

**IBM Business Process Manager**  
バージョン7 リリース5

**IBM Business Process  
Manager Express**  
インストール・ガイド

**IBM**



---

## PDF ブックおよびインフォメーション・センター

PDF ブックは、印刷およびオフラインでの参照用に提供されています。最新情報は、オンラインのインフォメーション・センターを参照してください。

セットとして、PDF ブックには、インフォメーション・センターと同一の内容が含まれます。PDF ブック内のリンクの中には、インフォメーション・センターで使用するよう調整されていて、正常に機能しないものがあります。

PDF 資料は、バージョン 7.0 またはバージョン 7.5 など、インフォメーション・センターのメジャー・リリースの後の四半期以内にご利用いただけます。

PDF 資料の更新頻度は、インフォメーション・センターより低いですが、Redbooks® よりも頻繁に更新されます。通常、PDF ブックはブックに十分な変更が累積されたときに更新されます。



# 目次

PDF ブックおよびインフォメーション・センター . . . . .	iii
------------------------------------	-----

第 1 章 ロードマップ: IBM Business Process Manager Express のインストールおよび構成 . . . . .	1
---	---

第 2 章 インストール・タイプおよびプロファイル . . . . .	5
-------------------------------------	---

第 3 章 データベースとインストールおよび構成のシナリオ . . . . .	7
---	---

第 4 章 ソフトウェアのインストールおよび構成の準備 . . . . .	9
---------------------------------------	---

第 5 章 IBM Business Process Manager の計画 . . . . .	11
--	----

要件の評価 . . . . .	11
プロセスおよび Process Application に関する考慮事項 . . . . .	11
リソースに関する考慮事項 . . . . .	12
開発およびデプロイメントのバージョン・レベル . . . . .	13
プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項 . . . . .	14
必要なセキュリティ許可の準備 . . . . .	19
製品およびプロファイルのインストール・ディレクトリー . . . . .	20
スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択 . . . . .	23
インストール・タイプおよびプロファイル . . . . .	26
Network Deployment 環境の計画 . . . . .	28
概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン . . . . .	29
ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー . . . . .	34
単一クラスター・トポロジー・パターン . . . . .	34
リモート・メッセージング・トポロジー・パターン . . . . .	36
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターン . . . . .	38
リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターン . . . . .	41
カスタマイズされたトポロジー . . . . .	43
トポロジーを選択するための考慮事項 . . . . .	44
トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー . . . . .	46
標準化された Network Deployment 環境とカスタマイズされた Network Deployment 環境のどちらを作成するかの判断 . . . . .	49

IBM HTTP サーバーでのロード・バランシングとフェイルオーバー . . . . .	50
データベース構成の計画 . . . . .	51
データベースと IBM Business Process Manager トポロジー . . . . .	51
共通データベースを構成する方法とタイミングの選択 . . . . .	52
サポートされているデータベース・タイプ . . . . .	53
データベース命名の制約事項 . . . . .	55
IBM Business Process Manager のデータ・ソース . . . . .	56
JDBC ドライバーおよびロケーション . . . . .	57
必須のデータベース管理者タスクの識別 . . . . .	58
非管理ユーザーの考慮事項 . . . . .	59
データベース特権 . . . . .	59
ユーザー ID またはスキーマ名特権 . . . . .	66
コンポーネントに固有のデータベース構成の計画 . . . . .	70
テーブルおよびスキーマの作成 . . . . .	73
共通データベース構成の計画 . . . . .	73
Common Event Infrastructure データベース構成の計画 . . . . .	79
メッセージング・エンジン・データベース構成の計画 . . . . .	79
WebSphere Enterprise Service Bus のロガー・メディエーション・データベース表を構成する計画 . . . . .	82
エラー防止およびリカバリーの計画 . . . . .	85
エラー防止とリカバリーの概要 . . . . .	85
エラー防止の計画 . . . . .	86
アプリケーション設計の一部としてのエラー防止 . . . . .	86
接続グループ . . . . .	86
例外および障害に対するアプリケーション設計上の考慮事項 . . . . .	88

第 6 章 IBM Business Process Manager Express のインストールおよび構成 . . . . .	91
---	----

ソフトウェアのインストールおよび構成の準備 . . . . .	91
製品インストール用のオペレーティング・システムの準備 . . . . .	92
Linux システムのインストール準備 . . . . .	93
Windows システムのインストール準備 . . . . .	95
データベースとインストールおよび構成のシナリオ . . . . .	97
IBM Business Process Manager Express のインストール . . . . .	97
IBM Business Process Manager Express のインストール . . . . .	97
ロードマップ: IBM Business Process Manager Express のインストールおよび構成 . . . . .	97

標準インストール: IBM Business Process Manager Express . . . . .	100	<b>manageprofiles</b> の例 . . . . .	312
標準インストール時の既存データベースの 構成 . . . . .	104	プロファイルの拡張 . . . . .	320
カスタム・インストール: Express . . . . .	106	プロファイル管理ツールを使用したプロフ ファイルの拡張 . . . . .	321
IBM Business Process Manager Express のサイ レント・インストール . . . . .	110	<b>manageprofiles</b> コマンド行ユーティリテ ィーを使用したプロファイルの拡張 . . . . .	350
コマンド行を使用した IBM Business Process Manager Express のサイレント・イ ンストール . . . . .	110	プロファイル管理ツール構成のデータベー ス構成フィールド . . . . .	356
応答ファイルを使用した IBM Business Process Manager Express のサイレント・イ ンストール . . . . .	113	データベースの構成 . . . . .	361
構成のアップグレード . . . . .	116	提供されているスクリプトを使用したデー タベースの作成 . . . . .	361
IBM Business Process Manager Express の構成 . . . . .	117	手動でのデータベースの作成 . . . . .	362
プロファイルの作成および拡張 . . . . .	118	Process Center または Process Server のデー タベース表の作成 . . . . .	364
プロファイルに関する前提条件および考慮事 項 . . . . .	119	Performance Data Warehouse データベース表 の作成 . . . . .	365
プロファイルの作成または拡張に関する前 提条件 . . . . .	119	Microsoft SQL Server データベースの構成 . . . . .	366
プロファイルの作成または拡張に関するデー タベースの前提条件 . . . . .	123	XA トランザクションの構成 . . . . .	367
プロファイル管理ツールの開始 . . . . .	124	データベースへのシステム情報のロード . . . . .	368
カスタム・インストールの後のスタンドアロ ン・プロファイルの作成 . . . . .	125	Process Server および Performance Data Warehouse を構成した後のデータベース・パ スワードとユーザー ID の変更 . . . . .	370
プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファ イルの作成 . . . . .	126	データ・ソース認証別名の更新 . . . . .	371
プロファイル管理ツールを使用したスタン ドアロン・プロファイルの作成 . . . . .	137	メッセージ・エンジンのデータ・ストア認 証別名の更新 . . . . .	371
<b>manageprofiles</b> コマンド行ユーティリテ ィーを使用したプロファイルの作成 . . . . .	150	構成ファイル内のパスワードおよびユーザ ー名の更新 . . . . .	372
カスタム・インストール後の <b>manageprofiles</b> を使用したスタンドアロ ン・プロファイルの作成 . . . . .	152	DB2 データベースのトランザクション・ロ グ・オプションの変更 . . . . .	375
		ファースト・ステップ・コンソールの開始 . . . . .	376

---

## 第 1 章 ロードマップ: IBM Business Process Manager Express のインストールおよび構成

IBM® Business Process Manager インストーラーおよび構成プログラムは、さまざまな開発シナリオおよび実動シナリオに対応します。このロードマップは、IBM Business Process Manager Express® をインストールし構成するために最も一般的に、かつ広く使用されるパスについて説明します。

このロードマップでは、一般的なインストールおよび構成の各シナリオをそれぞれ 1 つのセクションで説明しています。各セクションには、実行するアクティビティ、説明へのリンク、および各アクティビティの完了後の結果についての注を示す表が含まれています。

このロードマップの各セクションでは、以下のシナリオについて説明します。

- 標準インストール

「標準インストール」オプションでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロンの Process Center プロファイルまたは Process Server プロファイルを構成します。標準インストールでは、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** ユーティリティを使用してプロファイルを別個に作成する必要はありません。

「標準インストール」オプションは、ソフトウェアをインストールおよび構成するための最も単純で迅速な方法です。また、(Express、Standard、または Advanced 構成の) すべての Business Process Manager フィーチャーおよび機能を単一のマシンに取り込むための理想的な方法でもあります。標準インストールは電子インストール・イメージからのみ使用でき、DVD からは使用できません。

『「標準インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストール』を参照してください。

- カスタム・インストール、およびそれに続く 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの作成

「カスタム・インストール」オプションでは、ご使用のシステムにソフトウェアをインストールし、次にプロファイル管理ツールを実行して、ソフトウェアの構成方法をより柔軟に制御することができます。標準インストール・パスでは使用できない構成フィーチャーを必要とするスタンドアロンの Process Center 環境または Process Server 環境を作成する場合は、製品バイナリーをインストールした後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロンの Process Center プロファイルまたは Process Server プロファイルを作成します。

『「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成』を参照してください。

### 「標準インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストール

電子イメージからインストールする場合は、インストールで「標準インストール」オプションを使用して、ソフトウェアのインストールとスタンドアロン・プロファイルの構成を自動的に行うことができます。標準インストールでは、インストール後にプロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** を実行する必要はありません。

「標準」オプションは、ソフトウェアをインストールおよび構成するための最も迅速な方法です。このインストール・オプションでは大半の設定にデフォルトが使用されますが、インストール・パスとデータベース・タイプは指定できます。

「標準」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストールについては、『標準インストール: IBM Business Process Manager Express』を参照してください。

## 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成

インストーラーの「カスタム・インストール」オプションを使用すると、ソフトウェアをインストールし、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルを構成することができます。

表 1. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
「カスタム・インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール	カスタム・インストール・オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストールについては、『カスタム・インストール: IBM BPM Express: Process Server』を参照してください。	カスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center、Process Designer、および Process Server の製品バイナリーをインストールします。  カスタム・インストールでは、インストール中にプロファイルを作成しません。
プロファイル管理ツールの起動	インストーラーからプロファイル管理ツールを起動しなかった場合は、ここで起動できます。『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。 <b>制約事項:</b> Linux on zSeries プラットフォームを除き、64 ビットのアーキテクチャーの BPM インストール済み環境では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成できません。代わりに、次のステップに進んで <b>manageprofiles</b> コマンド行ユーティリティーを使用します。	プロファイル管理ツールが開始され、いつでも使用できます。  Process Center プロファイルからのデータが Process Server プロファイル作成プロセスへの入力として使用されるため、Process Center スタンドアロン・プロファイルを最初に (Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する前に) 作成する必要があります。
1 つ以上の Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成	Process Center スタンドアロン・プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成</li><li><b>manageprofiles</b> ユーティリティーを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成</li></ul>	Process Center スタンドアロン・プロファイルが作成されます。このプロファイルは、スタンドアロン・サーバー環境を定義し、コマンド・ファイル、構成ファイル、およびログ・ファイルを含みます。  プロファイル作成プロセスは、(共通およびコンポーネント固有の) データベースを構成し、スタンドアロン・サーバー環境をサポートするために必要なデータベース表を生成します。  これで、Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成したり、Process Designer をインストールしたりできるようになります。

表1. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストール、および1つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
Process Designer のインストール	ソフトウェアのビジネス・プロセス設計機能の使用を開始する場合は、Process Designer をダウンロードおよびインストールします。『Process Designer のインストール』を参照してください。	Process Designer がインストールされます。 Process Designer の使用方法については、以下のトピックを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Process Designer の雇用サンプル・チュートリアル</li> <li>• Authoring environments</li> <li>• Process Center によるプロセス開発</li> </ul>
1つ以上の Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成	ランタイム環境も含めてソフトウェアを完全に構成することが目的である場合は、Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。Process Server スタンドアロン・プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか1つを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• プロファイル管理ツールを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成</li> <li>• manageprofiles ユーティリティーを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成</li> </ul>	スタンドアロン・サーバー環境が構成され、いつでも使用できます。



## 第 2 章 インストール・タイプおよびプロファイル

実行するインストールのタイプ（「標準的」または「カスタム」）と、そのインストール・タイプに関連付けられたプロファイルを各 IBM BPM 構成 (Express、Standard、および Advanced) に対して作成する方法の間には、一定の関係が存在します。

以下の表は、その関係を示しています。

表 2. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	はい

表 3. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced: Process Server

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	Process Server のみ	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	オプション 単体テスト環境 (UTE) 専用の Process Server プロファイルまたは WebSphere ESB プロファイル (あるいはその両方) を作成できるフィーチャーがあります	はい	いいえ	はい

表 4. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Standard

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

表 5. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Express

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

---

## 第 3 章 データベースとインストールおよび構成のシナリオ

ソフトウェアと連携するようにデータベースを構成する方法は、インストールするソフトウェアおよび達成しようとするシナリオに関連します。

「標準インストール」オプションを使用するインストール・シナリオでは、データベースがローカル側 (IBM Business Process Manager のインストール先と同じシステム上) にあってもリモート側 (別のシステム上) にあっても、データベースを事前に作成しておく必要があります。データベースを事前に作成する必要のないシナリオは、IBM Business Process Manager に組み込まれている DB2 Express データベースをインストールする場合のみです。DB2 Express は、Windows および Linux for Intel の IBM Business Process Manager に組み込まれています。DB2 Express がまだインストールされていない場合は、IBM Business Process Manager インストーラーを実行するとオプションとしてインストールできます。また、このインストーラーによって DB2 Express に共通データベースおよびコンポーネント固有データベースも作成されます。DB2 Express をインストールするには、管理特権 (管理者または root ユーザー) が必要で、既存の DB2 データベース・サーバーがシステム上にあってはなりません。

「標準」インストール用の DB2 Express を使用しないシナリオはすべて、既存のデータベースを使用する「標準」インストールと見なされます。つまり、既にインストール済みのデータベースがあり、インストーラーの「既存データベース」パネルを使用して構成プロパティを指定することになります。詳細については、『標準インストール時の既存データベースの構成』を参照してください。このオプションを使用するには、ご使用のデータベースが既に作成されていることを確かめる必要があります。

ユーザーとデータベース管理者は、ソフトウェアをインストールおよび構成する前に、インフォメーション・センター内のデータベースの構成に関する情報を確認する必要があります。



## 第 4 章 ソフトウェアのインストールおよび構成の準備

ソフトウェアのインストールおよび構成を準備する前に、作成するデプロイメント環境の計画を作成します。

IBM Business Process Manager のインストールおよび構成の準備を行う場合は、以下の表に記載された情報を使用してください。

表 6. インストールおよび構成の準備

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ハードウェアおよびソフトウェア要件を確認する	IBM BPM の構成に応じて、以下を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>IBM Business Process Manager Advanced system requirements</li><li>IBM Business Process Manager Standard system requirements</li><li>IBM Business Process Manager Express system requirements</li></ul>	ご使用の IBM Business Process Manager インストールをサポートするために必要なシステム要件について理解します。
オペレーティング・システムを準備する	 Linux システムのインストール準備   Windows システムのインストール準備	使用する各ワークステーションのオペレーティング・システムが準備されます。

表 6. インストールおよび構成の準備 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
データベース管理システムがインストールされているか確認する	使用するデータベース管理システムのインストールおよび管理の詳細については、データベースの資料を参照してください。	<p>データベース管理システムがインストールされます。</p> <p>IBM Business Process Manager によって DB2 Express データベースが組み込まれます。データベースとして DB2 Express を使用する場合は、インストーラーからデータベース機能として DB2 Express を選択すると、DB2 Express が自動的にインストールおよび構成されます。DB2 Express をインストールするには、管理特権 (管理者または root ユーザー) が必要で、既存の DB2 データベース・サーバーがシステム上にあってはなりません。</p> <p><b>注:</b> 既に DB2 の特定のバージョンがインストールされていて DB2 Express をインストールする場合は、DB2 をアンインストールしてから IBM Business Process Manager インストーラーを実行する必要があります。インストーラーから DB2 Express をインストールするように選択した場合に、インストーラーが特定のバージョンの DB2 がインストールされていることを検出すると、警告メッセージが表示され、DB2 Express をインストールすることができなくなります。</p> <p><b>重要:</b> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">Linux</span> DB2 Express を root ユーザーとしてインストールする場合、DB2 Express のインストールを開始する前に、すべてのカーネル要件を満たしておく必要があります。カーネル要件のリストについては、カーネル・パラメーターの要件 (Linux) を参照してください。現行値は、<code>ipcs -l</code> コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。</p>

---

## 第 5 章 IBM Business Process Manager の計画

実装するシステムがユーザーのニーズを満たすことを確実にするために、該当のソフトウェアをご使用のエンタープライズ情報システムに導入する前に、ご使用の IBM Business Process Manager の計画を立てます。

---

### 要件の評価

再作業および障害を最小限にするために、インストールおよび構成の決定を行う前に、現行の環境の検討に時間をかけてください。現在のビジネス要件と設計、既にインストールされているハードウェアとソフトウェア、および現在の長所と短所を検討してください。また、この計画は、財政投資を最小化するのにも役立つ場合があります。

いくつかの要因がご使用のソフトウェアの要件を決定します。それらの要因は、以下のカテゴリーにまとめることができます。

- 製品のハードウェア要件およびソフトウェア要件、ユーザー自身のシステム・リソースの制約、およびご使用のシステムを管理し維持するためのリソースの可用性
- ランタイム環境にデプロイするアプリケーション、および構成済み環境の所期の使用方法
- 要件を満たすためにインストールする製品および製品のバージョン

これらすべての要因について賢明な選択をするには、以下の概念を理解している必要があります。

- 環境の構成に適用される用語
- インストール、構成、管理、保守を行う製品の管理アーキテクチャー。
- (提供されるパターンを介して) 使用可能な構成オプション、およびパターンが製品の使用目的に対処するかどうかを判別する方法。
- サポート対象の実装メソッド。製品をインストールし環境を構成する各種タスク・フローの理解も含まれる。

このセクションの情報を使用して、現在および将来の要件を評価および分析し、これらの要件に合致する環境を開発します。

**重要:** プラットフォーム固有のディスク・スペース要件、サポート対象のオペレーティング・システム、およびサポート対象のデータベースのバージョンに関する最新情報については、以下のリンクの 1 つをクリックします。オペレーティング・システムを要件に準拠させるためにインストールする必要がある、オペレーティング・システムのフィックスとパッチを検索することもできます。

- [IBM Business Process Manager Advanced system requirements](#)
- [IBM Business Process Manager Standard system requirements](#)
- [IBM Business Process Manager Express system requirements](#)
- [IBM Business Process Manager Tooling Requirements](#)

### プロセスおよび Process Application に関する考慮事項

ビジネス・コンポーネントの統合を合理化する計画のベースラインになるのは、現在の要件です。ビジネスの拡大に伴う意思決定に役立つガイドラインを作成するには、ビジネスの将来を視野に入れた構想が必要になります。

製品の製造および出荷、サービスの提供がどのように行われているかを把握する必要があります。IBM Business Process Manager には、実稼働環境とテスト環境の両方の要件に合うように設計されたデプロイメント環境パターンが用意されています。

以下を検討します。

- Process Application が既存のサービスやバックエンド・システムとどう対話するかを検討します。
- 特定のビジネス・ニーズに対処するために、プロセス・アプリケーションでデータをどう処理するか、およびシステム内にデータをどう流すかを検討します。

ソリューションを開発してその環境を構成する際には、複数の検索、セッション、プロセス、およびその他の境界にわたって、データがどのように存続するかを理解する必要があります。

環境にデプロイするプロセス・アプリケーションに関する以下の項目を検討してください。

#### – Process Application の呼び出しパターン

非同期呼び出しがランタイム環境でどのように処理されるか、また、非同期呼び出しを実装するために、基盤となるメッセージ・システムが SCA ランタイム環境でどのように利用されるかを理解する必要があります。

アプリケーションが異なれば要件が異なります。こうした要件の決定要因としては、例えば、エクスポート・タイプ、コンポーネント間の対話、インポート・タイプ、データベースや JMS リソースなどの必要なリソース、ビジネス・イベントの必要性、ビジネス・イベントの伝送機構などがあります。

#### – 実装予定のビジネス・プロセスのタイプ (トランザクション・ビジネス・プロセス、割り込み可能なビジネス・プロセス、割り込み不可能なビジネス・プロセス)

割り込み不可能なビジネス・プロセス、つまり microflow は、1 つのトランザクションで実行されるかトランザクションなしで実行される、実行時間の短いビジネス・プロセスです。割り込み不可能なビジネス・プロセスは、パフォーマンスのオーバーヘッドがほとんどなく、高速です。このプロセス内のすべてのアクティビティが単一スレッド内で処理されます。

割り込み可能なビジネス・プロセス、つまり macroflow は、一連のアクティビティが含まれている、実行時間の長いビジネス・プロセスです。このプロセス内のアクティビティは、それぞれ固有のトランザクションで実行されます。割り込み可能なビジネス・プロセスには、人の介入またはリモート・システムの呼び出し、あるいはその両方が必要なアクティビティを組み込むことができます。非同期アクティビティは完了するために数分、数時間、あるいは数日の時間がかかる可能性があるため、それらのアクティビティを組み込むビジネス・プロセスは割り込み可能にする必要があります。

## リソースに関する考慮事項

資産を明確化し、既に使用可能なソフトウェアおよびハードウェアのリソースを最大限に利用するとともに、十分な情報に基づいて実装の決定を下します。現在のエンタープライズ情報システムを評価し、ビジネス上のニーズを満たすためにハードウェアまたはソフトウェアを追加する必要があるかを判別します。

次の要因を検討します。

- 現在のハードウェアおよびソフトウェアをよく理解します。以下のようにして使用可能な資産のリストを準備します。
- 使用する物理コンピューター・システムの数と判別し、各物理ハードウェアを項目別に分けます。以下の情報を記録します。

- 実装済みメモリーの量
- 実装済みマイクロプロセッサの数およびタイプ
- 外部メディア
- 特定の装置がアップグレード可能かどうか
- すべてのサーバーが、製品とデータベースのどちらに関与するかを問わず、同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用し、同じ時刻に設定されているようにします。
- 現在インストールされているソフトウェアおよびデータベース・アプリケーションを列挙します。以下の情報を記録します。
  - 機能
  - 企業内での使用範囲
  - セキュリティー要件
- 現在の IT 要員のリストを作成します。ご使用のデータベースを管理するのに必要な専門的知識と共に、IBM Business Process Manager をインストールし維持するために必要な専門的知識を備えているかどうか判断します。適切なユーザーが、すべての製品およびファイルを正しくインストールする権限のあるユーザー ID を持っていることを確認します。

## 開発およびデプロイメントのバージョン・レベル

ご使用の環境に必要な IBM Business Process Manager のバージョン・レベルの決定は、アプリケーションの開発で使用されたバージョン・レベルに依存します。一般に、前のバージョンの IBM Business Process Manager にデプロイされたアプリケーションは、次に入手可能なバージョンの IBM Business Process Manager 上でも実行できます。

次の表は、IBM Integration Designer V7.5.1 (以前の WebSphere® Integration Developer) および IBM Process Designer V7.5.1 を含む IBM Business Process Manager V7.5.1 と、それ以前のリリースとの互換性を説明しています。

タスク	サポートされているか
WebSphere Integration Developer バージョン 6.1.0、6.1.2、6.2.0、または 7.0.0 または IBM Integration Designer 7.5 から IBM Business Process Manager V7.5.1 へのデプロイメント。	はい。 <b>重要:</b> WebSphere Adapters V6.1.0、V6.1.2、および V6.2.0 の場合は、「 <i>Mandatory adapter fix for running 6.1 and 6.2 Adapters on WPS v7.0</i> 」というタイトルの暫定修正をインストールする必要があります。WebSphere Adapter をバージョン 7.0 レベルにアップデートせず、アプリケーションを WebSphere Adapter バージョン 6.1.0、V6.1.2、または V6.2.0 で使用し続ける計画の場合は、この暫定修正をソース環境に適用する必要があります。 <b>重要:</b> Websphere Adapter for SAP V6.0.2、V6.1.0、V6.1.2、および V6.2.0 は、IBM Business Process Manager V7.5.1 ではサポートされません。Websphere Adapter for SAP を使用するアプリケーションを IBM Business Process Manager V7.5.1 にデプロイするには、まず Websphere Adapter for SAP を V7.0 に更新する必要があります。

タスク	サポートされているか
IBM Business Process Manager V7.5.1 成果物の WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 での実行。	いいえ。  IBM Integration Designer V7.5.1 で作成したアプリケーションは、WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 (前のすべてのリリース) のサーバーにパブリッシュまたはインストールできません。  WebSphere Integration Developer 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Integration Designer 7.5 で作成され、IBM Integration Designer V7.5.1 で生成されたアプリケーションは、WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 のサーバーにパブリッシュまたはインストールできません。  <b>serviceDeploy</b> を使用して IBM Business Process Manager V7.5.1 サーバーで生成されたアプリケーションは、WebSphere Process Server 6.1.0、6.1.2、6.2.0、7.0、または IBM Business Process Manager 7.5 のサーバーにインストールできません。

## プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項

このトピックでは、プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセル (該当する場合) を命名する際に考慮しなければならない予約語および問題について説明します。このトピックは分散プラットフォームに適用されます。

### プロファイルの命名の考慮事項

プロファイル名には、固有の名前を付けることができますが、以下の制限があります。プロファイルの名前を付ける際には、以下の文字を使用しないでください。

- スペース
- ご使用のオペレーティング・システムのディレクトリー名に使用できない特殊文字 (\*、&、または ? など)
- スラッシュ (/) または円記号 (¥)

全角文字は許可されています。

**Windows** ディレクトリー・パスについての考慮事項: インストール・ディレクトリーのパスは、60 文字以下でなければなりません。 `profiles_directory_path¥profile_name` ディレクトリーの文字数は、80 文字以下でなければなりません。

### ノード、サーバー、ホスト、セルの命名の考慮事項

**予約名:** フィールド値として予約済みの名前を使用しないでください。予約済みの名前を使用すると、予測不能な結果が起こる可能性があります。以下のワードは、予約されています。

- cells

- nodes
- servers
- クラスター
- アプリケーション
- deployments

「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」パネルのフィールドの説明: 表7では、プロファイル管理ツールの「ノード名およびホスト名」および「ノード名、ホスト名、セル名」ページにあるフィールドについて説明します。この表には、フィールド名、デフォルト値、および制約が示されています。プロファイルの作成時には、この情報をガイドとして使用してください。

表7. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
<b>スタンドアロン・サーバー・プロファイル</b>			
ノード名	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Linux</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Windows</div> <i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i> ここで、 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。</li> </ul>	予約名を使用しないでください。	希望の名前を選択してください。システムに複数のサーバーを作成する予定がある場合、インストールを編成するには、固有の名前を使用します。
サーバー名	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Linux</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Windows</div> server1	サーバーの固有の名前を使用します。	サーバーの論理名です。
ホスト名	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Linux</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">Windows</div> ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。	ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。  Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。	ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。

表7. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
セル名	<p>Linux</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Node <i>NodeNumber</i> Cell ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。</li> </ul>	<p>セルの固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: Sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティー間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要があるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。さらに、名前空間がフェデレートされる場合にも、セル名を固有にする必要があります。固有でなければ、<code>javax.naming.NameNotFoundException</code> 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。</p>
<b>Deployment manager プロファイル</b>			
ノード名	<p>Linux</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Cell ManagerNode Number ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。</li> </ul>	<p>デプロイメント・マネージャーの固有の名前を使用します。予約名を使用しないでください。</p>	<p>この名前は、デプロイメント・マネージャー・セル内での管理に使用されます。</p>

表7. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ホスト名	<p>Linux</p> <p>Windows ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。</p>	<p>ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。予約名を使用しないでください。</p> <p>Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。</p>	<p>ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。</p>
セル名	<p>Linux</p> <p>Windows</p> <p><i>shortHostName</i> Cell <i>CellNumber</i> ここで、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>CellNumber</i> は、01 から始まる連続番号を表します。</li> </ul>	<p>デプロイメント・マネージャー・セルに固有の名前を使用します。製品が同じ物理ワークステーション上で稼働する場合や、ワークステーションのクラスター上で稼働する場合 (例: Sysplex) は、どんな環境でも、セル名は固有でなければなりません。また、エンティティ間のネットワーク接続性 (セル間の、または各セルと通信する必要のあるクライアントからの) が求められる環境では、セル名は固有でなければなりません。名前空間が統合される場合でも、セル名は固有である必要があります。固有でなければ、<code>javax.naming.NameNotFoundException</code> 例外などの症状が発生する可能性があります。この場合は、固有の名前のセルを作成する必要があります。</p>	<p>すべての統合ノードは、デプロイメント・マネージャー・セルのメンバーになります。このセルは、プロファイル管理ツールの「ノード名、ホスト名、セル名」ページで指定します。</p>
カスタム・プロファイル			

表7. ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名ガイドライン (続き)

フィールド名	デフォルト値	制約	説明
ノード名	<div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px; display: inline-block;">Linux</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px; display: inline-block;">Windows</div> <i>shortHostName</i> <i>Node NodeNumber</i> ここで、 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <i>shortHost Name</i> は短いホスト名です。</li> <li>• <i>NodeNumber</i> は 01 で始まるシーケンス番号です。</li> </ul>	予約名を使用しないでください。  デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。	この名前は、カスタム・プロファイルが追加されるデプロイメント・マネージャー・セル内で管理のために使用されます。デプロイメント・マネージャー・セル内で固有の名前を使用します。
ホスト名	<div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px; display: inline-block;">Linux</div> <div style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px; display: inline-block;">Windows</div> ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) 名の長い書式。	ホスト名は、ご使用のネットワークを介してアドレス可能でなければなりません。  Business Space の使用を計画している場合は、完全修飾ホスト名を使用します。	ワークステーションの実際の DNS 名または IP アドレスを使用して、ワークステーションと通信できるようにします。この表の後にある、ホスト名に関する追加情報を参照してください。

### ホスト名の考慮事項:

ホスト名は、ノードがインストールされている物理ワークステーションのネットワーク名です。ホスト名は、サーバー上の物理ネットワーク・ノードに解決する必要があります。サーバーが複数のネットワーク・カードを備えている場合は、ホスト名または IP アドレスは、そのネットワーク・カードのいずれか 1 つに解決されなければなりません。リモート・ノードは、ホスト名を使用して、このノードに接続および通信します。

IBM Business Process Manager は、インターネット・プロトコル・バージョン 4 (IPv4) およびバージョン 6 (IPv6) の両方に対応しています。管理コンソールなどで IP アドレスを入力できる場所では、どちらの形式で入力しても構いません。ご使用のシステムに IPv6 が実装されている場合は、IP アドレスを IPv6 形式で入力する必要があります。反対に、IPv6 を使用できない環境では、IP アドレスを IPv4 形式で入力してください。IPv6 については、IPv6 の公式 Web サイトを参照してください。

以下のガイドラインが、ご使用のワークステーションに適切なホスト名を付ける場合に役立ちます。

- その他のワークステーションがネットワーク内でアクセスできるホスト名を選択します。
- この値に汎用 ID、localhost を使用しないでください。
- 2 バイト文字セット (DBCS) の文字を使用しているホスト名を持つサーバーには、IBM Business Process Manager 製品をインストールしないでください。DBCS 文字は、ホスト名に使用する場合はサポートされていません。
- サーバー名には下線文字 ( \_ ) を使用しないようにしてください。インターネット標準では、ドメイン・ネームが Internet Official Protocol Standards の RFC 952 および RFC 1123 に記述されているホスト名の要件に適合するよう定めています。ドメイン・ネームには、文字 (大文字または小文字) および数字の

みを使用する必要があります。ただし、名前の先頭または末尾にならない限り、ドメイン・ネームにダッシュ文字 ( - ) を使用してもかまいません。ホスト名では、下線文字 ( \_ ) はサポートされていません。サーバー名に下線文字を使用しているサーバーにすでに IBM Business Process Manager をインストールした場合、このサーバーにアクセスするには、その名前を変更するまで IP アドレスを使用してください。

同一コンピューター上に共存している複数のノードを固有の IP アドレスで定義する場合は、ドメイン・ネーム・サーバー (DNS) のルックアップ・テーブルで、個々の IP アドレスを定義してください。サーバーの構成ファイルでは、ネットワーク・アドレスが 1 つしかないワークステーションでの複数 IP アドレスのドメイン・ネーム解決が提供されません。

ホスト名に指定する値は、構成文書で `hostName` プロパティの値として使用されます。次のいずれかの形式で、ホスト名の値を指定してください。

- 完全修飾のドメイン・ネーム・サーバー (DNS) ホスト名ストリング。例えば `xmachine.manhattan.ibm.com` など。
- デフォルトの DNS 短縮ホスト名ストリング。例えば `xmachine` など。
- 数値 IP アドレス。例えば `127.1.255.3` など。

完全修飾 DNS ホスト名には、あいまいなところがなく、柔軟性に富むという利点があります。この柔軟性により、ユーザーは、ホスト・システムの実際の IP アドレスを変更しても、サーバー構成を変更する必要がありません。ホスト名のこの値は、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用して IP アドレスを割り当てる際に頻繁に IP アドレスを変更することが予定されている場合には、特に有用です。この形式の欠点は、DNS に依存するということです。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

短縮ホスト名も、動的に解決可能です。ショート・ネーム形式には、ネットワークから切断されたときでもシステムがサーバーを実行できるように、ローカルの `hosts` ファイルで再定義されるという機能もあります。`hosts` ファイルの `127.0.0.1` (ローカル・ループバック) に対するショート・ネームを、切断した状態でも実行されるように定義します。ショート・ネーム形式の欠点は、リモート・アクセスでは DNS に依存するということです。DNS が使用できないと、接続に支障を来します。

数値 IP アドレスには、DNS によって名前を解決する必要がないという利点があります。リモート・ノードは、DNS が使用できなくても、数値 IP アドレスを使用して名付けられたノードに接続できます。この形式の欠点は、数値 IP アドレスを使用するとアドレスが固定化されるということです。ワークステーションの IP アドレスを変更したら、構成文書の `hostName` プロパティの設定も必ず変更しなければなりません。したがって、DHCP を使用するか、あるいは IP アドレスを定期的に変更する場合は、数値 IP アドレスを使用しないでください。もう一方の形式の欠点としては、ホストがネットワークから切断されるとノードを使用できないことがあります。

## 必要なセキュリティ許可の準備

セキュリティ・ポリシーによっては、ファイルおよびフォルダーの作成やデータベースへのアクセスなどのタスクを完了するためにユーザー ID とパスワードが必要な場合があります。サーバーが保護データにアクセスしようとしたときの問題を防ぐために、セキュア・ユーザー ID を準備してください。

- データベースの設計を完了します。
- 使用する認証システム (例えば Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)) を決定します。
- IBM Business Process Manager のインストールに必要な権限に影響する制御として、存在している制御を判別します。
- 製品をインストールするシステムを識別します。

サイトのセキュリティー・ポリシーではグローバル・セキュリティーが有効になっており、ソフトウェアのインストール、データベースまたはテーブルの作成、およびデータベースへのアクセスを行うために所定の権限が必要になっています。正常に製品をインストールして運用するためには、ここに示すステップを行う必要があります。

IBM Business Process Manager データベースのセキュリティー許可を準備するには、以下のステップを実行します。

- システムにソフトウェアをインストールする権限を持つユーザー ID とパスワードのリストを作成します。ファイルおよびフォルダーを作成する権限を持つ IBM Business Process Manager ユーザー ID 用に、インストール・ウィザードを実行する必要があります。
- システムの日常の運用に必要なユーザー ID、パスワード、およびロールのリストを作成します。
  - 管理コンソールのユーザー ID と能力を制限するロール。ロールの構成、管理、またはモニター用のユーザー ID を所有することができます。
  - システム通信を認証する各システム・バスのユーザー ID。
- システムが操作中に使用するデータベース表にアクセスするために使用するユーザー ID とパスワードのリストを作成します。
- オプション: システムがインストール中にデータベースまたはデータベース表の作成に使用するユーザー ID とパスワードのリストを作成します。サイト・ポリシーによっては、この権限がデータベース管理者に制限されている場合があります。その場合は、生成されたスクリプトを管理者に提供して、データベースまたはデータベース表を作成してもらう必要があります。

サーバーをセキュアな環境にインストールして運用できます。

## 製品およびプロファイルのインストール・ディレクトリー

IBM Business Process Manager のインストール・ディレクトリーは、いくつかの変数で表されます。それらの変数の意味は、さまざまな要因で異なる可能性があります。

### この資料で使用されている変数

この資料では、特定のデフォルト・ディレクトリーを表すいくつかの変数を使用されています。これらのファイル・パスは、デフォルトのロケーションです。書き込み権限を所有しているディレクトリーであればどのディレクトリーにも、製品およびその他のコンポーネントをインストールし、プロファイルを作成できます。IBM Business Process Manager 製品またはコンポーネントを複数インストールする場合は、複数のロケーションが必要です。

以下に、この資料で使用されている主な変数を示します。

**Linux** **Windows** `install_root`

IBM Business Process Manager のインストール・ロケーション。IBM Business Process Manager は常に、関連付けられた WebSphere Application Server Network Deployment と同じ場所にインストールされます。

`profile_root`

IBM Business Process Manager プロファイルの場所。

### 変数の意味の違いについて

インストール・ディレクトリーを表すのに使用する変数の意味は、製品をクリーン・ワークステーションにインストールするか、あるいは WebSphere Application Server または WebSphere Application Server

Network Deployment が既にインストールされているワークステーションにインストールするかに基づいて異なることがあります。またそのような変数は、インストールを root ユーザー (Windows システムでは Administrator) として実行しているか、あるいは非 root ユーザーとして実行しているかによっても異なる場合があります。

Linux

Windows

## 非 root ユーザーがインストールする場合の制限

root、Administrator、および非 root ユーザーが製品をインストールできます。インストール・プログラムが用意するデフォルト・ディレクトリーは、ユーザーが root (管理者) 特権を所有しているかどうかにより異なります。root および Administrator ユーザーは共用製品を登録でき、システム所有のディレクトリー (すべてのユーザーが使用可能なグローバル共用リソース) にインストールできますが、非 root ユーザーはこれできません。非 root ユーザーは、そのユーザーが所有しているディレクトリーにしかインストールできません。

## 標準インストールの場合のデフォルト・ディレクトリー

以下の表は、標準インストールの場合の IBM Business Process Manager の基本インストールとそのプロファイルのデフォルトのインストール・ロケーションを示します。

表 8 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、インストール・プログラムが IBM Business Process Manager および WebSphere Application Server Network Deployment の両方をインストールするデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 8. *install\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
Linux /opt/ibm/BPM/v7.5	Linux <i>user_home</i> /ibm/BPM/v7.5C:¥IBM¥BPM¥v7.5
Windows C:¥IBM¥BPM¥v7.5	Windows C:¥IBM¥BPM¥v7.5

表 9 は、root (Administrator) ユーザーと非 root ユーザーの両方について、*profile\_name* という名前のプロファイルのデフォルト・インストール・ディレクトリーを示したものです。

表 9. *profile\_root* デフォルト・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>
Linux /opt/ibm/BPM/v7.5/profiles/ <i>profile_name</i>	Linux <i>user_home</i> /ibm/BPM/v7.5/profiles/ <i>profile_name</i>
Windows C:¥IBM¥BPM¥v7.5¥profiles¥ <i>profile_name</i>	Windows C:¥IBM¥BPM¥v7.5¥profiles¥ <i>profile_name</i>

22 ページの表 10 は、DB2 Express のインストール・ロケーションを示します。DB2 Express は IBM Business Process Manager と同じディレクトリーの下にインストールされます。

表 10. DB2 Express デフォルト・ディレクトリー

DB2 Express バイナリーのデフォルト・ロケーション	データベース・インスタンスのロケーション
Linux /opt/ibm/BPM/v7.5/DB2	Linux データベース・インスタンスは bpminst ユーザーの下で作成されます。例: <code>user_home/bpminst</code>
Windows C:\IBM\BPM\v7.5\DB2	Windows BPMINST データベース・インスタンスは、IBM Business Process Manager がインストールされているドライブのルート (¥) に作成されます。例えば、IBM Business Process Manager が C:\IBM\BPM\v7.5¥ にインストールされている場合は、C:\BPMINST となります。

## カスタム・インストールまたは WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment が既にインストールされている場合のデフォルト・ディレクトリー

以下の表は、製品とそのプロファイルのデフォルト・インストール・ロケーションを示します。サポートされる既存のバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment の上に IBM Business Process Manager をインストールする選択をした場合、IBM Business Process Manager は同じロケーションにインストールされます。表 11 は、root (Administrator) ユーザーおよび非 root ユーザーの両方について、そのような場合でのデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリーを示したものです。

表 11. インストール・プログラムが root (管理者) ユーザー用と非 root ユーザー用の両方に IBM Business Process Manager と WebSphere Application Server の両方をインストールするデフォルトのインストール・ルート・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>install_root</i>
Linux /opt/IBM/WebSphere/AppServer	Linux <code>user_home/IBM/WebSphere/AppServer</code>
Windows C:\Program Files\IBM \WebSphere\AppServer	Windows <code>user_home\IBM \WebSphere\AppServer</code>

表 12. root (Administrator) および root 以外のユーザーの両方における、*profile\_name* という名前のプロファイルのデフォルト・インストール・ディレクトリーを示します。

root または Administrator ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>	非 root ユーザーのデフォルトの <i>profile_root</i>
Linux /opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/ <i>profile_name</i>	Linux <code>user_home/IBM/WebSphere/AppServer/ profiles/<i>profile_name</i></code>
Windows C:\Program Files\IBM\ WebSphere\AppServer\profiles\ <i>profile_name</i>	Windows <code>user_home\IBM\ WebSphere\AppServer\profiles\ <i>profile_name</i></code>

## Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリー

23 ページの表 13 は、Installation Manager ツールに関連する 2 つのデフォルト・ディレクトリーを示したものです。

インストール・ディレクトリー内のディレクトリーは、Launchpad アプリケーションによって Installation Manager が格納される (プラットフォームごとの) デフォルト・ディレクトリーです。

エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー内のディレクトリーは、Installation Manager に関連するデータ (Installation Manager によって実行された操作の状態や履歴など) 用の (プラットフォームごとの) デフォルト・ディレクトリーです。

root (Administrator) ユーザー用と非 root ユーザー用の両方の値が提供されます。

エージェント・データのロケーションについては、Installation Manager 資料の『エージェント・データのロケーション』を参照してください。Installation Manager のその他のデフォルト設定については、Installation Manager 資料の『管理者または非管理者としてのインストール』を参照してください。

表 13. Installation Manager のデフォルトのインストール・ディレクトリー

root または Administrator ユーザーのデフォルト	非 root ユーザーのデフォルト
インストール・ディレクトリー:	インストール・ディレクトリー:
<b>Linux</b> /opt/IBM/InstallationManager/eclipse	<b>Linux</b> user_home/IBM/InstallationManager/eclipse
<b>Windows</b> C:¥Program Files¥IBM¥ Installation Manager¥eclipse	<b>Windows</b> C:¥Documents and Settings¥ userID¥IBM¥Installation Manager¥eclipse <b>Vista</b> <b>Windows 7</b> C:¥ProgramData¥IBM¥Installation Manager
エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー:	エージェント・データ・ロケーション・ディレクトリー:
<b>Linux</b> /var/ibm/InstallationManager	<b>Linux</b> user_home/var/ibm/InstallationManager
<b>Windows</b> C:¥Documents and Settings¥All Users¥Application Data¥IBM¥Installation Manager <b>Vista</b> <b>Windows 7</b> C:¥ProgramData¥IBM¥Installation Manager	<b>Windows</b> C:¥Documents and Settings¥userID¥Application Data¥IBM¥Installation Manager <b>Vista</b> <b>Windows 7</b> C:¥Users¥userID¥AppData¥Roaming¥IBM¥ Installation Manager

## スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするためには、スタンドアロン環境を選択します。実稼働環境でキャパシティ、アベイラビリティ、スケーラビリティ、およびフェイルオーバー・サポートなどの追加のフィーチャーを必要とする場合は、Network Deployment 環境を選択します。

スタンドアロン環境はインストール および構成が最も容易であり、計画はほとんど必要ありません。Network Deployment 環境では、多数のロールを含む、より詳細なインストールおよび構成のタスクが必要です。

Network Deployment 環境の場合、ビジネス・アプリケーションおよびサービスがその環境で実行する作業の要件を満たすことを目的として、慎重に特性を計画する必要があります。考慮すべき点はいくつかあります。以下に例を示します。

- 必要とする物理ワークステーションおよびハードウェア・リソースの数
- ビジネスをサポートするために必要なクラスターおよびクラスター・メンバーの数
- 必要なデータベースの数
- 認証の役割およびセキュリティー上の考慮事項
- デプロイメント環境の実装に使用する方式
- ユーザー・レジストリー (セキュリティー用)、1 台以上の HTTP サーバー (Web コンテンツ用)、必要なファイアウォール、ロード・バランサーなど、その他のサポート・リソース。

## スタンドアロン環境

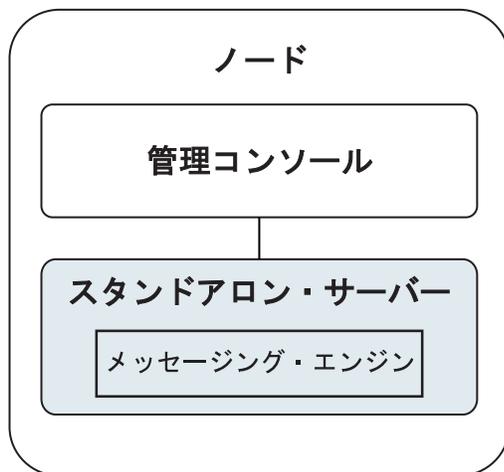


図1. スタンドアロン環境

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするために、サンプルをインストールして、スタンドアロン・サーバーにサンプル・ソリューションをデプロイできます。このサンプルに使用されているリソースは、管理コンソールで探索できます。

まずスタンドアロン環境から始めて、後でそれを Network Deployment 環境に組み込むには、スタンドアロン環境をデプロイメント・マネージャー・セルに統合します。これは、そのセルに他のノードが統合されていない場合にのみ可能です。

製品ソフトウェアをインストールするときに、スタンドアロン開発環境 (qesb) 用のプロファイルの作成を選択できます。作成されたプロファイルは、テスト・シナリオでの使用またはアプリケーション開発のサポートにのみ適します。実動目的でスタンドアロン・サーバー環境を使用するシナリオの場合、製品ソフトウェアをインストールしてください。次に、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・プロファイルを構成します。

## ネットワーク・デプロイメント環境

Network Deployment 環境には、サービス要求元およびプロバイダーのエンタープライズ・アプリケーション、およびそれらのメディエーション・モジュールを実行するために相互接続されたサーバーとクラスター

のコレクションが含まれます。この環境には、WebSphere Application Server のアプリケーション・サーバーも組み込むことができます。

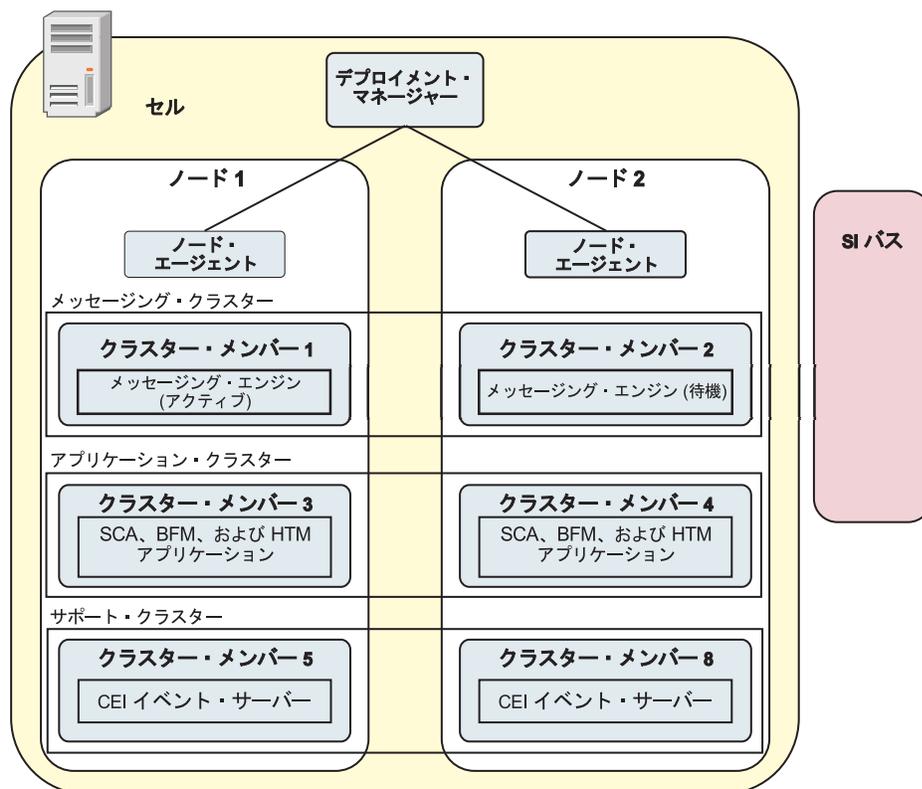


図 2. Network Deployment 環境

サーバーおよびクラスターは、1 つ以上の管理対象ノードで実行されます。それらの管理対象ノードは、それぞれ 1 つの論理コンピューター・システムまたは物理コンピューター・システムに対応しています。

複数のサーバーを、ロード・バランシングとフェイルオーバーをサポートするためにクラスターにグループ化することができます。

相互接続サーバーまたはクラスターのデプロイメント環境は、スタンドアロン・サーバーでは提供できないパフォーマンス、アベイラビリティ、スケーラビリティ、分離機能、セキュリティ、および安定度の特性を提供します。さらに、集中化されたデプロイメント・マネージャーからすべてのサーバーまたはクラスターを管理することができます。

デプロイメント・マネージャーによって管理されるサーバーとクラスターの集合全体は、デプロイメント環境として構成および管理されます。

Network Deployment 環境をインストールするには、製品ソフトウェアをインストールしてから、デプロイメント・マネージャーおよび 1 つ以上のカスタム (管理対象) ノード用のプロファイルを構成します。管理対象のデプロイメント環境は後で作成できます。提供されているトポロジー・パターンから標準のデプロイメント環境を作成するか、あるいはクラスターおよびサーバーを構成して、カスタマイズされたデプロイメント環境を作成することができます。

## 使用目的に応じたスタンドアロンまたは Network Deployment のクラスター・トポロジー・パターンの選択

IBM Business Process Manager の使用目的に応じたスタンドアロンまたは Network Deployment のクラスター・トポロジー・パターンの選択内容と、それに関連する計画について、以下の表に記載しています。

表 14. IBM Business Process Manager の使用目的に応じたスタンドアロンまたは Network Deployment のクラスター・トポロジー・パターンの選択

使用目的	構成パスおよび計画アクティビティ
単一サーバーの単体テスト環境 (UTE)	スタンドアロン・プロファイル構成パス。計画はほとんど必要ない。
クラスター化されたテスト環境	Network Deployment 環境の標準の「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターン。計画はほとんど必要ない。
柔軟性の高い実稼働環境	Network Deployment 環境の標準の「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターン。計画はほとんど必要ない。
高度に最適化された実稼働環境	固有の処理要件やビジネス要件に対応したカスタマイズ・トポロジー。必須の詳細計画 (資料の本セクションで説明しているもの)。

適切なクラスター・トポロジー・パターンの選択については、関連概念のリンクを参照してください。

### 関連概念:

34 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

44 ページの『トポロジーを選択するための考慮事項』

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

## インストール・タイプおよびプロファイル

実行するインストールのタイプ (「標準的」または「カスタム」と、そのインストール・タイプに関連付けられたプロファイルを各 IBM BPM 構成 (Express、Standard、および Advanced) に対して作成する方法の間には、一定の関係が存在します。

以下の表は、その関係を示しています。

表 15. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Manager からフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチャッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	はい

表 16. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Advanced: Process Server

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Managerからフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチャパッドを使用)	電子イメージのみ	Process Serverのみ	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	オプション 単体テスト環境 (UTE) 専用の Process Server プロファイルまたは WebSphere ESB プロファイル (あるいはその両方) を作成できるフィーチャーがあります	はい	いいえ	はい

表 17. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Standard

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Managerからフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチャパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

表 18. インストールの一部としてのプロファイル構成: IBM Business Process Manager Express

インストールのタイプ	メディア	スタンドアロン・プロファイルの作成	オプションとしてのプロファイル管理ツールの開始	オプションとしてのファースト・ステップ・コンソールの開始	Installation Managerからフィーチャーを選択可能
標準的 (ランチャパッドを使用)	電子イメージのみ	はい	いいえ	はい	適用外
カスタム	DVD または電子イメージ	いいえ	はい	いいえ	いいえ

---

## Network Deployment 環境の計画

Network Deployment 環境のセットアップには、物理ワークステーションの数および選択するパターンのタイプなど、多くの決定が関係しています。それぞれの決定はデプロイメント環境をセットアップする方法に影響を与えます。

デプロイメント環境を計画する前に、以下の作業を実行します。

- データベース・タイプの選択
- 使用可能なリソースの識別
- 必要なセキュリティ権限の明確化

相互接続サーバーのレイアウトを計画する際には、いくつかの決定を下す必要があります。こうした決定は、使用可能なハードウェアと物理接続の間で行われるトレードオフ、管理および構成の複雑さ、およびパフォーマンス、アベイラビリティ、スケーラビリティ、分離機能、セキュリティ、安定度などの要件に影響を与えます。

1. デプロイメント環境の機能要件を明確化します。

- a. デプロイメント環境のフィーチャーおよびランタイム機能を明確化します。

デプロイメント環境で、IBM Business Process Manager に加えてその他の IBM Business Process Manager 製品および BPM 以外の製品をサポートするかどうか検討します。

- b. デプロイするコンポーネントのタイプを確認します。

コンポーネント・タイプとコンポーネント間の対話を要件の一部として検討します。

- c. インポートおよびエクスポートの実装タイプとトランスポートを決定します。

データベースに必要なリソースまたは Java™ Message Service (JMS) リソース、およびビジネス・イベントとそれらの伝送手段に必要な事柄について考慮します。

- d. アプリケーションに関連しない機能要件を確認します。

セキュリティ・サーバー、ルーター、およびビジネス・イベントを処理するための他のすべてのハードウェア要件またはソフトウェア要件を検討します。

2. ご使用の環境に対する容量とパフォーマンスの要件を明確化します。

3. 各機能に必要な物理サーバーの数を決定します。

4. デプロイメント環境を設計します。

パターンを決定します。IBM Business Process Manager では、次の 4 つの確立されたトポロジー・パターンのいずれかを選択できます。

- 単一クラスター
- リモート・メッセージング
- リモート・メッセージングおよびリモート・サポート
- リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web

これらのパターンがいずれもニーズを満たさない場合は、管理コンソールを使用してカスタム・デプロイメント環境を作成できます。

**注:** 構成が、IBM Business Process Manager に加えて、およびこれと互換性のある、複数の IBM Business Process Manager および BPM 以外の製品をサポートする場合、デプロイメント環境を作成するときにこれらの製品のパターンを使用できます。

各パターンとその相違点について詳しくは、『34 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』』を参照してください。

## 5. デプロイメント環境の構成に使用できる方法を理解します。

以下のタイプの IBM Business Process Manager のデプロイメント環境を構成できます。

### • 標準化された Network Deployment 環境

標準化された Network Deployment 環境は、ソフトウェアに組み込まれているトポロジー・パターン・テンプレートに基づいており、「デプロイメント環境構成」ウィザードまたは `wsadmin` コマンドを使用して実装されます。

「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して、単一クラスター、リモート・メッセージング、リモート・メッセージングとリモート・サポート、および (該当する場合) リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web クラスターのトポロジー・パターンを持つクラスターを作成できます。

### • カスタマイズされた Network Deployment 環境

カスタマイズされた Network Deployment 環境は、管理コンソールから作成する構成であり、デプロイメント環境ウィザードを使用して作成される「テンプレート・ベース」の構成とは異なります。

カスタマイズされた Network Deployment 環境は、ソフトウェアに組み込まれているトポロジー・パターンが構成要件を満たさない場合にのみ作成してください。

標準化された環境の場合と同様に、カスタマイズされた Network Deployment 環境は `wsadmin` を使用して作成できます。

## 概要: デプロイメント環境のトポロジーおよびパターン

Network Deployment 環境にはさまざまなトポロジーを持たせることができます。またこの環境は、いくつかの標準トポロジー・パターンから作成することができます。

### トポロジーの概要

トポロジーとは、キャパシティー、可用性、およびスケーラビリティに対するビジネス・ニーズを満たすために必要なデプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。

IBM Business Process Manager の Process Center コンポーネントと Process Server コンポーネントの両方のトポロジーをセットアップすることができます。

さまざまな要因がトポロジーの設計方法および実装方法に影響を与えます。例えば、ビジネスおよびアプリケーションの要件、リソースの要件および制約、環境の本来の目的、オペレーティング・システムなどを考慮する必要があります。

IBM Business Process Manager には、以下のトポロジーのパターンが組み込まれています。これらのパターンを使用すると、PoC (概念検証) から完全な機能を備えた実稼働環境に至るさまざまなビジネス・シナリオに対処できます。

- 単一クラスター
- リモート・メッセージング
- リモート・メッセージングおよびリモート・サポート
- リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web

各トポロジー・パターンには、特定のビジネス・ニーズに対応する設計特性があります。例えば、分散システムの場合、単一クラスター・トポロジー・パターンは、通常、テストまたは PoC のシナリオに使用します。z/OS® システムの場合、このトポロジー・パターンはデフォルト・パターンであり、実稼働環境で使用できます。

各トポロジーの設計特性は、トポロジー・パターンとして取り込まれ、構成テンプレートとして製品とともに提供されます。

標準化された (IBM 提供の) トポロジー・パターンを必ず使用する必要はありません。どのトポロジー・パターンも特定のニーズに対応しない場合は、カスタム・トポロジー・パターンを作成できます。

## デプロイメント環境パターンの目的

デプロイメント環境トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境に関するコンポーネントとリソースの制約と要件を指定します。トポロジー・レイアウトごとに IBM 提供のパターンが用意されています。これらのトポロジー・パターンは、最もよく使用される BPM トポロジー・パターンの特性である、コンポーネント対話のルールおよびガイドラインを提供します。IBM 提供のトポロジー・パターンは、テスト済みの既知の構成シナリオに基づいています。これらのパターンにはデプロイメント環境を作成するための反復可能な自動化方式が含まれています。各トポロジー・パターンは、関連付けられているトポロジーの構成要件およびビジネス・ニーズを満たすように設計されています。トポロジー・パターンを使用すると、デプロイメント環境を最も単純な方法で作成できます。

デプロイメント環境トポロジー・パターンは、連携して動作するコンポーネント構成を含む推奨トポロジーを表します。そのため、完全に機能するデプロイメント環境を確実に構築できます。デプロイメント環境トポロジー・パターンの構成ルールを使用して、ファースト・パス構成を生成できます。これが可能な理由は、多数の設計上の決定 (例えば、どのコンポーネントを構成するか、どのデフォルト・パラメーターおよびリソースが必要か) がトポロジー・パターンに実装されているためです。

提供されているデプロイメント環境トポロジー・パターンは、それぞれ特定の要件のセットに対応しています。これらのトポロジー・パターンのいずれかを使用すると、ほとんどの要件セットに対処できます。トポロジー・パターンを選択するには、以下のステップをすべて実行します。

- 作成するビジネス・ソリューションの要件を理解します。
- IBM 提供のトポロジー・パターンの機能および特性を検討し、理解します。
- 使用するトポロジー・パターンを決定します。

IBM Business Process Manager トポロジー・パターンがいずれもニーズを満たさない場合は、管理コンソールまたはスクリプティング (wsadmin コマンド) を使用して、カスタマイズ・トポロジー・パターンを作成できます。

## データベースおよびデプロイメント環境

Network Deployment 環境を作成して構成する前に、データベースを構成し、必要なデータベース表を作成する必要があります。IBM Business Process Manager を使用するには、少なくとも、データベース管理システムで以下のデータベースを構成する必要があります。

- 共通データベース (CMNDB)
- Process Server データベース (BPMDDB)
- Performance Data Warehouse データベース (PDWDB)

スタンドアロン・サーバー構成の場合、「標準」インストール・オプションを使用すると、これらのデータベースが構成され、必要なデータベース表が自動的に作成されます。

Network Deployment 環境 (カスタマイズされたデプロイメント環境または標準化されたデプロイメント環境) の場合は、担当者またはデータベース管理者がインストーラーの外部で各データベースを構成する必要があります。追加機能をサポートするには、追加データベースが必要です。例えば、IBM Business Process Manager 構成に Business Process Choreographer、Business Space、または Common Base Event のモニタリングが含まれている場合は、担当者またはデータベース管理者がこれらのデータベースを構成し、用意されているユーティリティまたはスクリプトを使用して、必要なデータベース表を作成する必要があります。この構成は、Network Deployment 環境を作成する前に行う必要があります。

詳しくは、『データベース構成の計画』を参照してください。

## IBM 提供のデプロイメント環境トポロジー・パターンの機能

どの IBM Business Process Manager デプロイメント環境にも、基本的な一連の機能が含まれており、それらの機能が組み合わさることで完全な実稼働環境を形成しています。

堅固なデプロイメント環境を設計するためには、各クラスターが IBM 提供のトポロジー・パターンまたはカスタム・デプロイメント環境に提供できる機能について理解しておく必要があります。特定のタイプの機能 (例えば、サポート・インフラストラクチャー機能) を特定のクラスターに割り振ることができます。これらの機能を理解しておくこと、ニーズに最も合ったデプロイメント環境トポロジー・パターンを選択するのに役立ちます。

ネットワーク・デプロイメントの場合、複数のクラスターが共同でその環境に固有の機能を提供できます。お客様の要件に合わせて、デプロイメント環境内の各クラスターに特定の機能を割り当てて、パフォーマンス、フェイルオーバー、および容量を提供します。

デプロイメント環境で構成されたクラスターは、以下の機能を提供します。

これらの機能は、単一のクラスター内に存在している場合もあれば、複数のクラスターにまたがって分散している場合もあります。標準化された (IBM 提供の) トポロジー・パターンでは、これらの機能をサポートするために、それぞれ異なる数のクラスターが作成されます。デプロイメント環境内でのクラスターの数は、使用するトポロジー・パターンにより異なります。

### アプリケーション・デプロイメント・ターゲット

アプリケーション・デプロイメント・ターゲットとは、アプリケーション (ヒューマン・タスク、ビジネス・プロセス、メディエーションなど) のインストール先となる一連のサーバー (クラスター) です。選択したデプロイメント環境トポロジー・パターンによっては、アプリケーション・デプロイメント・ターゲットがメッセージング・インフラストラクチャーおよびサポート・インフラストラクチャーの機能を提供する場合があります。

単一クラスター・トポロジー・パターンでは、アプリケーション・デプロイメント・ターゲットはデプロイメント環境のすべての機能を提供します。

### サポート・インフラストラクチャー

サポート・インフラストラクチャーには、環境をサポートしてシステムを管理するために使用される Common Event Infrastructure (CEI) サーバーやその他のインフラストラクチャー・サービスが含まれます。各種インフラストラクチャー・サービスには、以下のものがあります。

- ビジネス・ルール
- セレクター
- ヒューマン・タスク
- ビジネス・プロセス

**重要:** このノードに対して、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターに対して使用した製品機能と同じ製品機能のカスタム・プロファイルを使用する必要があります。

ビジネス・ルールは、サポート・インフラストラクチャー・クラスターには結合されません。実際、ビジネス・ルールは、セル内のすべての場所で存在し、機能することができます。ビジネス・ルール管理機能 (Business Rules Manager から実行される) は、サポート・インフラストラクチャー・クラスター (3 クラスター構成の場合) または Web アプリケーション・インフラストラクチャー・クラスター (4 クラスター構成の場合) にデプロイできます。同じ原理がヒューマン・タスクとビジネス・プロセスに適用されます。ヒューマン・タスクとビジネス・プロセスは、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターで実行されます。これは、このクラスターでヒューマン・タスク・コンテナとビジネス・プロセス・コンテナが構成されるためです。ただし、プロセスとタスクは、Business Process Choreographer Explorer から管理します。Business Process Choreographer Explorer は、3 クラスター構成の場合はサポート・インフラストラクチャー・クラスター上、4 クラスター構成の場合は Web アプリケーション・インフラストラクチャー・クラスター上に配置できます。

#### メッセージング・エンジン・インフラストラクチャー

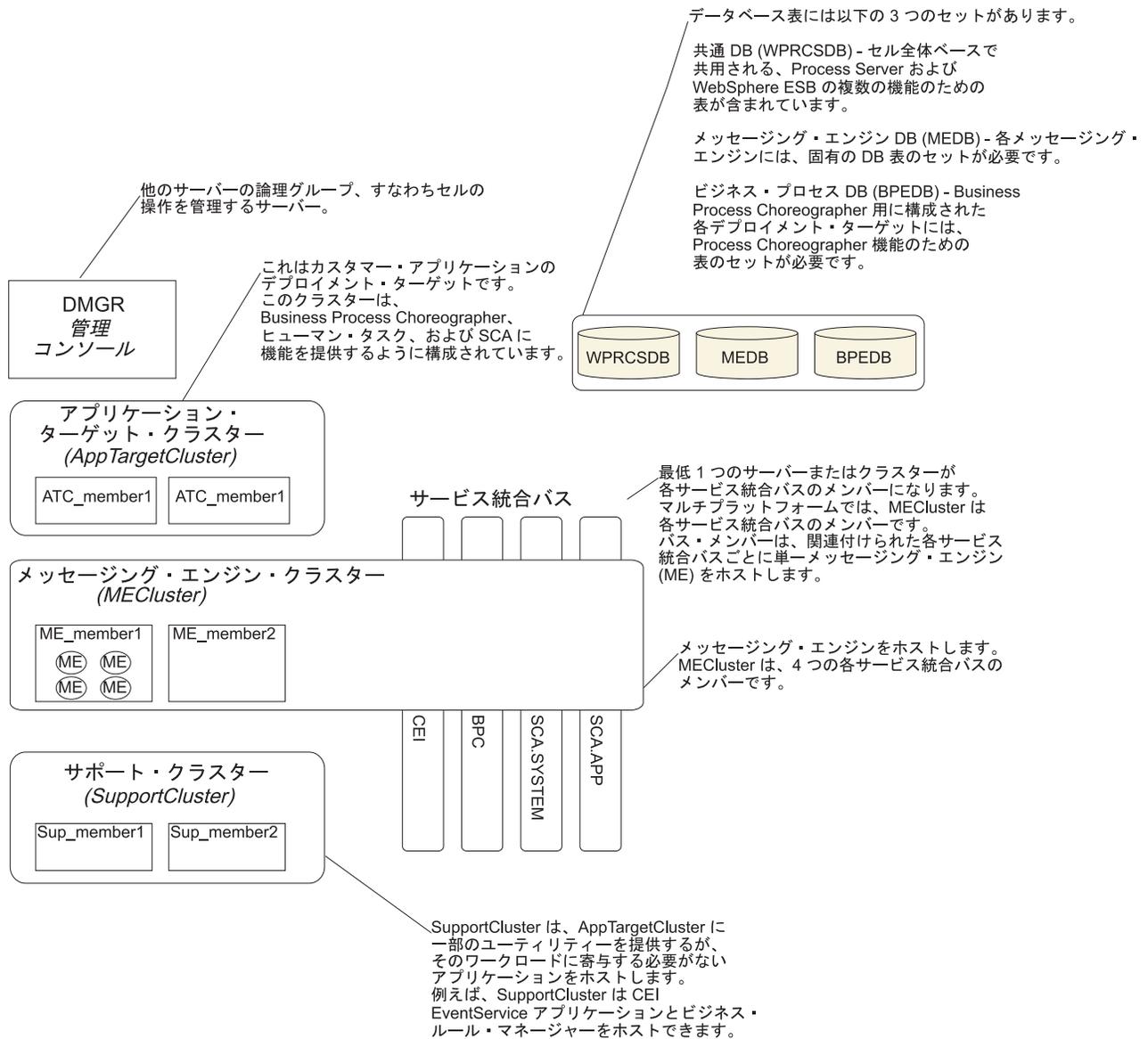
メッセージング・インフラストラクチャーは、メッセージング・エンジンが配置されている一連のサーバー (クラスター) です。メッセージング・インフラストラクチャーは、ご使用のアプリケーションおよび IBM Business Process Manager コンポーネントの内部メッセージング・ニーズに非同期メッセージング・サポートを提供するために使用されます。メッセージング・エンジンによって、デプロイメント環境内のノード間の通信が可能になります。クラスターがメッセージング機能のみを提供する場合は、このクラスターは IBM Business Process Manager ではなく WebSphere Application Server で作成されたノード上のメンバーでも構成することができます。

#### Web アプリケーション・インフラストラクチャー

Web ベース・コンポーネントの Business Process Choreographer Explorer、Business Space および Business Rules Manager が配置されている 1 つのクラスターで構成されます。

すべての環境内にあるトポロジーに対して、IBM Process Server および WebSphere ESB の基本的な部分は、常にほぼ同等です。どの IBM Process Server セルおよび WebSphere ESB セルでも、デプロイメント・マネージャーが、そのセルの管理の中心点になります。

次の図に、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンを使用して構成した、IBM Process Server デプロイメント環境の注目点を示します。Process Center デプロイメント環境ではアプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターに Process Center コンソールが含まれていますが、この点を除けば、このトポロジー・パターンは Process Center デプロイメント環境と同じです。Process Server の Network Deployment 環境には、Process Center コンソールは含まれません。



この図には、以下のものが含まれています。

- **デプロイメント・マネージャー (DMGR):** 論理グループまたは他のサーバーのセルの操作を管理するサーバー。
- **アプリケーション・ターゲット・クラスター:** カスタマー・アプリケーションのデプロイメント・ターゲット。このクラスターは、BPEL プロセス、ヒューマン・タスク、プロセス・アプリケーション、および SCA に機能を提供するように構成されています。Process Center デプロイメントの場合、このクラスターには Process Center コンソールも含まれます。
- **データベース:**
  - 共通データベース (CMNDB) - 必須。複数の IBM BPM Advanced Process Server および WebSphere ESB 機能のためにセル全体ベースで共用される表が含まれます。
  - Process Server データベース (BPMDB) - 必須。IBM BPM Advanced Process Server 機能のための表が含まれます。
  - Performance Data Warehouse データベース (PDWDB) - 必須。Performance Data Warehouse 機能のための表が含まれます。

- メッセージング・エンジン・データベース (MEDB) - 各メッセージング・エンジンには、固有のデータベース表のセットが必要です。
- Business Process データベース (BPEDB) - Business Process Choreographer 用に構成された各デプロイメント・ターゲットには、Business Process Choreographer 機能のための表のセットが必要です。
- **サービス統合バス (SIBus):** 少なくとも 1 つのサーバーまたはクラスターが各 SIBus のメンバーです。マルチプラットフォームでは、メッセージング・エンジン・クラスターは各 SIBus のメンバーです。バス・メンバーは、関連付けられた各 SIBus ごとに 1 つのメッセージング・エンジン (ME) をホストします。
- **メッセージング・エンジン (ME) クラスター:** メッセージング・エンジンをホストします。ME クラスターは、4 つのサービス統合バスのそれぞれのメンバーです。
- **サポート・クラスター:** サポート・クラスターは、アプリケーション・ターゲット・クラスターに一部のユーティリティを提供するアプリケーション (ただし、そのクラスターのワークロードの一部にはならない) をホストします。例えば、サポート・クラスターはビジネス・ルール・マネージャーをホストする場合があります。

## ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

### 関連概念:

44 ページの『トポロジーを選択するための考慮事項』

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

46 ページの『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

23 ページの『スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択』

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするためには、スタンドアロン環境を選択します。実稼働環境でキャパシティー、アベイラビリティ、スケラビリティ、およびフェイルオーバー・サポートなどの追加のフィーチャーを必要とする場合は、Network Deployment 環境を選択します。

## 単一クラスター・トポロジー・パターン

「単一クラスター」トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンの 1 つです。単一クラスター・トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境のすべての機能が 1 つのクラスターにまとめられています。

これは、IBM Business Process Manager for z/OS のデフォルト・パターンです。

単一クラスター・トポロジー・パターンは、ハードウェアが限られている場合に理想的です。すべてのコンポーネントが同じクラスターにインストールされるため、必要な物理マシンの数が少なく済みます。ただし、サポート・アプリケーションおよび統合アプリケーションを各サーバー・インスタンスで実行する必要があるため、個々の Java 仮想マシン (JVM) のメモリー所要量が多くなります。さらに、クラスターの 1 つ以上のメンバーで、非同期対話に必要なメッセージング・エンジンも実行する必要があります。そのため、単一クラスター・トポロジー・パターンは、通常、PoC (概念検証) 環境、開発環境、およびテスト環境で使用されます。

IBM Business Process Manager 環境のすべての側面を単一クラスターに結合する場合には、メモリー所要量が増加する点に加えて、いくつかの点を考慮する必要があります。

- 非同期対話 (JMS および MQ/JMS バインディングを含む)、ヒューマン・タスク、ステート・マシン、および長期実行ビジネス・プロセスは、メッセージング・インフラストラクチャーを頻繁に使用することがあるため、これらのコンポーネントを使用するアプリケーションには、単一クラスター環境は適していません。
- このトポロジー・パターンでは、メッセージング要件は最小に抑える必要があります (z/OS の場合は除く)。
- Service Component Architecture (SCA) の内部非同期呼び出し、Java Message Service (JMS) と MQ のメッセージングのバインディングは、同じクラスターで複数のメッセージング・エンジンをサポートしません。

必要な場合は、他のいずれかのトポロジー・パターン (メッセージング・インフラストラクチャーがアプリケーション・デプロイメント・ターゲットとは別のクラスターに存在する) を選択してください。

単一クラスター・トポロジー・パターンは、アプリケーションの実行および同期呼び出しに焦点を当てたシナリオに適しています。このトポロジー・パターンは、Common Event Infrastructure (CEI) を頻繁に使用することを計画している場合にも適していません。CEI 関連のメッセージング・トラフィックとイベントを生成すると、クラスター・メンバーに対する負荷が増加します。

管理上の観点とスケーラビリティの観点からは、単一クラスター・トポロジー・パターンが優れています。単一クラスターでは、各メンバーがすべての IBM Business Process Manager コンポーネントを実行するため、管理が容易になります。複数のクラスター内にいくつかのサーバー・インスタンスがある代わりに、少数のメンバーが単一のクラスターにまとめられています。環境のニーズが増大した場合でも、ノードおよびクラスター・メンバーを追加するだけで、インフラストラクチャーを拡張できます。このため、簡単に機能を追加できますが、その場合はすべてのコンポーネントが同じ比率で拡張されます。例えば、クラスター・メンバーを追加するたびに、CEI 処理が必要かどうかに関係なく、CEI 処理が追加されます。複数のサーバー・メンバーにわたって分散するメッセージング・エンジンがポリシーを使用する場合は、ポリシーの作成および保守のために、管理上の作業が増える可能性があります。

単一クラスター・トポロジー・パターンでは、以下に示すすべてのデプロイメント環境機能およびコンポーネントが単一クラスター上で実行されます。

- アプリケーション:
  - Process Server
  - Process Portal
- メッセージング・バス・メンバー:
  - Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
  - Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
  - Process Server バス・メンバー
  - Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
  - SCA システム・バス・メンバー
- サポート・インフラストラクチャー・アプリケーション:
  - CEI サーバー・アプリケーション
  - パフォーマンス・データウェアハウス
- Web アプリケーション:
  - ビジネス・ルール・マネージャー

## - REST API サービス

次に示す単一クラスター・トポロジー・パターンのグラフィカル表現を参照してください。

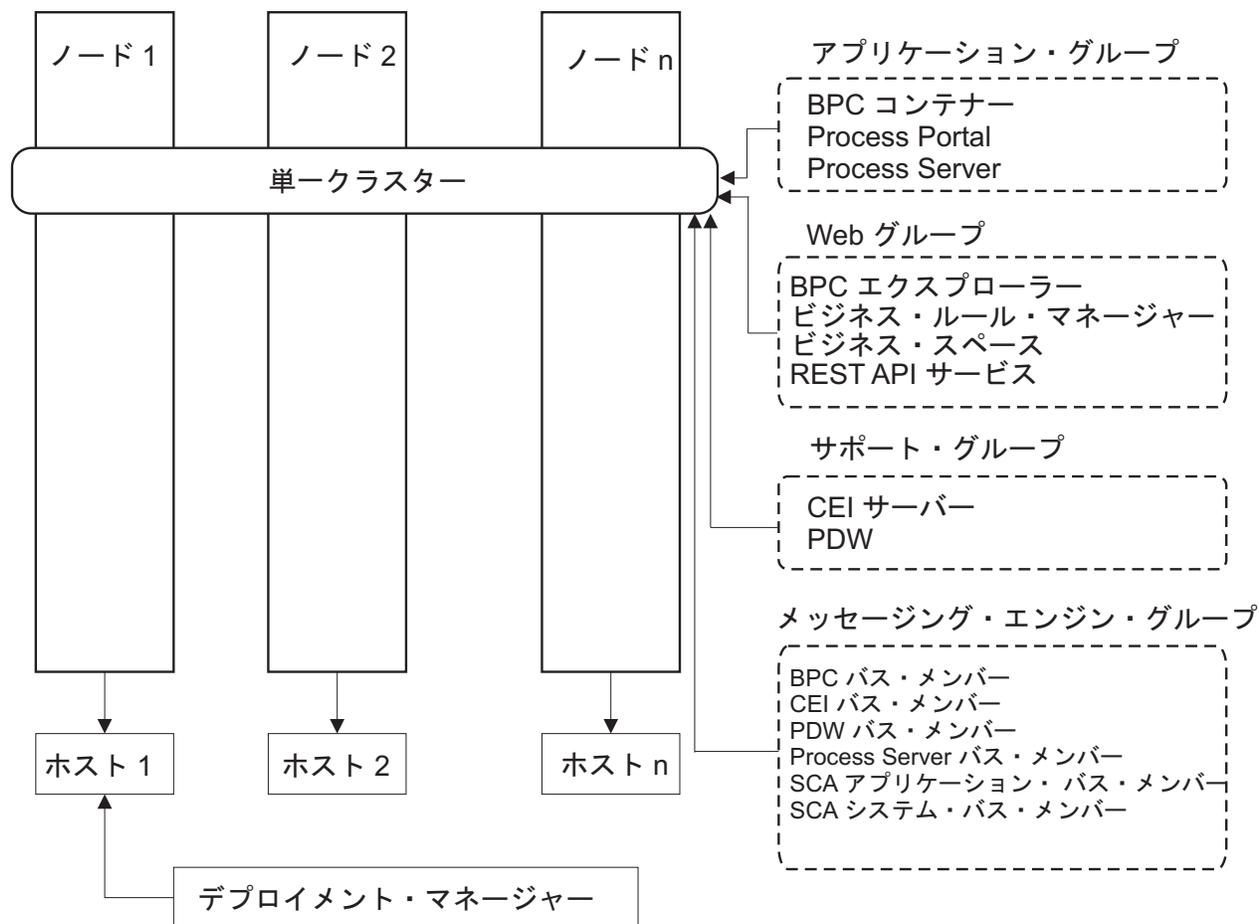


図3. 単一クラスター・トポロジー・パターン

## リモート・メッセージング・トポロジー・パターン

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンです。リモート・メッセージング・トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境の機能は 2 つの別個のクラスターに分割されています。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンでは、メッセージング機能用に独立したクラスターを使用します。このトポロジー・パターンは、負荷に対してクラスターを拡張できるため、非同期呼び出しを必要とするシナリオに適しています。各コンポーネントは、2 つのクラスター間で分割されます。

多数のヒューマン・タスク、長期実行ビジネス・プロセス、ステート・マシン、および非同期対話をサポートする必要がある環境では、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンの方が単一クラスター・トポロジー・パターンよりも有利です。

独立したクラスターにメッセージング・インフラストラクチャーを分離することで、メッセージングのオーバーヘッドがアプリケーション・ターゲット・クラスターから取り除かれます。分離されたメッセージング・インフラストラクチャーを持っている場合には、アプリケーション・ターゲット・クラスター・メンバーに必要なメモリーは少なくなります。このトポロジー・パターンは、また、必要なハードウェアに関して、単一クラスター・トポロジー・パターンとは異なっています。複数のクラスター・メンバーを持つ 2 つのクラスターがあるので、分散環境を構築するためにハードウェア要件が増しています。

管理上の観点からは、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンの要件は、単一クラスター・トポロジー・パターンの要件よりも増しています。クラスターやクラスター・メンバーを追加すると、必要な管理上の手間が増します。さらに、メッセージング・クラスターのメンバー全体にわたってメッセージング・エンジンを分散させているので、ポリシーを作成し、維持する必要があります。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンでは、サポート・アプリケーションおよび Common Event Interface (CEI) コンポーネントはやはりアプリケーション・ターゲット・クラスターの一部です。したがって、CEI を頻繁に使用する環境には、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンも理想的ではないことがあります。小規模から中規模のビジネスの場合、または頻繁なモニター要件または監査要件がないビジネスの場合は、通常、このトポロジー・パターンが適しています。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンのスケラビリティ・オプションは、単一クラスター・トポロジー・パターンのオプションと同程度に単純なものです。メッセージング・エンジンが従うのは  $n$  個のポリシーのうちのいずれか 1 つである (各メッセージング・エンジンは 1 つのサーバー上でのみアクティブになる) ため、メッセージング・クラスターにメンバーを追加しても、影響はほとんどありません。ポリシーを使用してサーバーのメンバー全体にわたってメッセージング・エンジンを分散させる場合、メッセージングの負担を最大で 3 つのサーバーに分割できます。(SCA.SYSTEM および SCA.APPLICATION のエンジンは、同じサーバー上でアクティブです。) このため、3 つより多くのクラスター・メンバーをメッセージング・クラスターに追加しても、メッセージング・インフラストラクチャーの処理能力は増強されません。アプリケーション・ターゲット・クラスターの拡張は、比較的容易です。ご使用のアプリケーションまたはサポート・インフラストラクチャーのために追加の処理能力が必要な場合は、追加のノードおよびメンバーをアプリケーション・ターゲット・クラスターに追加することができます。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは、以下をホスティングします。

- アプリケーション:
  - Process Server
  - Process Portal
- サポート・インフラストラクチャー・アプリケーション:
  - CEI サーバー・アプリケーション
  - パフォーマンス・データウェアハウス
- Web アプリケーション:
  - ビジネス・ルール・マネージャー
  - REST API サービス

メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
- Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
- Process Server バス・メンバー
- Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー

• SCA システム・バス・メンバー

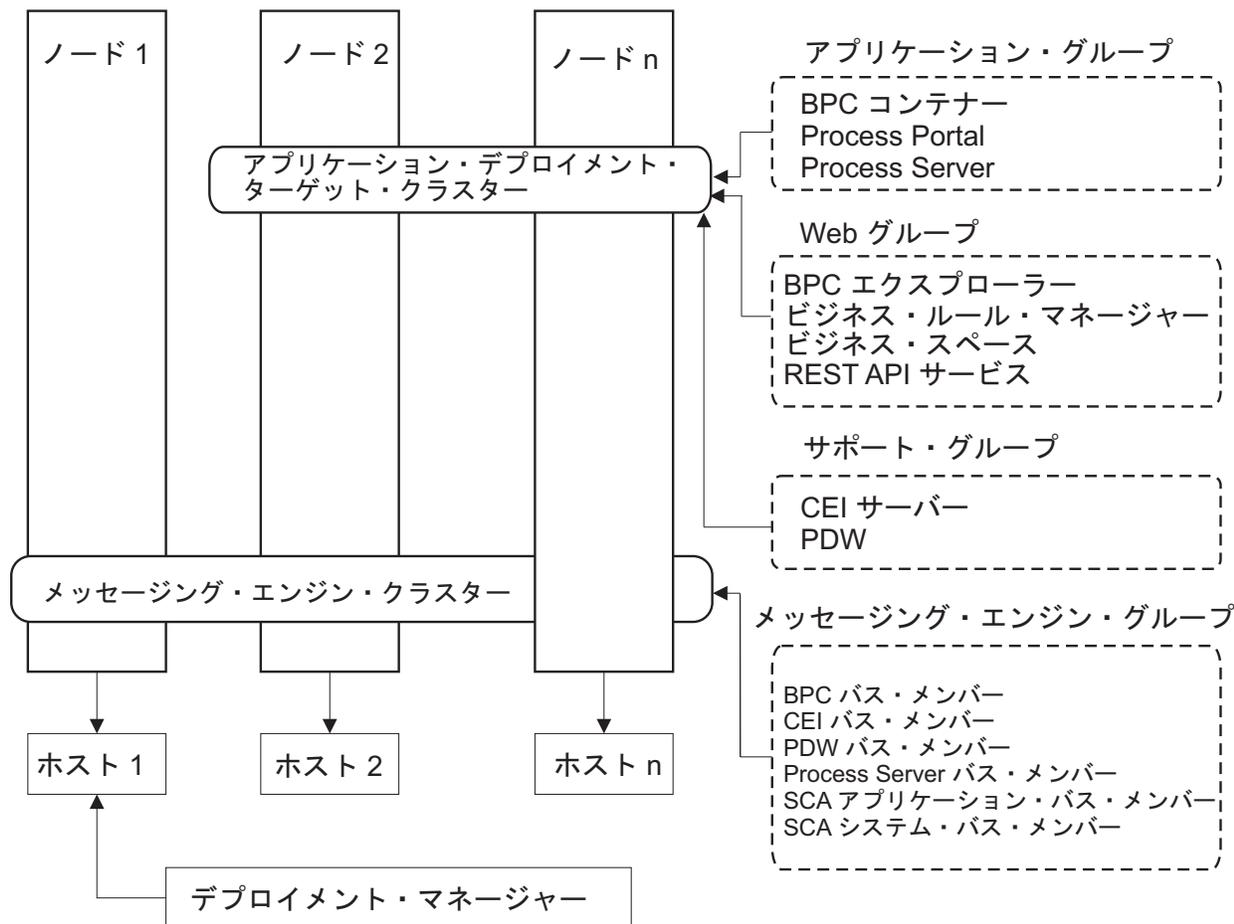


図4. リモート・メッセージング・トポロジー・パターン

## リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターン

「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンです。リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境機能は 3 つの分離したクラスターに分割されます。

この 3 つのクラスターのトポロジー・パターンを使用して、最も高い負荷を処理するクラスターにリソースが割り振られます。このトポロジー・パターンは、最も柔軟性が高く、用途が広いため、ほとんどのユーザー (z/OS を除く) に推奨されます。コンポーネントは 3 つのクラスター間で分割されます。

大規模なコンピューティング・インフラストラクチャーを保有されている多くのお客様には、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンが推奨される環境です。分散プラットフォームのハードウェア要件はより強いものです。ただし、複数のメンバーが特定の機能を実行している 3 つ以上のクラスターを持っている場合に、Java 仮想マシン (JVM) のメモリーの使用を調整しチューニングするのに、より大きい柔軟性があります。

それぞれが自身の機能およびアプリケーションを持つ 3 つのクラスターを作成すると、管理上の余分の負担が追加されます。クラスターやクラスター・メンバーを追加するにつれて、パフォーマンス・チューニング計画の規模が大幅に拡大し、トラブルシューティングの負担が大幅に増すことがあります。メッセージング・クラスターのメンバー全体にわたってメッセージング・エンジンを分散させると、ポリシーの作成および保守に関連する管理上の負担も増します。

スケーラビリティの観点からは、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンが最も高い柔軟性を提供します。IBM Business Process Manager 内の個別の機能のそれぞれが 3 つのクラスター間で分割されるため、パフォーマンス上のボトルネックを正確に特定でき、クラスター・サイズもかなり容易に調整できます。追加の Common Event Interface (CEI) 処理が必要な場合は、単純にノードおよびクラスター・メンバーをサポート・クラスターに追加することができます。同様に、ビジネス・プロセスまたはヒューマン・タスクの処理能力を増強する必要がある場合は、ノードおよびメンバーをアプリケーション・ターゲット・クラスターに追加することができます。3 つより多くのクラスター・メンバーを追加してメッセージング・インフラストラクチャーを拡張しても処理能力には効果はないので、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンのスケーラビリティの制限事項は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンにも適用されます。

リモート・メッセージング・トポロジー・パターンの場合と同様に、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンは長期実行ビジネス・プロセス、ステート・マシン、ヒューマン・タスク、および非同期対話 (JMS および MQ/JMS バインディングを含む) のための理想的な環境を提供します。

アプリケーション・ターゲット・クラスターはビジネス・インテグレーション・アプリケーションのみを実行するので、パフォーマンスのチューニングおよび診断は、アプリケーション・ターゲット・クラスターが追加の役割を持っているトポロジー・パターンの場合よりもはるかに単純です。リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンは、モニターおよび監査のために CEI を頻繁に使用する環境 (IBM Business Monitor を使用する環境を含む) でも理想的です。サポート・インフラストラクチャーをそれ自身のクラスターに分割すると、CEI 用およびサポートを行うアプリケーション用の専用のクラスター・メンバーのセットを持つことになります。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは、以下をホスティングします。

- Process Server
- Process Portal

メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
- Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー
- Process Server バス・メンバー
- Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
- SCA システム・バス・メンバー

サポート・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- サポート・アプリケーション:
  - CEI サーバー・アプリケーション
  - パフォーマンス・データウェアハウス
- Web アプリケーション:
  - ビジネス・ルール・マネージャー

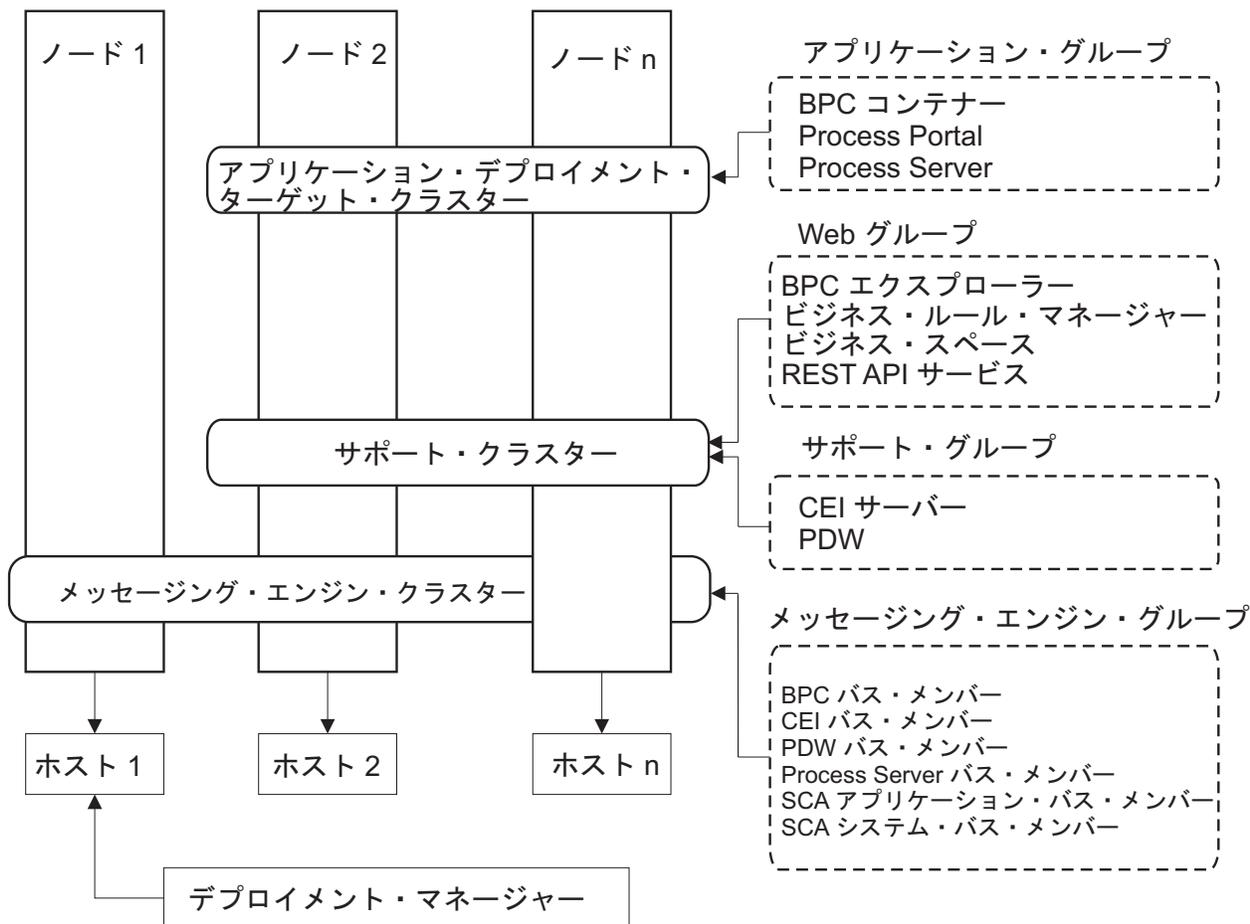


図5. リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターン

### リソース割り振りの例

以下の図は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンを使用してリソースを割り振る 1 つの方法を示しています。この図は、3 つのホストを示しています。ホスト A にはサーバー 1 およびサーバー 3 があります。ホスト B にはサーバー 2、サーバー 4、およびサーバー 5 があります。またホスト C にはサーバー 6 およびサーバー 7 があります。このインストール済み環境に対する最も重い負荷はアプリケーションの使用によって発生するので、アプリケーション・デプロイメントのターゲット・クラスター (クラスター 3) には、サーバー 1、サーバー 2、およびサーバー 6 のために他の機能のためよりも多くのリソースが割り振られています。

**重要:** ロード・バランシングは、デフォルトの構成であるリモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジー・パターンでは使用できません。このデフォルト構成で使用されるメッセージング・エンジン・バスは 1 つだけですが、ロード・バランシング機能を使用する場合、2 つ以上のメッセージング・エンジン・バスが必要になります。

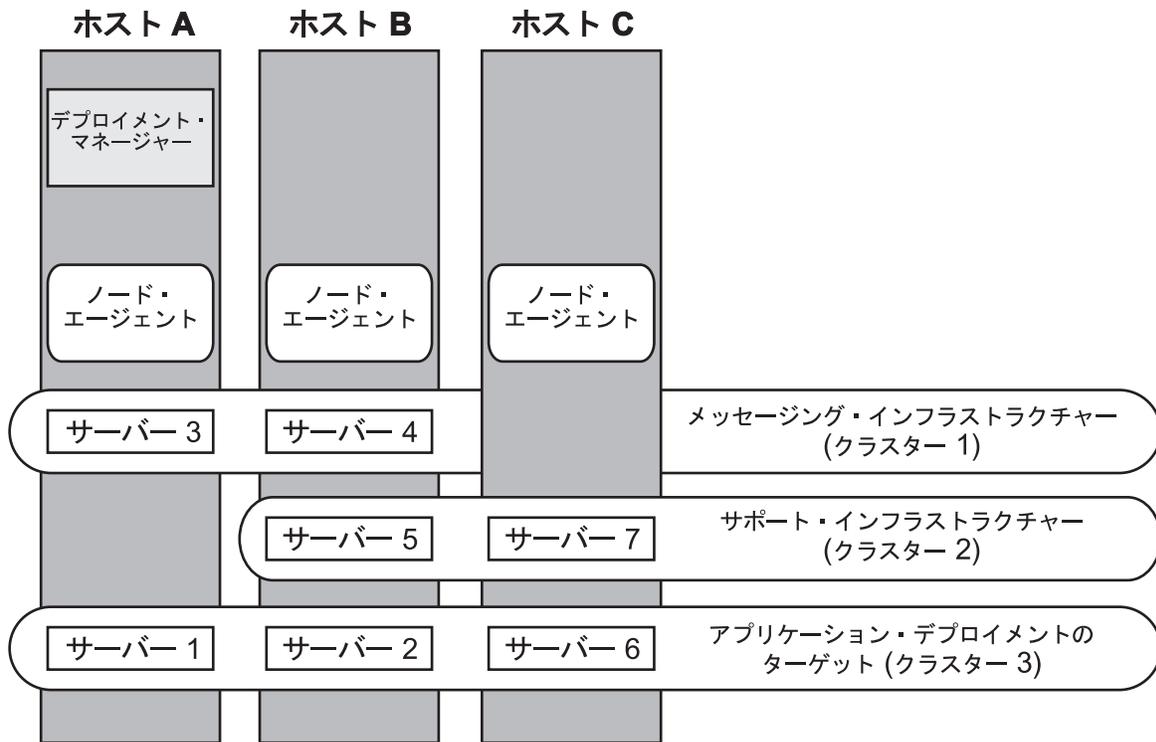


図6. リソース割り振りの例

## リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web トポロジー・パターン

「リモート・メッセージング、サポート、および Web」トポロジー・パターンは、IBM 提供のトポロジー・パターンの 1 つです。「リモート・メッセージング、サポート、および Web」トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境の機能が 4 つの独立したクラスターに分割されます。

「リモート・メッセージング、サポート、および Web」トポロジー・パターンは、IBM Business Process Manager Advanced で推奨される開始トポロジー・パターンです。

注: このパターンは、IBM Business Monitor が組み込まれていない限り標準構成では使用しないでください。

この 4 つのクラスターからなるトポロジー・パターンは、サポートする Web アプリケーションが独自のクラスターに常駐するという点を除き、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンによく似ています。

アプリケーション・デプロイメント・ターゲット・クラスターは、以下をホスティングします。

- Process Server
- Process Portal

メッセージング・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- Common Event Interface (CEI) バス・メンバー
- Performance Data Warehouse (PDW) バス・メンバー

- Process Server バス・メンバー
- Service Component Architecture (SCA) アプリケーション・バス・メンバー
- SCA システム・バス・メンバー

サポート・インフラストラクチャー・クラスターは、以下をホスティングします。

- CEI サーバー・アプリケーション
- パフォーマンス・データウェアハウス

Web アプリケーション・クラスターは、以下をホスティングします。

- ビジネス・ルール・マネージャー
- REST API サービス

「リモート・メッセージング、サポート、および Web」トポロジー・パターンでは、デプロイメント環境の機能が 4 つの独立したクラスターに分割されます。メッセージング機能に 1 つのクラスター、サポート機能に 1 つのクラスター、アプリケーションに 1 つのクラスター、Web ベースの機能に 1 つのクラスターが使用されます。

環境内の個々のコンポーネントを詳細に制御できる能力に加え、このトポロジー・パターンの利点は、「リモート・メッセージングおよびリモート・サポート」トポロジー・パターンの利点に似ています。

リモート・メッセージング、サポート、および Web トポロジーのグラフィカル表現を参照してください。

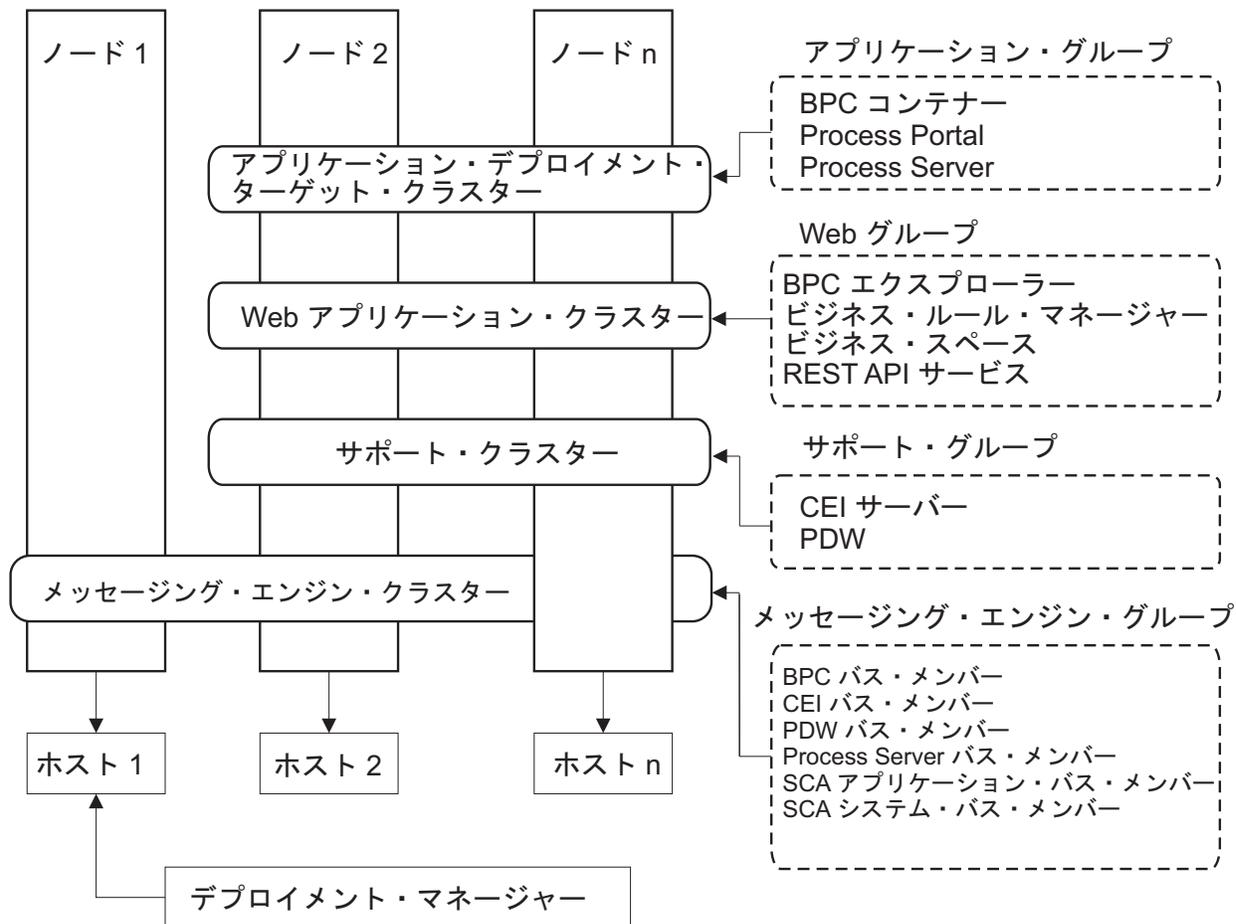


図7. 「リモート・メッセージング、サポート、および Web」 トポロジー・パターン

## カスタマイズされたトポロジー

カスタマイズされたトポロジーは、お客様の状態に固有の処理要件およびビジネス要件に対処します。これは IBM 提供のトポロジー・パターンではなく、ユーザーが作成し、次に固有のニーズに合うように調整するトポロジーです。

ユーザー自身のデプロイメント環境トポロジーを定義する必要がある場合には、カスタマイズされたトポロジーが抜群に柔軟性の高いものです。IBM 提供のトポロジー (単一クラスター、リモート・メッセージング、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート、および リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web) は、すべての IBM Business Process Manager コンポーネントを、それぞれのデフォルトの場所にデプロイします。これらのコンポーネントに関連する追加のオーバーヘッドは、必要な場合とそうでない場合があります。例えば、組織が Common Event Interface (CEI) を必要としない場合は、CEI サポートを使用環境から取り除いたカスタム・トポロジーを作成できます。同様に、ビジネス・ルール・マネージャーの利用を許可しないガバナンス・ルールが組織に存在する場合は、デプロイメント環境からビジネス・ルール・マネージャーを取り除くことができます。

使用環境にデプロイされているコンポーネントを制御できる能力を除けば、カスタム・トポロジーの利点は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポート・トポロジーの利点と同様です。また、欠点も同様です。

**重要:** カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成するには、IBM 提供のトポロジー・パターンを使用する場合よりも多くの労力が必要です。IBM 提供のトポロジー・パターンは、「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用して作成できます。カスタマイズされた Network Deployment 環境の作成を試行する前に、IBM 提供のトポロジーの中に、ニーズに対処するものがないかを確認してください。管理コンソールのフィーチャーと機能を確かに理解している場合に限り、カスタマイズされた Network Deployment 環境の作成を試行すべきです。

## トポロジーを選択するための考慮事項

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

トポロジー・パターンを選択する場合には、以下の要因を考慮します。

- 使用可能なハードウェア・リソース
- アプリケーションの呼び出しパターン
- 実装を計画しているビジネス・プロセスのタイプ (割り込み可能か割り込み不可能か)
- Common Event Infrastructure (CEI) をどの程度頻繁に使用する予定であるか
- 個別のスケラビリティ要件
- 必要になる管理作業

IBM 提供のトポロジーは、Process Server および Process Center トポロジーの両方に適用することができます。したがって、ご使用の Process Center および Process Server Network Deployment 環境は、同様な方法で編成することができます。

IBM 提供のトポロジーに基づいて Process Server および Process Center 用の環境を作成する手順も、やはり同様なものです。IBM 提供のパターンに関連する唯一の相違点は、実稼働環境用に推奨されるパターンと、それらのパターンを形成するクラスター上で構成されるコンポーネントです。

IBM Business Process Manager の各構成で使用可能なコンポーネント、フィーチャーおよび機能に関する情報については、『IBM Business Process Manager V7.5.1 構成の機能』を参照してください。

IBM 提供のトポロジーに関するヒントに従ってください。

- IBM Process Server デプロイメント環境の場合、最適なトポロジーは以下のとおりです。
  - リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web: 4 クラスター・トポロジー・パターン

**注:** このパターンは、IBM Business Monitor が組み込まれていない限り標準構成では使用しないでください。

- リモート・メッセージングおよびリモート・サポート: 3 クラスター・トポロジー・パターン
- IBM Process Center デプロイメント環境の場合、最適なトポロジーは以下のとおりです。
  - 単一クラスター・トポロジー・パターン
  - リモート・メッセージング: 2 クラスター・トポロジー・パターン

ご使用の Process Server または Process Center Network Deployment 環境用に選択するパターンは、ユーザーの固有の要件に基づいている必要があります。

ご使用の実稼働環境の計画を立てるときに、共通の各トポロジー・パターンの利点および欠点を綿密に考慮してください。

## 圧縮されたトポロジー・パターンの選択基準

以下の表に記載されている情報を考慮してください。これは、使用する実動トポロジーを選択する場合の簡単な手引きです。この表には、各トポロジー・パターンの利点と欠点の要約リストを示します。

提供トポロジー・パターンをサポートする BPM 製品については、『トポロジー・パターンおよびサポート対象の BPM 製品フィーチャー』を参照してください。

表 19. デプロイメント環境に合わせてトポロジーを選択するための考慮事項

考慮事項	トポロジー・パターン			
	単一クラスター	リモート・メッセージング	リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web
保守するクラスターの数	すべてのコンポーネントに対して 1 クラスター	アプリケーションおよびサポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター  メッセージングに対して 1 クラスター	アプリケーションに対して 1 クラスター  サポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター  サポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター	アプリケーションに対して 1 クラスター  Web インターフェースに対して 1 クラスター  サポート・インフラストラクチャーに対して 1 クラスター  メッセージングに対して 1 クラスター
ハードウェア要件	限られた数のハードウェアで実装できる	分散環境ではより多くのハードウェアが必要	分散環境ではより多くのハードウェアが必要	必要なハードウェアが最も多い
非同期対話	最低限の使用頻度に抑えることが望ましい	使用頻度はリソースの可用性とのバランスをとる必要がある	非同期対話に理想的な環境	非同期対話に理想的な環境
長期実行プロセス、ステート・マシン、およびヒューマン・タスク	最低限の使用頻度に抑えることが望ましい	使用頻度はリソースの可用性とのバランスをとる必要がある	割り込み可能プロセス、ステート・マシン、およびヒューマン・タスクに理想的な環境	割り込み可能プロセス、ステート・マシン、およびヒューマン・タスクに理想的な環境
非常に高い CEI 活動の頻度	非推奨 (CEI の使用頻度を低くしてリソース使用量とのバランスをとることが望ましい)	非推奨 (CEI の使用頻度を低くしてリソース使用量とのバランスをとることが望ましい)	CEI 使用頻度が高い場合に理想的な環境	CEI 使用頻度が高い場合に理想的な環境
管理上の負担	比較的少ない	手間が増す	管理の手間が増す	管理に最も多くの手間がかかる

表 19. デプロイメント環境に合わせてトポロジーを選択するための考慮事項 (続き)

考慮事項	トポロジー・パターン			
	単一クラスター	リモート・メッセージング	リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web
スケーラビリティ	すべてのコンポーネントは同じ比率で拡張される	メッセージング・クラスターのスケーラビリティは制限されている (サーバーの数を 3 つより多くしてもメリットがない)  それ以外のすべてのコンポーネントは同じ比率で拡張される	拡張が容易  すべての機能が独立している  メッセージング・クラスターのスケーラビリティは引き続き制限されている (サーバーの数を 3 つより多くしてもメリットがない)	スケールの変更が最も容易  すべての機能が独立している  メッセージング・クラスターのスケーラビリティは引き続き制限されている (他の BPM 製品を導入するとメリットが出てくる)

#### 関連概念:

『トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

34 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

23 ページの『スタンドアロン環境または Network Deployment 環境の選択』

製品を評価するため、またはアプリケーションおよびサービスの開発をサポートするためには、スタンドアロン環境を選択します。実稼働環境でキャパシティ、アベイラビリティ、スケーラビリティ、およびフェイルオーバー・サポートなどの追加のフィーチャーを必要とする場合は、Network Deployment 環境を選択します。

## トポロジー・パターンおよびサポート対象の製品フィーチャー

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。製品フィーチャーとデフォルトの使用法は、選択するトポロジー・パターンによって異なります。

管理コンソールで「デプロイメント環境構成」ウィザードを使用してデプロイメント環境を作成する場合、デプロイメント環境のベースにするトポロジー・パターンの可用性は、以下の条件および構成上の決定事項によって異なります。

- IBM Business Process Manager をインストールしたプラットフォーム
- 1 次デプロイメント環境フィーチャーおよび補足フィーチャー

47 ページの表 20 に、トポロジー・パターンと製品フィーチャーとの間の関係を示します。

表 20. 使用可能な提供パターンおよびそれらのパターンと製品フィーチャーとの関係

トポロジー・パターン	クラスター数	説明	サポートされる BPM 製品とフィーチャー	デフォルト状況
単一クラスター	1	<p>メッセージング、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、およびアプリケーション・サポート機能を単一のクラスターに含めます。このトポロジー・パターンは、同期メッセージング環境、PoC (概念検証) 環境、またはアプリケーション・テスト環境に役立ちます。</p> <p>単一クラスター・トポロジー・パターンは、ハードウェアが限られている場合に理想的です。すべてのコンポーネントが同じクラスターにインストールされるため、必要な物理マシンの数が少なく済みます。</p>	<p>以下の製品、またはこれらの製品の組み合わせでサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Business Process Manager</li> </ul> <p>Advanced 構成および Standard 構成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Business Monitor</li> </ul>	
リモート・メッセージング	2	<p>このトポロジー・パターンでは、メッセージング環境をアプリケーション・デプロイメント・ターゲットおよびアプリケーション・サポート機能から分離します。このトポロジー・パターンは、日常の運用でメッセージのスループットが重要な要件となる場合に使用します。このトポロジー・パターンは、非同期メッセージング・システムおよびトランザクション・システムの場合に強くお勧めします。</p> <p>Process Center Network Deployment 環境では、リモート・メッセージング・トポロジー・パターンが処理要件を満たすのに十分である場合がよくあります。</p>	<p>以下の単一の製品インストールによってサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• IBM Business Process Manager</li> </ul> <p>Advanced 構成および Standard 構成</p>	

表 20. 使用可能な提供パターンおよびそれらのパターンと製品フィーチャーとの関係 (続き)

トポロジー・パターン	クラスター数	説明	サポートされる BPM 製品とフィーチャー	デフォルト状況
リモート・メッセージングおよびリモート・サポート	3	このトポロジー・パターンでは、メッセージング、Common Event Infrastructure (CEI)、アプリケーション・デプロイメント・ターゲット、およびアプリケーション・サポート機能を別個のクラスターに分離します。ほとんどのビジネスでは、このトポロジー・パターンを使用してデプロイメント環境をサポートできます。このトポロジー・パターンはパフォーマンスを主眼にして設計され、トランザクション処理をメッセージングおよびその他のサポート機能から分離するように設計されているためです。	以下の単一の製品インストールによってサポートされます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IBM Business Process Manager</li> </ul> Advanced 構成および Standard 構成	このトポロジー・パターンは、IBM Business Process Manager 実稼働環境のデフォルトのトポロジー・パターンです。 このトポロジー・パターンは、以下のインストール済み環境のデフォルトのトポロジー・パターンです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IBM Business Process Manager Advanced (デプロイメント環境も含む)</li> <li>IBM Business Process Manager Standard</li> </ul>
リモート・メッセージング、リモート・サポート、および Web	4	このトポロジー・パターンは、アプリケーション・デプロイメント用に 1 つのクラスター、メッセージング・インフラストラクチャー用に 1 つのリモート・クラスター、サポート・アプリケーション用に 1 つのリモート・クラスター、および Web アプリケーション・デプロイメント (Business Process Choreographer Explorer、ビジネス・スペース、および Business Rules Manager) 用に 1 つのリモート・クラスターを定義します。	以下の製品、またはこれらの製品の組み合わせでサポートされます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>IBM Business Process Manager</li> </ul> Advanced 構成および Standard 構成 <ul style="list-style-type: none"> <li>IBM Business Monitor</li> </ul>	このトポロジー・パターンは、IBM Business Monitor インストール済み環境のデフォルトのトポロジー・パターンです。 標準構成の場合、ご使用のトポロジーに IBM Business Monitor が含まれている場合に限り、このパターンを選択します。

## 各構成の構成可能コンポーネント

IBM Business Process Manager のさまざまな構成をインストールする場合、インストールおよび構成プロセス時に特定のコンポーネントがユーザーに表示されます。Network Deployment の場合、これらのコンポーネントは 1 つのクラスター内か、複数のクラスター内にあることが可能です。

49 ページの表 21 に、各種構成それぞれのコンポーネントを示します。

表 21. IBM Business Process Manager コンポーネント

コンポーネント	Advan- -ced	WebSphere ESB	Stan- dard	Express
Process Server	X		X	X
Process Server メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X		X	X
パフォーマンス・データウェアハウス	X		X	X
Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X		X	X
共通データベース	X	X		
Common Event Infrastructure (CEI) メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X	X		
サービス・コンポーネント・アーキテクチャ (SCA) (Service Component Architecture)	X	X		
SCA アプリケーション・メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X	X		
Business Space	X	X		
Business Process Choreographer	X			
Business Process Choreographer メッセージング・エンジン (サービス統合バス)	X			
Business Process Choreographer Explorer	X			

#### 関連概念:

44 ページの『トポロジーを選択するための考慮事項』

使用するデプロイメント環境に適したトポロジーの選択は、いくつかの要因に基づいて行います。

34 ページの『ネットワーク・デプロイメント環境のトポロジー』

トポロジーとは、デプロイメント環境の物理的レイアウトのことです。IBM 提供パターンの 1 つを選択するか、独自のカスタマイズ・パターンを作成することで、ビジネス・ニーズに最適に対応したトポロジーを作成することができます。

## 標準化された Network Deployment 環境とカスタマイズされた Network Deployment 環境のどちらを作成するかの判断

プロファイルの作成後に、Network Deployment 環境を形成するサーバー、サーバー・クラスターおよび製品コンポーネントを構成するには 2 つの方法があります。IBM 提供のトポロジー・パターンに基づいて、標準化された Network Deployment 環境を作成できます。または、ユーザーのビジネス・プロセス要件に応じてカスタマイズされた方法で、サーバー、サーバー・クラスターおよび製品コンポーネントをセットアップして、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成することもできます。

### 標準化された Network Deployment 環境を作成する理由

IBM 提供のトポロジー・パターン (IBM Business Process Manager にテンプレートとしてパッケージ化) が、ユーザーのビジネス・プロセス要件のすべてまたは大部分を満たしている場合、デプロイメント環境ウィザードを使用して、標準化された Network Deployment 環境を作成します。デプロイメント環境ウィザードを使用すると、いくつかの事前定義トポロジーに従ってクラスターとサーバーを生成し、それらのクラスターとサーバー全体に複数のコンポーネントをすべて同時に構成することができます。

カスタマイズされた Network Deployment 環境ではなく、標準化された Network Deployment 環境を作成するその他の理由は、以下のとおりです。

- サーバー、サーバー・クラスターおよび IBM Business Process Manager コンポーネントの作成と構成に必要な管理コンソールのフィーチャーおよび機能の使用経験が豊富なユーザーがいません。
- 管理アプリケーションで単一のウィザードを実行して、複数のコンポーネントを構成します。
- データベース設計ファイルをインポートして、データベース関連リソース定義の値を指定します。データベース設計ファイルの作成については、データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成を参照してください。
- 現在の環境にインポートして、必要に応じてカスタマイズできる、事前定義デプロイメント環境が提供されています。

## カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成する理由

ユーザーのビジネス・プロセス要件が複雑で、IBM 提供のトポロジー・パターンでは十分に対応できない場合、管理コンソールのフィーチャーおよび機能を使用して、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成します。

標準化された Network Deployment 環境ではなく、カスタマイズされた Network Deployment 環境を作成するその他の理由は、以下のとおりです。

- 管理コンソールを使用してデプロイメント環境を作成するために必要な経験と知識がユーザーに豊富にあります。
- マルチクラスター環境で必要な概念およびコンポーネント・アーキテクチャーを理解しています。
- IBM Business Process Manager コンポーネント自体を構成する前に、そのコンポーネントをデプロイするクラスターまたはサーバーを構成したいと考えています。

## IBM HTTP サーバーでのロード・バランシングとフェイルオーバー

Network Deployment 環境では、ワークロード・バランシングとフェイルオーバーの目的で、IBM HTTP Server をプロキシ・サーバーとして構成できます。着信 HTTP 要求は、アプリケーション・サーバーに直接送信されるのではなく、プロキシ・サーバーに送信されます。このプロキシ・サーバーにより、処理を実行する複数のアプリケーション・サーバーの間で要求が分散されます。

具体的な構成ステップは環境によって異なりますが、IBM HTTP Server を使用したワークロード・バランシングとフェイルオーバーの計画と実装には、以下の一般的なタスクが役立ちます。

1. 『WebSphere Application Server トポロジーのフロントエンドの選択』を参照して、プロキシ・サーバー・フロントエンドの使用方法を詳しく確認します。
2. Web サーバー・プラグインを実装します。このプラグインを、ローカルのデプロイメント・マネージャー・プロファイルの一部としてインストールし、構成します。詳しくは、WebSphere Application Server に関する以下のトピックを参照してください。
  - Web サーバー・プラグインの実装
  - Web サーバー・プラグインのインストールと構成 (このトピックのシナリオ 5 を参照)
3. WebSphere Application Server の Deployment Manager と IBM HTTP Server 管理サーバーの間に Secure Sockets Layer (SSL) を構成します。SSL 接続を受け入れてトランザクションを実行できるように、IBM HTTP Server からの自己署名証明書を受け付けるように Application Server を構成する必要があります。詳しくは、IBM HTTP Server 管理サーバーと Deployment Manager の間の SSL の構成を参照してください。

4. 構成ファイルが Web サーバーを指し、Process Server がオンライン・モードとなり、通信が HTTP over SSL または HTTP Secure (HTTPS) に対応するように、Process Server クラスターまたは Process Center クラスターをカスタマイズします。Web サーバーと連動する Process Server/Process Center クラスターのカスタマイズを参照してください。

---

## データベース構成の計画

データベース構成の計画を立てるには、該当ソフトウェアを使用するためにどのデータベースが所定の位置になければならないか、また構成する必要があるか、IBM Business Process Manager のどのコンポーネントを使用するのか、およびそれらに関連するデータベース、データベースを管理するのに必要なタスク、および使用するデータベース・システムのセキュリティ特権を知っている必要があります。

## データベースと IBM Business Process Manager トポロジー

データベース構成は、IBM Business Process Manager トポロジー全体の一部です。構成アクティビティーについては、Process Center と Process Server のデータベースがトポロジーおよびランタイム処理に関係する場合の相違を理解する必要があります。

Process Center は同じデータベース・スキーマを共有しますが、保管されるインスタンス・データには具体的な違いがあります。Process Center および Process Server のインスタンスごとに、共有スキーマの別個のインスタンスがなければなりません。

「標準プロファイル作成」オプションを使用する場合、データベース設計ツールは、デフォルトのデータベースの構成のために自動的に SQL スクリプトを生成します。

インストール中にスタンドアロン開発プロファイル (qesb) を作成する場合には、必須のデータベースは自動的に構成されます。ユーザーはデータベース要件を設計する必要はありません。

データベース表を手動で作成する場合は、データベース設計ツールを使用して SQL スクリプトを作成します。このツールを使用すると、生成される SQL スクリプトは必ず固有になるからです。

**制約事項:** Oracle の場合、データベース・インスタンスは SQL ファイル実行の一環として作成されません。Oracle 製品資料を参照して、インスタンスを手動で作成する必要があります。

ユーザーは、データベースの構成情報を、以下のいずれかの方法でプロファイル作成プロセスに取り込むことができます。

- データベース設計ファイルを参照する
- プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用したデータベース構成パラメーターの設定

データベース構成を実装するために選択する方法に関係なく、プロファイル作成プロセスの一環として SQL スクリプトを生成する必要があります。Process Server 間または Process Server のクラスター間で SQL スクリプトを再使用することはできません。

データベースを構成する前に、ソリューション・アーキテクトとデータベース管理者は、データベース・トポロジーに関して共同作業を行って、データベース表を保管する最善の方法を理解する必要があります。例えば、表は共通データベースと同じデータベースに保管されるのかどうか。あるいは、表は別個のデータベースにスタンドアロン・プロファイルとして保管されるのかどうか。別個のデータベースは、データベース構成を単純化するので、役に立つ可能性があります。別個のデータベースを使用して、スタンドアロン・サーバー環境で、共通データベースとは別個にコンポーネント・データベースを調整し管理することが可能な場合もあります。

データベース設計ツールに関する詳細については、『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

## Process Center データベースおよび Process Server データベース

IBM Business Process Manager Express および IBM Business Process Manager Standard にはデータベース構成パターンが含まれており、したがって各ランタイム環境用にデータベース設計を作成することができます。いずれかのパターンを使用して、Process Server および Performance Data Warehouse Server コンポーネント用のデータベース構成を作成することができます。

IBM Business Process Manager Advanced には、同じデータベース構成パターンに加えて、**bpm.advanced.standalone.dbDesign** と呼ばれる追加パターンが含まれています。

**bpm.advanced.standalone.dbDesign** パターンを、共通データベース内の Process Server および Performance Data Warehouse サーバー・コンポーネント用のデータベース・スキーマとして使用することができます。Process Server と Performance Data Warehouse ランタイム環境を結合するスタンドアロン・プロファイルを作成する場合、このパターンを使用します。このパターンを共通データベース用に使用するには、カスタム・スキーマ値は指定されません。

デプロイメント環境ウィザードによる procsry および pctrsry データベース設計も使用することができます。標準 (standard) 構成または拡張 (advanced) 構成内の Network Deployment 環境については、これらのパターンは、デプロイメント・ホスト上の Process Server または Process Center のセットアップの一部です。

## 共通データベースを構成する方法とタイミングの選択

必須のデータベース表は、IBM Business Process Manager の構成前または構成後に作成することができます。いずれの場合も、IBM Business Process Manager のサーバーがデータベースを使用しようとする前に、データベース (テーブルやスキーマなども含む) が既に存在している必要があることに注意してください。

共通データベースは、IBM Business Process Manager プロファイルの作成前、作成中、または作成後に作成できます。

- IBM Business Process Manager を構成する前:
  - IBM Business Process Manager に用意されているデフォルトのスクリプトを編集して実行します。デフォルトのスクリプトは、共通データベースおよび Business Process Choreographer テーブルの作成のみに使用できます。
  - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。
- IBM Business Process Manager を構成した後:
  - プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルの作成時にデータベース内のテーブルと連携するように IBM Business Process Manager を構成します。データベース表の作成と構成は、プロファイルの作成時に行うことができます。また、プロファイルの作成後までデータベース表の作成と構成を遅らせることができます。プロファイル管理ツールを使用してデータベース・スクリプトを生成し、そのスクリプトをデータベース表の作成と構成に使用することができます。生成されるこれらのスクリプトは、使用可能な状態になっています。編集する必要はありません。
  - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

## サポートされているデータベース・タイプ

データベースの選択は、IBM Business Process Manager と共に使用するオペレーティング・システムおよびフィーチャーによって異なります。

IBM Business Process Manager でサポートされるデータベースのリストについては、表 22を参照してください。

IBM Business Process Manager には、DB2、Oracle、および SQL Server 用の JDBC ドライバーがパッケージ化されています。JDBC ドライバーについて (バージョンおよびレベル情報を含む) は、「Detailed hardware and software requirements for IBM Business Process Manager」の Web ページを参照してください。

注: IBM Business Process Manager でパッケージ化されているもの以外の JDBC ドライバー・レベルの提供は、お客様の責任において行ってください。

DB2 Express データベースは IBM Business Process Manager ソフトウェアに組み込まれており、IBM Business Process Manager のインストール時に自動的にインストールおよび構成することができます。

**重要:** Linux DB2 Express を root ユーザーとしてインストールする場合、DB2 Express のインストールを開始する前に、すべてのカーネル要件を満たしておく必要があります。カーネル要件のリストについては、カーネル・パラメーターの要件 (Linux) を参照してください。現行値は、`ipcs -l` コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

注: 現在、DB2 Express インストーラーには、IBM Business Process Manager インストーラーから渡されるプロパティーでの各国語 (NL) スtringの取り込み関する、既知の制約事項があります。DB2 Express のインストール時に DB2 Express に渡される以下の値に、NL スtringを組み込むことはできません。

Linux Windows

- Linux インスタンス・ユーザー名およびパスワード: `bpminst` および `bpminst1`
- Linux 隔離 (fenced) ユーザー名およびパスワード: `bpmfenc` および `bpmfenc1`
- Linux 管理サーバー (DAS) ユーザー名およびパスワード: `bpmadmin` および `bpmadmin1`
- Windows 管理ユーザー名およびパスワード: `bpmadmin` および `bpmadmin1`

各データベースは、文字スStringのパラメーター `dbType` で表されています。`dbType` パラメーターは、`manageprofile` コマンド行ユーティリティーのパラメーターとして使用されます。サポートされているデータベースの `dbType` の値を表 22 にまとめます。

表 22. サポートされているデータベース・タイプ、その関連 `dbType` の値および制約事項

サポートされているデータベース	dbType の値	制約事項および注意事項
DB2 Express	DB2_UNIVERSAL	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2® Universal	DB2_UNIVERSAL	
DB2 データ・サーバー	DB2_DATASERVER	ダウンロード元: 9.7 GA レベル フィックスバック

表 22. サポートされているデータベース・タイプ、その関連 dbType の値および制約事項 (続き)

サポートされているデータベース	dbType の値	制約事項および注意事項
DB2 for z/OS	DB2UDBOS390	DB2 for z/OS をデータベース管理システムとして使用する場合は、 <b>createDB.sh</b> スクリプトを使用してデータベースおよびデータベース・オブジェクトを構成する必要があります。インストール・ウィザードは、このタイプのデータベースを作成できません。
Microsoft SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC 1.2 および 2.0 = MSSQLSERVER_MICROSOFT	Microsoft SQL Server JDBC 3.0 もサポートされていますが、Profile Management Tool には個別のデータベース・タイプとしてリストされません。Microsoft SQL Server JDBC 3.0 をデータベース管理システムとして使用する場合は、Microsoft SQL Server JDBC 2.0 のデータベース・タイプを選択すると、バージョン 3.0 がサポートされます。 <b>注:</b> Process Server および Performance Data Warehouse データベースを、CommonDB で共用することはできません。 <b>注:</b> Latin 以外のロケールを指定する必要がある場合、 <b>createDatabase.sql</b> スクリプトは使用できません。大/小文字が区別されない別のロケールを指定する必要があります。 <b>重要:</b> データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。XA トランザクションを構成しないと、サーバーの始動時にエラーが発生することがあります。367 ページの『XA トランザクションの構成』を参照してください。
Oracle	ORACLE	インストール・ウィザードは、Oracle 用のこのタイプのデータベースを作成できません。

ファイル・パスとファイルの命名規則で使用する 2 番目のパラメーターは、*feature* です。このパラメーターでは、対象になっているデータベースを指定します。表 23 は、各データベースとそれぞれに関連付けられている *feature* パラメーターをまとめたものです。

表 23. 各データベースとそれぞれに関連付けられている feature 名

データベース	フィーチャー
Process Server	ProcessServer
パフォーマンス・データウェアハウス	PerformanceDW
共通データベース	CommonDB
エンタープライズ・サービス・パスのロガー・メディエーション・データベース	EsbLoggerMediation

IBM Business Process Manager をインストールすると、データベース・スクリプトが以下の場所に作成されます。

`INSTALL_ROOT/dbscripts/feature/dbType`

feature は以下のいずれかです。

- CommonDB
- EsbLoggerMediation
- ProcessServer
- PerformanceDW

ほとんどの JDBC プロバイダーの作成は、指定されたデータベース・パラメーターに基づいて、プロファイルの作成中に実行されます。ただし、Business Process Choreographer JDBC プロバイダーは、スクリプトまたは管理コンソールを使用して、後で作成されます。適切な JDBC プロバイダーがサーバーまたはクラスターに存在していれば、その既存の JDBC プロバイダーが使用され、新しいプロバイダーの作成は省略されます。

#### 関連概念:

57 ページの『JDBC ドライバーおよびロケーション』

以下の各表に、サポートされている JDBC ドライバーをリストします。最初の表には、製品に付属している JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。2 番目の表には、サポートされているが製品には付属していない JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。

#### 関連情報:



DB2 データベースを使用したカスタム・ユーザー・レジストリー・データの保持

## データベース命名の制約事項

データベースは、IBM Business Process Manager の複数のインストール済み環境にわたって再使用することはできません。IBM Business Process Manager の各インストール済み環境は、関連するデータベースを排他使用する必要があります。データベースは、一意的に識別できるように構成される必要があります。

選択するインストール・パスに応じて、インストールに関連するデータベースはデフォルト名を使用して構成されることがあります。例えば、IBM DB2 上の IBM Business Process Manager Advanced に関連付けられたデータベースは、以下のデフォルト名を持ちます。

- Process Server - BPMDB
- Performance Data Warehouse - PDWDB

DB2 を使用する 2 つの IBM Business Process Manager のインストール済み環境がある場合には、インストール済み環境のうちの 1 つに対して、デフォルト値を受け入れるのではなく名前を指定するインストール・パスを選択する必要があります。

データベース名の固有性を確実にするために、データベース名を求めるプロンプトを出すインストール・パスを選択します。

例えば、「標準」インストール・パスを使用するとき、データベース名を求めるプロンプトが出されません。デフォルトの DB2 Express ではなく既存のデータベース・サーバーを使用するオプションを選択します。

注: インストール後にプロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成するときに、プロファイル管理ツールのどのパス（「標準」または「拡張」）を選択しても、データベース名を求めるプロンプトが出されます。唯一の例外は、ご使用のデータベース構成用のデータベース設計ファイルを使用する場合です。データベース設計ファイルには、データベース名、ユーザー名、およびパスワード情報が含まれています。したがって、プロファイル管理ツールはこの情報を求めるプロンプトは出しません。

以下のケースでは、対照的に、ユーザーに対してデータベース名を求めるプロンプトは出されません。

- **Installation Manager** はプロファイルを作成するオプションを提供しますが、データベース名にはデフォルト値を割り当てます。
- 「標準」インストール・パスを使用しており、インストール・イメージと一緒にパッケージされている **DB2 Express** をインストールするよう選択しています。データベース名にはデフォルト値が割り当てられます。

追加の制約事項がデータベース名の命名に適用されます。これらの制約事項は、使用しているデータベース・サーバーによって決まります。

## IBM Business Process Manager のデータ・ソース

データ・ソースは、アプリケーションとリレーショナル・データベースの間のリンクを提供します。使用するデータ・ソースは、スタンドアロン環境あるいは **Network Deployment** 環境のいずれかをセットアップするかによって影響されます。

アプリケーションは、データ・ソースを使用して、リレーショナル・データベースへの接続を取得します。データ・ソースは、他の種類のエンタープライズ情報システム (EIS) に接続するための **Java EE** コネクタ・アーキテクチャー (JCA) 接続ファクトリーに類似しています。

データ・ソースは、固有のタイプのデータベースに接続するドライバー実装クラスを提供する **Java Database Connectivity (JDBC)** プロバイダーに関連しています。アプリケーション・コンポーネントはデータ・ソースと直接対話して、ご使用のデータベースへの接続インスタンスを取得します。各データ・ソースに対応する接続プールによって、接続を管理できます。

さまざまな設定で複数のデータ・ソースを作成し、それらを同じ **JDBC** プロバイダーに関連付けることも可能です。例えば、同じデータベース・アプリケーション内でさまざまなデータベースにアクセスするために複数のデータ・ソースを使用する、といった状況が考えられます。**IBM Business Process Manager** において、**JDBC** プロバイダーは以下のデータ・ソース・インターフェースの 1 つまたは両方を実装する必要があります。これらのインターフェースを使用して、アプリケーションを単一フェーズまたは 2 フェーズのトランザクション・プロトコルで実行します。

### ConnectionPoolDataSource

2 フェーズ・コミット・トランザクション以外のローカル・トランザクションとグローバル・トランザクションにアプリケーションが参加することを可能にするデータ・ソース。接続プールのデータ・ソースがグローバル・トランザクションに関わる場合は、トランザクション・マネージャーがトランザクションのリカバリーを実施することはありません。複数のリソース・マネージャーが関わっている場合は、バックアップ・リカバリー・プロセスをアプリケーション側で用意する必要があります。

以下の表には、標準的なスタンドアロン環境のセットアップと標準的なデプロイメント環境のセットアップの例を示します。

表 24. 標準的なスタンドアロン環境のセットアップ

データ・ソース	コンポーネント	Scope	JNDI 名
WBI データ・ソース	CommonDB	ノード	jdbc/WPSDB
SCA アプリケーション・パス ME データ・ソース	SCA ME	サーバー	jdbc/com.ibm.ws.sib/nlNode01.server1-SCA.APPLICATION.localhostNode01.Cell.Bus

表 24. 標準的なスタンドアロン環境のセットアップ (続き)

データ・ソース	コンポーネント	Scope	JNDI 名
イベント	CEI	サーバー	jdbc/cei
CEI ME データ・ソース	CEI ME	サーバー	jdbc/com.ibm.ws.sib/nlNode01.server1-CEI.cellName.BUS

表 25. 標準的なデプロイメント環境のセットアップ

データ・ソース	コンポーネント	Scope	JNDI 名
WBI データ・ソース	CommonDB	セル	jdbc/WPSDB
SCA アプリケーション・バス ME データ・ソース	SCA ME	クラスター	jdbc/com.ibm.ws.sib/clusterone-SCA.APPLICATION.enduranceTestCell01.Bus
イベント	CEI	クラスター	jdbc/cei
CEI ME データ・ソース	CEI ME	クラスター	jdbc/com.ibm.ws.sib/clusterone-CEI.cellName.BUS

## JDBC ドライバーおよびロケーション

以下の各表に、サポートされている JDBC ドライバーをリストします。最初の表には、製品に付属している JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。2 番目の表には、サポートされているが製品には付属していない JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。

以下のサポートされている JDBC ドライバーは、製品のインストール・ファイルに含まれています。

表 26. 製品に付属しているサポート対象の JDBC ドライバーとそのロケーション

サーバー	ドライバーの説明	ドライバーのロケーション	コメント
DB2	IBM DB2 Universal JDBC Driver 3.61.65	WAS_HOME/jdbcdrivers/DB2	IBM DB2 Universal JDBC Driver は、分散プラットフォームおよび z/OS プラットフォームでのデフォルトの DB2 ドライバーです。
	IBM Data Server Driver for JDBC and SQLJ 4.11.69		
Oracle	Oracle JDBC Driver 11g 11.2.0.1.0	WAS_HOME/jdbcdrivers/Oracle	
SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC Driver 2.0	WAS_HOME/jdbcdrivers/SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC Driver 2.0 は、SQL Server 1.2、2.0、および 3.0 をサポートしています。

以下のサポートされている JDBC ドライバーは、製品のインストール・ファイルに含まれていません。

表 27. 製品に付属していないサポート対象の JDBC ドライバー

サーバー	ドライバーの説明
Oracle	Oracle JDBC Driver 11g 11.1.0.6

表 27. 製品に付属していないサポート対象の JDBC ドライバー (続き)

サーバー	ドライバーの説明
SQL Server	Microsoft SQL Server JDBC ドライバー 1.2
	Microsoft SQL Server JDBC ドライバー 3.0

#### 関連概念:

53 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』

データベースの選択は、IBM Business Process Manager と共に使用するオペレーティング・システムおよびフィーチャーによって異なります。

#### 関連情報:

 IBM Business Process Manager Advanced のハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細

## 必須のデータベース管理者タスクの識別

IBM Business Process Manager での何らかのタイプのデータベース作成および構成タスクを実行したい場合には、データベース管理者 (DBA) である必要があります。

### データベースの選択

データベースの構成方法の選択

### データベース特権およびセキュリティ上の考慮事項

- 59 ページの『データベース特権』
- 必要なセキュリティ権限の明確化

### プロファイルの作成

- プロファイルの作成および拡張に対する前提条件
- スタンドアロン環境の作成
- カスタム・インストール後に 1 つ以上のデプロイメント・マネージャー・プロファイルおよびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成するためのソフトウェアの構成
- 

**ヒント:** デプロイメント環境フィーチャーを使用する場合には、デフォルトのデータベース・サーバー以外のデータベースを、ご使用のデータベース製品として使用することができます。データベース構成パネル上の「データベースで認証するユーザー名」フィールドに提供するユーザー ID は、DBA 特権を備えている必要があります。

### データベースの構成

- プロファイルを作成または拡張する前のデータベースおよびテーブルの作成
  - データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成
- プロファイルを作成または拡張した後のデータベースおよびテーブルの作成
  - プロファイルの作成後または拡張後の共通データベースとテーブルの作成
  - データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成
- 79 ページの『メッセージング・エンジン・データベース構成の計画』

## 関連リンク

- Business Space の構成

## 非管理ユーザーの考慮事項

インストール中には、入力できるように、データベースの詳細を覚えておいてください。

このトピックで説明する考慮事項は、「標準 (Typical)」インストール・オプションを使用してインストールすることを選択したインストール・シナリオに適用されます。「標準 (Typical)」インストール・オプションを使用してインストールを行うと、プロファイルが自動的に作成されます。

注: テスト・プロファイルは、IBM BPM 拡張構成で使用する場合にのみ該当します。

非管理ユーザーとしてインストールを行う場合は、以下の選択肢があります。

注: 製品に組み込まれている (オプションでインストールした) DB2 Express データベースを使用する場合は、以下の基準を満たしている必要があります。

- 他のバージョンの DB2 をすべてシステムからアンインストールする
- 非管理ユーザーまたは非 root ユーザーとして IBM Business Process Manager をインストールする

## データベース特権

サポートされるデータベース管理システムごとに、データ・ストア・テーブルの作成またはアクセスに必要な権限を決めるために、データベース特権を設定します。

インストーラー、プロファイル管理ツール、データベース設計ツール、またはスクリプトを使用してスキーマを作成する場合、テーブルを作成する権限のあるユーザー ID が必要です。テーブルが作成された後は、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行う権限が必要です。

次の表では、データ・ストアにアクセスするために必要なデータベース特権について説明します。

表 28. データベース特権

ヘッダー	データベース内にオブジェクトを作成するために必要な最小特権	データベース内のオブジェクトにアクセスするために必要な最小特権
DB2	ユーザー ID には、データベースに関する CREATETAB 権限と、テーブル・スペースを作成するための CREATETS 権限が必要です。また、ユーザー ID には、スキーマに関する CREATEIN 特権と DROPIN 特権も必要です。ユーザー ID にはシステム特権 CREATEDBA および CREATEDBC が必要です。また、ユーザー ID には、作成されたテーブルに関する ALTER、DELETE、INDEX、INSERT、REFERENCES、SELECT、および UPDATE 特権も必要です。	ユーザー ID はテーブルに対する SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE 特権が必要です。また、ユーザー ID には、ストアード・プロシージャーに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権も必要です。  IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する DB2 データベース特権については詳しくは、『61 ページの表 29』を参照してください。

表 28. データベース特権 (続き)

ヘッダー	データベース内にオブジェクトを作成するために必要な最小特権	データベース内のオブジェクトにアクセスするために必要な最小特権
DB2 for z/OS	<p>ユーザー ID には、データベースに関する CREATETAB 権限と、テーブル・スペースを作成するための CREATETS 権限が必要です。また、ユーザー ID には、スキーマに関する CREATEIN 特権と DROPIN 特権も必要です。データベースのストレージ・グループを作成するには、ユーザー ID には CREATESG、CREATEDBA、および CREATEDBC システム特権が必要です。また、ユーザー ID には、作成されたテーブルに関する ALTER、DELETE、INDEX、INSERT、REFERENCES、SELECT、および UPDATE 特権も必要です。</p>	<p>ユーザー ID はテーブルに対する SELECT、INSERT、UPDATE、および DELETE 特権が必要です。また、ユーザー ID には、ストアド・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権も必要です。</p> <p>IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する DB2 for z/OS データベース特権について詳しくは、62 ページの表 30 を参照してください。</p>
Oracle	<p>ユーザー ID には、データ・ストア・スキーマ内にリレーショナル・テーブルおよび索引を作成するための十分な特権が必要です。またデータベースには、スキーマの所有者のデフォルト・テーブル・スペースにおけるスペース割り当て量も必要です。</p>	<p>ユーザー ID には、データベースに接続するための SESSION 特権が必要です。データ・ストア・スキーマと、データベースに接続するコンポーネントの両方を同じユーザー ID が所有している場合、このユーザー ID にはテーブルを処理するのに十分な特権が設定されています。そうでない場合、ユーザー ID には、データ・ストアを構成するテーブルに関する SELECT、INSERT、UPDATE、ALTER、および DELETE オブジェクト特権と、TRUNCATE TABLE ステートメントの使用を可能にする DROP ANY TABLE システム特権が必要です。ユーザー ID には CREATE INDEX 特権も必要です。</p> <p>Oracle データベースの作成には UTF-8 文字セットを使用してください。この文字セットは、IBM Business Process Manager でサポートされるその他のカスタム文字セットをサポートしています。</p> <p>IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する Oracle データベース特権について詳しくは、『64 ページの表 31』を参照してください。</p>

表 28. データベース特権 (続き)

ヘッダー	データベース内にオブジェクトを作成するために必要な最小特権	データベース内のオブジェクトにアクセスするために必要な最小特権
SQL Server	理想的な場合、ユーザー ID には IBM Business Process Manager に使用されるデータ・ストアに関する DB OWNER 特権が必要です。	SQL Server および Windows の認証が SQL Server ログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルの所有者か、または TRUNCATE TABLE ステートメントを実行する十分な権限を持つグループのメンバーでなければなりません。  IBM Business Process Manager および WebSphere Enterprise Service Bus コンポーネントに関する SQL Server データベース特権について詳しくは、『65 ページの表 32』を参照してください。

表 29 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに対する追加の DB2 データベース特権について説明しています。

表 29. DB2 データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、USAGE ON SEQUENCE
Business Space	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE FUNCTION	createFunctionsSql_Observer.sql スクリプトにリストされている関数での SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、および EXECUTE ON FUNCTION の各特権
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。

表 29. DB2 データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Process Server パフォーマンス・データウェアハウス	<p>データベースの作成に必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• CREATEDBA</li> <li>• CREATEDBC</li> </ul> <p>データベースにスキーマおよびストアド・プロシージャを取り込むために必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• CREATETAB</li> <li>• CREATEIN</li> <li>• DROPIN</li> </ul> <p>作成されたテーブルに関するその他の必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ALTER</li> <li>• DELETE</li> <li>• INDEX</li> <li>• INSERT</li> <li>• REFERENCES</li> <li>• SELECT</li> <li>• UPDATE</li> </ul>	<p>Process Server および Performance Data Warehouse データベース内のテーブルに関する必要な特権:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• DELETE</li> <li>• INSERT</li> <li>• SELECT</li> <li>• UPDATE</li> </ul> <p>実行時ユーザーには、<code>createProcedure_ProcessServer.sql</code> スクリプト内の 6 つのストアド・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権が必要です。</p> <p>実行時ユーザーには、Performance Tracking Server データベースについても、上記の特権のすべてが必要です。さらに、ユーザーは Performance Tracking データベース内に新しいテーブルを作成できるように、CREATETAB 特権も必要です。</p> <p>システム・メタデータ・テーブルを読み取るには、<code>syscat.tables</code>、<code>syscat.views</code>、<code>syscat.columns</code>、<code>syscat.tabconst</code>、および <code>sysibm.sysdummy1</code> に関する SELECT 権限が必要です。</p>

データベースを作成し、DB2 ユーザーに権限を割り当てるための構文:

```
create database database_name; automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to database_name;
grant dbadm on database to user user_name;
UPDATE DB CFG FOR database_name USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR database_name USING LOGSECOND 64 DEFERRED;
connect reset;
```

表 30 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに関する追加の DB2 for z/OS データベース特権について説明します。

表 30. DB2 for z/OS データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	<p>CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE</p>	<p>SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、USAGE ON SEQUENCE</p>
Business Space	<p>CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE SEQUENCE、CREATE USER、ALTER USER、CREATE TABLESPACE</p>	<p>SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、USAGE ON SEQUENCE</p>

表 30. DB2 for z/OS データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE TABLESPACE、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE TABLESPACE、CREATE FUNCTION	createFunctionsSql_Observer.sql スクリプトにリストされている関数での SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、および EXECUTE ON FUNCTION の各特権
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE、CREATE INDEXTYPE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。
Process Server パフォーマンス・データウェアハウス	データベースの作成に必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> <li>• CREATESG</li> <li>• CREATEDBA</li> <li>• CREATEDBC</li> </ul> データベースにスキーマおよびストアード・プロシージャを取り込むために必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> <li>• CREATETS</li> <li>• CREATETAB</li> <li>• CREATEIN</li> <li>• DROPIN</li> </ul> 作成されたテーブルに関するその他の必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> <li>• ALTER</li> <li>• DELETE</li> <li>• INDEX</li> <li>• INSERT</li> <li>• REFERENCES</li> <li>• SELECT</li> <li>• UPDATE</li> </ul>	Process Server および Performance Data Warehouse データベース内のテーブルに関する必要な特権: <ul style="list-style-type: none"> <li>• DELETE</li> <li>• INSERT</li> <li>• SELECT</li> <li>• UPDATE</li> </ul> 実行時ユーザーには、createProcedure_ProcessServer.sql スクリプト内の 6 つのストアード・プロシージャに関する EXECUTE ON PROCEDURE 特権が必要です。  実行時ユーザーには、Performance Tracking Server データベースについても、上記の特権のすべてが必要です。さらに、ユーザーは Performance Tracking データベース内に新しいテーブルを作成できるように、CREATETS および CREATETAB 特権も必要です。  システム・メタデータ・テーブルを読み取るには、sysibm.systables、sysibm.sysviews、sysibm.syscolumns、sysibm.syschecks、sysibm.sysrels、sysibm systabconst、sysibm.systablespace、および sysibm.sysdummy1 に関する SELECT 特権も必要です。

64 ページの表 31 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに対する追加の Oracle データベース特権について説明しています。

**重要:** 以下のすべてのコンポーネントを 1 つの Oracle データベースに対して構成する場合は、コンポーネントごとに指定されているすべての特権のスーパーセットを作成することができます。以下の 4 つのコンポーネントを多数のデータベースに対して構成する場合は、データベースごとに異なる特権を設定できません。

表 31. Oracle データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE, ALTER TABLE, INSERT, CREATE SEQUENCE, CREATE USER, ALTER USER, CREATE TABLESPACE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE VIEW, CREATE PROCEDURE
Business Space	CREATE TABLE, ALTER TABLE, INSERT, CREATE SEQUENCE, CREATE USER, ALTER USER, CREATE TABLESPACE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE VIEW, CREATE PROCEDURE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE, ALTER TABLE, CREATE VIEW, CREATE TABLESPACE, CREATE USER, CREATE PROCEDURE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT
Business Process Choreographer Explorer のレポート作成機能	CREATE TABLE, ALTER TABLE, CREATE VIEW, CREATE TABLESPACE, CREATE FUNCTION	createFunctionsSql_Observer.sql スクリプトにリストされている関数での SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT、および EXECUTE ON FUNCTION の各特権
Common Event Infrastructure (CEI)	CREATE TABLE, CREATE INDEXTYPE, ALTER TABLE, CREATE VIEW, ALTER SESSION, SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE TABLESPACE, CREATE PROFILE, CREATE ROLE, CREATE PROCEDURE, CREATE TEMPORARY TABLESPACE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE PROCEDURE
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。
Process Server	CREATE TABLE, SELECT, INSERT, UPDATE, ALTER LOCK TABLE, DELETE TABLE, DROP TABLE, CREATE INDEX, CREATE VIEW, DROP VIEW, CREATE PROCEDURE, CREATE SEQUENCE, CREATE USER, ALTER USER, CREATE TABLESPACE	SELECT, UPDATE, DELETE, INSERT, CREATE VIEW, CREATE PROCEDURE, DROP TABLE, DROP VIEW, CREATE SEQUENCE

表 31. Oracle データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
パフォーマンス・データウェアハウス	CREATE TABLE, SELECT, INSERT, UPDATE, ALTER LOCK TABLE, DELETE TABLE, DROP TABLE, CREATE INDEX, CREATE VIEW, DROP VIEW, CREATE PROCEDURE, CREATE SEQUENCE, CREATE USER, ALTER USER, CREATE TABLESPACE	<p>SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、DROP TABLE、DROP VIEW、CREATE SEQUENCE</p> <p>IBM BPM プロファイルを作成またはマイグレーションするすべてのスキーマまたはユーザーは、<b>DBMS_LOCK</b> パッケージへのアクセス権限を持っている必要があります。次の例に示すように、パフォーマンス・データベースを使用する Oracle ユーザーまたはスキーマに対して <b>DBMS_LOCK</b> パッケージの <b>Execute</b> 権限を設定します。</p> <pre>GRANT execute ON DBMS_LOCK TO &lt;schema_name&gt;</pre> <p>この例で、<i>schema_name</i> はパフォーマンス・データベースに使用されるユーザー ID です。</p>

Oracle ユーザーに権限を割り当てるための構文:

```
CREATE USER user_name; IDENTIFIED BY user_password;
grant connect, resource, unlimited tablespace to user_name;
grant create view to user_name;
grant javauserpriv to user_name;
grant execute on dbms_lock to user_name;
```

表 32 では、IBM Business Process Manager コンポーネントに対する追加の SQL Server データベース特権について説明します。

IBM Business Process Manager データベース・ユーザーに対して、以下の 3 つのロールを割り当てる必要があります。

注: データベースは、データベース管理者が作成する必要があります。作成後、データベース管理者は、IBM Business Process Manager のデータベース・ユーザーにこれらのロールを割り当てることができます。

- db\_ddladmin
- db\_datawriter
- db\_datareader

これらのロールに設定されている権限については、Microsoft 固有の資料を参照してください。

以下の表は、インストール・アクティビティと実行時アクティビティの両方について、各コンポーネントの必要な権限を示しています。

表 32. SQL Server データベース特権の詳細

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
共通 DB	CREATE TABLE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE USER、ALTER USER	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE

表 32. SQL Server データベース特権の詳細 (続き)

コンポーネント	インストール特権	実行時特権
Business Space	CREATE TABLE、ALTER TABLE、INSERT、CREATE USER、ALTER USER	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE
Business Process Choreographer	CREATE TABLE、ALTER TABLE、CREATE VIEW、CREATE USER、CREATE PROCEDURE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT
メッセージング・エンジン	CREATE TABLE	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、DROP ANY TABLE 注: メッセージング・エンジンは TRUNCATE TABLE SQL ステートメントを使用しますが、このステートメントには DROP ANY TABLE 特権が必要となる可能性があります。データベース特権を参照してください。
Process Server	CREATE TABLE、SELECT、INSERT、UPDATE、DELETE TABLE、DROP TABLE、CREATE INDEX、CREATE VIEW、DROP VIEW、CREATE PROCEDURE、CREATE USER、ALTER USER	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、DROP TABLE、DROP VIEW
パフォーマンス・データウェアハウス	CREATE TABLE、SELECT、INSERT、UPDATE、DELETE TABLE、DROP TABLE、CREATE INDEX、CREATE VIEW、DROP VIEW、CREATE PROCEDURE、CREATE USER、ALTER USER	SELECT、UPDATE、DELETE、INSERT、CREATE VIEW、CREATE PROCEDURE、DROP TABLE、DROP VIEW

SQL Server では、Business Process Choreographer Explorer レポート作成機能はサポートされません。

SQL ユーザーに権限を割り当てるための構文:

```
USE database_name
GO
CREATE USER user_name FOR LOGIN user_name WITH DEFAULT_SCHEMA=user_name
GO
CREATE SCHEMA user_name AUTHORIZATION user_name
GO
EXEC sp_addrolemember 'db_ddladmin', 'user_name';
EXEC sp_addrolemember 'db_datareader', 'user_name';
EXEC sp_addrolemember 'db_datawriter', 'user_name';</p>

```

詳しくは、関連参照の WebSphere Application Server のページを参照してください。

関連資料:



WebSphere Application Server でのデータベース特権

## ユーザー ID またはスキーマ名特権

IBM Business Process Manager のインストール時には、デフォルトのスキーマ名およびユーザー ID 特権を使用してデータベースをインストールできます。ただし、データベース設計によっては、別のユーザー ID またはスキーマ名特権が必要になる場合があります。

提供されているシナリオを検討して、IBM Business Process Manager のインストール時に別のスキーマ名およびユーザー ID 特権を構成するタイミングと方法を決定してください。

### 単一のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ

データベースのデフォルト・インストールを選択した場合、IBM Business Process Manager では、テーブルを作成する機能と、作成したテーブルの行の選択、挿入、更新、および削除を行う機能を備えたユーザー ID またはスキーマ名が最小限 1 つ必要です。データベースを作成するには、プロファイル管理ツールまたはインストーラーが使用できます。

次の表は、データベースとして DB2 を使用する際のデフォルトのデータベース構成プロパティを示しています。他のデータベースでは、データベース構成用に、これとは異なるデフォルト構成プロパティがあります。

表 33. シナリオ: 単一のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデフォルト・データベース名	ユーザー ID またはスキーマ名
共通データベース表	CMNDB	IBM Business Process Manager は、インストール中にユーザー ID を提供します
メッセージング・テーブル	MEDB	IBM Business Process Manager は、インストール中にスキーマ名を提供します

データベース設計のプロパティが異なる場合、複数のユーザー ID およびスキーマ名特権が必要となる場合があります。以下のシナリオは、構成を適用して希望の設計を実現する方法を示しています。提供されているシナリオに希望する特定の設計が含まれていない場合でも、アイデアの一部を修正して、特定の設計を実装することができます。

### 複数のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ 1

このシナリオでは、ユーザー ID 特権と同じスキーマ名を使用しますが、デフォルトのスキーマ名またはデフォルトのユーザー ID 特権は使用しません。この単一ユーザー ID は、すべてのデータベースにアクセスことができ、必要なすべてのテーブルを作成することもできます。以下にシナリオ 1 の特権の例を示します。

- スキーマ名: dog
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: dogSYS
- SCA.APP ME のスキーマ名: dogAPP
- Event ME のスキーマ名: dogEvent
- スキーマを作成するためのユーザー ID: dog
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID: dog

次の表は、データベースとして DB2 を使用してスキーマ名特権およびユーザー ID 特権をセットアップする方法に関する情報を示しています。別のデータベースを選択した場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権のセットアップについては、そのデータベースの資料を参照してください。

表 34. シナリオ 1: 複数のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名	テーブルを作成するためのユーザー ID	行の選択、挿入、更新、および削除を行うためのユーザー ID
共通データベース表	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール・ウィザード</li> <li>Profile Management Tool</li> <li>サイレント・インストール</li> <li>サイレント・プロファイル作成</li> </ul>	このスキーマ名は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール・ウィザード</li> <li>Profile Management Tool</li> <li>サイレント・インストール</li> <li>サイレント・プロファイル作成</li> </ul>

## 複数のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ 2

このシナリオでは、同じスキーマ名とユーザー ID を使用して、スキーマの選択、挿入、更新、削除を行います。ただし、スキーマの作成には別のユーザー ID を使用します。以下にシナリオ 2 の特権の例を示します。

- スキーマ名 : snow
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: snowSYS
- SCA.APP ME のスキーマ名: snowAPP
- Event ME のスキーマ名: snowEvent
- スキーマを作成するためのユーザー ID: rock
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID: snow

次の表は、データベースとして DB2 を使用してスキーマ名特権およびユーザー ID 特権をセットアップする方法に関する情報を示しています。別のデータベースを選択した場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権のセットアップについては、そのデータベースの資料を参照してください。

表 35. シナリオ 2: 複数のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名	テーブルを作成するためのユーザー ID	行の選択、挿入、更新、および削除を行うためのユーザー ID
共通データベース表	<p>この値は、以下で 2 回指定します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. テーブル作成スクリプト</li> <li>2. 次のいずれかを使用した IBM Business Process Manager 構成時: <ul style="list-style-type: none"> <li>• 管理コンソール</li> <li>• インストール・ウィザード</li> <li>• Profile Management Tool</li> <li>• サイレント・インストール</li> <li>• サイレント・プロフィール作成</li> </ul> </li> </ol> <p><b>制約事項:</b> 最初にインストーラーを実行する場合は、生成されるスクリプトに既に正しいスキーマ名およびユーザー ID の値が含まれているため、値を指定する回数は 1 回です。</p>	<p>テーブル作成スクリプトは、行の読み取りおよび書き込みが可能なスキーマ名を使用して変更する必要があります。</p>	<p>テーブル作成スクリプトは、テーブルの作成が可能なユーザー ID を使用して変更する必要があります。</p>	<p>ユーザー ID はプロフィールの作成中に、以下のいずれかを使用して指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• インストール・ウィザード</li> <li>• Profile Management Tool</li> <li>• サイレント・インストール</li> <li>• サイレント・プロフィール作成</li> </ul>

### 複数のユーザー ID 特権またはスキーマ名特権の場合のシナリオ 3

このシナリオでは、同じユーザー ID を使用してすべてのスキーマを作成します。ただし、各スキーマには、行を選択、挿入、更新、および削除するための別々のユーザー ID があります。次のリストは、シナリオ 3 の特権の例を示しています。

- スキーマ名: waterCom
- 共通テーブルのスキーマ名 : waterCom
- SCA.SYSTEM ME のスキーマ名: waterSYSME
- SCA.APP ME のスキーマ名: waterAPPME
- Event ME のスキーマ名: waterEventME
- ESBMessaging テーブルのスキーマ名: waterESB
- スキーマを作成するためのユーザー ID: milk
- スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID:

スキーマ名	スキーマの選択、挿入、更新、削除を行うためのユーザー ID
waterCom	waterCom
waterSYSME	waterSYSME
waterAPPME	waterAPPME
waterEventME	waterEventME
waterESB	waterESB

次の表は、データベースとして DB2 を使用してスキーマ名特権およびユーザー ID 特権をセットアップする方法に関する情報を示しています。別のデータベースを選択した場合、スキーマ名およびユーザー ID 特権のセットアップについては、そのデータベースの資料を参照してください。

表 36. シナリオ 3: 複数のユーザー ID またはスキーマ

データベース表	DB2 を使用したデータベース名	スキーマ名	テーブルを作成するためのユーザー ID	行の選択、挿入、更新、および削除を行うためのユーザー ID
共通データベース表	この値は、以下で指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール・ウィザード</li> <li>Profile Management Tool</li> <li>サイレント・インストール</li> <li>サイレント・プロファイル作成</li> </ul>	このスキーマ名は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	ユーザー ID はプロファイルの作成中に、以下のいずれかを使用して指定します。 <ul style="list-style-type: none"> <li>インストール・ウィザード</li> <li>Profile Management Tool</li> <li>サイレント・インストール</li> <li>サイレント・プロファイル作成</li> </ul>
メッセージング・テーブル	この値は、各メッセージング・エンジンの定義を使用して指定します。	テーブル作成スクリプトは、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるスキーマ名を含める必要があります。	この値は、行の選択、挿入、更新、および削除に使用されるユーザー ID と同じです。	この値は、メッセージング・エンジンの作成中に指定します。メッセージング・エンジンの構成中に「 <b>テーブル作成</b> 」オプションを使用します。

## コンポーネントに固有のデータベース構成の計画

IBM Business Process Manager には、データベース表を必要とするコンポーネントと、表が保管されるデータベースの固有の名前が含まれています。

このセクションの情報を使用して、該当のデータベース管理者が管理し、構成し、運営する必要のある IBM Business Process Manager コンポーネントに精通してください。

データベースの構成を計画するには、使用するコンポーネントを明確にする必要があります。データベース表を必要とする IBM Business Process Manager のコンポーネントと、それぞれのコンポーネントに関連付けられている表が保管されているデータベースのデフォルト名を、71 ページの表 37 にまとめます。

**重要:** これらの名前は必要に応じて変更できますが、後の構成手順でも一貫してその名前を使用する必要がありますのでご注意ください。

表 37. 個々のコンポーネントが必要とするデータベース

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注
Process Server	BPMDB	Process Server のテーブルは、Process App リポジトリのデータの保持、格納、および追跡を行うために使用されます。
パフォーマンス・データウェアハウス	PDWDB	
Application Scheduler	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
Business Space	CMNDB (共通データベース)	スタンドアロン・プロファイルの場合、IBM Business Process Manager の開始前に共通データベースを作成する必要があります。その他のプロファイルについては、管理コンソールを使用して Business Space を構成する必要があります。Business Space データベースの構成は、Business Space powered by WebSphere を使用する場合には必須の作業です。これは、アプリケーション・ユーザーが、特定の範囲の IBM 製品で Web インターフェースを作成、管理、および統合するための共通のインターフェースです。
Common Event Infrastructure (CEI)	EVENT (イベントの格納)	CEI データベースの構成は、プロファイル管理ツールまたは <b>manageprofile</b> コマンド行ユーティリティではサポートされていません。  永続イベントのパフォーマンスに影響を与える可能性があるため、実稼働環境の場合はこのデータベースを作成しないでください。  Common Base Event ブラウザーは CEI データベースを利用します。ご使用のビジネス・エンタープライズ・アプリケーションでのログイン、トレース、管理、およびビジネスの各イベントの取得および表示に Common Base Event ブラウザーを使用する場合は、CEI データベースを手動で作成する必要があります。

表 37. 個々のコンポーネントが必要とするデータベース (続き)

サーバー・コンポーネント	データベース (デフォルト名)	注
エンタープライズ・サービス・バス	CMNDB (共通データベース)	これらのテーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、あるいはデプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
メディエーション	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
リカバリー	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーの始動時か、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前に構成する必要があります。
関係	CMNDB (共通データベース)	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前、またはそれらの始動時に構成する必要があります。
セレクターおよびビジネス・ルール	CMNDB (共通データベース)/リポジトリ DB	IBM Business Process Manager の開始前に、共通データベースを作成する必要があります。CMNDB テーブルは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーを始動する前、またはそれらの始動時に構成する必要があります。
SIBus	ユーザー作成	これらのテーブルは、メッセージング・エンジンの始動時、またはメッセージング・エンジンを始動する前に構成する必要があります。プロファイルの作成時には、スタンドアロン環境で SIBus によるファイル・ストアを使用できます。ただし、Network Deployment 環境では、SIBus によるファイル・ストアを使用することはできません。

## テーブルおよびスキーマの作成

データベース・プロバイダーによっては、IBM Business Process Manager 内のデータベース用に異なるデータベース表およびスキーマが必要な場合があります。

管理コンソールで「リソース」 > 「JDBC」 > 「ビジネス・インテグレーション・データ・ソース」を選択してデータ・ソースをクリックするときに、「テーブルの作成」のチェック・ボックスを選択して、データ・ソースからテーブルを作成できます。データベース表の作成がデータベース管理者に限られている場合は、このチェック・ボックスを選択解除し、メッセージ・ボックスでスクリプトを見つけ、そのスクリプトをデータベース管理者に提供して実行を依頼します。「テーブルの作成」を使用可能にすると、以下の表に示すように、各データベース・プロバイダーの各種のデプロイメント環境機能を使用できます。「X」は、テーブルまたはスキーマが作成されたことを示します。

**ヒント:** 共通データベースはプロファイル作成時に構成します。

表 38. データベース・プロバイダーごとのテーブルの作成

データベース・プロバイダー	メッセージング・エンジン	Business Process Choreographer	Business Process Choreographer レポート作成	IBM Process Server	パフォーマンス・データウェアハウス
DB2	X	X	X	X	X
Oracle	X	X	X	X	X
Microsoft SQL	X	X		X	X

表 39. データベース・プロバイダーごとのスキーマの作成

データベース・プロバイダー	メッセージング・エンジン	Business Process Choreographer	Business Process Choreographer レポート作成	IBM Process Server	パフォーマンス・データウェアハウス
DB2	X	X	X	X	
DB2 for z/OS	X	X	X	X	X
Oracle	X	X	X	X	

Common Event Infrastructure データベースは手動でのみ構成できます。詳しくは、『*Common Event Infrastructure データベースの構成*』を参照してください。

## 共通データベース構成の計画

共通データベース構成には、サポート対象のデータベース・タイプ、スクリプトの名前およびスクリプトの場所、プロファイル作成の構成アクション、インストール・パラメーター、作成されるテーブルのタイプ、およびユーザー ID の特権に関する情報が含まれます。

IBM Business Process Manager 共通データベースは、以下の製品コンポーネントで使用します。

- リカバリー
- リレーションシップ・サービス
- Enterprise Service Bus (ESB) ロガー・メディエーション・プリミティブ

共通データベースは、IBM Business Process Manager プロファイルの作成前、作成中、または作成後に作成できます。

- IBM Business Process Manager を構成する前:

- IBM Business Process Manager に用意されているデフォルトのスク립トを編集して実行します。デフォルトのスク립トは、共通データベースおよび Business Process Choreographer テーブルの作成のみに使用できます。
- データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。
- IBM Business Process Manager を構成した後:
  - プロファイル管理ツールを使用して、プロファイルの作成時にデータベース内のテーブルと連携するように IBM Business Process Manager を構成します。データベース表の作成と構成は、プロファイルの作成時に行うことができます。また、プロファイルの作成後までデータベース表の作成と構成を遅らせることができます。プロファイル管理ツールを使用してデータベース・スク립トを生成し、そのスク립トをデータベース表の作成と構成に使用することができます。生成されるこれらのスク립トは、使用可能な状態になっています。編集する必要はありません。
  - データベース設計ツール (DDT) を使用して作成された設計ファイルを使用します。『データベース設計ツールを使用したデータベース設計ファイルの作成』を参照してください。

## サポートされているデータベース・タイプ

共通データベースは、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 40. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Express	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	<b>重要:</b> DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブル、およびスキーマを作成するには、システム・データベース管理者特権が必要です。これらの特権を持っていない場合には、テーブルおよびスキーマを作成するかそれらにアクセスするときに、エラーを受け取る可能性があります。

## ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するのに必要な権限を持つ必要があります。「データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。スク립トを実行しているユーザーがテーブルの作成の権限を持っている

る場合には、そのスクリプトは、スクリプト内に認証 ID を持っている必要はありません。詳細については、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

## データベース管理サービス・インスタンス

Network Deployment 環境の場合、セルあたりに共通データベース表のセットが 1 つあります。

### プロファイル作成時の構成操作

共通データベースをインストールするのに、以下のオプションの中の 1 つを使用することができます。

- インストーラー
- Profile Management Tool
- サイレント・インストール
- スクリプト

これらのオプションのそれぞれに、さらにいくつかの選択項目があります。

#### インストーラー

ソフトウェアのインストール時にプロファイルを作成する場合は、「インストーラー」を使用します。インストール時に、ご使用のデータベース製品をインストールすることができますが、インストールできるデータベース製品のタイプは制限されています。表 41 にはない、サポート対象のデータベース製品を使用するには、プロファイル管理ツールを使用して、ユーザーのデプロイメント・マネージャーを作成する必要があります。

表 41. インストーラー・オプション

オプション	使用可能なデータベース
標準: スタンドアロン・プロファイル	DB2 Express
標準: その他のすべてのプロファイル	DB2 Express
カスタマイズ: スタンドアロン・プロファイル	<ul style="list-style-type: none"><li>• DB2 Universal</li><li>• DB2 データ・サーバー</li><li>• Oracle</li></ul>
カスタマイズ: その他のすべてのプロファイル	<ul style="list-style-type: none"><li>• DB2 Universal</li><li>• DB2 データ・サーバー</li><li>• Oracle</li></ul>

標準インストールでは、構成パラメーターのデフォルト値を使用します。これらのデフォルト値は変更できません。カスタマイズ・インストールを選択する場合は、ユーザーの固有の要件に合わせてデフォルトを変更することができます。

#### Profile Management Tool

プロファイル管理ツールを使用して、ソフトウェアのインストール後にプロファイルを作成します。プロファイル管理ツールを使用すると、プロファイルの作成前、作成中、または作成後にデータベースをインストールすることができます。

76 ページの表 42 では、標準 (デフォルト) プロファイルおよびカスタマイズ・プロファイルでサポートされるデータベースをリストします。

表 42. 「プロファイル管理ツール」オプション

オプション	使用可能なデータベース
標準: スタンドアロン・プロファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 DataServer</li> <li>• DB2 Universal</li> <li>• DB2 for z/OS</li> <li>• Microsoft SQL Server</li> <li>• Oracle</li> </ul> <p>DB2 for z/OS、Oracle、および Microsoft SQL データベースが存在しなければなりません。プロファイル管理ツールがそれらを構成できるようにするためです。</p>
標準: その他のすべてのプロファイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 DataServer</li> <li>• DB2 Universal</li> <li>• DB2 for z/OS</li> <li>• Microsoft SQL Server</li> <li>• Oracle</li> </ul> <p>DB2 for z/OS、Oracle、および Microsoft SQL データベースが存在しなければなりません。プロファイル管理ツールがそれらを構成できるようにするためです。</p>
カスタマイズ: スタンドアロン・プロファイル	74 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』のいずれか
カスタマイズ: その他のすべてのプロファイル	74 ページの『サポートされているデータベース・タイプ』のいずれか

## サイレント・インストール

製品をサイレント・インストールするとき、テンプレート応答ファイルを編集して共通データベース構成を指定することができます。

## スクリプト

IBM Business Process Manager をインストールする前、またはプロファイルの作成中に、スクリプトを使用して、ご使用の共通データベースを作成することができます。

プロファイルの作成後にデータベースを手動で構成するように選択した場合は、まず IBM Business Process Manager をインストールして、プロファイル管理ツール内で、プロファイル作成の一環としてスクリプトを実行したくないことを示す必要があります。プロファイル管理ツールは、ユーザーが指定したデータベース・パラメーターを使用してデフォルト・スクリプトを更新し、更新されたスクリプトを `profile_root/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName` ディレクトリーに書き込みます。

**ヒント:** プロファイル管理ツールを使用して、更新されたスクリプトが書き込まれるディレクトリーを変更することができます。

スクリプトは、そのままでも実行できますが、編集して特定の要件を組み込むことも可能です。これらのスクリプトを、共通データベースを作成する担当者に渡すことができます。データベースを作成する前に IBM Business Process Manager を開始しようとする、エラー・メッセージを受け取ります。

スクリプトを実行するときに、以下のタスクも実行します。

- 適切な場合 (ローカル・データベースの場合にのみ有効)、プロファイル管理ツール内の「データベース構成」パネルでの選択に応じて、データベースを作成します。

**重要:** データベースの作成をプロファイル作成の完了後に先送りすることもできますが、プロファイル管理ツールの「データベース構成」パネルに有効な情報を入力する必要があります。その情報に基づいて、IBM Business Process Manager のデータ・ソースが作成されます。

- JDBC プロバイダーでデータ・ソースを作成します。

**重要:** プロファイルの作成と同時にデータベースも作成する場合に、データベース・パラメーターに誤りがあると、プロファイルにエラーが発生します。データベースの作成を先送りすれば、プロファイルはエラーなしで作成されますが、生成されたデータベース・スクリプトにはエラーが含まれているため、データベースを作成できるようにするには、そのスクリプトを訂正する必要があります。セルのカスタム (管理対象) ノードの場合、デプロイメント・マネージャー・プロファイルと同じデータベース・タイプを選択する必要があります。データ・ソースは、セル・レベルでのみ維持されます。

**注:** セルのカスタム (管理対象) ノードの場合、デプロイメント・マネージャー・プロファイルと同じデータベース・タイプを選択する必要があります。データ・ソースは、セル・レベルでのみ維持されます。

## SQL スクリプト

SQL スクリプトを使用して、プロファイル作成の前後にご使用のデータベースを構成します。テーブルは、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを使用して作成されるため、管理対象ノードの作成時に SQL スクリプトが実行されることはありません。

各共通データベース・クライアントの SQL スクリプトは、以下の場所にあります。

- IBM Business Process Manager のインストール後の *install\_root/dbscripts/CommonDB/dbType*

データベースの作成をプロファイルの作成後に先送りするよう選択した場合は、更新されたスクリプトは *profile\_root/dbscripts/feature/dbType/dbName* ディレクトリーで見つけることができます。

### SQL スクリプト命名規則

- コンポーネント固有のスクリプトの場合: **createTable\_componentName.sql**、例えば **createTable\_Recovery.sql**。
- コンポーネントに依存しないスクリプトの場合: **createTable.sql**。

以下の表は、スクリプトの命名規則を示しています。

表 43. 共通データベース・スクリプトの命名規則

スクリプトのタイプ	スクリプト名
コンポーネント固有のスクリプト	<i>scriptName_componentName.sql</i>
コンポーネントに依存しないスクリプト	<i>scriptName.sql</i>

## JDBC プロバイダー

新しい Java Database Connectivity (JDBC) プロバイダーは、データベース・タイプに応じて作成されます。プロバイダーは、スタンドアロン・プロファイルのノード・スコープ内に、Network Deployment 環境のセル・レベルで作成されます。JDBC プロバイダーは、**JDBC\_DRIVER\_PATH** 変数を参照して、ローカル JDBC ドライバーを見つけます。その変数は、セル・レベルで指定され、各ノード・レベルは、正しいローカル・パスを指します。

データ・ソース名:

- WPS DataSource

データ・ソース JNDI 名:

- jdbc/WPSDB

## 制約事項

プロファイルの作成中に使用可能なデータベース・コマンドには、いくつかの制約事項があります。

以下のデータベース・タイプでは、「新規データベースの作成」が使用不可になります。

- DB2 for z/OS
- Oracle
- Microsoft SQL Server

## テーブル

共通データベース・スクリプトは、プロファイルの作成時に静的テーブルのみを作成します。以下の表には、さまざまなコンポーネントによって作成されるすべてのテーブルのリストが含まれています。

表 44. IBM Business Process Manager の各コンポーネントによって作成されるテーブル

コンポーネント	テーブル名	スクリプト
リレーションシップ	実行時に作成される動的テーブル	<b>createTable_Relationship MetadataTable.sql</b>
共通データベース	SchemaVersionInfo	<b>createTable_CommonDB.sql</b>
ESB ロガー・メディエーション	MSGLOG	<b>createTable_ESBLogger Mediation.sql</b>

前出のテーブル中のすべての SQL スクリプトは、**configRecovery > commonDBUtility > execute createTable\_Recovery.sql** といった各コンポーネント・スクリプトからの `commonDBUtility.ant` ファイルによって実行されます。値 `delayConfig=true` が応答ファイル内にあるとき、SQL ファイルは作成されますが、これらのファイルは実行はされません。この場合、構成後に SQL を手動で実行する必要があります。

WebSphere Enterprise Bus ロガー・メディエーション・コンポーネントでは、各メッセージ・ロガー・プリミティブを構成して、さまざまなデータ・ソースおよびさまざまなデータベースを使用できるようにすることができます。

## スクリプトのエクスポート

スクリプトは、共通データベースを構成するためにプロファイル管理ツール・パネルで選択されたすべてのオプション用に作成されます。これらのスクリプトには、データベース、テーブル、および索引の基本的な作成ステートメントのみが含まれています。データベース管理者は、これらのスクリプトを実行するために、データベースのネイティブ・コマンドを使用する必要があります。詳細については、『プロファイル管理ツールによる共通データベースの構成』を参照してください。

スクリプトの名前は、Windows の場合は `configCommonDB.bat`、UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合は `configCommonDB.sh` です。

データベース・スクリプトは、以下の場所にエクスポートされます:

`profile_root/dbscripts/CommonDB/dbType/dbName` ディレクトリー。

## Common Event Infrastructure データベース構成の計画

Common Event Infrastructure (CEI) データベース仕様には、サポートされるデータベースのタイプ、スクリプトの場所、プロファイル構成タイプ、および必要なユーザー ID の特権がリストされます。オプションで、CEI データベースを使用して、それが IBM Business Process Manager をモニターしているときに取り込まれるイベントを保管することができます。

CEI データベースは内部のデバイスであり、ユーザーと直接対話することはありません。CEI データベースとの間のすべての対話に対して、サポート対象の CEI プログラミング・インターフェースを使用する必要があります。

プロファイル管理ツールを実行するときに、自動的に CEI データベースを作成することはありません。CEI イベントを保管したい場合には、スタンドアロン・プロファイルに対して、および Network Deployment 環境内の CEI サーバーの各インスタンスに対して、データベースを手動で作成する必要があります。

## メッセージング・エンジン・データベース構成の計画

このメッセージング・エンジン・データベースの仕様には、サポート対象のデータベース・タイプ、スクリプトとそれらの場所、プロファイル作成のタイプ、および必要なユーザー ID の特権がリストされています。

メッセージング・エンジン・データベースは、運用情報を格納するために使用します。障害が発生した場合のリカバリーのためにメッセージング・エンジンが必要とする重要なオブジェクトも保管されます。

SCA メッセージング・エンジンのデフォルトのデータベース名は SCADB です。他のメッセージング・エンジンの場合、デフォルトのデータベース名は MEDB です。デフォルトのスキーマ名は、IBMWSSIB です。

**重要:** すべてのデータベース・タイプで複数のスキーマがサポートされているとは限りません。詳細については、ご使用のデータベースの資料を参照してください。

スタンドアロン環境では、管理コンソールを使用して、SCA メッセージング・エンジンを構成できます。パターン化された Network Deployment 環境では、メッセージング・エンジンは、デプロイメント環境の作成時に構成されます。カスタム Network Deployment 環境の場合、メッセージング・エンジンを手動で構成する必要があります。

ユーザーは、メッセージング・エンジン・データベースに対して制御を行います。例えば、各メッセージング・エンジン用のデータベースを作成することができ、また、すべてのメッセージング・エンジンに対して単一のデータベースを使用することができます。各メッセージング・エンジンは、独自のデータベースまたはスキーマのいずれかを持つ必要があります。

## サポートされているデータベース・タイプ

メッセージング・エンジン・データベースには、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 45. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Express	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。

表 45. サポートされるデータベース製品 (続き)

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	<b>重要:</b> DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブル、およびスキーマを作成するには、システム・データベース管理者特権が必要です。これらの特権を持っていない場合には、テーブルおよびスキーマを作成するかそれらにアクセスするときに、エラーを受け取る可能性があります。

## ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するのに必要な権限を持つ必要があります。「データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。スクリプトを実行しているユーザーがテーブルの作成の権限を持っている場合には、そのスクリプトは、スクリプト内に認証 ID を持っている必要はありません。詳細については、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

Network Deployment 環境では、構成時に管理コンソールで指定したユーザー特権に関して必要な許可すべてを持っている必要があります。

**重要:** DB2 V9.7 の場合、新しく作成されたユーザーに、適切な権限を付与します。これは、ユーザー作成プロセスはユーザーに対して自動的に必要な権限を付与することがないためです。

## データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

各メッセージング・エンジンには、以下に示す独自のデータベースまたはスキーマがあります。

- Service Component Architecture システム・バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Service Component Architecture アプリケーション・バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。
- Common Event Infrastructure バスの各メッセージング・エンジンのホストとして使用するもの。

以下のリストには、メッセージング・エンジンがデータベースと対話するのに使用する JDBC データ・ソースの命名規則が含まれています。

- システム・バス: <node><server><cluster>-SCA.SYSTEM.<cell>.Bus
- アプリケーション・バス: <node><server><cluster>-SCA.APPLICATION.<cell>.Bus

- CEI バス: <node><server>|<cluster>-CEI.cellName.BUS

## プロファイル作成時の構成操作

### Network Deployment

メッセージング・エンジン・データベースは自動的に作成されません。プロファイルが作成された後、「Network Deployment 環境の構成」というガイド付きアクティビティを使用して、SCA用のサーバーまたはクラスターを構成することができます。デプロイメント・マネージャーの管理コンソールからこのガイド付きアクティビティにアクセスするには、「ガイド付きアクティビティ」を展開して、「Network Deployment 環境の構成」をクリックします。

管理コンソールの「アプリケーション・サーバー」 > 「servername」 > 「Service Component Architecture」パネルで、サーバーの SCA 構成を表示できます。

プロファイルの作成時に、以下の管理用タスクが実行されます。

- リモート宛先の場所:
  - configSCAAsyncForServer、configSCAJMSForServer (remoteMELocation は true)
  - configSCAAsyncForCluster、configSCAJMSForCluster (remoteMELocation は true)
- ローカル宛先の場所:
  - configSCAAsyncForServer、configSCAJMSForServer
  - configSCAAsyncForCluster、configSCAJMSForCluster

これらのタスクに関する詳細については、『configSCAAsyncForCluster コマンド』および『configSCAAsyncForServer コマンド』を参照してください。

サーバーまたはクラスターに非同期の SCA 構成を実行すると、SCA システム・バス用にメッセージング・エンジンが作成されます。サーバーまたはクラスターに SCA 構成の JMS エlementを実行すると、SCA アプリケーション・バス用にメッセージング・エンジンが作成されます。両方のメッセージング・エンジンに対して、データベースまたはスキーマを作成する必要があります。

Common Event Infrastructure メッセージング・エンジンを構成するためには、deployEventService 管理用タスクを使用して、イベント・サーバーおよび Common Event Infrastructure バスを構成します。

## SQL スクリプト

製品の一部として SQL スクリプトが作成されることはありません。必要な場合は、既存の基本 WebSphere Application Server のスクリプトを使用して、データベースとテーブルを作成することができます。構成される前に MEDB を手動で作成するには、管理コンソールの「アプリケーション・サーバー」 > 「servername」 > 「Service Component Architecture」パネルを使用します。

## JDBC プロバイダー

### Service Component Architecture

JDBC プロバイダーの実装クラスが、拡張構成で選択されている実装クラスと一致しなければならない場合は、その JDBC プロバイダーが再利用されます。同じデータベース・タイプを使用する場合には、通常、実装クラスは一致します。resource.xml ファイル内に一致する JDBC プロバイダーが見つからない場合、templates/system ディレクトリー (プロファイル構成) 内にある jdbc-resource-provider-templates.xml ファイルで、一致する JDBC プロバイダーが検索されます。プロバイダーの突き合わせは、実装クラスについても行われます。

## Common Event Infrastructure

メッセージング・エンジン・データベースの JDBC プロバイダーの作成手順は、CEIDB データベースの場合の作成手順とよく似ています。

### データ・ソース名

- システム・バス: `_(node.server|cluster)-SCA.SYSTEM.cell.Bus/cel/cluster/server/node`
- アプリケーション・バス: `_(node.server|cluster)-SCA.APPLICATION.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- Common Event Infrastructure: `_(node.server| cluster-CEI.cellName.BUS/cluster/server/node`

### データ・ソース JNDI 名

- システム・バス: `jdbc/com.ibm.ws.sib/(node.server|cluster)-SCA.SYSTEM.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- アプリケーション・バス: `jdbc/com.ibm.ws.sib/(node.server|cluster)-SCA.APPLICATION.cell.Bus/cell/cluster/server/node`
- Common Event Infrastructure: `Jdbc/ com.ibm.ws.sib /(node.server|cluster)-CEI.cellName.BUS/cluster/server/node`

## 制約事項

既知の制約事項はありません。

## テーブル

テーブルについては、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターの『データ・ストア』のトピックを参照してください。

## スクリプトのエクスポート

**WAS\_INSTALL\_ROOT/bin** 内の **sibDDLGenerator** スクリプトを使用して、メッセージング・エンジン・データベース用の SQL スクリプトを作成することができます。実稼働環境、特に DB2 for z/OS プラットフォームで使用される SQL スクリプトを作成するために、**sibDDLGenerator** スクリプトを使用します。詳細については、「sibDDLGenerator コマンド」を参照してください。

これらのスクリプトには、基本的な **database/tablespace/table** 作成ステートメントのみが含まれています。データベース管理者は、データベースのニーズを満たすために、特に DB2 for z/OS において、これらのスクリプトを調整する必要がさらに生じることがあります。

### 関連情報:

 データ・ストア接続が失われた場合のメッセージング・エンジンとサーバーの動作の構成

## WebSphere Enterprise Service Bus のロガー・メディエーション・データベース表を構成する計画

WebSphere ESB のロガー・メディエーション・データベース表の仕様を検索することができます。仕様には、サポート対象のデータベース・タイプ、スクリプトの名前およびスクリプトの場所、プロファイル作成の構成アクション、スキーマのアップグレード、およびユーザー ID の特権に関する情報が含まれています。

ロガー・メディエーション・データベース表は、WebSphere ESB 内のメッセージ・ロガー・メディエーション・プリミティブが使用します。メッセージ・ロガー・プリミティブは、メッセージ情報を共通データベ

ースに保管します。共通データベースは、WebSphere ESB ロガー・メディエーション・データベース用のデフォルトですが、外部データベースを使用することもできます。プロファイルの拡張フェーズ時に、システムは `ESB_MESSAGE_LOGGER_QUALIFIER` 変数を作成し、その変数は選択された共通データベースのスキーマ修飾子の値に設定されます。

データベースがスタンドアロン構成に対して自動的に作成されます。データ定義言語 (DDL) ファイルを使用することにより、スタンドアロン・サーバー構成用または Network Deployment 環境用に追加のデータベースを使用できます。

DB2 for z/OS データベースを使用するスタンドアロン構成の場合、または Network Deployment 構成内の管理対象ノードまたはデプロイメント・マネージャーの場合には、まず WebSphere ESB データベースおよびストレージ・グループを作成する必要があります。次に、IBM Business Process Manager for z/OS 用の構成スクリプトを実行することができます。

## サポートされているデータベース・タイプ

WebSphere ESB ロガー・メディエーション・データベースは、以下のデータベース製品を使用することができます。

表 46. サポートされるデータベース製品

データベース・タイプ	考慮事項
DB2 Express	スタンドアロン・プロファイルのデフォルトのデータベース・タイプとして使用されます。
DB2 Universal	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 データ・サーバー	Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
DB2 for z/OS v8 DB2 for z/OS v9	<b>重要:</b> DB2 for z/OS v9 を使用するサーバー用にプロファイルを作成するときは、そのサーバーが DB2 データベースに接続できる必要があります。Network Deployment 構成のデータベースとして使用されます。オプションで、スタンドアロン・サーバー構成でのデータベースとしても使用できます。
Microsoft SQL Server (Microsoft)	
Oracle	データベース、テーブル、およびスキーマを作成するには、システム・データベース管理者特権が必要です。これらの特権を持っていない場合には、テーブルおよびスキーマを作成するかそれらにアクセスするときに、エラーを受け取る可能性があります。

## ユーザー ID の特権

プロファイル管理ツールで指定するユーザー資格情報には、テーブル・スペース、テーブル、スキーマ、索引、およびストアド・プロシージャを作成するのに必要な権限を持つ必要があります。「データベースの作成」オプションを使用する場合は、新規データベースを作成するために必要な特権がユーザー ID に与えられていなければなりません。スクリプトを実行しているユーザーがテーブルの作成の権限を持っている場合には、そのスクリプトは、スクリプト内に認証 ID を持っている必要はありません。詳細について

は、『データベースのユーザーおよびスキーマ』および『データベース特権』を参照してください。

## データベース管理サービス (DBMS) インスタンス

共通データベースは、スタンドアロン環境および Network Deployment 環境の両方に、セル・スコープで使用されます。ただし、他のインスタンスを、必要な数だけ手動で作成することができます。各メッセージ・ロガー・メディエーション・プリミティブは、さまざまなデータ・ソース、したがってさまざまなデータベースを使用するために構成することができます。

### プロファイル作成時の構成操作

スタンドアロン・プロファイルとデプロイメント・マネージャー・プロファイルの場合、WebSphere ESB のロガー・プロファイルは、共通データベース内の **createTable** 共通データベース・スクリプトを実行します。

#### スタンドアロン・プロファイル

デフォルトのスタンドアロン環境では、EsbLogMedDB という名前の DB2 データベースが自動的に作成されます。

#### ネットワーク・デプロイメント環境

デフォルトの WebSphere ESB データベースは、Network Deployment プロファイルの作成中に自動的に選択されることはありません。デフォルトのデータベースを選択するか、またはサポート対象のデータベースの 1 つを選択する必要があります。

## SQL スクリプト

**createTable\_ESB.sql** SQL スクリプトは、*install\_root/dbscripts/CommonDB/DBTYPE* ディレクトリーにあります。

**createMessageLoggerResource.jacl** および **removeMessageLoggerResource.jacl** スクリプトは、*install\_root/bin* ディレクトリーにあり、要求されたデータベース・タイプのテーブルを作成または削除するのに使用することができます。

## JDBC プロバイダー

以下の 共通データベースの JDBC プロバイダーとデータ・ソースがデフォルトで使用されます。

データ・ソース名:

- **WPS DataSource**

データ・ソース JNDI 名:

- **jdbc/WPSDB**

メッセージ・ロガー・メディエーションを構成して、異なるデータ・ソースを使用することができます。

## 制約事項

既知の制約事項はありません。

## テーブル

WebSphere ESB ロガー・メデイエーション・データベースは、共通データベース内の MSGLOG テーブルを使用します。ただし、共通データベースを使用しないことを選択でき、代わりに外部データベースを使用することもできます。

## スクリプトのエクスポート

データベース・スクリプトは、`install_root/dbscripts/CommonDB/DBTYPE/dbName` ディレクトリーにエクスポートされます。

## スキーマのアップグレード・スクリプト

スキーマのアップグレードは、MSGLOG テーブルには含まれていません。IBM Business Process Manager V6.1 にマイグレーションするときに、IBM Business Process Manager は、前のリリースで使用された MessageLogger データベースを継続して使用します。このデータを IBM Business Process Manager 共通データベースにマイグレーションするためのサポートはありません。

メッセージ情報用に単一の場所を維持したい場合には、以下のタスクの中の 1 つを実行することができます。

- データを古いデータベースから新しいデータベースへ手動で移動する
- 古いデータベースを引き続き使用する
- `createMessageLoggerResource.jacl` スクリプトを使用して、データを移動します。

---

## エラー防止およびリカバリーの計画

システムおよびアプリケーションのエラーの影響を最小化するために、エラー防止およびリカバリーの方法を作成することができます。

『エラー防止およびリカバリーの計画』の各トピックには、インフォメーション・センター・トピック、技術記事および IBM Redbooks などのさまざまなリソースへのリンクが含まれています。これらには WebSphere のシステム・リカバリー機能を活用するように設計された開発プロセスおよびシステム構成パターンに関する詳細な情報が提供されています。

## エラー防止とリカバリーの概要

エラー防止とリカバリーの情報では、システム障害を引き起こす問題を回避する方法について説明し、通常の状態と異常な状態の両方で発生する可能性があるシステム障害からリカバリーする方法について、情報を提供しています。

IBM Business Process Manager は、ビジネス・プロセス管理 (BPM) ソリューションとサービス指向アーキテクチャー (SOA) ソリューションの実行および管理を可能にするために最適化されたミドルウェア・サーバーです。IBM Business Process Manager は WebSphere Application Server の基盤となる機能に基づいて構築されています。

ミドルウェア・システムはさまざまな条件下で実行されますが、従来、それらのすべてが『良好なパス (good path)』条件になっているわけではありません。IBM Business Process Manager の主要な機能の多くは、普通に見える動作から発生する可能性がある、不確実さに対処するためのものです。

## 想定および予期

『エラー防止およびリカバリーの計画』セクションの記載に従ってシステム障害およびリカバリーの情報を使用する前に、以下の想定リストを読んでください。

- IBM Business Process Manager およびその構築に使用されている基本のアーキテクチャー原則、ならびにそれが実行する基本的な種類のアプリケーションについて熟知している。
- 統合プロジェクトの計画および実施方法などの、統合プロジェクトについての基礎知識がある。
- 特に指定しない限り、システム障害およびリカバリーについての情報は、IBM Business Process Manager のバージョン 6.1.0 以降に関するものである。

注：『エラー防止およびリカバリーの計画』セクションに含まれている情報は、リモート・メッセージングおよびリモート・サポートのパターンを想定しており、IBM Business Process Manager 用に 1 つ、メッセージング・エンジンおよび CEI イベント・サーバー用にそれぞれ 1 つずつの 3 つの別個のクラスターで構成されています。

## エラー防止の計画

あらゆる IT 処理の場合と同様、極端なシチュエーションに対して計画を行って実行すれば、正常にリカバリーする確率は高くなります。

システムおよびアプリケーションのリカバリーを準備することに関しては、必須の考慮事項が数多くあります。これらの考慮事項は、次の 2 つのカテゴリーに分類できます。

- アプリケーション設計の一部としてのエラー防止手段
- 開発プロセスの一部としてのエラー防止手段

### アプリケーション設計の一部としてのエラー防止

アプリケーション設計の一部としてエラー防止手段を組み込むことは、特定の設計技法を実装し、製品の機能を使用して、システムおよびアプリケーションのエラーを防止することを意味します。

アプリケーションを正しく構築するためには、アーキテクチャーおよび設計のガイドラインと適切な標準と、その組み合わせとなるレビューおよびチェックポイントが完備された強力なシステム・ガバナンスが不可欠です。

アプリケーション設計の一部としてのエラー防止手段には、以下の要素が含まれています。

- 例外および障害に対する設計上の考慮事項の実装
- 既存の IBM Business Process Manager エラー処理機能とツールを使用するエラー処理方針の実装
- 接続グループの作成とモジュール・アプリケーション設計技法の使用

#### 接続グループ:

接続グループは、SCA モジュール内に見られる特定の動作パターンを表します。

システムで考えられる要求ソースを表す接続グループを作成します。

接続グループでは以下を行います。

- インバウンド・データを取得するためのすべてのロジックを 1 つのモジュールに配置します。

これはアウトバウンド・データが、外部システムまたはレガシー・システムに送信される場合にも該当します。

- データを接続および変換するためのすべてのロジックを 1 つのモジュールに配置します。

他のすべてのモジュールもインターフェースの標準セットを使用できるようになったため、さらなる変換を考慮する必要はありません。

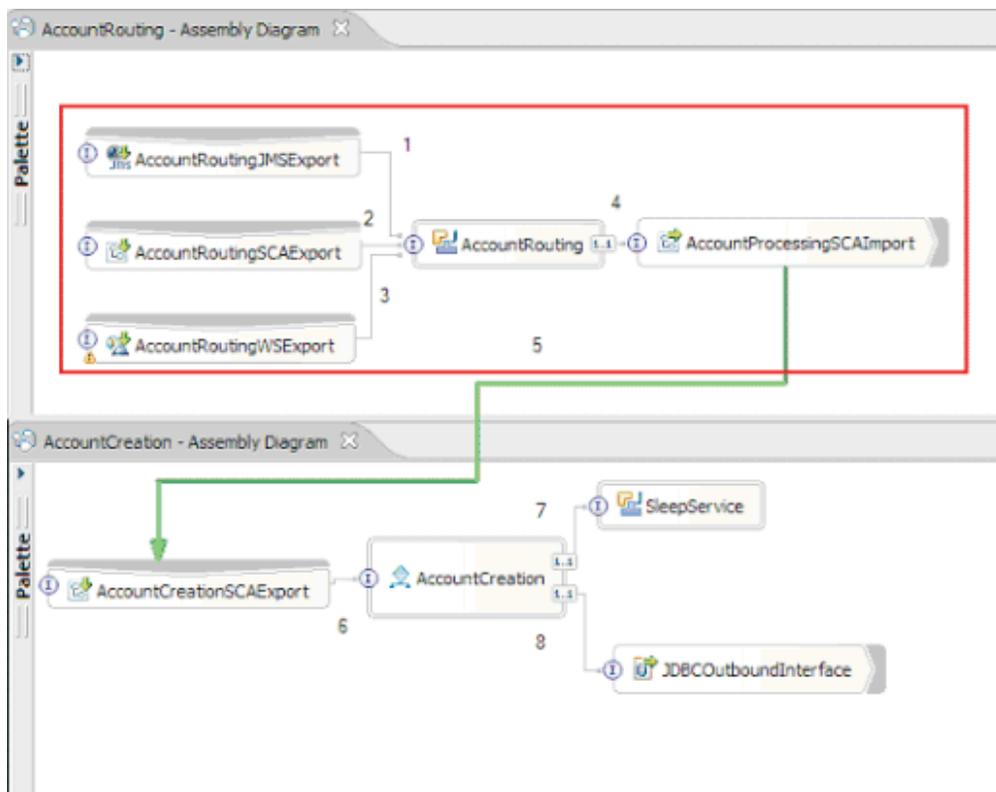
接続グループには、長期実行ビジネス・プロセスやビジネス・ステート・マシンのようなステートフル・コンポーネント・タイプが含まれません。これらの接続グループにより、特定のエンドポイントの統合要件をカプセル化して分離できます。一般に、WebSphere ESB メディエーション・モジュールがこの目的のために使用されるのは、「インフラストラクチャー」関連タスクを実装する便利な方法だからです。

接続グループの概念は、リカバリーの必要がある場合に、システムを休止状態にするための便利な方法として使用することもできます。接続グループ・モジュールはステートレスであるため、モジュールを一時的に停止して、システムが保持するイベントの処理を完了させる間、新規イベントのインバウンド・フローを遮断することができます。

注: インバウンド・イベントのフローを停止する場合、接続モジュールはインバウンドおよびアウトバウンドを同じモジュール内でサポートしてはいけません (同じ EIS システムがインバウンドとアウトバウンドの両方を持っている場合でも該当します)。インバウンドおよびアウトバウンドが同じモジュールでサポートされている場合、アウトバウンドはインバウンドと一緒にオフになります。このため、内部処理の実行が停止することがあります。このケースでは、インバウンドとアウトバウンドを分離することを検討してください。

システムがリカバリーされ、新規の作業を処理できるようになったら、これらのモジュールを再開できます。

以下の画面取りに外観が示されているモジュールは、接続グループの一部と見なされます。



接続グループは、SAP または CICS® などの外部ソースまたは既存システムからの入力用に使用できます。または、Web ブラウザー・ベースのクライアントからの新規作業のためにも使用できます。

#### 例外および障害に対するアプリケーション設計上の考慮事項:

アプリケーション設計では、IBM Business Process Manager のエラー処理機能と障害処理機能の利点を活用することを考慮する必要があります。

包括的なエラー処理方法を作成するには、ソリューション設計者は、WebSphere Process Server および WebSphere ESB が宣言済みまたは宣言済みでない例外をどのように表すかを理解する必要があります。

SCA プログラミング・モデルには以下の 2 つのタイプの例外が提供されています。

- サービス・ビジネス例外

サービス・ビジネス例外は、ビジネス・メソッドの機能シグニチャー (WSDL 障害または Java スロー) で宣言されるチェック例外です。サービス・ビジネス例外では、アプリケーションまたはサービスによって予期されるエラー状態を識別します。これらの例外は、「チェック例外」と呼ばれることもあります。

例えば、株価サービスでの **InvalidSymbolException** があります。そのような例外は **ServiceBusinessException** によってラップされ、クライアントに戻されます。

- サービス・ランタイム例外

「システム例外」としても知られています。サービス・ランタイム例外は、メソッド・シグニチャーでは宣言されません。一般にこの例外は、Java コンポーネントでの **NullPointerException** などのように、アプリケーションによって予期されていないエラー状態を表します。

これらの例外は、**ServiceRuntimeException** によってラップされ、クライアントに戻されます。クライアントは **ServiceRuntimeException** について問い合わせる原因を判別できます。

注: SCA レベルで動作するとき、これらの例外は障害と呼ばれることもあります。ただし、Java コードを使用するときは、これらはたいてい例外と呼ばれます。

コンポーネントから **ServiceRuntimeException** が throw されると、現在のトランザクションがロールバックされます。

#### サービス・ビジネス例外の処理:

サービス・ビジネス例外は、アプリケーションまたはサービスによって予期される既知および宣言済みの例外を表します。

サービス・ビジネス例外は、サービス・インターフェースで定義されます。

コンポーネント開発者は、スローされる可能性がある例外を宣言することに注意を払い、消費側のサービスでそれらの例外を処理できるようにしてください。例えば、銀行用アプリケーションのビジネス障害には、「無効な口座番号」または「資金不足」がビジネス例外として含まれる場合があります。したがって、サービスを呼び出すアプリケーションには、無効な口座番号が渡された場合や、\$100 を振り替えようとして口座に \$50 しかなかった場合などの状況処理するロジックを組み込んでおく必要があります。これらは、呼び出し側のアプリケーションが処理するように設計されたタイプのビジネス・エラーです。IBM Business Process Manager のビジネス例外は、catch して適切に処理するクライアントに戻されます。

ビジネス・サービス例外を処理する場合、サービス・コンシューマーは、宣言済みのビジネス例外の場合に以下のアクションのいずれかを実行するようにクライアントを実装します。

1. 例外を catch して、呼び出し側のアプリケーションに適したサービス・ビジネス例外を作成します。

これは、元の例外を新規例外に含める (ラッピングする) ことを意味する場合があります。これが最も頻繁に行われるのは、呼び出し側のモジュールが、呼び出し先のサービスと同じビジネス例外を持たない場合です。例外を catch して、呼び出し側のアプリケーションのためにサービス・ビジネス例外を作成するフローの例を以下に示します。

- a. モジュール A は SBE 「MoneyTransferFailed」を持つ
- b. モジュール B は SBE 「InsufficientFunds」を持つ
- c. モジュール A はモジュール B を呼び出し、「InsufficientFunds」例外を取得する
- d. モジュール A は、資金の不足という元のエラーを定義するストリングを格納できる場所を持つ、新規例外「MoneyTransferFailed」を作成する必要がある。

2. 例外を catch して代替ロジックを実行します。

### サービス・ランタイム例外の処理:

サービス・ランタイム例外は、未宣言の例外です。一般にこの例外は、アプリケーションによって予期されていないエラー状態を表します。

サービス・ランタイム例外を使用して、実行時の予期せぬ状態を知らせます。

コンポーネント開発者は、次の方法でサービス・ランタイム例外を処理できます。

1. それらの例外を catch し、何らかの代替ロジックを実行します。

例えば、あるパートナーが要求を処理できなくても、別のパートナーでは処理できることもあります。

2. 例外を catch し、クライアントに「再スロー」します。
3. その例外をビジネス例外に再マップします。

例えば、パートナーがタイムアウトになると、ビジネス例外が生成される可能性があります。その例外では、ほとんどの要求が処理されたものの、完了していない 1 つの要求が残されており、その要求を後に再試行するか、異なるパラメーターを指定して試行すべきことが示されます。

例外が catch されない場合、例外は現行コンポーネントを呼び出したコンポーネントに渡されます。この呼び出しチェーンは、チェーンの最初の呼び出し元に戻るまで続きます。例えば、**Module A** が **Module B** を呼び出し、**Module B** が **Module C** を呼び出して、**Module C** が例外をスローすると、**Module B** は例外を catch する場合も、またはしない場合もあります。**Module B** が例外を catch しない場合、例外は **Module A** まで戻されます。

コンポーネントから **ServiceRuntimeException** が throw されると、現在のトランザクションがロールバックされます。このタイプの例外処理は、チェーン内のすべてのコンポーネントに対して繰り返されます。例えば、**Module C** から **ServiceRuntimeException** がスローされた場合は、そのトランザクションに、ロールバック対象としてのマークが付けられます。次にその例外は **Module B** にスローされ、**Module B** で例外が catch されず、別のトランザクションが存在する場合は、そのトランザクションもロールバックされます。コンポーネント開発者は、呼び出しが現行トランザクションと新規トランザクションのどちらで行われるかを制御するサービス品質 (QoS) 修飾子を使用できます。例えば、**Module A** が **Module B** を呼び出し、**Module B** が新しいトランザクションの一部である場合、**Module A** は **Module B** からの **ServiceRuntimeException** を "catch" することで、**Module A** のトランザクションをロールバックすることなく、処理を続行できます。

注: ランタイム例外はインターフェースの一部として宣言されていないため、コンポーネント開発者は、例外の解決を試みて、クライアントがユーザー・インターフェースである場合にランタイム例外がクライアントまで不意に伝搬されるのを防止してください。

ロールバックされるトランザクションの内容は、トランザクションの性質によって異なることに注意してください。例えば、長期実行の BPEL プロセスは、多数の小規模なトランザクションにセグメント化することができます。非同期要求および応答の呼び出しは、自動的にトランザクションから切り離されます (そうしないと、呼び出し側のアプリケーションが長時間にわたって応答を待たなければならなくなります)。

1 つのトランザクションが、(1 つの大きなトランザクションとして扱われるのではなく) 複数の非同期呼び出しに分割される場合、トランザクションの最初の作業は `ServiceRuntimeException` の発生時にロールバックします。ただし、非同期呼び出しの応答が別のトランザクションから送信された場合、その非同期呼び出しの応答の行き先がなくなるため、`Failed Event Manager (FEM)` でイベントが作成されます。

以下に、`ServiceRuntimeException` の現行サブクラス 4 つを示します。

#### 1. `ServiceExpirationRuntimeException`

この例外を使用して、非同期 SCA メッセージの有効期限が切れたことを示します。有効期限は、サービス参照で `RequestExpiration` 修飾子を使用して設定できます。

#### 2. `ServiceTimeoutRuntimeException`

この例外を使用して、非同期要求への応答を構成された期間内に受信しなかったことを示します。有効期限は、サービス参照で `ResponseExpiration` 修飾子を使用して設定できます。

#### 3. `ServiceUnavailableException`

この例外を使用して、インポートを介して外部サービスを呼び出し中にスローされた例外が存在することを示します。

#### 4. `ServiceUnwiredReferenceRuntimeException`

この例外を使用して、コンポーネントでのサービス参照が正しくワイヤーされていないことを示します。

## 第 6 章 IBM Business Process Manager Express のインストールおよび構成

IBM Business Process Manager Express は、スタンドアロン・トポロジーでのみインストールおよび構成することができます。すべてのコンポーネントを単一サーバー上にインストールおよび構成することができます (スタンドアロン構成と呼ばれます)。フェイルオーバーがサポートされた高可用性環境を実現するには、WebSphere Application Server のクラスター化メカニズムを使用できる IBM Business Process Manager Standard を選択するか、またはそれにアップグレードしてください。

### ソフトウェアのインストールおよび構成の準備

ソフトウェアのインストールおよび構成を準備する前に、作成するデプロイメント環境の計画を作成します。

IBM Business Process Manager のインストールおよび構成の準備を行う場合は、以下の表に記載された情報を使用してください。

表 47. インストールおよび構成の準備

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
ハードウェアおよびソフトウェア要件を確認する	IBM BPM の構成に応じて、以下を参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>IBM Business Process Manager Advanced system requirements</li><li>IBM Business Process Manager Standard system requirements</li><li>IBM Business Process Manager Express system requirements</li></ul>	ご使用の IBM Business Process Manager インストールをサポートするために必要なシステム要件について理解します。
オペレーティング・システムを準備する	 Linux システムのインストール準備   Windows システムのインストール準備	使用する各ワークステーションのオペレーティング・システムが準備されます。

表 47. インストールおよび構成の準備 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
データベース管理システムがインストールされているか確認する	使用するデータベース管理システムのインストールおよび管理の詳細については、データベースの資料を参照してください。	<p>データベース管理システムがインストールされます。</p> <p>IBM Business Process Manager によって DB2 Express データベースが組み込まれます。データベースとして DB2 Express を使用する場合は、インストーラーからデータベース機能として DB2 Express を選択すると、DB2 Express が自動的にインストールおよび構成されます。DB2 Express をインストールするには、管理特権 (管理者または root ユーザー) が必要で、既存の DB2 データベース・サーバーがシステム上にあってはなりません。</p> <p><b>注:</b> 既に DB2 の特定のバージョンがインストールされていて DB2 Express をインストールする場合は、DB2 をアンインストールしてから IBM Business Process Manager インストーラーを実行する必要があります。インストーラーから DB2 Express をインストールするように選択した場合に、インストーラーが特定のバージョンの DB2 がインストールされていることを検出すると、警告メッセージが表示され、DB2 Express をインストールすることができなくなります。</p> <p><b>重要:</b> <span style="background-color: #800000; color: white; padding: 2px;">Linux</span> DB2 Express を root ユーザーとしてインストールする場合、DB2 Express のインストールを開始する前に、すべてのカーネル要件を満たしておく必要があります。カーネル要件のリストについては、カーネル・パラメーターの要件 (Linux) を参照してください。現行値は、<code>ipcs -l</code> コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。</p>

## 製品インストール用のオペレーティング・システムの準備

IBM Business Process Manager Express をインストールする前に、オペレーティング・システムを準備する必要があります。構成は、ご使用のオペレーティング・システムのタイプによって異なります。

インストール環境を準備する前に、以下の作業を実行してください。

- IBM Business Process Manager Express をインストールするシステム上でファイアウォールが実行されている場合は、ファイアウォールを無効にします。
- ご自分のユーザー・ログインが、DB2 または Oracle データベースのコマンドにアクセスできることを確認します。
- ご使用のオペレーティング・システムに固有の追加作業を実行します。

**重要:** IBM Business Process Manager 7.5.0 を **Windows Server 2003** または **Windows 7 (英語版)** でインストールし、IBM Process Portal の「設定」->「インターフェース言語」でロケールをチェコ語に切り替えると、IBM Process Designer のいくつかのパネルでテキストが文字化けして表示されます。IBM Process Designer をチェコ語のロケールで開始しても、テキストは文字化けして表示されます。

**ヒント:** この問題を解決するには、システム設定を以下のように変更します。

- **Windows Server 2003** の場合: 「地域と言語のオプション」->「詳細設定」->「Unicode 対応でないプログラムの言語」->「チェコ語」に設定
- **Windows 7** の場合: 「地域と言語」オプション->「管理」タブ->「システム ロケールの変更...」(「Unicode 対応でないプログラムの現在の言語」の下)->「チェコ語」を選択

## Linux システムのインストール準備

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux オペレーティング・システムを準備する必要があります。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件であるため、WebSphere Application Server インフォメーション・センターの『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』というトピックの、必要な準備手順をすべて実行する必要があります。

**注:** ただし、WebSphere Application Server のインストールに関連する以下の点に注意してください。

- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、インストールに IBM Installation Manager を使用しますが、InstallShield Multiplatform (ISMP) は使用しません。ISMP の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。
- IBM Business Process Manager V7.5 によってインストールされる WebSphere Application Server Network Deployment V7.0 は、フィックスパックおよびインテリム・フィックスをインストールするのに IBM Installation Manager を使用しますが、WebSphere Update Installer は使用しません。WebSphere Update Installer の実行について具体的に言及する前提条件は無視してください。

バージョン 3.5.x.x 以上の Mozilla Firefox がインストールされていることを確認してください。

一部のステップはオペレーティング・システムの 1 つのバージョンに特定であるため、すべてのステップがご使用の環境に該当するとは限りません。ステップに修飾子が示されていない場合、そのステップはオペレーティング・システムのすべてのバージョンで実行してください。Red Hat Enterprise Linux 6.0 (64 ビット) 上にインストール・マネージャーをインストールするには、『Unable to install Installation Manager on RHEL 6.0 (64-bit)』を参照してください。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、`ipcs -l` コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

値を変更するには、以下の処理を行います。

1. 次の行を、次に示す順序で `/etc/sysctl.conf` ファイルに追加します。

```
kernel.shmni=4096
kernel.shmmax=4294967296
kernel.shmall=8388608
#kernel.sem=<SEMMS><SEMMNS><SEMOPM><SEMMNI>
```

```
kernel.sem=250 256000 32 4096
kernel.msgmni=16384
kernel.msgmax=65536
kernel.msgmnb=65536
```

2. 次の行を /etc/security/limits.conf の末尾に追加します。

```
# - stack - max stack size (KB)
* soft stack 32768
* hard stack 32768
# - nofile - max number of open files
* soft nofile 65536
* hard nofile 65536
# - nproc - max number of processes
* soft nproc 16384
* hard nproc 16384
```

3. システムをリブートします。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Linux システム上で以下の手順を実行します。

1. 32 ビット WebSphere Application Server を 64 ビット・オペレーティング・システム上にインストールする場合は、適切な 32 ビット・ライブラリーがご使用の 64 ビット・システム上にインストールされていることを確認します。

2. Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して、root ユーザーとして IBM Business Process Manager をインストールする場合は、前述の手順のとおりに行い、このステップはスキップしてください。それ以外の場合は、オープン・ファイルの最大数を少なくとも 8800 に増やします。デフォルト設定は通常、十分ではありません。オープン・ファイルの現在の最大数を調べるには、**ulimit -n** を使用します。以下の例は、8800 に増やされたオープン・ファイルの最大数を示しています。この数は、ほとんどのシステムで十分なものです。**ulimit** 要件は、インストール時に動的に計算されるので、場合によっては選択したオプションに基づいて大きくする必要があります。

a. /etc/security/limits.conf を開きます。

b. **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。

```
* hard nofile 8800
```

```
* soft nofile 8800
```

c. ファイルを保存して閉じます。

d. ログオフし、ログインし直します。

この設定の詳細については、**man limits.conf** を実行するか、WebSphere Application Server インフォメーション・センターのトピック『製品インストールのためのオペレーティング・システムの準備』を参照してください。

3. ご使用のオペレーティング・システム用の以下のパッケージをインストールします。

オプション	説明
<b>Red Hat Enterprise Linux 5</b>	compat-libstdc++-33-3.2.3-61 compat-db-4.2.52-5.1 libXp-1.0.0-8 rpm-build-4.4.2-37.el5 <b>64 ビット・カーネルのみ:</b> compat-libstdc++-296-2.96-138

オプション	説明
Red Hat Enterprise Linux 6	ksh-version.rpm Korn シェル  詳細な手順とパッケージのリストについて『Unable to install Installation Manager on RHEL 6.0 (64-bit)』を参照してください。
SUSE Linux Enterprise Server 9.0	XFree86-libs-32bit-9 glibc-32bit-9 glib-32bit-9 gtk-32bit-9

訂正として新しいパッケージがある場合は、これらのいずれのパッケージについても、より最新のリリースをインストールすることもできます。ご使用のハードウェアに固有の追加パッケージがある場合は、インストールします。

単一行コマンドを使用して、依存関係 (必要な全パッケージ) をインストールできます。以下のコマンドは、サポート対象の Linux 配布版のデフォルトのパッケージ・マネージャーを使用した例です。

- **Red Hat Enterprise Linux 5 (32-bit):**

```
yum install compat-libstdc++-33 compat-db libXp rpm-build RHEL 5.x
```

- **Red Hat Enterprise Linux 5 (64-bit):**

```
yum install compat-libstdc++-33 compat-db libXp rpm-build compat-libstdc++-296
```

- **SUSE Linux:**

```
zypper install XFree86-libs-32bit-9 glibc-32bit-9 glib-32bit-9 gtk-32bit-9
```

4. 以下のコマンドを使用して、**umask** 値を 077 に設定します。

```
umask 077
```

値 077 は、製品が許容する最も制限的な値です。以下のアクセス・レベルの場合は、オプションで、より制限の弱い **umask** 値を設定することを選択できます。

- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り専用アクセス権限の場合は 037
- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取り/書き込みアクセス権限の場合は 027
- 人間の管理者およびツールのグループに関する読み取りアクセス権限、書き込みアクセス権限、および実行アクセス権限の場合は 007

5. Red Hat Enterprise Linux 5 システムの場合、SELinux を使用不可に設定するか、または許容モードに設定します。

6. コンピューターを再始動します。

7. Linux システムの調整を行うための手順を実行します。

8. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

## Windows システムのインストール準備

IBM Business Process Manager をインストールするには、まず Windows オペレーティング・システムを準備する必要があります。

IBM Business Process Manager インストール済み環境で DB2 Express を使用する場合は、管理特権 (管理者ユーザー) が必要で、インストールを実行するシステム上に既存の DB2 データベース・サーバーがなくてはなりません。

WebSphere Application Server は IBM Business Process Manager の前提条件製品であるため、IBM Business Process Manager をインストールする前に、WebSphere Application Server の準備作業をすべて完了する必要があります。

IBM Business Process Manager をインストールする前に、Windows システムで以下の手順を実行します。

1. WebSphere Application Server のインストール環境について、以下の手順を実行します。

- a. Web ブラウザーをダウンロードしてインストールします。ランチパッド・アプリケーションを使用したい場合は、Web ブラウザーをインストールする必要があります。システムにデフォルトのブラウザがないか、またはブラウザが破損しているか正しくインストールされていない場合は、インストール・ウィザード・パネルでさまざまなハイパーリンクを開こうとするとエラーが発生することがあります。
- b. 32 ビット WebSphere Application Server を 64 ビット・オペレーティング・システム上にインストールする場合は、適切な 32 ビット・ライブラリーがご使用の 64 ビット・システム上にインストールされていることを確認します。
- c. 製品をインストールしているマシン上で、すべての WebSphere Application Server 関連の Java プロセスを停止します。
- d. IBM HTTP Server などの Web サーバー・プロセスはすべて停止します。
- e. **process\_spawner.exe** プログラムのすべてのインスタンスを停止します。**process\_spawner.exe** が存在しない場合は、このステップをスキップできます。**process\_spawner.exe** は、WebSphere Application Server が適切に機能するための必要なバイナリー・ファイルです。**process\_spawner.exe** は直接呼び出されるものではなく、Windows 上の WebSphere Application Server のコア機能となります。
- f. 十分なディスク・スペースを用意します。必要なディスク・スペースの量は、インストールされる機構または製品によって異なります。インストール・ウィザードを使用して製品をインストールする場合、「インストールの要約」パネルに、選択された機構および製品に基づく、必要なディスク・スペースの概算量が示されます。アプリケーションおよび構成を以前のバージョンからマイグレーションする計画がある場合は、アプリケーション・オブジェクトに十分なディスク・スペースがあることを確認します。以下の場合に大まかなガイドラインとして、アプリケーションのサイズの 110% に相当するスペースを見込んでおいてください。
- g. 前提条件および相互前提条件が、必要なリリース・レベルであることを確認します。インストール・ウィザードは、前提条件となるオペレーティング・システム・パッチの有無を調べますが、前提条件をまだ検討していない場合は、サポートされるハードウェアおよびソフトウェア Web サイトで前提条件を検討してください。サポートされているバージョンへのマイグレーションの方法については、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

WebSphere Application Server インストール済み環境では、IBM Installation Manager ウィザードを使用します。このウィザードのグラフィカル・インターフェースを使用することができます。また、サイレント・モードでウィザードを使用することもできます。リモートでインストールしており、インストール・ウィザードを使用する場合は、グラフィックスの使用をサポートする接続メカニズムを使用する必要があります。ご使用の接続でグラフィックスの使用がサポートされていない場合は、製品をサイレント・インストールします。

インストールを正しく実行するには、**USER\_HOME** ディレクトリーへの書き込み権限が必要です。**USER\_HOME** への書き込み権限がない場合は、以下のインストール上の制限に注意してください。

- ・ プロファイル管理ツールの GUI は、**USER\_HOME** への書き込みを必要とするため、機能しません。代わりに、コマンド行で **manageprofiles** を使用してプロファイルを管理する必要があります。
2. 『Windows システムの調整』のステップを完了します。
  3. 関与するすべてのサーバーが同じ時刻に設定されていることを確認します。アプリケーション・クラスター、サポート・クラスター、データベース・クラスターを含め、すべてのクラスター・ノードのすべてのサーバーに同じネットワーク・タイム・プロトコルを使用してください。時刻の不一致は、システム・タスクの重複を含め、不安定な動作の原因になります。

## データベースとインストールおよび構成のシナリオ

ソフトウェアと連携するようにデータベースを構成する方法は、インストールするソフトウェアおよび達成しようとするシナリオに関連します。

「標準インストール」オプションを使用するインストール・シナリオでは、データベースがローカル側 (IBM Business Process Manager のインストール先と同じシステム上) にあってもリモート側 (別のシステム上) にあっても、データベースを事前に作成しておく必要があります。データベースを事前に作成する必要のないシナリオは、IBM Business Process Manager に組み込まれている DB2 Express データベースをインストールする場合のみです。DB2 Express は、Windows および Linux for Intel の IBM Business Process Manager に組み込まれています。DB2 Express がまだインストールされていない場合は、IBM Business Process Manager インストーラーを実行するとオプションとしてインストールできます。また、このインストーラーによって DB2 Express に共通データベースおよびコンポーネント固有データベースも作成されます。DB2 Express をインストールするには、管理特権 (管理者または root ユーザー) が必要で、既存の DB2 データベース・サーバーがシステム上にあってはなりません。

「標準」インストール用の DB2 Express を使用しないシナリオはすべて、既存のデータベースを使用する「標準」インストールと見なされます。つまり、既にインストール済みのデータベースがあり、インストーラーの「既存データベース」パネルを使用して構成プロパティを指定することになります。詳細については、『標準インストール時の既存データベースの構成』を参照してください。このオプションを使用するには、ご使用のデータベースが既に作成されていることを確かめる必要があります。

ユーザーとデータベース管理者は、ソフトウェアをインストールおよび構成する前に、インフォメーション・センター内のデータベースの構成に関する情報を確認する必要があります。

---

## IBM Business Process Manager Express のインストール

IBM Business Process Manager Express のインストールには、ソフトウェアの取得とそれに続くソフトウェア・ファイルのインストール (前提ソフトウェア、IBM Business Process Manager Express によって使用されるデータベース製品、および IBM Business Process Manager Express ソフトウェア) が含まれます。

## IBM Business Process Manager Express のインストール

ソフトウェアは、Launchpad プログラムで対話的にインストールするか、Installation Manager をサイレント・インストール・モードで実行してサイレントにインストールします。サイレント・モードでは、インストール・ウィザードはグラフィカル・インターフェースを表示せずに、応答ファイルから応答を読み取ります。

## ロードマップ: IBM Business Process Manager Express のインストールおよび構成

IBM Business Process Manager インストーラーおよび構成プログラムは、さまざまな開発シナリオおよび実動シナリオに対応します。このロードマップは、IBM Business Process Manager Express をインストールし構成するために最も一般的に、かつ広く使用されるパスについて説明します。

このロードマップでは、一般的なインストールおよび構成の各シナリオをそれぞれ 1 つのセクションで説明しています。各セクションには、実行するアクティビティ、説明へのリンク、および各アクティビティの完了後の結果についての注を示す表が含まれています。

このロードマップの各セクションでは、以下のシナリオについて説明します。

- 標準インストール

「標準インストール」オプションでは、ソフトウェアをインストールし、スタンドアロンの Process Center プロファイルまたは Process Server プロファイルを構成します。標準インストールでは、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** ユーティリティを使用してプロファイルを別個に作成する必要はありません。

「標準インストール」オプションは、ソフトウェアをインストールおよび構成するための最も単純で迅速な方法です。また、(Express、Standard、または Advanced 構成の) すべての Business Process Manager フィーチャーおよび機能を単一のマシンに取り込むための理想的な方法でもあります。標準インストールは電子インストール・イメージからのみ使用でき、DVD からは使用できません。

『「標準インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストール』を参照してください。

- カスタム・インストール、およびそれに続く 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの作成

「カスタム・インストール」オプションでは、ご使用のシステムにソフトウェアをインストールし、次にプロファイル管理ツールを実行して、ソフトウェアの構成方法をより柔軟に制御することができます。標準インストール・パスでは使用できない構成フィーチャーを必要とするスタンドアロンの Process Center 環境または Process Server 環境を作成する場合は、製品バイナリーをインストールした後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、スタンドアロンの Process Center プロファイルまたは Process Server プロファイルを作成します。

『「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成』を参照してください。

## 「標準インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストール

電子イメージからインストールする場合は、インストールで「標準インストール」オプションを使用して、ソフトウェアのインストールとスタンドアロン・プロファイルの構成を自動的に行うことができます。標準インストールでは、インストール後にプロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** を実行する必要はありません。

「標準」オプションは、ソフトウェアをインストールおよび構成するための最も迅速な方法です。このインストール・オプションでは大半の設定にデフォルトが使用されますが、インストール・パスとデータベース・タイプは指定できます。

「標準」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストールについては、『標準インストール: IBM Business Process Manager Express』を参照してください。

## 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成

インストーラーの「カスタム・インストール」オプションを使用すると、ソフトウェアをインストールし、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルを構成することができます。

表 48. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
「カスタム・インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール	カスタム・インストール・オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストールについては、『カスタム・インストール: IBM BPM Express: Process Server』を参照してください。	カスタム・インストールでは、ご使用のシステムに Process Center、Process Designer、および Process Server の製品バイナリーをインストールします。  カスタム・インストールでは、インストール中にプロファイルを作成しません。
プロファイル管理ツールの起動	インストーラーからプロファイル管理ツールを起動しなかった場合は、ここで起動できます。『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。 <b>制約事項:</b> Linux on zSeries プラットフォームを除き、64 ビットのアーキテクチャーの BPM インストール済み環境では、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを作成できません。代わりに、次のステップに進んで <b>manageprofiles</b> コマンド行ユーティリティを使用します。	プロファイル管理ツールが開始され、いつでも使用できます。  Process Center プロファイルからのデータが Process Server プロファイル作成プロセスへの入力として使用されるため、Process Center スタンドアロン・プロファイルを最初に (Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する前に) 作成する必要があります。
1 つ以上の Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成	Process Center スタンドアロン・プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成</li><li>manageprofiles ユーティリティを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成</li></ul>	Process Center スタンドアロン・プロファイルが作成されます。このプロファイルは、スタンドアロン・サーバー環境を定義し、コマンド・ファイル、構成ファイル、およびログ・ファイルを含みます。  プロファイル作成プロセスは、(共通およびコンポーネント固有の) データベースを構成し、スタンドアロン・サーバー環境をサポートするために必要なデータベース表を生成します。  これで、Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成したり、Process Designer をインストールしたりできるようになります。
Process Designer のインストール	ソフトウェアのビジネス・プロセス設計機能の使用を開始する場合は、Process Designer をダウンロードおよびインストールします。『Process Designer のインストール』を参照してください。	Process Designer がインストールされます。  Process Designer の使用方法については、以下のトピックを参照してください。 <ul style="list-style-type: none"><li>IBM Process Designer の雇用サンプル・チュートリアル</li><li>Authoring environments</li><li>Process Center によるプロセス開発</li></ul>

表 48. 「カスタム・インストール」オプションを使用した IBM Business Process Manager Express のインストール、および 1 つ以上のスタンドアロン・プロファイルの構成 (続き)

タスク	情報の入手先	タスクの実行結果
1 つ以上の Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成	<p>ランタイム環境も含めてソフトウェアを完全に構成することが目的である場合は、Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。Process Server スタンドアロン・プロファイルをどのような方法で作成したいかに応じて、以下のトピックのいずれか 1 つを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>プロファイル管理ツールを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成</li> <li>manageprofiles ユーティリティーを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成</li> </ul>	スタンドアロン・サーバー環境が構成され、いつでも使用できます。

## 標準インストール: IBM Business Process Manager Express

「標準インストール」オプションを使用して、開発、品質保証、およびクラスター化されていないステージングおよび実動のための環境に IBM Business Process Manager Express をインストールします。このインストール・オプションでは、ほとんどの設定値がデフォルトで設定されますが、インストール・パスとデータベース・タイプはユーザーが指定できます。電子インストール・イメージ (DVD ではなく) から標準インストールを実行する必要があります。

標準インストールの使用シナリオを理解して、このオプションで作成されるインストール環境がニーズを満たすことを確認してください。システム上に IBM Business Process Manager の個人用コピーを保持するには、「標準的」オプションを選択する必要があります。このようにして、ローカルで統合サービスまたはビジネス・プロセスを開発したり、製品に組み込まれたエクスポート機能およびインポート機能を使用して成果物を提供したりできます。標準インストールは、PoC (概念検証) 作業と、製品のフィーチャーおよび機能の習得にも推奨されます。

**重要:** 標準インストールでは、製品のビット・アーキテクチャーがシステムのビット・アーキテクチャーと一致していなければなりません。32 ビット・システムの場合、32 ビット・バージョンの製品がインストールされます。64 ビット・システムの場合、64 ビット・バージョンの製品がインストールされます。64 ビット・システムに 32-bit ビット製品をインストールする場合は、「カスタム・インストール」オプションを使用する必要があります。

**ヒント:** 組み込みの DB2 Express データベースではなく既存のデータベース・サーバーを使用する場合は、この手順を開始する前に、DB2、Microsoft SQL Server、または Oracle の構成情報を準備します。このオプションを使用するには、データベースが既に作成されている必要があります。DB2 の場合は、少なくとも 32 K のページ・サイズでデータベースを作成する必要があります。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、**ipcs -l** コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

**Windows** Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 で IBM Business Process Manager Express をインストールまたは実行するには、Microsoft Windows のユーザー・アカウント特権を昇格させ

ることが必要です。管理ユーザーであるか非管理ユーザーであるかにかかわらず、`launchpad.exe` を右クリックし、「**管理者として実行 (Run as administrator)**」を選択します。

**重要:** 1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager Express の複数のインスタンスをインストールできます。

このタスクでは、ランチパッドから標準インストール・オプションを使用して IBM Business Process Manager Express をインストールする手順について説明します。

- 標準インストールでは、IBM Process Center または IBM Process Server 用の標準スタンドアロン・プロファイルが作成されます。
  - 標準インストールでは、既存のデータベースが指定されていない場合に、DB2 Express をインストールできます。DB2 Express が使用可能なのは、Windows および Linux の 32 ビット・システムと 64 ビット・システムのみです。ユーザーは管理者または root ユーザーであり、他の DB2 製品がインストールされていない必要があります。
  - 標準インストールでは、自動的にデータベースにデータを取り込みます。
  - **Windows** Windows オペレーティング・システムの場合、Process Center のインストールにより、IBM Process Designer が自動的にインストールされます。
  - 標準インストールでは、Process Center 管理コンソール、Playback Server 管理コンソール、Process Designer、および WebSphere 管理コンソールのショートカットが作成されます。
1. オプション: インターネットに接続している場合、標準インストールでは、推奨される暫定修正レベルに製品が自動的にアップグレードされます。これらのアップグレードをインターネットからではなくローカル・ディレクトリーからインストールする場合や、フィックス・レベルを指定する場合は、プロパティ・ファイルを使用して、アップグレードを検索する場所やインストール対象のアップグレードを、Installation Manager に対して指定することができます。

次のファイルを作成します。

- **Linux** `<user.home>/bpm_updates.properties`

**注:** `<user.home>` は、ユーザーのホーム・ディレクトリーを示します。

- **Windows** `C:/HOMEPATH%bpm_updates.properties`

Windows XP では、HOMEPATH 環境変数が `C:%Documents and Settings%user_name%` を示します。

Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 では、HOMEPATH 環境変数が `C:%Users%user_name%` を示します。

**注:** `bpm_updates.properties` ファイルに指定されているフォルダーに対する読み取り/書き込み権限があることを確認します。

このファイルは、`ifix` プレフィックスを使用します。プレフィックスの後には 1 つのドットが続いていなければなりません。接頭部とドットの後の名前部分には、任意の文字列を指定できます。これにより、`ifix` のアップグレードを行う複数の場所を指定することができます。ローケーションには、ローカル・ディレクトリーまたは URL のいずれかを指定できます。以下に例を示します。

```
ifix.1=C:%bpmUpdates
```

```
ifix.2=C:%WASUpdates
```

2. 以下のコマンドのいずれかを入力して、Launchpad を開始します。

**Linux** `extract_directory/launchpad.sh`

**Windows** (コマンド行から) `extract_directory#1launchpad.exe`

3. 「ようこそ」ページで「標準インストール」をクリックします。
4. 以下のインストール・オプションのいずれかを選択します。
  - **Process Center:** Process Center は、Process App のビルドに使用する共用開発環境です。Process Center には、Process Designer 開発ツールが含まれています。
  - **Process Server:** Process Server は、Process App のデプロイ先となる場所です。
5. 選択したインストール・オプションに関する情報を指定します。
  - **Process Center: Process Center** を選択した場合は、以下の情報を指定します。
    - ホスト名
    - インストールの場所
    - Process Designer のインストール場所
  - **Process Server: Process Server** を選択した場合は、以下の情報を指定します。
    - ホスト名
    - インストールの場所
    - 環境のタイプ
    - 環境の名前

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択していない場合は、このサーバーが接続する Process Center に関する以下の情報を指定します。

  - ホスト名
  - ポート
  - ユーザー名
  - パスワード

「このサーバーをオフラインで使用する」を選択した場合は、「ホスト名」、「ポート」、「ユーザー名」、および「パスワード」の各フィールドが使用不可になります。

**重要:** DB2 Express をインストールする場合、インストール・ロケーションに各国語のストリング (NLS) を含めることはできません。
6. 「次へ」をクリックします。
7. データベースを選択します。
  - 組み込みの DB2 Express データベースをインストールする場合は、そのデータベースがインストールされて、すべての構成が行われます。デフォルト値は以下のとおりです。
    - **Linux** インスタンス・ユーザー名およびパスワード: `bpminst` および `bpminst1`
    - **Linux** 隔離 (fenced) ユーザー名およびパスワード: `bpmfenc` および `bpmfenc1`
    - **Linux** 管理サーバー (DAS) ユーザー名およびパスワード: `bpmadmin` および `bpmadmin1`
    - **Windows** 管理ユーザー名およびパスワード: `bpmadmin` および `bpmadmin1`

**重要:** デフォルト・パスワードがご使用のオペレーティング・システム (Windows 2008 など) のパスワード・ポリシーに準拠していない場合は、システムのパスワード・ポリシーに適合するパスワードを指定できるように、「標準インストール」ではなく「カスタム・インストール」を使用する必要があります。

**制約事項:** ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。

- 既存のデータベースを使用する場合は、データベース固有のフィールドの説明を確認するには、「**セットアップ手順**」のリンクをクリックします。標準インストール時に既存のデータベースを構成する場合の必須フィールドの値に関する情報を参照してください。
- 8. 「次へ」をクリックします。
- 9. 「ライセンス (Licenses)」 ページで、インストール・オプションを検証し、ご使用条件を確認します。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件と注意事項を読んで同意しました (I have read and accepted the license agreement and notices)**」 をクリックし、「次へ」をクリックします。
- 10. 「ソフトウェアのインストール (**Install Software**)」 をクリックします。

#### 重要:

前提条件の検査中に以下の警告メッセージが表示された場合は、後述のプラットフォーム固有の手順を使用して、**ulimit** の数 値を増やしてください。

Current system has detected a lower level of ulimit than the recommended value of *recommended\_value*. Please increase the ulimit number to minimum value of *recommended\_value* and re-start the installation.

Shutdown your installer. If you are a root user open a command prompt and issue `ulimit -n recommended_value` and then restart the installer.  
If you are a non-root user, work with your system administrator to increase your ulimit `-n recommended_value` and then restart the installer.

必要な値は、WebSphere Application Server のバージョン、フィーチャー・パック、およびインストール中の構成に基づいて計算されます。

- a. 以下の手順で、オープン・ファイルの最大数を設定します。 Linux
  - 1) `/etc/security/limits.conf` を開きます。
  - 2) **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。

\* **hard nofile *recommended\_value***

\* **soft nofile *recommended\_value***

- 3) ファイルを保存して閉じます。
- 4) ログオフし、ログインし直します。
- b. コンピューターを再始動します。
- c. インストーラーを再始動します。

標準インストールでは、全機能を使用可能な Process Center または Process Server がインストールされます。Windows で Process Center をインストールすると、Process Designer もインストールされます。標準インストールでは、Process Center または Process Server のどちらかのプロファイルが作成され、オプションとして、正常に完了した後にファースト・ステップ・コンソールを起動できます。

ファースト・ステップ・コンソールを起動して、インストールの検証、サーバーの始動または停止、管理コンソールへのアクセス、Process Center コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、および製品資料へのアクセスを行います。

#### 関連タスク:

362 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Express は、Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Express をイン

ストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

『標準インストール時の既存データベースの構成』

標準インストール時に既存のデータベース・サーバーを構成するための正しいデータベース値を判別するには、このトピックの情報を参考にしてください。

106 ページの『カスタム・インストール: Express』

「標準」インストール・オプションで用意されていないインストール・オプションまたは構成オプションが必要な場合は、「カスタム」インストール・オプションを使用して IBM Business Process Manager Express をインストールします。

#### 標準インストール時の既存データベースの構成:

標準インストール時に既存のデータベース・サーバーを構成するための正しいデータベース値を判別するには、このトピックの情報を参考にしてください。

IBM Business Process Manager Express の標準インストール時に既存のデータベース・サーバーの使用を計画している場合は、データベースが既に存在すること、およびそのデータベースが空であることを確認する必要があります。DB2 の場合は、少なくとも 32 K のページ・サイズでデータベースを作成する必要があります。

標準インストール時に、既存のデータベース・サーバーに関する情報を指定する必要があります。ここでは、データベース認証用のユーザー名とパスワード、データベース・サーバーのホスト名とポート、および Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを指定する必要があります。

「データベース」ページで、そのデータベースに関する必要な情報を指定します。

- 表 49 に、DB2 用のデータベース構成フィールドを示します。
- 105 ページの表 50 に、Microsoft SQL Server 用のデータベース構成フィールドを示します。
- 105 ページの表 51 に、Oracle 用のデータベース構成フィールドを示します。

表 49. DB2 データベース の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
ユーザー名	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
パスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
Process Center のデータベース名または Process Server のデータベース名	Process Server データベースの名前を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse データベースの名前を入力してください。

表 50. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。
ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
Process Center のデータベース名または Process Server のデータベース名	Process Center または Process Server のデータベース名を入力してください。
Performance Data Warehouse のデータベース名	Performance Data Warehouse のデータベース名を入力してください。
Windows 認証情報を使用してデータベースに接続するように指定する場合は、「Windows 認証を適用」オプションを選択します。このオプションを選択すると、それ以降のフィールドが非アクティブになります。	
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> </ul>

表 51. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
ホスト名	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。例えば、IP アドレス。

表 51. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
Process Center のデータベース・システム ID	正しい Process Center データベース・システム ID を入力してください。
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p>

#### 関連概念:

366 ページの『Microsoft SQL Server データベースの構成』

Microsoft SQL Server と共に使用するスタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

#### 関連タスク:

100 ページの『標準インストール: IBM Business Process Manager Express』

「標準インストール」オプションを使用して、開発、品質保証、およびクラスター化されていないステージングおよび実動のための環境に IBM Business Process Manager Express をインストールします。このインストール・オプションでは、ほとんどの設定値がデフォルトで設定されますが、インストール・パスとデータベース・タイプはユーザーが指定できます。電子インストール・イメージ (DVD ではなく) から標準インストールを実行する必要があります。

362 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Express は、Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Express をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

### カスタム・インストール: Express

「標準」インストール・オプションで用意されていないインストール・オプションまたは構成オプションが必要な場合は、「カスタム」インストール・オプションを使用して IBM Business Process Manager Express をインストールします。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、`ipcs -l` コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

**Windows** IBM Business Process Manager Express を Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 にインストールして実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。管理ユーザーであるかどうかに関わらず、`launchpad.exe` を右クリックして「管理者として実行」を選択します。

**重要:** 1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager Express の複数のインスタンスをインストールできます。

1. 製品 DVD からインストールするか、またはパスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージからインストールするかに応じて、以下のいずれかの方法でメディアにアクセスします。
  - 製品 DVD からインストールする場合は、IBM Business Process Manager Express のラベルが付いた製品ディスクをディスク・ドライブに挿入します。必要に応じてディスク・ドライブをマウントします。ワークステーションで自動実行が使用可能な場合は、ランチパッド・プログラムが自動的に開き、ステップ 2 に進むことができます。ワークステーションで自動実行が使用可能でない場合は、次のコマンドのいずれかを入力して、ランチパッドを手動で開始します。

- **Linux** `mount_point/launchpad.sh`

- **Windows** (コマンド行から) `DVD_root¥launchpad.exe`

- パスポート・アドバンテージからダウンロードしたイメージを使用してインストールする場合は、以下のステップを実行します。
  - a. イメージを解凍するディレクトリーに移動します。
  - b. 以下のコマンドのいずれかを入力して、Launchpad を開始します。

- **Linux** `extract_directory/launchpad.sh`

- **Windows** (コマンド行から) `extract_directory¥launchpad.exe`

2. 「ようこそ」ページで「カスタム・インストール」をクリックします。

**重要:** 64 ビット・システムを使用している場合は、以下のメッセージが表示される場合があります。

ご使用のオペレーティング・システムは、ランチパッド前提条件の検査に失敗しました。IBM Installation Manager の実行のための次の 32 ビット GTK ライブラリーが、基本 OS で使用可能ではありません。*list of missing files*。32 ビット GTK ライブラリーをインストールし、そのインストール環境を再始動してください。

このメッセージが表示された場合、サーバーに 32 ビット・バージョンの GTK ライブラリーがインストールされていないか、そのライブラリーが正しいバージョンではありません。オペレーティング・システムの DVD または公式 Web サイトから入手する正しいバージョンの 32 ビット GTK ライブラリーでサーバーを更新してから、インストールを続行してください。

3. オプション: 「ヘルプ・システムのインストール」をクリックし、製品のヘルプ・システムと文書をコンピューターにインストールします。ヘルプ・システムは、文書を表示するための Eclipse フレームワークです。インストール後は、文書をスタンドアロン・モードで表示することも、サーバー・モードで表示することもできます。このオプションは、Windows XP 32 ビット版および Linux 32 ビット版のみサポートされます。
4. 「管理ユーザーとしてのインストール」をクリックして、管理ユーザーとしてインストールします。Windows で管理者グループに属する場合、あるいは Linux または UNIX システムで root ユーザーで

ある場合は、管理ユーザーとしてインストールできます。管理ユーザーでない場合、または管理特権のない独自のユーザー名でインストールする場合は、このチェック・ボックスをクリアします。

5. 「インストール」をクリックします。
6. Installation Manager の「パッケージのインストール」ページで、「**IBM Business Process Manager Express**」パッケージを選択します。
7. オプション: デフォルトでは、IBM DB2 Express パッケージをインストールするように選択されています。組み込みの DB2 Express データベースを使用し、システムにいずれのエディションの DB2 もまだインストールされていない場合は、そのパッケージを選択したままにしてください。
8. 「次へ」をクリックして先に進みます。

前提条件の検査時に以下のエラー・メッセージを受け取った場合、製品の非互換性の問題に対処し、「戻る」をクリックし、問題を修正して、「次へ」をクリックして続行します。

- DB2 Express をインストールするように選択した場合に、そのシステムに DB2 が既にインストールされていると、以下のエラー・メッセージを受け取ります。

DB2 は既にこのシステムにインストール済みです。既存の DB2 をアンインストールするか、DB2 Express をインストール対象から選択解除してください。

- IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 製品のいずれかを、他のいずれかの IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 または同等の以前のリリースの製品と同じ WebSphere Application Server のロケーションにインストールすることを選択すると、以下のエラー・メッセージを受け取ります。

IBM Business Process Manager V7.5.1 can not coexist with the following offerings:

Installation Manager は、参照用にすべての非互換製品をリストします。

前提条件の検査中に以下の警告メッセージが表示された場合は、後述のプラットフォーム固有の手順を使用して、**ulimit** の数 値を増やしてください。

Current system has detected a lower level of ulimit than the recommended value of *recommended\_value*. Please increase the ulimit number to minimum value of *recommended\_value* and re-start the installation.

Shutdown your installer. If you are a root user open a command prompt and issue `ulimit -n recommended_value` and then restart the installer.

If you are a non-root user, work with your system administrator to increase your ulimit `-n recommended_value` and then restart the installer.

必要な値は、WebSphere Application Server のバージョン、フィーチャー・パック、およびインストール中の構成に基づいて計算されます。

- a. 以下の手順で、オープン・ファイルの最大数を設定します。 Linux
  - 1) `/etc/security/limits.conf` を開きます。
  - 2) **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。
    - \* **hard nofile *recommended\_value***
    - \* **soft nofile *recommended\_value***
  - 3) ファイルを保存して閉じます。
  - 4) ログオフし、ログインし直します。
- b. コンピューターを再始動します。
- c. インストーラーを再始動します。

9. 「ライセンス」ページで、ご使用条件を読みます。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックし、「**次へ**」をクリックします。
10. 「ロケーション」ページでは、「**新規パッケージ・グループの作成**」オプションがデフォルトで選択されています。共用リソース・ディレクトリーのロケーションおよび **Installation Manager** のロケーションを選択し、「**次へ**」をクリックします。このパネルは、**Installation Manager** をまだインストールしていない場合にのみ表示されます。

このパネルでは、デフォルトのインストール・ロケーションを自分で選択するロケーションに変更できます。「パッケージのインストール」ウィザードは、ご使用のシステムがオペレーティング・システムの前提条件を満たしているかどうかを検査します。サポートされるオペレーティング・システムの高いメジャー・リリースが稼働している場合、またはオペレーティング・システム自体がサポート対象のリストにない場合は、警告が出されることがあります。インストールを続行することはできますが、保守を適用しないとインストール済み環境または製品が正常に稼働しなくなる可能性があります。

警告が出された場合は、製品サポート Web ページにアクセスして、最新保守パッケージを取得し、インストール終了後に適用してください。サポートされているバージョンへのマイグレーションについては、IBM 以外の前提条件および相互に必要な製品の資料を参照してください。

**重要:** DB2 Express をインストールする場合、インストール・ロケーションに各国語のストリング (NLS) を含めることはできません。

11. オプション: 組み込み DB2 Express データベースのインストールと使用を選択した場合は、「共通構成」ページで DB2 管理者の「**ユーザー名**」および「**パスワード**」を指定します。デフォルト値は以下のとおりです。

- **Linux** インスタンス・ユーザー名およびパスワード: bpinst および bpinst1
- **Linux** 隔離 (fenced) ユーザー名およびパスワード: bpmfenc および bpmfenc1
- **Linux** 管理サーバー (DAS) ユーザー名およびパスワード: bpmadmin および bpmadmin1
- **Windows** 管理ユーザー名およびパスワード: bpmadmin および bpmadmin1

**重要:** 使用しているオペレーティング・システム (Windows 2008 など) のパスワード・ポリシーにデフォルトのパスワードが準拠していない場合、標準インストールではなくカスタム・インストールを実行すると、システムのパスワード・ポリシーに準拠するパスワードを指定することができます。

**制約事項:** ユーザー名に各国語のストリング (NLS) が含まれてはなりません。

12. 「要約」ページで **IBM Business Process Manager Express** パッケージのインストール前に選択内容を確認します。これまでのページで行った選択を変更するには、「**戻る**」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「**インストール**」をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識で、インストールの完了率が示されます。
13. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
  - a. オプション: 「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。続行するには、「インストール・ログ」ウィンドウを閉じる必要があります。
  - b. 終了時にプロファイル管理ツールを起動する場合は「**プロファイル管理ツール**」を選択し、そうでない場合は「**なし**」を選択してインストールを完了します。
  - c. 「**完了**」をクリックして、**Installation Manager** を終了します。

ファースト・ステップ・コンソールを起動して、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始または停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、製品資料へのアクセスを行います。

#### 関連タスク:

100 ページの『標準インストール: IBM Business Process Manager Express』

「標準インストール」オプションを使用して、開発、品質保証、およびクラスター化されていないステージングおよび実動のための環境に IBM Business Process Manager Express をインストールします。このインストール・オプションでは、ほとんどの設定値がデフォルトで設定されますが、インストール・パスとデータベース・タイプはユーザーが指定できます。電子インストール・イメージ (DVD ではなく) から標準インストールを実行する必要があります。

## IBM Business Process Manager Express のサイレント・インストール

IBM Business Process Manager Express 製品パッケージをサイレント・インストール・モードでインストールできます。サイレント・モードでインストールするときは、ユーザー・インターフェースは使用できません。

**重要:** 1 つの IBM Installation Manager だけで、IBM Business Process Manager Express の複数のインスタンスをインストールできます。

#### コマンド行を使用した IBM Business Process Manager Express のサイレント・インストール:

コマンド行を使用して、IBM Business Process Manager Express をインストールできます。(DVD ではなく) 電子インストール・イメージからサイレント・インストールを実行する必要があります。

IBM Business Process Manager Express をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。さらに、すべての前提ソフトウェアの必要レベルも記載されています。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、**ipcs -l** コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

前提条件の検査中に以下の警告メッセージが表示された場合は、後述のプラットフォーム固有の手順を使用して、**ulimit** の数値を増やしてください。

```
Current system has detected a lower level of ulimit than the recommended value of recommended_value.  
Please increase the ulimit number to minimum value of recommended_value and re-start the installation.
```

```
Shutdown your installer. If you are a root user open a command prompt and issue ulimit
```

```
-n recommended_value and then restart the installer.
```

```
If you are a non-root user, work with your system administrator to increase your ulimit
```

```
-n recommended_value and then restart the installer.
```

必要な値は、WebSphere Application Server のバージョン、フィーチャー・パック、およびインストール中の構成に基づいて計算されます。

1. 以下の手順で、オープン・ファイルの最大数を設定します。

Linux

- a. `/etc/security/limits.conf` を開きます。
- b. **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。

\* **hard nofile recommended\_value**

\* **soft nofile recommended\_value**

- c. ファイルを保存して閉じます。
  - d. ログオフし、ログインし直します。
2. コンピューターを再起動します。
  3. インストーラーを再起動します。

IBM Business Process Manager Express のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment
- Feature Pack for XML

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Express をインストールします。

IBM Business Process Manager Express をサイレント・インストールするには、以下のステップを実行します。

1. インストール前にライセンス条項を読んで同意します。**-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
2. 次のコマンドを実行します。

**重要:** Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「管理者として実行」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

Windows

```
extract_directory%imcl install list_of_product_IDs -acceptLicense  
-installationDirectory location  
-repositories repository  
-properties key=value,key=value  
-showVerboseProgress -log logName.log
```

Linux

```
extract_directory/imcl install list_of_product_IDs -acceptLicense -installationDirectory location  
-repositories repository -properties key=value,key=value -showVerboseProgress -log  
logName.log
```

ここで、

- *list\_of\_product\_IDs* は、インストールする製品と機能の ID のリストです。構文は *productID.feature.feature* で、複数の製品はスペースで区切ります。

表 52. 製品 ID

製品	製品 ID
IBM BPM Express	com.ibm.ws.WBPMEXP
WebSphere Application Server Network Deployment	com.ibm.websphere.ND.v70.core.feature, samples,import.productProviders.feature, import.configLauncher.feature, consoleLanguagesSupport.feature, runtimeLanguagesSupport.feature (すべての必須フィーチャーを含む)
Feature Pack for XML	com.ibm.websphere.XML.v10
Installation Manager	com.ibm.cic.agent,agent_core,agent_jre
DB2 for Linux (32 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.linuxia32
DB2 for Linux (64 ビット版)	com.ibm. ws.DB2EXP97. linuxia64
DB2 for Windows (32 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.winia32
DB2 for Windows (64 ビット版)	com.ibm.ws.DB2EXP97.winia64

- *location* は、製品がインストールされるディレクトリーへのパスです。
- *repository* は、ファイルが抽出されたリポジトリーへのパスで、以下のいずれかのディレクトリーです。

*extract\_directory/repository/repos\_32bit*  
*extract\_directory/repository/repos\_64bit*

複数のリポジトリーを指定する場合は、リポジトリーの場所をコンマで区切ってください。

- *key=value* は、インストール環境に渡すキーと値のコンマで区切られたリストです。コンマとコンマの間にスペースを入れないでください。

表 53. キー

キー	説明
user.select.64bit.image	64 ビット・オペレーティング・システムにインストールする場合、以下の行を正確に追加します。  user.select.64bit.image,,com.ibm.websphere.ND.v70=true  デフォルト値は false です。
user.db2.admin.username	Windows のみ。DB2 データベースにアクセスする権限を持つユーザー名。デフォルト値は bpmadmin です。
user.db2.admin.password	Windows のみ。上記のユーザー名のパスワード。デフォルト値は bpmadmin1 です。
user.db2.port	DB2 データベースのポート。デフォルト値は 50000 です。
user.db2.instance.username	Linux および UNIX のみ。DB2 インスタンスのユーザー名。デフォルト値は bpminst です。
user.db2.instance.password	Linux および UNIX のみ。上記のユーザー名のパスワード。デフォルト値は bpminst1 です。

表 53. キー (続き)

キー	説明
user.db2.fenced.username	Linux および UNIX のみ。fenced ユーザー名。デフォルト値は bpmfenc です。
user.db2.fenced.password	Linux および UNIX のみ。上記のユーザー名のパスワード。デフォルト値は bpmfenc1 です。
user.db2.das.username	Linux および UNIX のみ。管理サーバー (DAS) ユーザー名。デフォルト値は bpmadmin です。
user.db2.das.password	Linux および UNIX のみ。上記のユーザー名のパスワード。デフォルト値は bpmadmin1 です。

- *logName* は、メッセージおよび結果が記録されるログ・ファイルの名前です。

このコマンドを実行すると、デフォルト・フィーチャーの製品がインストールされます。特定のフィーチャーをインストールする場合、またはその他の変更を行う場合は、`imcl` のコマンド行引数に関する参照リンクを参照してください。

Installation Manager により、リストされた製品がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き込まれます。

次の例では、テスト環境を組み込んだ IBM Business Process Manager Express、WebSphere Application Server Network Deployment、Feature Pack for XML、および DB2 for Windows 32 ビットを Windows にインストールします。

```
imcl install com.ibm.ws.WBPMEXP com.ibm.websphere.ND.v70,core.feature,samples,
import.productProviders.feature,
import.configLauncher.feature,consoleLanguagesSupport.feature,
runtimeLanguagesSupport.feature com.ibm.websphere.XML.v10 com.ibm.ws.DB2EXP97.winia32
-acceptLicense -installationDirectory C:\IBM\BPM75 -repositories
D:\temp\BPM\repository\repos_32bit -properties user.db2.admin.username=bpmadmin,
user.db2.admin.password=bpmadmin1
-showVerboseProgress -log silentinstall.log
```

#### 関連資料:



[imcl のコマンド行引数](#)



[IBM Business Process Manager Express のシステム要件](#)

#### 応答ファイルを使用した IBM Business Process Manager Express のサイレント・インストール:

応答ファイルを作成し、その応答ファイルを使用して製品をインストールするコマンドを実行すれば、IBM Business Process Manager Express をインストールできます。サイレント・インストールは、電子インストール・イメージから行う必要があります (DVD ではなく)。

IBM Business Process Manager Express をインストールする前に、製品のシステム要件を確認してください。

オペレーティング・システムおよびソフトウェアの前提条件レベルが特に重要です。インストール・プロセスでは前提条件オペレーティング・システム・パッチが自動的に検査されますが、まだ確認していない場合はシステム要件を確認してください。システム要件リンクには、すべてのサポートされているオペレーティング・システムと、対応したオペレーティング・システムにするためにインストールしなければならないオペレーティング・システムのフィックスおよびパッチがリストされています。さらに、すべての前提ソフトウェアの必要レベルも記載されています。

Red Hat Enterprise Linux 6 環境で DB2 Express を使用して IBM Business Process Manager をインストールする場合は、管理権限 (root ユーザー) が必要であり、システム上に既存の DB2 データベース・サーバーがあってはならず、DB2 Express のインストールを開始する前にすべてのカーネル要件が満たされている必要があります。現行値は、**ipcs -l** コマンドの出力を解析することによって見つけることができます。

前提条件の検査中に以下の警告メッセージが表示された場合は、後述のプラットフォーム固有の手順を使用して、**ulimit** の数 値を増やしてください。

```
Current system has detected a lower level of ulimit than the recommended value of recommended_value.  
Please increase the ulimit number to minimum value of recommended_value and re-start the installation.
```

```
Shutdown your installer. If you are a root user open a command prompt and issue ulimit  
-n recommended_value and then restart the installer.  
If you are a non-root user, work with your system administrator to increase your ulimit  
-n recommended_value and then restart the installer.
```

必要な値は、WebSphere Application Server のバージョン、フィーチャー・パック、およびインストール中の構成に基づいて計算されます。

1. 以下の手順で、オープン・ファイルの最大数を設定します。 Linux
  - a. `/etc/security/limits.conf` を開きます。
  - b. **nofile** パラメーターを見つけて、値を増やします。**nofile** パラメーターが含まれている行が存在しない場合は、以下の行をファイルに追加します。  
  
\* **hard nofile recommended\_value**  
  
\* **soft nofile recommended\_value**
  - c. ファイルを保存して閉じます。
  - d. ログオフし、ログインし直します。
2. コンピューターを再始動します。
3. インストーラーを再始動します。

IBM Business Process Manager Express のインストールに必要な前提条件の基本製品がない場合、サイレント・インストールの一部としてそれをインストールする必要があります。必要な基本製品は以下のとおりです。

- Installation Manager
- WebSphere Application Server Network Deployment
- Feature Pack for XML

サイレント・インストールでは、以下のタスクが実行されます。

- Installation Manager がまだインストールされていない場合はインストールし、既にインストールされている場合は適切なレベルに更新します。
- 必要な基本製品および IBM Business Process Manager Express をインストールします。

IBM Business Process Manager Express をサイレント・インストールするには、以下のステップを実行します。

1. 必要な基本製品と IBM Business Process Manager Express をインストールする応答ファイルを作成します。以下のディレクトリーからサンプル応答ファイルをコピーし、独自の応答ファイルを作成します。  
`extract_directory/responsefiles/BPM/template_response.xml`

2. 応答ファイル・テンプレートのテキストの指示に従ってパラメーターを変更し、独自の応答ファイルを作成します。

以下の変更を行います。

- リポジトリのロケーションを設定します。32 ビットまたは 64 ビットのいずれか適切な方のリポジトリを選択し、使用しない方のリポジトリはコメント化してください。 `extract_directory/responsefiles/BPM/` ディレクトリーから直接実行しない場合は、使用するインストール・リポジトリの場所を指定します。リポジトリは、ローカルでもリモートでも構いません。DVD から実行する場合は、DVD から応答ファイルをコピーし、DVD 上のリポジトリでこの応答ファイルを再び指定します。
  - 応答ファイルの置換変数を次のように設定します。
    - `{INSTALL_LOCATION_IM}` - IBM Installation Manager が既にインストールされているか、またはこれからインストールされるロケーション。
    - `{LOCATION_ECLIPSE_CACHE}` - Eclipse キャッシュのロケーション。このロケーションを設定する必要があるのは、このロケーションがまだ定義されていない場合のみです。このロケーションが既に設定済みの場合は、この行をコメント化してください。
    - `{INSTALL_LOCATION}` - 製品のインストール先のロケーション。
    - `{FEATURE_LIST}` - 製品のフィーチャーのリスト。このリストは、インストールするフィーチャーのリストと置き換える必要があります。 `template_response.xml` ファイルに記載されている説明に従ってください。
  - DB2 Express をインストールする場合は、`template_response.xml` ファイルの説明に従って、必要なユーザー ID とパスワードを指定します。
3. インストール前にライセンス条項を読んで同意します。**-acceptLicense** をコマンド行に追加すると、すべてのライセンスに同意したことになります。
  4. 次のコマンドを実行します。

**重要:** Windows 7、Windows Vista、または Windows Server 2008 を実行している場合、右クリックして「管理者として実行」を選択してコマンド・プロンプトを開始します。

管理者または root ユーザー: Windows

```
extract_directory%IM%installc.exe -acceptLicense input
extract_directory%responsefiles%productID
%template_response.xml -log preferred_log_location%silent_install.log
```

Linux

```
extract_directory/IM/installc -acceptLicense input
extract_directory/responsefiles/productID/template_response.xml -log
preferred_log_location/silent_install.log
```

管理者/root ユーザー以外の場合: Windows

```
extract_directory%IM%userinstc.exe -acceptLicense input
extract_directory%responsefiles%productID
%template_response.xml -log
preferred_log_location%silent_install.log
```

Linux

```
extract_directory/IM/userinstc -acceptLicense input
extract_directory/responsefiles/productID/template_response.xml -log preferred_log_location/silent_install.log
```

Installation Manager により、必要なすべての前提条件および IBM Business Process Manager Express がインストールされ、指定したディレクトリーにログ・ファイルが書き出されます。

#### 関連資料:

 IBM Business Process Manager Express のシステム要件

#### 関連情報:

 Installation Manager でのサイレント・インストール

 Installation Manager を使用した応答ファイルの記録

## 構成のアップグレード

IBM Installation Manager を使用して、同じパッケージ・グループ内のインストール済み構成上に新規構成をインストールすることで、IBM Business Process Manager の構成をアップグレードします。

アップグレードする構成が、Installation Manager を使用してインストールされている必要があります。アップグレードを実行する前に、サーバーまたは Network Deployment 環境をシャットダウンしてください。

サポート対象の製品アップグレード・パスは以下のとおりです。

- IBM Business Process Manager Express から IBM Business Process Manager Standard
- IBM Business Process Manager Express から IBM Business Process Manager Advanced
- IBM Business Process Manager Standard から IBM Business Process Manager Advanced

IBM Business Process Manager Advanced - Process Server 構成への、またはその構成からのアップグレード・パスはありません。

注: 構成のアップグレードを実行するとき、既存の IBM Business Process Manager プロファイルはどれも変更されずに残ります。

サポートされているアップグレード・パスとして、以前のバージョンから V7.5.1 にアップグレードすることができます。例えば、IBM Business Process Manager Express バージョン 7.5.0.1 を、IBM Business Process Manager Standard V7.5.1 または IBM Business Process Manager Advanced V7.5.1 にアップグレードすることができます。バージョンをアップグレードする前に、エディションをアップグレードする必要はありません。

#### 注意:

ある構成の V7.5.1 から、アップグレードされた構成の以前のバージョンにアップグレードすることは推奨されません。例えば、IBM Business Process Manager Express V7.5.1 を使用していて、IBM Business Process Manager Standard にアップグレードする場合は、IBM Business Process Manager Standard の以前のバージョンではなく V7.5.1 にアップグレードする必要があります。以前のバージョンへのアップグレードではプロファイルに問題が生じる可能性があり、暫定修正が存在する場合は、それらの暫定修正を先に削除しないとエラーが発生します。

1. Installation Manager を始動します。
2. 「ファイル」 > 「設定」 > 「リポジトリー」をクリックし、新規構成パッケージが含まれているリポジトリーを参照します。「リポジトリーの追加」をクリックします。
3. Installation Manager の「ようこそ」ページで、「インストール」をクリックします。
4. 「パッケージのインストール」ページで、インストールする構成を選択します。
5. 「次へ」をクリックして先に進みます。

6. 「ライセンス」ページで、ご使用条件を読みます。ご使用条件の条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックし、「**次へ**」をクリックします。
7. 「インストールの場所」ページで、アップグレードする構成が含まれているパッケージ・グループを選択します。
8. パッケージをインストールする前に、「要約」ページで選択内容を確認します。これまでのページで行った選択を変更するには、「**戻る**」をクリックして変更します。インストールの選択項目が希望どおりになったら、「**インストール**」をクリックしてパッケージをインストールします。進行標識にインストールの完了した割合が表示されます。
9. インストール・プロセスが完了すると、プロセス正常終了の確認メッセージが表示されます。
  - a. オプション: 「**ログ・ファイルの表示**」をクリックして、現行セッションのインストール・ログ・ファイルを新しいウィンドウに表示します。「インストール・ログ」ウィンドウを閉じて続行します。
  - b. 終了時にプロファイル管理ツールを起動する場合は「**プロファイル管理ツール**」を選択し、そうでない場合は「**なし**」を選択してインストールを完了します。
  - c. 「**完了**」をクリックして、Installation Manager を終了します。

---

## IBM Business Process Manager Express の構成

IBM Business Process Manager を構成して、スタンドアロン環境を構築することができます。

構成 (Advanced、Standard、または Express) は、さまざまなレベルのビジネス・プロセス・マネジメント機能を提供します。例えば、Business Process Choreographer 機能は、IBM Business Process Manager Advanced でのみ使用可能です。IBM Business Process Manager Express 構成の詳細な説明については、「IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 構成の機能」を参照してください。

構成フェーズは、製品構成タスクおよび環境構成タスクという 2 種類のタスクで構成されています。製品構成タスクは、製品プロファイルのセットアップとデータベースの構成を目的としています。環境構成タスクは、デプロイメント環境のセットアップおよび生成を目的としています。

118 ページの図 8 に、製品および環境の計画、インストール、および構成に関するタスク・フローを示します。

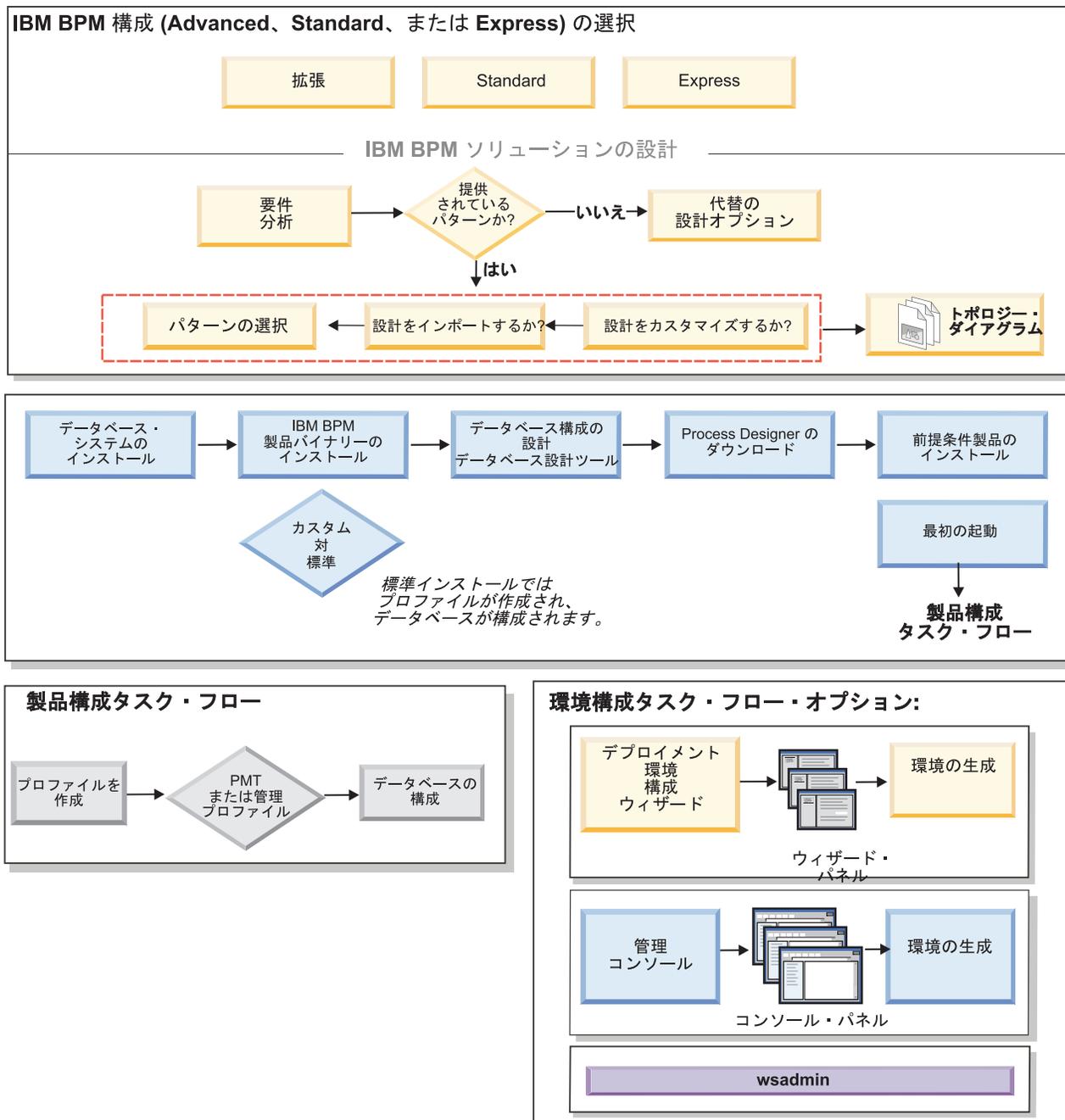


図 8. 製品および環境の計画、インストール、および構成に関するタスク・フロー

製品データベースの作成は、製品インストールの前、製品インストールの後 (ただしプロファイル作成の前)、またはプロファイルの作成後に行うことができます。

## プロファイルの作成および拡張

製品のインストール後に、1 つ以上のプロファイルを作成して、ランタイム環境を定義する必要があります。

## プロファイルに関する前提条件および考慮事項

IBM Business Process Manager のプロファイルを作成または拡張する前に、前提条件とその他の考慮事項を検討してください。

### プロファイルの作成または拡張に関する前提条件:

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

- IBM Business Process Manager が既にインストールされている必要があります。存在しない場合は、『IBM Business Process Manager のインストールおよび構成』でインストール手順を参照してください。
- 製品をインストールしたユーザー ID でない場合は、IBM Business Process Manager インストール内の選択されたディレクトリーへの書き込み権限を持つ必要があります。それらの権限を取得する方法については、120 ページの『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。プロファイルは、*install\_root/profiles* 以外のディレクトリーに作成する必要があります。

- **Windows** プロファイル管理ツールを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 にインストールして実行するには、使用している Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。ご自身が管理ユーザーであるかまたは非管理ユーザーであるかに関係なく、*pmt.bat* ファイルを右クリックし、「**管理者として実行**」を選択します。代替の方法として、コマンド行で **runas** コマンドを使用します。例えば、*install\_root\bin\ProfileManagement* ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /user:MyAdminName /env pmt.bat
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- **Windows** **manageprofiles** コマンドを Windows 7、Windows Vista あるいは Windows Server 2008 にインストールして実行するには、**runas** コマンドを使用して Microsoft Windows ユーザー・アカウントの特権を上げる必要があります。必ず **manageprofiles** コマンドとすべてのパラメーターを二重引用符で囲んでください。例えば、*install\_root\bin* ディレクトリーから以下のコマンドを実行できます。

```
runas /env /user:MyAdminName "manageprofiles -create -templatePath  
install_root/profileTemplates/BPM/default.procctr"
```

非管理ユーザーに、管理者パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

- 作成または拡張するプロファイルのタイプを知っている必要があります。プロファイルについては詳しくは、『プロファイル』を参照してください。
- 適切な手順に従って、プロファイルを作成または拡張する必要があります。
  - IBM Business Process Manager スタンドアロン構成のプロファイルを作成する場合は、『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』を参照してください。

このトピックには、プロセス・センターのプロファイルおよびプロセス・サーバーのプロファイルの作成に関する情報が含まれています。

- 既存の プロファイル を IBM Business Process Manager プロファイルに拡張する場合は、以下のトピックの 1 つを参照してください。

**重要:** 拡張する予定のプロファイルでは、既に統合されている管理対象ノードを定義できません。

- スタンドアロン・サーバー・プロファイルを拡張するには、『Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』または『Process Center スタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張』を参照してください。
- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の IBM Business Process Manager インストール済み環境でプロファイルを作成または拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。その他の 64 ビット・アーキテクチャー上でプロファイルを作成または拡張するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用できます。

注: 32 ビットの IBM Business Process Manager インストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でプロファイル管理ツールを使用できます。

- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンする必要があります。
- プロファイル、ノード、ホスト、サーバー (該当する場合) またはセル (該当する場合) の名前を設定するときに考慮しなければならない予約語や問題点について、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』の情報を確認する必要があります。
- 新しいプロファイルの作成または拡張に必要な十分なディスク・スペースと一時スペースが必要です。スペース所要量については、詳細なシステム要件の Web ページを参照し、ご使用のバージョンの IBM Business Process Manager へのリンクを選択してください。
  - Advanced 構成の場合: <http://www.ibm.com/software/integration/business-process-manager/advanced/sysreqs/>
  - Standard 構成の場合: <http://www.ibm.com/software/integration/business-process-manager/standard/sysreqs/>
  - Express 構成の場合: <http://www.ibm.com/software/integration/business-process-manager/express/sysreqs/>

#### 関連概念:

123 ページの『プロファイルの作成または拡張に関するデータベースの前提条件』  
プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連のデータベースの前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

#### 関連タスク:

201 ページの『manageprofiles を使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』  
**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Express 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

152 ページの『manageprofiles を使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』  
IBM Business Process Manager Express 用の Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

#### プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与:

製品インストール・ユーザー (root または管理者の場合と非 root ユーザーの場合がある) は、該当する IBM Business Process Manager のファイルとディレクトリーへの書き込み権限を非 root ユーザーに付与することができます。この権限付与を行うと、非 root ユーザーがプロファイルを作成できるようになります。製品インストール・ユーザーは、プロファイル作成の権限を持つユーザーのグループを作成することもでき、また個々のユーザーにプロファイル作成の権限を付与することもできます。

以下の作業の例では、プロファイルの作成権限があるグループの作成方法を示しています。

ここの説明全体にわたり、「インストール・ユーザー」と「製品インストール・ユーザー」という用語は、IBM Business Process Manager をインストールしたユーザー ID のことを指しています。

**制約事項:** IBM Business Process Manager では、製品インストール・ユーザーから非 root ユーザーへの既存のプロファイルの所有権の変更はサポートされていません。このため、非 root ユーザーによる、別のユーザーによって所有されているプロファイルの拡張はサポートされません。

非 root ユーザーは、自分の環境を管理できるように、独自のプロファイルを作成します。通常、これらのユーザーは開発の目的で環境を管理します。

非 root ユーザーは、製品の *install\_root/profiles* ディレクトリーではなく、自身の専用ディレクトリー構造にプロファイルを格納する必要があります。

**制約事項:** プロファイルを作成する非 root ユーザーには、操作性の制限があります。固有の名前とポート値を提示してくれるプロファイル管理ツール内の仕組みは、非 root ユーザーには使用不可になります。さらに非 root ユーザーは、プロファイル管理ツールのフィールドのうち、プロファイル名、ノード名、セル名、ポート割り当ての各フィールドのデフォルト値を変更することも必要になります。製品インストール・ユーザーは、各フィールドの値の範囲を非 root ユーザーに割り当てることができ、また非 root ユーザーが各自の割り当てられた値の範囲を遵守し、また自分の定義の整合性を維持するための責任を非 root ユーザーに割り当てることができます。

少なくとも 1 つのプロファイルを既に作成してある場合は、該当するディレクトリーおよびファイルが作成されています。その場合は、このトピック内のステップのうち、それらのディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップをスキップしてください。以前にプロファイルを作成したことがない場合は、必要なディレクトリーおよびファイルを作成するためのステップを完了する必要があります。ほとんどの場合、プロファイルは以前に作成済みです。

### 製品インストール・ユーザーが適切な権限を付与するために実行する必要がある手順

インストール・ユーザーは、以下のステップを実行して、profilers グループを作成し、このグループにプロファイル作成のための適切な権限を付与することができます。

1. 製品インストール・ユーザーとして、IBM Business Process Manager システムにログオンします (製品インストール・ユーザーは、root または管理者の場合と非 root ユーザーの場合があります。)
2. オペレーティング・システム・コマンドを使用して、以下のステップを実行します。
  - プロファイルの作成を実行できるユーザーをすべて組み込むグループ (名前は profilers) を作成します。
  - プロファイルの作成を実行できるユーザー (名前は user1) を作成します。
  - ユーザー product\_installer と user1 を profilers グループに追加します。
3. **Linux** ログオフし、インストール・ユーザーとして再びログオンして、新しいグループを有効にします。
4. プロファイルが存在しない場合は、以下のディレクトリーをインストール・ユーザーとして作成します。
  - **Linux** 次のように入力して、*install\_root/logs/manageprofiles* ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/logs/manageprofiles
```
  - **Windows** Windows の資料の説明に従って、*install\_root¥logs¥manageprofiles* ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root¥logs¥manageprofiles
```
  - **Linux** 次のように入力して *install\_root/properties/fsdb* ディレクトリーを作成します。

```
mkdir install_root/properties/fsdb
```

**Windows** Windows の資料の説明に従って、*install\_root*¥*properties*¥*fsdb* ディレクトリーを作成します。この手順例の場合、ディレクトリーは次のとおりです。

```
install_root¥properties¥fsdb
```

5. プロファイルが存在しない場合は、インストール・ユーザーとして、ご使用のオペレーティング・システムの方法に従って *profileRegistry.xml* ファイルを作成します。この例の場合、ファイル・パスは次のとおりです。

**Linux**

```
install_root/properties/profileRegistry.xml
```

**Windows**

```
install_root¥properties¥profileRegistry.xml
```

ご使用のオペレーティング・システムの説明に従って、次の情報を *profileRegistry.xml* ファイルに追加します。ファイルは、UTF-8 でエンコードする必要があります。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<profiles/>
```

6. 製品インストール・ユーザーとして、オペレーティング・システムのツールを使用して、ディレクトリーとファイルのアクセス許可を変更します。

**Linux**

次の例では、変数 **\$WASHOME** が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの *profiles* と想定しています。

```
export WASHOME=/opt/IBM/WebSphere/
echo $WASHOME
echo "Performing chgrp/chmod per WAS directions..."
chgrp profilers $WASHOME/logs/manageprofiles
chmod g+wr $WASHOME/logs/manageprofiles
chgrp profilers $WASHOME/properties
chmod g+wr $WASHOME/properties
chgrp profilers $WASHOME/properties/fsdb
chmod g+wr $WASHOME/properties/fsdb
chgrp profilers $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chmod g+wr $WASHOME/properties/profileRegistry.xml
chgrp -R profilers $WASHOME/profileTemplates
```

**Linux**

以下のコマンドを別途発行します。

```
chgrp profilers $WASHOME/properties/Profiles.menu
chmod g+wr $WASHOME/properties/Profiles.menu
```

**Windows**

次の例では、変数 **\$WASHOME** が IBM Business Process Manager のルート・インストール・ディレクトリーの *profiles* と想定しています。Windows の資料の説明に従って、*profilers* グループに以下のディレクトリーとそれらのファイルに対する読み取り権限および書き込み権限を付与します。

```
@WASHOME¥logs¥manageprofiles
@WASHOME¥properties
@WASHOME¥properties¥fsdb
@WASHOME¥properties¥profileRegistry.xml
```

非 root ユーザーに許可エラーが発生した場合は、追加ファイルの許可を変更することが必要になる場合があります。例えば、製品インストール・ユーザーが非 root ユーザーにプロファイルの削除の権限を与える場合、製品インストール・ユーザーは以下のファイルを削除することが必要になる場合があります。

**Linux** `install_root/properties/profileRegistry.xml_LOCK`

**Windows** `install_root\properties\profileRegistry.xml_LOCK`

このファイルを削除する権限を非 root ユーザーに付与するには、そのユーザーにこのファイルへの書き込み権限を付与します。それでも非 root ユーザーがこのプロファイルを削除できない場合は、製品インストール・ユーザーがこのプロファイルを削除することができます。

## 結果

インストール・ユーザーが **profilers** グループを作成し、特定のディレクトリーとファイルに対する適切な、プロファイル作成のための権限をこのグループに付与しました。非 root ユーザーがプロファイルの作成のために書き込む必要がある、IBM Business Process Manager のインストール・ルートに存在するディレクトリーとファイルはこれだけです。

## 次の作業

**profilers** グループに属している非 root ユーザーは、この非 root ユーザーが所有していて、書き込み権限を持っているディレクトリーにプロファイルを作成することができます。ただし、非 root ユーザーは、製品のインストール・ルート・ディレクトリーにプロファイルを作成することはできません。

1 つの非 root ユーザー ID で、複数のプロファイルを管理することができます。サーバーとノード・エージェントが含まれているデプロイメント・マネージャー・プロファイルであっても、カスタム・プロファイルであっても、1 つのプロファイル全体を同じ非 root ユーザー ID で管理することができます。グローバル・セキュリティーまたは管理セキュリティーが使用可能か使用不可かに関係なく、セル内のプロファイルごとに異なるユーザー ID を使用することができます。ユーザー ID には、root ユーザー ID と非 root ユーザー ID を混用することができます。例えば、root ユーザーでデプロイメント・マネージャー・プロファイルを管理する一方で、非 root ユーザーでサーバーとノード・エージェントが含まれたプロファイルを管理することができ、またこの逆も可能です。ただし、通常は単一の root ユーザーまたは非 root ユーザーがセル内のすべてのプロファイルを管理することができます。

非 root ユーザーは、root ユーザーと同じタスクを使用してプロファイルを管理できます。

## プロファイルの作成または拡張に関するデータベースの前提条件:

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連のデータベースの前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

製品データベースに関連する前提条件を以下に示します。

- **Linux** DB2 Universal Database™ を使用する場合:

**db2profile** スクリプトを実行して、プロファイル作成中に使用される DB2 コマンドの起動に使用される、必要な DB2 環境を設定する必要があります。**db2profile** スクリプトを `/etc/profile` ディレクトリーに追加します。

vi /etc/profile を実行し、以下の行を追加します。

```
export PATH=/opt/IBM/db2/V9.7/bin:$PATH
. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

db2profile スクリプトを /etc/profile ディレクトリーに追加した後に、**db2profile** スクリプトを実行して DB2 環境を設定する必要があります。

DB2 管理グループに、プロファイル作成時に使用されるユーザー ID を追加する必要があります。例えば、root ユーザーでログインし、db2inst1 をユーザー ID として使用してデータベースを作成する場合、root を /etc/group 管理グループに追加します

vi /etc/group を実行し、以下の行を更新します。

```
dasadm:|:101:dasusr1,db2inst1,root
db2iadm:|:102:root
db2fadm:|:103:db2fenc1,root
```

プロファイル作成の典型的な例外:

**db2profile** スクリプトが実行されていない場合:

```
/opt/HJJ/wps4013/util/dbUtils/profileHelpers/commonDBUtility.ant:841:
  Execute failed:
java.io.IOException: Cannot run program "db2" (in directory "/opt/HJJ/
wps4013/profiles/Dmgr01/dbscripts/CommonDB/DB2/WPSDB1")
```

DB2 データベース・マネージャーが実行中でない場合:

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

IBM Business Process Manager をインストールし、プロファイルを作成使用しているユーザーが DB2 管理グループに追加されない場合:

```
SQL1092N "ROOT" does not have the authority to perform the requested command.
```

```
When DB2 database manager is down or not running...
```

```
SQL1032N No start database manager command was issued. SQLSTATE=57019
```

#### 関連概念:

119 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

#### プロファイル管理ツールの開始:

プロファイル管理ツールを開始する前に、制約事項に注意し、特定の前提条件が満たされていることを確認してください。プロファイル管理ツールは、実行するときのプラットフォームに応じて、いくつかの方法で開始できます。

#### 制約事項:

- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の IBM Business Process Manager インストール済み環境でプロファイルを作成または拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。他の 64 ビット・アーキテクチャーでプロファイルを作成するときは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用できます。**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーの使用について詳しくは、『150 ページの『manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの作成』』を参照してください。プロファイル管理ツールは、これらのアーキテクチャー上の IBM Business Process Manager 32 ビットのインストール済み環境でも使用できます。

- **Vista** **Windows 7** 複数インスタンスを持つ非管理ユーザーの制約事項: IBM Business Process Manager の複数インスタンスをルート・ユーザーとしてインストールし、それらのインスタンスのサブセットだけに非管理ユーザーのアクセス権限を与えた場合、プロファイル管理ツールはその非管理ユーザーに対して正しく機能しません。さらに、`com.ibm.wsspi.profile.WSProfileException`、つまりアクセス拒否メッセージが `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` ファイルで出現します。デフォルトでは、非管理ユーザーにはプログラム・ファイル・ディレクトリーに対するアクセス権限がありません。プログラム・ファイル・ディレクトリーは製品がデフォルトでインストールされる場所です。この問題を解決するには、非管理ユーザーが自分で製品をインストールするか、あるいは他の製品インスタンスにアクセスする許可を得ます。

**Linux** **Windows** プロファイル管理ツールの言語は、システムのデフォルト言語で決まります。デフォルト言語がサポートされる言語ではない場合、英語として使用されます。デフォルト言語をオーバーライドするには、コマンド行からプロファイル管理ツールを開始し、`java user.language` 設定を使用してデフォルト言語を置き換えます。次のコマンドを実行します。

- **Linux** `install_root/java/bin/java -Duser.language=locale install_root/bin/ProfileManagement/startup.jar`
- **Windows** `install_root¥¥java¥bin¥java -Duser.language=locale install_root¥¥bin¥ProfileManagement¥startup.jar`

例えば、Linux システム上でドイツ語のプロファイル管理ツールを開始するには、以下のコマンドを入力します。

```
install_root/java/bin/java -Duser.language=de install_root/ ¥
bin/ProfileManagement/startup.jar
```

### すべてのプラットフォームでのプロファイル管理ツールの開始

任意のプラットフォームで、ファースト・ステップ・コンソールからプロファイル管理ツールを開始します。詳しくは、『ファースト・ステップ・コンソールの開始』を参照してください。

### Linux および UNIX プラットフォームでのツールの開始

**Linux** このツールは、Linux および UNIX プラットフォーム上で、コマンド `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh` を実行して開始できます。

**Linux** Linux プラットフォームでは、オペレーティング・システムのメニューを使用して、プロファイル管理ツールを開始することもできます。例えば、「`Linux_operating_system_menus_to_access_programs`」 > 「**IBM WebSphere**」 > 「`your_product`」 > 「プロファイル管理ツール」をクリックします。

### Windows プラットフォームでのツールの開始

**Windows** Windows プラットフォームでは、以下の方法でツールを開始できます。

- `install_root¥¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat` コマンドを実行します。

### カスタム・インストールの後のスタンドアロン・プロファイルの作成

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成することができます。

プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してのプロファイル作成に関する情報については、以下のリンクのうち 1 つを選択してください。

## 関連タスク:

201 ページの『**manageprofiles** を使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Express 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

## プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールを使用します。

Process Center スタンドアロン・プロファイルの統合は、バージョン 7.5 ではサポートされていません。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』を確認します。

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- IBM Business Process Manager Express 用の *Process Center* スタンドアロン・プロファイルを作成する場合。

ここに示すステップでは、「**拡張プロファイル作成**」と「**標準プロファイル作成**」の両方について説明します。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

このツールを開始するためのその他の方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。

2. 「ようこそ」ページで、「**プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)**」をクリック、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。

「**プロファイル**」タブが表示されます。

「**プロファイル**」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「**プロファイル**」タブで、「**作成**」をクリックします。

「**環境の選択**」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「**環境の選択**」ページで、プロファイルの作成対象の構成を見つけ、そのセクションを展開します。

例えば、IBM BPM Advanced 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Advanced、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「**次へ**」をクリックします。IBM BPM Standard 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「**次へ**」をクリックします。IBM BPM Express 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Express、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「**次へ**」をクリックします。

**注:** WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルの作成のみを扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

「プロファイル作成オプション」ページから、「**標準プロファイル作成**」または「**拡張プロファイル作成**」のいずれかの方法を使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成させます。

#### **関連タスク:**

『プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

130 ページの『プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

#### **関連資料:**

356 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

#### **プロファイル管理ツールの標準オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:**

プロファイル管理ツールの標準オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

126 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

以下のステップは「**標準プロファイル作成**」の説明です。標準プロファイル作成オプションは、プロファイル管理ツールで以下のことを行う場合に使用します。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。
- 管理コンソールをインストールします。
- プロファイルの個人セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。

- 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティ証明書を作成します。

証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。

- サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。

ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合にのみ該当します。

- サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。
1. 「管理セキュリティー」ページで、「**ユーザー名**」、「**パスワード**」、および「**パスワードの確認**」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティーを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

2. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。
  - 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
  - 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されません。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

「次へ」をクリックして、「データベース構成 - パート 2」ページを表示します。

「データベース構成 - パート 2」ページの内容は、「データベース構成 - パート 1」ページの「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」メニューで指定した値によって異なります。

3. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を完了します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

**DB2** 「データベース構成 - パート 2」 ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」 ページに進みます。

#### **DB2 Universal Database for z/OS**

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」 ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」 ページに進みます。

#### **Microsoft SQL Server**

「データベース構成 - パート 2」 ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」 ページに進みます。

**Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」 ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」 ページに進みます。

4. 「プロファイルの要約」 ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」 ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」 ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」 チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」 ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成した Process Center スタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動することができます。

プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、データベースの作成後に、データベースにシステム情報をロードする必要があります。

#### **関連タスク:**

368 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コ

マンドを実行する必要があります。

126 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールを使用します。

### プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールの拡張オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

126 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』に記載されている初期プロファイル作成の手順を完了します。

以下のステップは「**拡張プロファイル作成**」の説明です。拡張オプションを使用して以下のことを行います。

- ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。
  - 管理コンソールをデプロイします。
  - デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。
  - Web サーバー定義を作成します。
  - ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。
1. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、管理コンソールおよびデフォルト・アプリケーションをデプロイするかどうかを選択します。

#### サンプル・アプリケーションのデプロイ

IBM Business Process Manager および WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションをインストールします。サンプル・アプリケーションは、実稼働環境へのデプロイメントが推奨されていません。

#### 管理コンソールのデプロイ (推奨)

サーバーを管理する Web ベースの管理コンソールをインストールします。

#### デフォルト・アプリケーションのデプロイ

Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含むデフォルト・アプリケーションをインストールします。

「次へ」をクリックすると、「プロファイル名およびロケーション」ページが表示されます。

2. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さに関する制限など、プロファイルの命名の際に考慮する必要がある問題について、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

- b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照...」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。 デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。以下の例は、プラットフォームの相違を示しています。 *profile\_name* はユーザーが指定する名前です。

- **Linux** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

次のいずれかの問題が発生すると、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した *profile\_name* が固有ではない。
  - 指定したディレクトリーが空ではない。
  - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
  - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイル  
をデフォルトにする」チェック・ボックスを選択します。

注: このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

デフォルト・プロファイルにするプロファイルを作成すると、コマンドは自動的にそのプロファイル  
を処理対象とします。 ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロ  
ファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーか  
ら実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1  
つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数の  
プロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する  
必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してくだ  
さい。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance  
tuning setting)」プルダウン・リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チュー  
ニング・レベルを選択します。
- e. 「次へ」をクリックします。

注: 「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、  
このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

3. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」ページで、作成するプロファイルに対して次の処置を行いま  
す。

- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でな  
ければなりません。命名時に考慮する必要のある予約済みの用語やその他の問題については、『ブ  
ロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』を参照してくだ  
さい。

- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックすると、「管理セキュリティ」ページが表示されます。

4. 「管理セキュリティ」 ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」 ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」 ボタンは有効になりません。

「次へ」 をクリックします。

5. 「セキュリティ証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」 ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」 ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」 をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」 ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」 ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」 フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」 フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」 フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」 フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」 をクリックすると、「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を trust.p12 ファイルに追加します。

6. 「セキュリティ証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」 をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、java.security ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- key.p12: デフォルトの個人証明書が入っています。
- trust.p12: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。

- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower® 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

7. 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てるには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

インストールの内容	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで <code>root</code> または管理者グループ特権を持っている場合	「Linux または Windows サービス定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップ 8 に進みます。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「Web サーバー定義 (Web Server Definition)」ページが表示されます。ステップ 9 (135 ページ) に進みます。

8. 「サービスの定義」ページで、Windows サービスまたは Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

**Windows** Windows プラットフォームにおいて、Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合のみ、「Windows サービスの定義」ページが表示されます。プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

#### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

**Linux** 「Linux サービスの定義」ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合のみ表示されます。

IBM Business Process Manager によって、**startManager** または **startManager** コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーは root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

9. Web サーバー定義をすぐにプロファイルに組み込む場合は、以下のステップを実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」チェック・ボックスを選択します。
  - b. ページ上の Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. 「**第 2 部**」ページの Web サーバーの特性を指定します。

Web サーバーを使用して、要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を定義する場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを IBM Business Process Manager に対して定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイルに定義する必要があります。

- d. 「**次へ**」をクリックします。
10. 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「**次へ**」をクリックします。
11. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。
  - 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
  - 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

「次へ」をクリックして、「データベース構成 - パート 2」ページを表示します。

「データベース構成 - パート 2」ページの内容は、「データベース構成 - パート 1」ページの「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」メニューで指定した値によって異なります。

12. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

**DB2** 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

#### **DB2 Universal Database for z/OS**

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

#### **Microsoft SQL Server**

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

**Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」 ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」 ページに進みます。

13. 「プロファイルの要約」 ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」 ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」 ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」 ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」 チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」 ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

ファースト・ステップ・コンソールに進み、作成した Process Center スタンドアロン・プロファイルに対応するサーバーを始動することができます。

プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、データベースの作成後に、データベースにシステム情報をロードする必要があります。

#### 関連タスク:

368 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

126 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールを使用します。

#### プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン環境のプロファイルを作成できます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

Process Server スタンドアロン・プロファイルの統合は、バージョン 7.5 ではサポートされていません。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』を確認します。

**ヒント:** プロファイル管理ツールを使用する代わりに、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成することもできます (『コマンド行ユーティリティーおよび `wsadmin` を使用したソフトウェアの構成』を参照)。

IBM Business Process Manager Express 用のスタンドアロンの *Process Server* プロファイルを作成する場合は、このタスク・トピックの手順に従ってください。このステップでは、「標準的なプロファイル作成」オプションと「高度なプロファイル作成」オプションの両方について説明します。

1. プロファイル管理ツールを開始します。このツールの開始方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。「ようこそ」ページが表示されます。
2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)」をクリック、または「プロファイル管理ツール」タブを選択します。

「プロファイル」タブが表示されます。

「プロファイル」タブには、マシン上で作成されたプロファイルのリストが表示される場合があります。プロファイル管理ツールを使用して、新規プロファイルを作成するか、既存のプロファイルを拡張することができます。

3. 「プロファイル」タブで、「作成」をクリックします。

「環境の選択」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「環境の選択」ページで、プロファイルの作成対象の構成を見つけ、そのセクションを展開します。

例えば、IBM BPM Advanced 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Advanced、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「次へ」をクリックします。IBM BPM Standard 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Standard、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「次へ」をクリックします。IBM BPM Express 用のプロファイルを作成する場合は、「**IBM BPM Express、Process Server スタンドアロン**」プロファイルのオプションを選択し、「次へ」をクリックします。

**注:** WebSphere Application Server プロファイルもこのプロファイル管理ツールで作成できます。ただし、本書では、IBM Business Process Manager プロファイルの作成のみを扱います。

「プロファイル作成オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル作成オプション」ページで、以下のオプションのいずれかを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成します。

#### 標準的なプロファイル作成

デフォルトの構成設定を使用してプロファイルを作成します。

#### 「拡張プロファイル作成」

指定した構成値を使用してプロファイルを作成します。

スタンドアロン・プロファイルを作成するためのオプションについては、『139 ページの表 54』を参照してください。

表 54. スタンドアロン・プロファイルに応じた作成オプションの選択

選択	目的
標準的なプロファイル作成	<p>プロファイル管理ツールで以下のアクションを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セルの名前にデフォルト値を割り当てます。</li> <li>• 管理コンソールをインストールします。</li> <li>• プロファイルの個人セキュリティー証明書を作成します。</li> </ul> <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 1 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 他の証明書に署名するためのルート署名セキュリティー証明書を作成します。</li> </ul> <p>証明書には個人鍵と秘密鍵があり、各鍵のデフォルト値は WebAS です (このパスワードは変更する必要があります)。有効期間は 15 年です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。</li> </ul> <p>ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権で許可される場合のみ該当します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• サポート対象のデータベース製品のいずれかを選択します。データベース構成は、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベース用に設定されます。</li> </ul>
高度なプロファイル作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ポート、プロファイルのロケーション、およびプロファイル、ノード、ホスト、セル (該当する場合) の名前にカスタマイズ値を割り当てます。</li> <li>• 管理コンソールをデプロイします。</li> <li>• デフォルト・アプリケーション (Snoop、Hello、および HitCount の各サブレットを含む) をデプロイします。</li> <li>• Web サーバー定義を作成します。</li> <li>• ご使用のオペレーティング・システムとユーザー・アカウントの特権によってサービスの作成が許可される場合に、サーバーを実行するためのシステム・サービスを作成します。</li> </ul>

引き続き、以下のいずれかのタイプの Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

- 標準的なプロファイル作成
- 「拡張プロファイル作成」

#### プロファイル管理ツールを使用した標準 Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、標準的なスタンドアロン環境のプロファイルを作成できます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

137 ページの『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』に記載されている初期構成の手順を完了します。

IBM Business Process Manager Express 用の標準スタンドアロン Process Server プロファイルを作成する場合は、このタスク・トピックの手順に従ってください。以下のステップは「標準プロファイル作成」の説明です。

1. 「管理セキュリティー」 ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」 ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティーを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」 ボタンは有効になりません。

「次へ」 をクリックします。

2. 「Process Server 構成」 ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

#### 環境名

構成する環境の名前を指定します。

#### 環境タイプの選択

以下のオプションを使用できます。

**実動** 実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「**実動**」を選択します。

#### ステージング

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーを実行する場合は、「**ステージング**」を選択します。

**テスト** 構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

インストール時に設定した環境タイプは、Process Server の使用方法を指すものであり、サーバーに適用できる環境変数および値を決定します。Process App ごとに環境固有の変数を設定できます。次に、プロセスが実行される環境のタイプごとに値を定義します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー (実動、ステージング、またはテスト) です。負荷テストはテスト・サーバーで実行され、ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするための一時的なロケーションとして使用されます。構成する Process Server が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「**環境タイプ**」として「**ステージング**」を指定することが考えられます。

#### Process Center の構成情報

この Process Center に接続するための構成の詳細を指定します。一方、オフライン・モードで実行する場合は、サーバーをオフライン・モードで使用するためのチェック・ボックスを選択します。

#### サーバーをオフラインで使用する

構成するサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

#### プロトコル

Process Center への接続プロトコルとして「**http://**」または「**https://**」を選択します。

#### ホスト名

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

ポート Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

#### ユーザー名

Process Center に存在する有効なユーザー名を入力します。Process Server は、このユーザーとして Process Center に接続します。

#### パスワード

前述のユーザーのパスワードを入力します。

「接続のテスト」をクリックすることによって、Process Center への接続をテストできます。

「次へ」をクリックします。

3. 「データベース構成」ページで、以下の措置を行います。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

Oracle の場合、「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」および

「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」(実際にはこれがデータベース・インスタンス名)を、「**共通データベース名**」と同じにすることができます。その他のデータベース・タイプでは、データベース名は固有である必要があります。

4. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

**DB2** 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

#### **DB2 Universal Database for z/OS**

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

#### **Microsoft SQL Server**

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

**Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

5. 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません」：プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「ファースト・ステップ・コンソールの起動」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「終了」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。デフォルト構成設定を使用してプロファイルを作成するステップが完了しました。

「ファースト・ステップ・コンソール」から、先程作成した スタンドアロン・プロファイルを開始できます。

プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、データベースの作成後に、データベースにシステム情報をロードする必要があります。

**関連タスク:**

368 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

### プロファイル管理ツールを使用した拡張 *Process Server* スタンドアロン・プロファイルの作成:

プロファイル管理ツールを使用して、スタンドアロン環境の拡張プロファイルを作成することができます。スタンドアロン環境は、他のすべてのサーバーから独立して機能し、専用の管理コンソールによって管理されます。

137 ページの『プロファイル管理ツールを使用したスタンドアロン・プロファイルの作成』に記載されている初期構成の手順を完了します。

IBM Business Process Manager Express 用の拡張スタンドアロン *Process Server* プロファイルを作成する場合は、このタスク・トピックの手順に従ってください。以下のステップは「**拡張プロファイル作成**」オプションの説明です。

1. 「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで、プロファイル環境にデプロイするアプリケーションを選択します。

#### サンプル・アプリケーションのデプロイ

IBM Business Process Manager および WebSphere Application Server サンプル・アプリケーションをインストールします。サンプル・アプリケーションは、実稼働環境へのデプロイメントが推奨されていません。

#### 管理コンソールのデプロイ (推奨)

サーバーを管理する Web ベースの管理コンソールをインストールします。

#### デフォルト・アプリケーションのデプロイ

Snoop、Hello、および HitCount の各サーブレットを含むデフォルト・アプリケーションをインストールします。

2. 「プロファイル名およびロケーション」ページで、以下のステップを実行します。
  - a. 「**プロファイル名**」フィールドで固有の名前を指定するか、デフォルト値をそのまま使用します。

作成する各プロファイルに名前を付ける必要があります。複数のプロファイルがある場合は、この名前によって明らかに区別することができます。デフォルト名を使用しないことを選択した場合は、ディレクトリー名の長さに関する制限など、プロファイルの命名の際に考慮する必要がある問題について、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名の考慮事項』を参照してください。

- b. 「**プロファイル・ディレクトリー**」フィールドにプロファイルのディレクトリーを入力するか、「参照...」ボタンを使用してプロファイル・ディレクトリーに移動します。

指定したディレクトリーには、ランタイム環境を定義するファイル (コマンド、構成ファイル、ログ・ファイルなど) が格納されます。デフォルト・ディレクトリーは、プラットフォームに依存しています。以下の例は、プラットフォームの相違を示しています。`profile_name` はユーザーが指定する名前です。

- **Linux** `install_root/profiles/profile_name`
- **Windows** `install_root¥profiles¥profile_name`

次のいずれかの問題が発生すると、エラー・メッセージが表示されます。

- 指定した `profile_name` が固有ではない。

- 指定したディレクトリーが空ではない。
  - 使用しているユーザー ID に、このディレクトリーに対する十分な権限がない。
  - プロファイルを作成するための十分なスペースがない。
- c. オプション: 作成中のプロファイルをデフォルト・プロファイルにするには、「このプロファイルをデフォルトにする」チェック・ボックスを選択します。

注: このチェック・ボックスは、既存のプロファイルがご使用のシステムに存在する場合にのみ表示されます。

デフォルト・プロファイルにするプロファイルを作成すると、コマンドは自動的にそのプロファイルを処理対象とします。ワークステーションで作成する最初のプロファイルは、デフォルト・プロファイルです。デフォルト・プロファイルは、製品インストール・ルートの bin ディレクトリーから実行されるコマンドのデフォルトのターゲットです。ワークステーション上にプロファイルが 1 つしか存在しない場合は、すべてのコマンドがそのプロファイルに基づいて機能します。複数のプロファイルが存在する場合、特定のコマンドでは、コマンドが適用されるプロファイルを指定する必要があります。詳しくは、『複数プロファイル環境のプロファイル・コマンド』を参照してください。

- d. 「サーバー・ランタイムのパフォーマンス・チューニング設定 (Server runtime performance tuning setting)」プルダウン・リストから、作成するプロファイルに適したパフォーマンス・チューニング・レベルを選択します。
- e. 「次へ」をクリックします。

注: 「戻る」をクリックしてプロファイル名を変更した場合、このページが再表示されたときに、このページで手動で名前を変更しなければならないことがあります。

3. 「ノード、ホスト、およびセルの名前」ページで、作成するプロファイルに対して次の処置を行います。

- 「ノード名」フィールドにノードの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

ノード名はできるだけ短くしてください。ただし、ノード名は、デプロイメント環境内で固有でなければなりません。命名時に考慮する必要がある予約済みの用語やその他の問題については、『プロファイル、ノード、サーバー、ホスト、およびセルの命名に関する考慮事項』を参照してください。

- 「サーバー名」フィールドにサーバーの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「ホスト名」フィールドにホストの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- 「セル名」フィールドにセルの名前を入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。

「次へ」をクリックすると、「管理セキュリティー」ページが表示されます。

4. 「管理セキュリティー」ページで、「ユーザー名」、「パスワード」、および「パスワードの確認」の値を入力します。インストール時に管理者に対して指定されたパスワードが、tw\_admin および tw\_user を含むすべての内部ユーザーに使用されます。

注: 初期設定では、「次へ」ボタンは無効に設定されています。管理セキュリティーを無効に設定するオプションはないため、ユーザー ID、パスワード、およびパスワードの確認の各項目に値を指定しなければ、「次へ」ボタンは有効になりません。

「次へ」をクリックします。

5. 「セキュリティー証明書 (パート 1)」 ページで、新規証明書を作成するか、既存の証明書をインポートするかを指定します。

以下のアクションを実行します。

- 新規デフォルト個人証明書と新規ルート署名証明書を作成するには、「**新規デフォルト個人証明書を作成する (Create a new default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**新規ルート署名証明書を作成する (Create a new root signing certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ」をクリックします。
- 既存の証明書をインポートするには、「**既存のデフォルト個人証明書をインポートする (Import an existing default personal certificate)**」ラジオ・ボタンと「**既存のルート署名個人証明書をインポートする (Import an existing root signing personal certificate)**」ラジオ・ボタンを選択して、以下の情報を指定します。
  - 「パス」フィールドに、既存の証明書へのディレクトリー・パスを入力します。
  - 「パスワード」フィールドに、証明書のパスワードを入力します。
  - 「**鍵ストア・タイプ (Keystore type)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア・タイプを選択します。
  - 「**鍵ストア別名 (Keystore alias)**」フィールドで、インポートする証明書の鍵ストア別名を選択します。
  - 「次へ」をクリックすると、「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページが表示されます。

個人証明書をデフォルトの個人証明書としてインポートする場合は、個人証明書に署名したルート証明書をインポートしてください。そのようにしない場合、プロファイル管理ツールは、個人証明書の署名者を `trust.p12` ファイルに追加します。

6. 「セキュリティー証明書 (パート 2)」 ページで、証明書の情報が正しいことを確認し、「次へ」をクリックして「ポート値の割り当て」 ページを表示します。

証明書を作成する場合、デフォルト値をそのまま使用するか変更して、新しい証明書を作成します。デフォルトの個人証明書は、デフォルトで 1 年間有効で、ルート署名証明書によって署名されます。ルート署名証明書は、デフォルトで 15 年間有効な自己署名証明書です。ルート署名証明書のデフォルトの鍵ストア・パスワードは、WebAS です。パスワードを変更します。パスワードに 2 バイト文字セット (DBCS) 文字を使用することはできません。PKCS12 などの特定の鍵ストア・タイプは、これらの文字をサポートしないからです。サポートされる鍵ストア・タイプは、`java.security` ファイルのプロバイダーによって異なります。

いずれかの証明書または両方の証明書を作成するか、いずれかの証明書または両方の証明書をインポートすると、以下の鍵ストア・ファイルが作成されます。

- `key.p12`: デフォルトの個人証明書が入っています。
- `trust.p12`: デフォルトのルート証明書の署名者証明書が入っています。
- `root-key.p12`: ルート署名証明書が入っています。
- `default-signers.p12`: サーバーのインストールまたは実行後に作成する新しい鍵ストア・ファイルに追加された署名者証明書が入っています。デフォルトで、デフォルトのルート証明書署名者と、DataPower 署名者証明書は、この鍵ストア・ファイルに入っています。
- `deleted.p12`: 必要に応じて復旧できるように、`deleteKeyStore` タスクで削除された証明書を保持します。
- `ltpa.jceks`: 環境内のサーバーが相互に通信するために使用するサーバーのデフォルトの Lightweight Third-Party Authentication (LTPA) 鍵が入っています。

これらのすべてのファイルのパスワードは、証明書の作成またはインポート時に使用したのと同じパスワード (デフォルトのパスワードか、指定したパスワード) です。

インポートされた証明書が `key.p12` ファイルまたは `root-key.p12` ファイルに追加されます。

証明書をインポートして、その証明書に必要な情報が含まれていない場合は、「戻る」をクリックして、別の証明書をインポートします。

- 「ポート値の割り当て」ページで、プロファイルに指定されたポートが固有であることを確認し、「次へ」をクリックします。

プロファイル管理ツールは、他の WebSphere 製品によって現在使用されているポートを検出し、既存のポート値と競合しない推奨値を表示します。指定されたポートを使用する WebSphere アプリケーション以外のアプリケーションが存在する場合は、ポートが競合しないことを確認してください。「オプションのアプリケーション・デプロイメント」ページで管理コンソールをデプロイしないように選択した場合、「ポート値の割り当て」ページ上で管理コンソール・ポートは使用できません。

以下の条件が満たされた場合には、ポートは使用中であると認識されます。

- ポートが、現在のユーザーが実行したインストールで作成されたプロファイルに割り当てられている。
- ポートが現在使用中である。

「ポート値の割り当て (Port Values Assignment)」ページにアクセスするときにはポートはツールによって検証されますが、続いて表示される「プロファイル管理ツール」ページで行われる選択の結果、依然としてポート競合が発生する可能性があります。ポートは、プロファイルの作成が完了するまで割り当てられません。

ポートの競合が発生していると思われる場合、プロファイルの作成後に調査することができます。以下のファイルを調べて、プロファイルの作成時に使用されたポートを確認します。

- **Linux** `profile_root/properties/portdef.props`
- **Windows** `profile_root\properties\portdef.props`

このファイル内に含まれているものは、ポートの設定で使用されたキーと値です。ポートの競合を発見した場合は、ポートを手動で再度割り当てることができます。ポートを再度割り当てするには、WebSphere Application Server Network Deployment インフォメーション・センターのトピック『既存プロファイル内のポートの更新』を参照してください。このトピックで説明されている `ws_ant` スクリプトを使用して `updatePorts.ant` ファイルを実行します。

インストールの内容	次のステップ
Linux または Windows プラットフォームで <code>root</code> または管理者グループ特権を持っている場合	「Linux または Windows サービス定義 (Linux or Windows Service Definition)」ページが表示されます。ステップ 8 に進みます。
それ以外のプラットフォームの場合、または Linux または Windows プラットフォームで非 <code>root</code> ユーザーとして実行している場合	「Web サーバー定義 (Web Server Definition)」ページが表示されます。ステップ 9 (148 ページ) に進みます。

- 「サービスの定義」ページで、Windows サービスまたは Linux サービスを使用して IBM Business Process Manager を実行するかどうかを指定します。

**Windows** Windows プラットフォームにおいて、Windows サービスをインストールする ID に管理者グループ特権が設定されている場合にのみ、「Windows サービスの定義」ページが表示されます。P

プロファイルが Windows サービスとして構成されている場合、製品は、**startServer** または **startManager** コマンドによって開始されるプロセスに対応する Windows サービスを開始します。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Windows サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

**重要:** 特定のユーザー・アカウントを使用してログオンすることを選択した場合、サービスを実行するユーザーのユーザー ID とパスワード、および始動タイプ (デフォルトは「手動」) を指定する必要があります。ユーザー ID の名前にスペースを使用することはできません。また、この ID は管理者グループに属し、拡張ユーザー権限の「サービスとしてログオン」を持っている必要があります。ユーザー ID が管理者グループに属していて、まだ拡張ユーザー権限がない場合は、プロファイル管理ツールにより、ユーザー ID に拡張ユーザー権限が付与されます。

プロファイルの作成時に追加された Windows サービスをプロファイルの削除時に除去できます。

### プロファイルを Windows サービスとして実行する場合の IPv6 に関する考慮事項

Windows サービスとして実行するように作成されたプロファイルは、このサービスがローカル・システムとして実行するように構成されている場合、IPv6 の使用時には開始できません。ユーザー固有の環境変数を作成して、IPv6 を使用可能にします。この環境変数はローカル・システム変数ではなくユーザー変数であるため、その特定のユーザーで実行される Windows サービスのみが、この環境変数にアクセスできます。新規プロファイルが Windows サービスとして実行するように作成および構成されている場合、デフォルトでは、このサービスはローカル・システムとして実行するように設定されます。IBM Business Process Manager Windows サービスによって実行が試みられる場合、このサービスは IPv6 が指定されているユーザー環境変数にアクセスできないため、IPv4 として開始を試みます。この場合、サーバーは正常に始動しません。この問題を解決するには、プロファイルの作成時に、IBM Business Process Manager Windows サービスが、ローカル・システムの代わりに IPv6 が指定されている環境変数を定義したユーザー ID と同じユーザー ID で実行されることを指定します。

**Linux** 「Linux サービスの定義」ページは、現在のオペレーティング・システムがサポート対象バージョンの Linux であり、現在のユーザーに適切な権限がある場合にのみ表示されます。

IBM Business Process Manager によって、**startManager** または **startManager** コマンドで開始されたプロセス用の Linux サービスの開始が試みられます。例えば、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーを Linux サービスとして構成し、**startServer** または **startManager** コマンドを実行すると、**wasservice** コマンドは定義されたサービスを開始します。

デフォルトでは、IBM Business Process Manager は、Linux サービスとして実行するように選択されません。

このサービスを作成するためには、プロファイル管理ツールを実行するユーザーは root ユーザーでなければなりません。プロファイル管理ツールを root 以外のユーザー ID で実行している場合は、「Linux サービスの定義」ページは表示されないため、サービスも作成されません。

サービスの実行に使用されるユーザー名を指定する必要があります。

Linux サービスを削除するためには、ユーザーが root ユーザーであるか、またはこのサービスを削除するための適切な特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、root ユーザーがこのユーザーの代わりにサービスを削除するために実行できる除去スクリプトが作成されます。

「次へ」をクリックして先に進みます。

9. Web サーバー定義をすぐにプロファイルに組み込む場合は、以下のステップを実行します。
  - a. 「**Web サーバー定義を作成する**」チェック・ボックスを選択します。
  - b. ページ上の Web サーバーの特性を指定して、「**次へ**」をクリックします。
  - c. 「**第 2 部**」ページの Web サーバーの特性を指定します。

Web サーバーを使用して、要求を IBM Business Process Manager に送信する場合は、Web サーバー定義を組み込む必要があります。定義をすぐに組み込むこともできますし、後で IBM Business Process Manager に対して Web サーバーを定義することもできます。このプロファイルの作成中に Web サーバー定義を定義する場合は、プロファイルの作成後に Web サーバーとそのプラグインをインストールすることができます。ただし、「Web サーバー定義」ページ上で指定したパスに対してこの両方をインストールする必要があります。このプロファイルの作成後に、Web サーバーを IBM Business Process Manager に対して定義する場合は、Web サーバーを別のプロファイルに定義する必要があります。

- d. 「**次へ**」をクリックします。
10. 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。
  - a. 「**データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)**」を選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

**重要:** 「**データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する**」を選択する場合は、「**既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する**」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「**次へ**」をクリックします。
11. 設計ファイルを使用したデータベースの構成を行わないことを選択した場合、「データベース構成」パネルでデータベースの詳細を指定します。詳細は、以下のステップを参照してください。
  - a. 「データベース構成」ページで、以下の措置を行います。
    - 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
    - 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。

- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

Oracle の場合、「Process Server データベース名」と「Performance Data Warehouse データベース」の名前 (データベース・インスタンス名) は、「共通データベース名」と同じにすることができます。その他のデータベース・タイプでは、データベース名は固有である必要があります。

- 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

**DB2** 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

#### DB2 Universal Database for z/OS

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

#### Microsoft SQL Server

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして、「プロファイルの要約」ページに進みます。

**Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイルの要約」ページに進みます。

- 「プロファイルの要約」ページで、「作成」をクリックしてプロファイルを作成するか、または「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

構成の進行状況が、「プロファイル構成の進行 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに表示されます。

プロファイルの作成が完了すると、「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に作成されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの作成中にエラーが検出された場合は、正常終了のメッセージの代わりに他のメッセージが表示される可能性があります。その例と意味は次のとおりです。

- 「**プロファイル管理ツールによりプロファイルが作成されましたが、エラーが発生しました**」: プロファイルの作成が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「**プロファイル管理ツールでプロファイルを作成できません**」: プロファイルの作成が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。ファースト・ステップ・コンソールに進むには、「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」チェック・ボックスにチェック・マークが付けられていることを確認して、「**終了**」をクリックします。また、別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページも閉じてください。ファースト・ステップ・コンソールを使用して、製品資料にアクセスします。

「ファースト・ステップ・コンソール」から、先程作成した スタンドアロン・プロファイルを開始できます。

プロファイル作成時にデータベース・スクリプトを実行しなかった場合は、データベースの作成後に、データベースにシステム情報をロードする必要があります。

#### 関連タスク:

368 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

## manageprofiles コマンド行ユーティリティーを使用したプロファイルの作成

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーおよびプロパティ・ファイルを使用して、コマンド行からプロファイルを作成できます。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーについて詳しくは、『**manageprofiles コマンド行ユーティリティー**』を参照してください。**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーのサンプル応答ファイルは `install_root/BPM/samples/manageprofiles` ディレクトリにあります。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件をすべて確認している。
- プロファイル作成コマンドの例を
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクには、**セキュリティー・ロールが必要です**。『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (`-templatePath` オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。以下のテンプレートを使用できます。

- `default.procctr`: IBM Business Process Manager Process Center スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard または Express に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
  - `default.procsvr`: Process Server スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard または Express に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
2. 『`manageprofile` の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
  3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、`manageprofiles` パラメーターのトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。

**注:** `samplesPassword` パラメーターを指定せずに `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して IBM Business Process Manager にプロファイルを作成した場合は、**INSTCONFPARTIALSUCCESS** メッセージが返されます。これは以下の基準が満たされたときに起こります。

- IBM Business Process Manager または WebSphere Application Server のインストール中にサンプルをインストールした。
  - `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してプロファイルを作成している。
  - `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーに `samplesPassword` パラメーターが指定されていない。
4. 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

5. `-response` パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを実行します。

- **Linux** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`
- **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの作成は正常に終了しました。」というメッセージが表示された場合は、プロファイルの作成が正常に完了したことが分かります。また、以下のログ・ファイルを確認できます。

- **Linux** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log`
- **Windows** `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_create.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に作成されたことを確認する。このためには、以下のコマンドを実行します。

- **Linux** `profile_root/bin/wbi_ivt.sh`
- **Windows** `profile_root\bin\wbi_ivt.bat`

#### 関連概念:

57 ページの『JDBC ドライバーおよびロケーション』

以下の各表に、サポートされている JDBC ドライバーをリストします。最初の表には、製品に付属している JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。2 番目の表には、サポートされているが製品には付属していない JDBC ドライバーの名前とロケーションを示します。

#### カスタム・インストール後の **manageprofiles** を使用したスタンドアロン・プロファイルの作成:

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成することができます。

このセクションでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成する方法について説明します。ここでは、インストーラーを実行済みであり、カスタム・インストールを実行済みであることを想定しています。

また、カスタム・インストールの実行後に、プロファイル管理ツールを使用してスタンドアロン・プロファイルを作成することもできます。

#### **manageprofiles** を使用した **Process Center** スタンドアロン・プロファイルの作成:

IBM Business Process Manager Express 用の **Process Center** スタンドアロン・プロファイルを作成するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認済みである。
- プロファイル作成コマンドの例を確認済みである。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して IBM Business Process Manager Express 用の **Process Center** プロファイルを作成する方法について説明します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。

以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procctr**: **Process Center** スタンドアロン・プロファイル用に、IBM BPM Standard 構成および Express 構成に固有の機能を使用してスタンドアロン・サーバーを定義します。

- 『manageprofile の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。
- プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、manageprofiles パラメーターのトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。
- 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、install\_root/BPM/samples/manageprofiles/ ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'personalCertValidityPeriod=1 ' や 'winserviceCheck=false ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

- response パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から **manageprofiles** コマンドを実行します。

- Linux** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`
- Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

#### 関連概念:

119 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

312 ページの『manageprofiles の例』

このセクションの例では、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法を示します。

#### Standard Process Center 用の応答ファイル:

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと応答ファイルを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成します。

#### DB2 用の Standard Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
```

```

# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,

```

```

# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the

```

```

# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#     For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#     security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#     You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#     along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#     true
# Default Values:
#     true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#     Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#     create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#     quotation marks. This default personal certificate is located in the
#     server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#     signing certificate, one is created by default. See the
#     -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#     An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#     root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#     with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#     for 20 years.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.

```

```

# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName

```

```

#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

```

```

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
#   specified.)
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,
#   you can specify a different port number instead of the default port
#   number.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId

```

```

#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId

```

```

#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####

```

```

#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false

```

```
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
#   Creates a password to be used for samples. The password is used to
#   restrict access to Web application samples installed during the
#   installation of the application server.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
samplesPassword=samplesPassword
```

**DB2 for z/OS 用の Standard Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create
```

```

#####
# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:

```

```

# None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.

```

```

#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:

```

```

# false
# true
# Default Values:
# None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
# Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
# service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
# service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
# The type of the owner account of the Windows service created for the
# profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
# localsystem value runs the Windows service under the local account of the
# user who creates the profile. The default value for this parameter is
# localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
# localsystem
# specifieduser
# Default Values:
# localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
# Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
# as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
# belong to the Administrator group and have the following advanced user
# rights:
# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
# Specify the password for the specified user or the local account that is
# to own the Windows service.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
# The value can be either true or false. Specify true to create a Windows

```

```

# service for the server process that is created within the profile. Specify
# false to not create the Windows service. The default value for this
# parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbddbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####

```

dbCreateNew=false

```
#####  
# Parameter: dbType  
#  
# Description:  
#   The database type. Set one of the following values for the type of  
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.  
#  
#   Required only for one of the following:  
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.  
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.  
#  
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.  
#  
# Valid Values:  
#   DB2UDBOS390  
# Default Values:  
#   DB2UDBOS390  
#####  
dbType=DB2UDBOS390
```

```
#####  
# Parameter: dbDelayConfig  
#  
# Description:  
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is  
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by  
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the  
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the  
#   database to be set up during profile creation.  
#  
# Valid Values:  
#   false  
#   true  
# Default Values:  
#   false  
#####  
dbDelayConfig=true
```

```
#####  
# Parameter: dbName  
#  
# Description:  
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle  
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.  
#  
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies  
# Default Values:  
#   CMNDB  
#  
# Parameter: dbUserId  
#  
# Description:  
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has  
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source  
#   uses this ID to authenticate the database connection.  
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database  
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.  
#  
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.  
#  
# Valid Values:  
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for

```

```

# -perfDWDName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
# The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
# The location of DB2 for z/OS database.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
# has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
environmentName=environment_name
#####

```

```

# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

## Oracle 用の Standard Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、Oracle データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.

```

```

# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root

```

```

# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile

```

```

# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType

```

```

#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.

```

```

#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   ORACLE
# Default Values:

```

```

# ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
# The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
# databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
# server operating system. Server installations on all operating systems use
# type 4.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle

#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
# The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
# when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
# only valid if you are using Oracle databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbLocation=db_location

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=false

```

```

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
# The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
# -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None

```

```

#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
#   parameter is required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter:  environmentName
#
# Description:
#    Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#    has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#    Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#    Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#    test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#    stage environment type might be used as a temporary location to host
#    changes before putting those changes into production. You might specify
#    Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#    accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#    are as follows:
#    Test
#    Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#    environment.
#    Stage
#    Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#    preproduction server.
#    Production
#    Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#    The default value is Test.
#
# Valid Values:
#    Test
#    Production
#    Stage
# Default Values:
#    Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#    Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#    This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#    non-production server prior to deploying the applications on their
#    production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#    creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#    file repository is installed. This file repository contains a sample
#    organization that can be used to test Business Process Choreographer
#    people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#    false

```

```

# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

### SQL 用の Standard Process Center スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PC Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PC_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
# Creates the profile.

```

```

# If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
# Specifies the directory path to the template files in the installation
# root directory. Within the profileTemplates directory are various
# directories that correspond to different profile types and that vary with
# the type of product installed. The profile directories are the paths that
# you indicate while using the -templatePath option.
# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
templatePath=BPM/default.procctr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
# Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
# profile.
# Each profile that shares the same set of product binaries must have a
# unique name. The default profile name is based on the profile type and a
# trailing number, for example:
# profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
profileName=ProcCtr01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
# Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
# creating.
# This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
# development

```

```

# standard
# production
# Default Values:
# None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
# Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
# profile.
# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#   shortHostNameCellCellNumber
# else
#   shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
# Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
# Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#   shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#   shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
# Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative

```

```

# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate
# and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
# Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile

```

```

# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to

```

```

#     set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     false
#     true
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#     Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#     service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#     service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#     The type of the owner account of the Windows service created for the
#     profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#     localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#     user who creates the profile. The default value for this parameter is
#     localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#     localsystem
#     specifieduser
# Default Values:
#     localsystem
#
# Parameter:  winserviceUserName
#
# Description:
#     Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#     as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#     belong to the Administrator group and have the following advanced user
#     rights:
#     Act as part of the operating system
#     Log on as a service
#     The default value for this parameter is the current user name. The value
#     for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#     valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#     you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#     You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winservicePassword
#
# Description:
#     Specify the password for the specified user or the local account that is
#     to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter:  winserviceCheck

```

```

#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter:  winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual
#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file
#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false

```

```

# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter:  dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID

```

```

dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
# default user name is the first three characters of the Oracle database
# service name. For example: If the database service name is ORCL,
# dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
# Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
# profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
# and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
# all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
# deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
# to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
# An optional parameter that is valid in all default profile templates.
# Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated

```

```

# windows authentication.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
# has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample

```

```

# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

### **manageprofiles** を使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成:

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Express 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行する前に、以下の作業が完了していることを確認します。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件を確認している。
- プロファイル作成コマンドの例を確認している。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクでは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して、IBM Business Process Manager Express 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成する方法について説明します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを作成するには、以下のステップを実行します。

1. 作成するプロファイルの種類を決定します。これにより、新しいプロファイルに使用するテンプレートが決まります (**-templatePath** オプションを使用)。

各プロファイルのテンプレートは、*install\_root/profileTemplates/BPM* ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。

以下のテンプレートを使用できます。

- **default.procsvr**: Process Server スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard 構成および Express 構成に固有の機能を持ったスタンドアロン・サーバーを定義します。
2. 『manageprofile の例』に記載されているプロファイル作成コマンドの例を検討して、ご使用のプロファイルのタイプにどのパラメーターが必要であるかを判断します。

3. プロファイルに提供する値を決定します。これを行うには、`manageprofiles` パラメーター のトピックで示されているデフォルト値を確認して、それらがプロファイルに必要なものであるかどうかを検討します。
4. 応答ファイルを作成します。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

5. `-response` パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを実行します。

- **Linux** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`
- **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

#### 関連概念:

125 ページの『カスタム・インストールの後のスタンドアロン・プロファイルの作成』

カスタム・インストールを実行した後で、プロファイル管理ツールまたは `manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用してスタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成することができます。

119 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』

プロファイルの作成または拡張を実行する前に、一連の前提条件が満たされていることを確認する必要があります。

312 ページの『`manageprofiles` の例』

このセクションの例では、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法を示します。

#### Standard Process Server 用の応答ファイル:

`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーと応答ファイルを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成します。

#### DB2 用の Standard Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
```

```

# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a

```

```

# trailing number, for example:
# profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
# Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
# unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
# or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
# /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
# Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
# the value in quotation marks. The default value is based on the
# install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
# file. For example, the default for profile creation is:
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
# WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
# file in the install_root/properties directory. The value for this
# parameter must be a valid path for the target system and must not be
# currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile

```

```

# that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
# This parameter is required for profile creation only with the
# dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
# procctr.advmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
# The default value for this parameter is based on the short host name,
# profile type, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellManagerNodeNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumber
# where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#     Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#     to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#     Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#     offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#     Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#     parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#     is required if the Process Server is online (connected to a Process
#     Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#     advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#     Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#     This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#     parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#     Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#     or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#     Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter:  enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter:  signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name

```

```

#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:

```

```

# Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
# false. The default value for this parameter is false. When the
# manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
# set to true , the Linux service is created with the profile when the
# command is run by the root user. When a nonroot user runs the
# manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
# service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
# does not have sufficient permission to set up the service. An
# INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
# creation and the profile creation log
# install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
# message indicating the current user does not have sufficient permission to
# set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#

```

```

# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual
#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

```

```

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2_DATASERVER
# Default Values:
#   DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
#   specified.)
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,

```

```

# you can specify a different port number instead of the default port
# number.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the

```

```

# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:

```

```

# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter:  cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter:  environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####

```

```

# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

## DB2 for z/OS 用の Standard Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```
# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
```

```

# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (Dmgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
#   else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.

```

```

# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
# Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
# This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
# parameter is required if the Process Server is online (connected to a
# Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
# or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in
# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```

```

# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile. Do not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path

#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:

```

```

# Act as part of the operating system
# Log on as a service
# The default value for this parameter is the current user name. The value
# for this parameter must not contain spaces or characters that are not
# valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
# you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
# You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of

```

```

# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2UDBOS390
# Default Values:
#   DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=true

```

```

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#

```

```

# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location
#####
# Parameter:  environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM

```

```

# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

**Oracle 用の Standard Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

**注:** ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_Oracle.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

```

```

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:

```

```

# Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
# creating.
# This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

```

```

#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN

```

```

#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter:  defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and

```

```

# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#

```

```

# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# ORACLE
# Default Values:
# ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
# The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
# databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
# server operating system. Server installations on all operating systems use
# type 4.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
# The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
# when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
# only valid if you are using Oracle databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbLocation=db_location
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:

```

```

# false
# true
# Default Values:
# false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
# The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
# privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
# uses this ID to authenticate the database connection.
# Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
# authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
# The password required for database authentication. Required when the
# -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
# Database name for Process Server database. The value specified for
# -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None

```

```

#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#

```

```

# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
# parameter is required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
# default user name is the first three characters of the Oracle database
# service name. For example: If the database service name is ORCL,
# dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
# Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
# profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
# and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
# all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced

```

```

# deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
# to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name
#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test
#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM

```

```

# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

#### SQL 用の Standard Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Std profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Std_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

```

```

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:

```

```

# Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
# creating.
# This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

```

```

#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword

#####
# Parameter: signingCertDN

```

```

#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and

```

```

# resolves ports that are currently in use and determines the port
# assignments to avoid port conflicts.
# Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#

```

```

# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter:  bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter:  dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter:  dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.

```

```

#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#   MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter:  procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password

#####
# Parameter:  perfDWDbName
#
# Description:

```

```

# Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
# -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
#   default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
#   Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
#   profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
#   and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#
# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentName
#

```

```

# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter:  environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter:  isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their
#   production application servers. If -isDeveloperServer is set when
#   creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
#   file repository is installed. This file repository contains a sample
#   organization that can be used to test Business Process Choreographer
#   people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
isDeveloperServer=false

#####
# Parameter:  samplesPassword
#
# Description:

```

```

# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

**Advanced Process Server 用の応答ファイル:**

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと応答ファイルを使用して、スタンドアロン・プロファイルを作成します。

**DB2 用の Advanced Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、DB2 データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Adv profile that uses DB2.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Standalone_DB2.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

```

```

#####
# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsrv.adv

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None

```

```

#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  processCenterURL
#
# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#

```

```

# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:

```

```

#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#    An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#    root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#    with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#    for 20 years.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#    Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#    creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#    and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####

#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#    Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#    parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#    Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#    for the profile.
#    Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#    omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#    resolves ports that are currently in use and determines the port
#    assignments to avoid port conflicts.
#    Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#    During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#    automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#    -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#    parameter. The recommended port values can be different than the default
#    port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:

```

```

#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The

```

```

#    localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#    user who creates the profile. The default value for this parameter is
#    localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#    localsystem
#    specifieduser
# Default Values:
#    localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#    Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#    as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#    belong to the Administrator group and have the following advanced user
#    rights:
#    Act as part of the operating system
#    Log on as a service
#    The default value for this parameter is the current user name. The value
#    for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#    valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#    you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#    You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#    Specify the password for the specified user or the local account that is
#    to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#    Varies
# Default Values:
#    None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#    The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#    service for the server process that is created within the profile. Specify
#    false to not create the Windows service. The default value for this
#    parameter is false.
#
# Valid Values:
#    false
#    true
# Default Values:
#    false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#    The following values for Windows service startup can be used:
#    manual
#    automatic
#    disabled
#    The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#    manual
#    automatic

```

```

# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# None
#####
dbCreateNew=true

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# DB2_DATASERVER
# Default Values:
# DB2_DATASERVER
#
# Parameter: dbJDBCClasspath

```

```

#
# Description:
#   The directory path location of JDBC driver files.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbHostName
#
# Description:
#   The database server host name or IP address. The default value is the
#   local host name. Required when the -bpmdbDesign parameter was not
#   specified. (It is not required if the -bpmdbDesign parameter is
#   specified.)
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  dbServerPort
#
# Description:
#   The database server port number. Depending on the database you are using,
#   you can specify a different port number instead of the default port
#   number.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbType=DB2_DATASERVER
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcd drivers/DB2
dbHostName=db_host_name
dbServerPort=db_port_number
#####
# Parameter:  dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter:  dbName
#
# Description:

```

```

# The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
# databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
#   Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
#   Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
#   and password during profile creation and if you specified ORACLE for
#   dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
#dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
#   setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Description:
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
#dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: cdbSchemaName
#
# Description:
#   The schema name for the Common database. If no value is specified, the
#   following default database schema names are used:
#   DB2 database
#   The default schema name is the value specified by the dbUserId parameter.
#   The -cdbSchemaName parameter is valid for all database types except for
#   Oracle and Microsoft SQL Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
#   The user id to authenticate with the Common database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCommonPassword

```

```

#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#cdbSchemaName=db_schema_name
#dbCommonUserId=common_db_userid
#dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbAppMeUserId
#
# Description:
#   User name for application messaging engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbAppMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbAppMeUserId parameter.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbAppMeUserId=app_me_userID
#dbAppMePassword=app_me_pwd

#####
# Parameter: dbCeiMeUserId
#
# Description:
#   User name for CEI messaging engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCeiMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCeiMeUserId parameter. If you enter
#   a user-specified a user name and password during profile creation and if
#   you specified ORACLE for -dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#####
#dbCeiMeUserId=cei_me_userID
#dbCeiMePassword=cei_me_pwd

#####
# Parameter: dbSysMeUserId
#
# Description:
#   The default user name for the SCA system bus messaging engine is the first
#   three characters of the Oracle database service name. For example: If the
#   database service name is ORCL, dbSysMeUserId is ORCSS00.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbSysMePassword
#
# Description:
#   The default password for the SCA system bus messaging engine is
#   dbPassword.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbSysMeUserId=sys_me_userID
#dbSysMePassword=sys_me_pwd

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage

```

```

# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter: webFormConfig
#
# Description:
# Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
# with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
# is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
# Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
# required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
# stand-alone server profiles only.
# Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
# for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
# false
# true

```

```

# Default Values:
#   false
#
# Parameter: webFormHTTP
#
# Description:
#   Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
#   for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
#   is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
#   for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: webFormInstallRoot
#
# Description:
#   Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
#   the IBM Forms Server install root might be
#   C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
#   if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter: configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
configureBRM=false

#####
# Parameter: configureBPC
#
# Description:
#   Determines whether the Business Process Choreographer sample configuration
#   is created.
#   The following conditions apply:
#   Only DB2 databases are supported.
#   The default is set to true for DB2.
#   It uses its own schema within the common database (CMNDB) and the schema
#   name is always BPEDB.
#   Business Process Choreographer database parameters set in the Database
#   Design Tool and generated to the database design file are ignored by
#   Business Process Choreographer at profile creation time.
#   See -bpmdbDesign for information about the database design file.
#   Note: If these conditions are too restrictive, consider setting
#   -configureBPC to false and using other documented methods to configure
#   Business Process Choreographer.
#

```

```

# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   true
#####
configureBPC=true

```

**DB2 for z/OS 用の Advanced Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、DB2 for z/OS データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Adv profile that uses DB2zOS.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Standalone_DB2zOS.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.

```

```

# Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
# a valid template directory.
#
# When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
# path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsrv.adv
#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01
#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard
#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.

```

```

# The default value for this parameter is based on a combination of the
# short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
# if (DMgr)
#     shortHostNameCellCellNumber
# else
#     shortHostNameNodeNodeNumberCell
# where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
# the node number that you used to define the node name.
# The value for this parameter must not contain spaces or any characters
# that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#     Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#     Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#     that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#     This parameter is required for profile creation only with the
#     dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#     procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#     The default value for this parameter is based on the short host name,
#     profile type, and a trailing number, for example:
#     if (DMgr)
#         shortHostNameCellManagerNodeNumber
#     else
#         shortHostNameNodeNodeNumber
#     where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#     The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#     that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:
#     Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1
#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
#     Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#     to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#     Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#     offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#     Varies
# Default Values:
#     None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#     Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This

```

```

# parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
# is required if the Process Server is online (connected to a Process
# Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
# advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in
#   quotation marks. This default personal certificate is located in the
#   server keystore file. If you do not specifically create or import a root
#   signing certificate, one is created by default. See the
#   -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter

```

```

# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
# for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.

```

```

# Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
# parameter.
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem

```

```

#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password

```

```

#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of
#   database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
#   Required only for one of the following:
#   A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
#   An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   DB2UDBOS390
# Default Values:
#   DB2UDBOS390
#####
dbType=DB2UDBOS390

#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
#   Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#   created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#   default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#   scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#   database to be set up during profile creation.

```

```

#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=true

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   CMNDB
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies

```

```

# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbStorageGroup
#
# Description:
#   The storage group name for DB2 z/OS databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbConnectionLocation
#
# Description:
#   The location of DB2 for z/OS database.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbStorageGroup=db_stg_group
dbConnectionLocation=db2_location

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####

```

```

# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter: webFormConfig
#
# Description:
# Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
# with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
# is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
# Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
# required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
# stand-alone server profiles only.
# Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
# for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: webFormHTTP
#
# Description:
# Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
# for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
# is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
# for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```

```

# Parameter: webFormInstallRoot
#
# Description:
#   Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
#   the IBM Forms Server install root might be
#   C:/IBM/IBMFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
#   if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter: configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
configureBRM=false

```

**Oracle 用の Advanced Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:**

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティと一緒に使用して、Oracle データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Adv profile that uses Oracle.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Standalone_Oracle.response
#

```

```

# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#
# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter: templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr.adv

#####
# Parameter: profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumber where profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileName where
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

```

```

#####
# Parameter: applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#
# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter: cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter: serverName
#
# Description:

```

```

# Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter: processCenterURL
#
# Description:
# Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
# to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
# Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
# offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
# Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
# parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
# is required if the Process Server is online (connected to a Process
# Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
# advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
# Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
# This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
# parameter is required if the Process Server is online (connected to a
# Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
# or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password

#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
# For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
# security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
# You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
# along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
# true
# Default Values:
# true
#####
enableAdminSecurity=true

```

adminUserName=adminUser\_ID  
adminPassword=adminPassword

```
#####  
# Parameter: signingCertDN  
#  
# Description:  
# Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you  
# create when you create the profile. Specify the distinguished name in  
# quotation marks. This default personal certificate is located in the  
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root  
# signing certificate, one is created by default. See the  
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.  
#  
# Valid Values:  
# Varies  
# Default Values:  
# None  
#  
# Parameter: signingCertValidityPeriod  
#  
# Description:  
# An optional parameter that specifies the amount of time in years that the  
# root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter  
# with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid  
# for 20 years.  
#  
# Valid Values:  
# Varies  
# Default Values:  
# None  
#  
# Parameter: keyStorePassword  
#  
# Description:  
# Specifies the password to use on all keystore files created during profile  
# creation. Keystore files are created for the default personal certificate  
# and the root signing certificate.  
#  
# Valid Values:  
# Varies  
# Default Values:  
# None  
#####  
#signingCertDN =distinguished_name  
#signingCertValidityPeriod =validity_period  
#keyStorePassword =keyStore_password  
#####  
# Parameter: defaultPorts  
#  
# Description:  
# Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this  
# parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.  
# During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an  
# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the  
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile  
# parameter. The recommended port values can be different than the default  
# port values based on the availability of the default ports.  
#  
# Valid Values:  
# Varies  
# Default Values:  
# None  
#  
# Parameter: startingPort  
#
```

```

# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter:  enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter:  serviceUserName
#

```

```

# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true

```

```

# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic
#   disabled
#   The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
#   manual
#   automatic
#   disabled
# Default Values:
#   manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType=manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
#   Specifies the file that holds the database configuration design for all of
#   the IBM Business Process Manager components .
#   This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
#   versions of WebSphere Process Server.
#
#   Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
#   related properties should be specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
#   Indicates a new database is created or if an existing database is to be
#   reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
#   Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
#   a DB2 database.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
#   The database type. Set one of the following values for the type of

```

```

# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# ORACLE
# Default Values:
# ORACLE
#
# Parameter: dbDriverType
#
# Description:
# The database driver type. For an Oracle database, specify ORACLE. For
# databases other than Oracle, the value is automatically set based on the
# server operating system. Server installations on all operating systems use
# type 4.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbJDBCClasspath
#
# Description:
# The directory path location of JDBC driver files.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbType=ORACLE
dbDriverType=ORACLE_THIN
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/Oracle
#####
# Parameter: dbLocation
#
# Description:
# The directory of the ORACLE_HOME directory. This parameter is required
# when the parameter dbDelayConfig is set to false. No, this parameter is
# only valid if you are using Oracle databases.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbLocation=db_location
#####
# Parameter: dbDelayConfig
#
# Description:
# Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
# created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by

```

```

# default. Setting this parameter to true delays the execution of the
# scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
# database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
dbDelayConfig=false

#####
# Parameter: dbName
#
# Description:
#   The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#   databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   orcl
#
# Parameter: dbUserId
#
# Description:
#   The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#   privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#   uses this ID to authenticate the database connection.
#   Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#   authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=orcl
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd

#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName can be the same.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPassword
#
# Description:
#   Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
#   Performance Data Warehouse.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPassword=db_PerfDW_Password
#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:

```

```

# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePassword
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserID
dbProcSvrMePassword=db_ProcSvr_Me_Password
#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine. This
# parameter is required.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePassword
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password
#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
# default user name is the first three characters of the Oracle database
# service name. For example: If the database service name is ORCL,
# dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
# Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
# profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
# and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#

```

```

# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
#   all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
#   deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
#   to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pwd
#####

# Parameter: dbAppMeUserId
#
# Description:
#   The default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbAppMeUserId is ORCSA00. If you enter a user-specified a user name and
#   password during profile creation and if you specified ORACLE for dbType,
#   this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbAppMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbAppMeUserId parameter. If you enter
#   a user-specified a user name and password during profile creation and if
#   you specified ORACLE for dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbAppMeUserId=app_me_userID
dbAppMePassword=app_me_pwd
#####

# Parameter: dbCeimeUserId
#
# Description:
#   The default user name is the first three characters of the Oracle database
#   service name. For example: If the database service name is ORCL,
#   dbCeimeUserId is ORCCM00. If you enter a user-specified a user name and
#   password during profile creation and if you specified ORACLE for dbType,
#   this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:

```

```

# None
#
# Parameter: dbCeiMePassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbCeiMeUserId parameter. If you enter
# a user-specified a user name and password during profile creation and if
# you specified ORACLE for -dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbCeiMeUserId=cei_me_userID
dbCeiMePassword=cei_me_pwd
#####
# Parameter: dbSysMeUserId
#
# Description:
# The default user name for the SCA system bus messaging engine is the first
# three characters of the Oracle database service name. For example: If the
# database service name is ORCL, dbSysMeUserId is ORCSS00. If you enter a
# user-specified a user name and password during profile creation, this
# parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbSysMePassword
#
# Description:
# The default password for the SCA system bus messaging engine is
# dbPassword. If you enter a user-specified a user name and password during
# profile creation, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbSysMeUserId=sys_me_userID
dbSysMePassword=sys_me_pwd
#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
# Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
# has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
environmentName=environment_name

```

```

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
# Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
# Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
# test environment. Load testing might be done on a test server, while a
# stage environment type might be used as a temporary location to host
# changes before putting those changes into production. You might specify
# Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
# accessed and used to review content and new functionality. Valid values
# are as follows:
# Test
# Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
# environment.
# Stage
# Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
# preproduction server.
# Production
# Use Production if the server is to serve in a production capacity.
# The default value is Test.
#
# Valid Values:
# Test
# Production
# Stage
# Default Values:
# Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
# Specifies whether the server is intended for development purposes only.
# This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
# non-production server prior to deploying the applications on their
# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

```

```

#####
# Parameter: webFormConfig
#
# Description:
#   Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
#   with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
#   is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
#   Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
#   required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#   Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
#   for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: webFormHTTP
#
# Description:
#   Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
#   for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
#   is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
#   for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: webFormInstallRoot
#
# Description:
#   Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
#   the IBM Forms Server install root might be
#   C:/IBM/IBMFoamsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only
#   if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
#   stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter: configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
configureBRM=false

#####
# Parameter: configureBPC
#

```

```

# Description:
#   Determines whether the Business Process Choreographer sample configuration
#   is created.
#   The following conditions apply:
#   Only DB2 databases are supported.
#   The default is set to true for DB2.
#   It uses its own schema within the common database (CMNDB) and the schema
#   name is always BPEDB.
#   Business Process Choreographer database parameters set in the Database
#   Design Tool and generated to the database design file are ignored by
#   Business Process Choreographer at profile creation time.
#   See -bpmdbDesign for information about the database design file.
#   Note: If these conditions are too restrictive, consider setting
#   -configureBPC to false and using other documented methods to configure
#   Business Process Choreographer.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
configureBPC=false

```

### SQL 用の Advanced Process Server スタンドアロン・プロファイル作成の応答ファイル:

ここに用意されている応答ファイルを変更し、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーと一緒に使用して、SQL データベース用のスタンドアロン・プロファイルを作成します。

注: ご使用のオペレーティング・システムに合わせて、必要に応じて応答ファイルの情報をコメント化またはアンコメントしてください。詳細については、応答ファイルのコメントを参照してください。

```

# BEGIN COPYRIGHT
# *****
#
# Licensed Materials - Property of IBM
# 5725-C94
# (C) Copyright IBM Corporation 2011, 2012. All Rights Reserved.
# This sample program is provided AS IS and may be used, executed, copied
# and modified without royalty payment by customer (a) for its own
# instruction and study, (b) in order to develop applications designed to
# run with an IBM WebSphere product, either for customer's own internal
# use or for redistribution by customer, as part of such an application,
# in customer's own products.
#
# *****
# END COPYRIGHT

#####
# These response file has the applicable parameters for creating a
# Standalone PS Adv profile that uses SQLServer.
#
# Depending on your environment, you may need to change the default values.
#
# To create a profile with this response file specify:
#
# was.install.root/bin/manageprofiles -response PS_Adv_Standalone_SQLServer.response
#
# If you use the -response parameter, it must be the only parameter on
# the command-line. If you include any manageprofile parameters
# (in addition to -response) on the command-line, the response file
# is ignored. And default WebSphere Application server profile will be created .
#####

#####
# Parameter: create
#

```

```

# Description:
#   Creates the profile.
#   If you are creating a profile, this parameter is required.
#####
create

#####
# Parameter:  templatePath
#
# Description:
#   Specifies the directory path to the template files in the installation
#   root directory. Within the profileTemplates directory are various
#   directories that correspond to different profile types and that vary with
#   the type of product installed. The profile directories are the paths that
#   you indicate while using the -templatePath option.
#   Use absolute paths. This parameter must exist as a directory and point to
#   a valid template directory.
#
#   When using the -templatePath parameter, specify the fully qualified file
#   path for the parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
templatePath=BPM/default.procsvr.adv

#####
# Parameter:  profileName
#
# Description:
#   Specifies the name of the profile. Use a unique value when creating a
#   profile.
#   Each profile that shares the same set of product binaries must have a
#   unique name. The default profile name is based on the profile type and a
#   trailing number, for example:
#   profileType ProfileNumberwhere profileType is a value such as ProcSrv,
#   Dmgr, or Custom and ProfileNumber is a sequential number that creates a
#   unique profile name. The value for this parameter must not contain spaces
#   or characters that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,,
#   /, \, and |. The profile name that you choose must not be in use. On
#   Windows platforms: If the fully qualified path contains spaces, enclose
#   the value in quotation marks. The default value is based on the
#   install_root directory, the profiles subdirectory, and the name of the
#   file. For example, the default for profile creation is:
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME/profileNamewhere
#   WS_WSPROFILE_DEFAULT_PROFILE_HOME is defined in the wasprofile.properties
#   file in the install_root/properties directory. The value for this
#   parameter must be a valid path for the target system and must not be
#   currently in use. You must have permissions to write to the directory.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
profileName=ProcSrv01

#####
# Parameter:  applyPerfTuningSetting
#
# Description:
#   Set a performance tuning level appropriate for the profile you are
#   creating.
#   This parameter is a WebSphere Application Server parameter.
#

```

```

# Valid Values:
#   development
#   standard
#   production
# Default Values:
#   None
#####
#applyPerfTuningSetting=standard

#####
# Parameter:  cellName
#
# Description:
#   Specifies the cell name of the profile. Use a unique cell name for each
#   profile.
#   The default value for this parameter is based on a combination of the
#   short host name, the constant Cell, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellCellNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumberCell
#   where CellNumber is a sequential number starting at 01 and NodeNumber is
#   the node number that you used to define the node name.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  nodeName
#
# Description:
#   Specifies the node name for the node that is created with the new profile.
#   Use a unique value within the cell or on the workstation. Each profile
#   that shares the same set of product binaries must have a unique node name.
#   This parameter is required for profile creation only with the
#   dmgr.esbserverdefault.procsvrdefault.procctrdefault.procsvr.advdefault.
#   procctr.advdmgr.procctrmanaged.procctrmanaged.procsvr templates.
#   The default value for this parameter is based on the short host name,
#   profile type, and a trailing number, for example:
#   if (DMgr)
#       shortHostNameCellManagerNodeNumber
#   else
#       shortHostNameNodeNodeNumber
#   where NodeNumber is a sequential number starting at 01.
#   The value for this parameter must not contain spaces or any characters
#   that are not valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   Varies
#
# Parameter:  serverName
#
# Description:
#   Specifies the name of the server.
#####
cellName=cell_name
nodeName=node_name
serverName=server1

#####
# Parameter:  processCenterURL
#

```

```

# Description:
#   Specifies the URL of the Process Center that the Process Server connects
#   to. If this parameter is set, the protocol must be either http or https.
#   Note: No corresponding useServerOffline parameter exists to use the server
#   offline. To use the server offline, omit the processCenterURL parameter.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterUserId
#
# Description:
#   Specifies the user ID to be used to connect to the Process Center. This
#   parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This parameter
#   is required if the Process Server is online (connected to a Process
#   Center). It is required for a stand-alone process server (standard or
#   advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: processCenterPassword
#
# Description:
#   Specifies the user password to be used to connect to the Process Center.
#   This parameter is valid for stand-alone Process Server profiles. This
#   parameter is required if the Process Server is online (connected to a
#   Process Center). It is required for a stand-alone process server (standard
#   or advanced) profile if the processCenterURL parameter is specified.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
processCenterURL=process_Center_URL
processCenterUserId=process_Center_UserId
processCenterPassword=process_Center_Password
#####
# Parameter: enableAdminSecurity
#
# Description:
#   For IBM Business Process Manager omit this parameter. Administrative
#   security is always enabled for IBM Business Process Manager profiles.
#   You must also specify the parameters -adminUserName and -adminPassword
#   along with the values for these parameters.
#
# Valid Values:
#   true
# Default Values:
#   true
#####
enableAdminSecurity=true
adminUserName=adminUser_ID
adminPassword=adminPassword
#####
# Parameter: signingCertDN
#
# Description:
#   Specifies the distinguished name of the root signing certificate that you
#   create when you create the profile. Specify the distinguished name in

```

```

# quotation marks. This default personal certificate is located in the
# server keystore file. If you do not specifically create or import a root
# signing certificate, one is created by default. See the
# -signingCertValidityPeriod parameter and the -keyStorePassword.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: signingCertValidityPeriod
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the amount of time in years that the
#   root signing certificate is valid. If you do not specify this parameter
#   with the -signingCertDN parameter, the root signing certificate is valid
#   for 20 years.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: keyStorePassword
#
# Description:
#   Specifies the password to use on all keystore files created during profile
#   creation. Keystore files are created for the default personal certificate
#   and the root signing certificate.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#signingCertDN =distinguished_name
#signingCertValidityPeriod =validity_period
#keyStorePassword =keyStore_password
#####
# Parameter: defaultPorts
#
# Description:
#   Assigns the default or base port values to the profile.d o not use this
#   parameter when using the -startingPort or -portsFile parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: startingPort
#
# Description:
#   Specifies the starting port number for generating and assigning all ports
#   for the profile.
#   Port values are assigned sequentially from the -startingPort value,
#   omitting those ports that are already in use. The system recognizes and
#   resolves ports that are currently in use and determines the port
#   assignments to avoid port conflicts.
#   Do not use this parameter with the -defaultPorts or -portsFile parameters.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an

```

```

# automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
# -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
# parameter. The recommended port values can be different than the default
# port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: portsFile
#
# Description:
#   An optional parameter that specifies the path to a file that defines port
#   settings for the new profile.
#   Do not use this parameter when using the -startingPort or -defaultPorts
#   parameter.
#   During profile creation, the manageprofiles command-line utility uses an
#   automatically generated set of recommended ports if you do not specify the
#   -startingPort parameter, the -defaultPorts parameter or the -portsFile
#   parameter. The recommended port values can be different than the default
#   port values based on the availability of the default ports.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#defaultPorts=default_ports
#startingPort=startingPort
#portsFile=file_path
#####
# Parameter: enableService
#
# Description:
#   Enables the creation of a Linux service. Valid values include true or
#   false. The default value for this parameter is false. When the
#   manageprofiles command-line utility is run with the -enableService option
#   set to true , the Linux service is created with the profile when the
#   command is run by the root user. When a nonroot user runs the
#   manageprofiles command-line utility, the profile is created, but the Linux
#   service is not. The Linux service is not created because the nonroot user
#   does not have sufficient permission to set up the service. An
#   INSTCONPARTIALSUCCESS result is displayed at the end of the profile
#   creation and the profile creation log
#   install_root/logs/manageprofiles/profile_name_create.log contains a
#   message indicating the current user does not have sufficient permission to
#   set up the Linux service. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: serviceUserName
#
# Description:
#   Specifies the user ID that is used during the creation of the Linux
#   service so that the Linux service will run under this user ID. The Linux
#   service runs whenever the user ID is logged on. Not required.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None

```

```

#
# Parameter: winserviceAccountType
#
# Description:
#   The type of the owner account of the Windows service created for the
#   profile. Valid values include specifieduser or localsystem. The
#   localsystem value runs the Windows service under the local account of the
#   user who creates the profile. The default value for this parameter is
#   localsystem. Use this parameter when creating profiles only.
#
# Valid Values:
#   localsystem
#   specifieduser
# Default Values:
#   localsystem
#
# Parameter: winserviceUserName
#
# Description:
#   Specify your user ID so that the Windows operating system can verify you
#   as an ID that is capable of creating a Windows service. Your user ID must
#   belong to the Administrator group and have the following advanced user
#   rights:
#   Act as part of the operating system
#   Log on as a service
#   The default value for this parameter is the current user name. The value
#   for this parameter must not contain spaces or characters that are not
#   valid such as the following: *, ?, ", <, >, ,, /, \, and |. The user that
#   you specify must have the proper permissions to create a Windows service.
#   You must specify the correct password for the user name that you choose.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winservicePassword
#
# Description:
#   Specify the password for the specified user or the local account that is
#   to own the Windows service.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: winserviceCheck
#
# Description:
#   The value can be either true or false. Specify true to create a Windows
#   service for the server process that is created within the profile. Specify
#   false to not create the Windows service. The default value for this
#   parameter is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#
# Parameter: winserviceStartupType
#
# Description:
#   The following values for Windows service startup can be used:
#   manual
#   automatic

```

```

# disabled
# The default value for this parameter is manual.
#
# Valid Values:
# manual
# automatic
# disabled
# Default Values:
# manual
#####
#enableService=true
#serviceName=service_user_ID
#winserviceAccountType=localsystem
#winserviceUserName=winservice_user_ID
#winservicePassword=winservice_password
#winserviceCheck=false
#winserviceStartupType>manual

#####
# Parameter: bpmdbDesign
#
# Description:
# Specifies the file that holds the database configuration design for all of
# the IBM Business Process Manager components .
# This parameter replaces the -wbldbDesign that was used in previous
# versions of WebSphere Process Server.
#
# Note: If a bpmdbDesign file parameter is specified, none of the database
# related properties should be specified.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
#bpmdbDesign=design_file

#####
# Parameter: dbCreateNew
#
# Description:
# Indicates a new database is created or if an existing database is to be
# reused. Valid values are true or false. This value cannot be true for an
# Oracle, SQL Server or a DB2 z/OS database. This value can only be true for
# a DB2 database.
#
# Valid Values:
# false
# Default Values:
# false
#####
dbCreateNew=false

#####
# Parameter: dbType
#
# Description:
# The database type. Set one of the following values for the type of
# database product you are using with IBM Business Process Manager.
#
# Required only for one of the following:
# A stand-alone profile when -bpmdbDesign was not specified.
# An advanced dmgr or managed profiles when -bpmdbDesign was not specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:

```

```

#      MSSQLSERVER_MICROSOFT
# Default Values:
#      MSSQLSERVER_MICROSOFT
#
# Parameter:  dbJDBCClasspath
#
# Description:
#      The directory path location of JDBC driver files.
#
#      Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#      Varies
# Default Values:
#      None
#####
dbType=MSSQLSERVER_MICROSOFT
dbJDBCClasspath=${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/SQLServer
#####
# Parameter:  dbDelayConfig
#
# Description:
#      Indicates whether to postpone table creation until after the profile is
#      created. Valid values are true or false. The parameter is set to false by
#      default. Setting this parameter to true delays the execution of the
#      scripts that create the database tables. No. Specify false if you want the
#      database to be set up during profile creation.
#
# Valid Values:
#      false
#      true
# Default Values:
#      false
#####
dbDelayConfig=false
#####
# Parameter:  dbName
#
# Description:
#      The name of the database. By default, the value is set to orcl for Oracle
#      databases and to CMNDB for all other supported databases.
#
#      Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#      Varies
# Default Values:
#      CMNDB
#
# Parameter:  dbUserId
#
# Description:
#      The user ID for all database types. Specifies the user ID that has
#      privileges to create and drop the databases. The WebSphere data source
#      uses this ID to authenticate the database connection.
#      Important: The -dbUserId parameter value must be a valid database
#      authorization ID. Required if the -bpmdbDesign file is not set.
#
#      Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#      Varies
# Default Values:
#      None
#

```

```

# Parameter: dbPassword
#
# Description:
#   The password required for database authentication. Required when the
#   -bpmdbDesign file is not set.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
dbName=CMNDB
dbUserId=db_userid
dbPassword=db_pswd
#####
# Parameter: procSvrDbName
#
# Description:
#   Database name for Process Server database. The value specified for
#   -procSvrDbName and -perfDWDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrUserId
#
# Description:
#   The Process Server user name. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbProcSvrPassword
#
# Description:
#   The Process Server password. Required for setting up the Process Server.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
procSvrDbName=procSvr_Db_Name
dbProcSvrUserId=db_ProcSvr_UserId_name
dbProcSvrPassword=db_ProcSvr_Password
#####
# Parameter: perfDWDbName
#
# Description:
#   Database name for Performance Data Warehouse. The value specified for
#   -perfDWDbName and -procSvrDbName must be different.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.

```

```

#
# Parameter: dbPerfDWUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse user name. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Parameter: dbPerfDWPASSWORD
#
# Description:
# Performance Data Warehouse password. Required for setting up the
# Performance Data Warehouse.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#####
perfDWDbName=perfDW_Db_Name
dbPerfDWUserId=db_PerfDW_UserId
dbPerfDWPASSWORD=db_PerfDW_Password

#####
# Parameter: dbProcSvrMeUserId
#
# Description:
# Process Server Messaging Engine user name. Required for setting up the
# Process Server Messaging Engine. If you enter a user-specified a user name
# and password during profile creation and if you specified ORACLE for
# dbType, this parameter is required.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbProcSvrMePASSWORD
#
# Description:
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbProcSvrMeUserId=db_ProcSvr_ME_UserId
dbProcSvrMePASSWORD=db_ProcSvr_Me_Password

#####
# Parameter: dbPerfDWMeUserId
#
# Description:
# Performance Data Warehouse Messaging Engine user name. Required for
# setting up the Performance Data Warehouse Messaging Engine.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbPerfDWMePASSWORD
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:

```

```

# None
#####
dbPerfDWMeUserId=db_PerfDW_Me_UserId
dbPerfDWMePassword=db_PerfDW_ME_Password

#####
# Parameter: dbCommonUserId
#
# Description:
# The user id to authenticate with the Common database. For Oracle, the
# default user name is the first three characters of the Oracle database
# service name. For example: If the database service name is ORCL,
# dbCommonUserId is ORCCOMM. Required for all stand-alone IBM Business
# Process Manager profiles and advanced deployment manager (dmgr.*.adv)
# profiles, if the -dbType parameter is set to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER
# and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbCommonPassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbCommonUserId parameter. Required for
# all stand-alone IBM Business Process Manager profiles and advanced
# deployment manager (dmgr.*.adv) profiles, if the -dbType parameter is set
# to ORACLE or MICROSOFT_SQLSERVER and no bpmdbDesign file was specified.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
dbCommonUserId=common_db_userid
dbCommonPassword=common_db_pswd

#####
# Parameter: dbAppMeUserId
#
# Description:
# User name for application messaging engine.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: dbAppMePassword
#
# Description:
# The password for the user id of the dbAppMeUserId parameter.
#
# Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####

```

```

#dbAppMeUserId=app_me_userID
#dbAppMePassword=app_me_pwd

#####
# Parameter: dbCeiMeUserId
#
# Description:
#   User name for CEI messaging engine.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbCeiMePassword
#
# Description:
#   The password for the user id of the dbCeiMeUserId parameter. If you enter
#   a user-specified a user name and password during profile creation and if
#   you specified ORACLE for -dbType, this parameter is required.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbCeiMeUserId=cei_me_userID
#dbCeiMePassword=cei_me_pwd

#####
# Parameter: dbSysMeUserId
#
# Description:
#   The default user name for the SCA system bus messaging engine is the first
#   three characters of the Oracle database service name. For example: If the
#   database service name is ORCL, dbSysMeUserId is ORCSS00.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#
# Parameter: dbSysMePassword
#
# Description:
#   The default password for the SCA system bus messaging engine is
#   dbPassword.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#dbSysMeUserId=sys_me_userID
#dbSysMePassword=sys_me_pwd

#####
# Parameter: dbWinAuth
#

```

```

# Description:
#   An optional parameter that is valid in all default profile templates.
#   Specify true to indicate that you are running SQL Server using integrated
#   windows authentication.
#
#   Note: Do not use this parameter if you are using -bpmdbDesign.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   None
#####
#dbWinAuth=true

#####
# Parameter: environmentName
#
# Description:
#   Specifies the name of the environment you are configuring. This parameter
#   has no default value, and it must not be empty.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
environmentName=environment_name

#####
# Parameter: environmentType
#
# Description:
#   Specifies the environment type. The environment type refers to how IBM
#   Business Process Manager is used; for example, in a production, stage or
#   test environment. Load testing might be done on a test server, while a
#   stage environment type might be used as a temporary location to host
#   changes before putting those changes into production. You might specify
#   Stage as the Environment type if the server you are configuring will be
#   accessed and used to review content and new functionality. Valid values
#   are as follows:
#   Test
#   Use Test if the server you are configuring is to be used as a testing
#   environment.
#   Stage
#   Use Stage if the server is to serve as a staging platform to be used as a
#   preproduction server.
#   Production
#   Use Production if the server is to serve in a production capacity.
#   The default value is Test.
#
# Valid Values:
#   Test
#   Production
#   Stage
# Default Values:
#   Test
#####
environmentType=Test

#####
# Parameter: isDeveloperServer
#
# Description:
#   Specifies whether the server is intended for development purposes only.
#   This parameter is useful when creating profiles to test applications on a
#   non-production server prior to deploying the applications on their

```

```

# production application servers. If -isDeveloperServer is set when
# creating an IBM Business Process Manager profile, then a preconfigured VMM
# file repository is installed. This file repository contains a sample
# organization that can be used to test Business Process Choreographer
# people resolution, ready for you to use as is.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#####
#isDeveloperServer=false

#####
# Parameter: samplesPassword
#
# Description:
# Creates a password to be used for samples. The password is used to
# restrict access to Web application samples installed during the
# installation of the application server.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#####
samplesPassword=samplesPassword

#####
# Parameter: webFormConfig
#
# Description:
# Indicates if Business Space is configured to use IBM Forms Server to work
# with Human Task Management widgets. The default value for this parameter
# is false. Indicate true to configure Business Space to use IBM Forms
# Server. Both the webFormConfig and webFormInstallRoot parameters are
# required to configure IBM Forms Server. This parameter is valid for
# stand-alone server profiles only.
# Note: IBM Forms Server configuration using these parameters is only valid
# for local IBM Forms Server installations.
#
# Valid Values:
# false
# true
# Default Values:
# false
#
# Parameter: webFormHTTP
#
# Description:
# Specifies the location of the IBM Forms Server Translator. The default URL
# for the location is http://localhost:8085/translator. No. This parameter
# is valid only if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid
# for stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
# Varies
# Default Values:
# None
#
# Parameter: webFormInstallRoot
#
# Description:
# Specifies the full path where IBM Forms Server is installed. For example,
# the IBM Forms Server install root might be
# C:/IBM/IBMFFormsServer/4.0/WebFormServer. No. This parameter is valid only

```

```

# if the -webFormConfig parameter is set to true. It is valid for
# stand-alone server profiles only.
#
# Valid Values:
#   Varies
# Default Values:
#   None
#####
#webFormConfig=false
#webFormHTTP=URL
#webFormInstallRoot=Webform_Server_install_root

#####
# Parameter:  configureBRM
#
# Description:
#   Configures the business process rules manager. The default value is false.
#
# Valid Values:
#   false
#   true
# Default Values:
#   false
#####
configureBRM=false

#####
# Parameter:  configureBPC
#
# Description:
#   Determines whether the Business Process Choreographer sample configuration
#   is created.
#   The following conditions apply:
#   Only DB2 databases are supported.
#   The default is set to true for DB2.
#   It uses its own schema within the common database (CMNDB) and the schema
#   name is always BPEDB.
#   Business Process Choreographer database parameters set in the Database
#   Design Tool and generated to the database design file are ignored by
#   Business Process Choreographer at profile creation time.
#   See -bpmdbDesign for information about the database design file.
#   Note: If these conditions are too restrictive, consider setting
#   -configureBPC to false and using other documented methods to configure
#   Business Process Choreographer.
#
# Valid Values:
#   false
# Default Values:
#   false
#####
configureBPC=false

```

### manageprofiles の例:

このセクションの例では、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、スタンドアロン・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム (管理対象ノード) プロファイルを作成する方法を示します。

#### 関連タスク:

201 ページの『**manageprofiles** を使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの作成』

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、IBM Business Process Manager Express 用の Process Server スタンドアロン・プロファイルを作成します。

152 ページの『manageprofiles を使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』  
IBM Business Process Manager Express 用の Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するに  
は、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

**例: DB2 データベースおよび manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用した Process Server プロファイルの作成:**

このトピックには、DB2 データベースを備えたインストール済み環境で **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した、*Process Server* スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成に役立つプロファイル作成コマンド実例が記載されています。

**スタンドアロン・サーバーのプロファイル**

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_BPM\_PSVRSA\_profile* と呼ばれる IBM Business Process Manager スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成します。指定の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターおよび デフォルト指定の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターにおけるパラメーターは、以下のものを指定します。

- DB2 データベース製品は Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースに使用され、これらはすべてローカル・ホストに既に存在すると想定されています。すべてのデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。データベース関連の **manageprofiles** パラメーターの完全なリストは、トピック『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント:** **manageprofiles** コマンド行ユーティリティが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターと値の例を示したものです。

表 55. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥ profileTemplates¥BPM¥ default.procsvr" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRSA_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbServerPort	"50000"
-dbHostName	"localhost"
-dbType	"DB2_UNIVERSAL" または "DB2_DATASERVER"
-procSvrDbName	"BPMDB"

表 55. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-perfDWDdbName	"PDWDB"
-dbCreateNew	"false"
-dbDelayConfig	"true"
-dbUserId	"db_id"
-dbPassword	"db_pwd"
-samplesPassword	"samples_pwd"
-environmentName	"environment_name"

**要確認:** **enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

**ヒント:** **samplesPassword** パラメーターは、サンプルを使用している場合のみ必要です。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 56. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root\profiles\my_BPM_PSVRSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
<b>Windows</b> -environmentType	"Test"
<b>Windows</b> -processCenterURL	URL が指定されていない場合は、デフォルトでオフライン・サーバーになります。
<b>Windows</b> -winserviceCheck	"true"
<b>Windows</b> -winserviceAccountType	"localsystem"
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root\jdbcdrivers\DB2"
-dbOutputScriptDir	"install_root\profiles\my_BPM_PSVRSA_profile \dbscripts"

**例: Oracle データベースおよび **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した Process Center プロファイルの作成:**

このトピックには、Oracle データベースを備えたインストール済み環境で **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した、Process Center スタンドアロン・サーバー・プロファイル、デプロイメント・マネージャー・プロファイル、およびカスタム・プロファイルの作成に役立つプロファイル作成コマンド実例が記載されています。

## スタンドアロン・サーバーのプロファイル

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_BPM\_PCTRSA\_profile* と呼ばれる Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成します。

指定の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターでのパラメーターは、以下の機能を指定します。

- Oracle データベース製品は Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースに使用され、これらはローカル・ホストに既に存在すると想定されています。すべてのデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント:** **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

- 管理セキュリティーは使用可能になります。

データベース構成を実行する前に、プロファイル作成用に指定されたすべてのユーザー ID がデータベース内になければなりません。

- **dbDelayConfig** が **false** に設定されている場合は、プロファイルを作成する前にユーザー ID を作成する必要があります。
- **dbDelayConfig** が **true** に設定されている場合は、プロファイル作成が完了してからサーバーを始動するまでの間に、データベース表と同時にユーザー ID を作成できます。

**注:** **dbDelayConfig** が **true** に設定されている場合は、サーバーを始動する前に **bootstrapProcessServerData** スクリプトを実行する必要があります。詳しくは、368 ページの『データベースへのシステム情報のロード』を参照してください。このシナリオでは、このステップがスタンドアロン・プロファイルに適用されます。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 57. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root¥profileTemplates¥BPM¥ default.procctr" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PCTRSA_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbServerPort	"1521"
-dbType	"ORACLE"

表 57. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-procSvrDbName	"BPMDB"
-dbProcSvrUserId	"procsvr_db_id"
-dbProcSvrPassword	"procsvr_db_pwd"
-perfDWDbName	"PDWDB"
-dbPerfDWUserId	"perfdw_db_id"
-dbPerfDWPassword	"perfdw_db_pwd"
-dbDelayConfig	"true"
-samplesPassword	"samples_pwd"
-environmentName	"environment_name"

**要確認:** **enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

**ヒント:** **samplesPassword** パラメーターは、サンプルを使用している場合のみ必要です。

**制約事項:** **dbProcSvrUserId** および **dbPerfDWUserId** パラメーターは、同じ値が **procSvrDbname** および **perfDWDbName** パラメーターに与えられていた場合には、同じ値を持つことはできません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 58. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥my_BPM_PCTRSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
<b>Windows</b> -environmentType	"Test"
<b>Windows</b> -winserviceCheck	"true"
<b>Windows</b> -winserviceAccountType	"localsystem"
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcdrivers¥Oracle"
-dbOutputscriptDir	"install_root¥profiles¥my_BPM_PCTRSA_profile¥dbscripts"
-dbHostName	"local_host_name"

『Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター』に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 59. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	値	注釈
-dbCeiMeUserId	"cei_me_userID" (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	"cei_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword
-dbAppMeUserId	"app_me_userID" (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	"app_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

**例: manageprofiles コマンド行ユーティリティによる Oracle データベースを使用した Process Server および WebSphere ESB プロファイルの作成:**

このトピックには、Oracle データベースを備えたインストール済み環境で **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した、Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの作成に役立つプロファイル作成コマンド実例が記載されています。

**スタンドアロン・サーバーのプロファイル**

以下のコマンド例は、Windows サーバー上で *my\_BPM\_PSVRSA\_profile* と呼ばれる IBM Business Process Manager スタンドアロン・プロファイルを作成します。

指定の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター、デフォルト指定の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター、および 追加の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター (Oracle 用)におけるパラメーターが以下の機能を指定します。

- Oracle データベース製品はProcess Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースに使用され、これらはすべてローカル・ホストに既に存在すると想定されています。すべてのデータベースは後で構成するように設定されています (**-dbDelayConfig "true"** のコマンド・パラメーター値は、構成スクリプトは作成されますが実行されないことを指定します)。データベース関連の **manageprofiles** パラメーターの完全なリストは、トピック『*manageprofiles* パラメーター』を参照してください。
- Windows サービスは手動で開始するように設定されます。
- プロファイル作成プロセスにより、ポート値 (データベース関連のポートは除く) が自動的に設定されます。このプロセスでは、新規プロファイルが他のプロファイルに対して検証され、ポートの競合が存在しないことが確認されます。

**ヒント:** **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーが指定するポート値をオーバーライドするには、**-portsFile** パラメーターを使用します。すべての有効な **manageprofiles** パラメーターのリストについては、参照資料の「*manageprofiles* パラメーター」を参照してください。

- 管理セキュリティは使用可能になります。

データベース構成を実行する前に、プロファイル作成用に指定されたすべてのユーザー ID がデータベース内になければなりません。

- **dbDelayConfig** が false に設定されている場合は、プロファイルを作成する前にユーザー ID を作成する必要があります。
- **dbDelayConfig** が true に設定されている場合は、プロファイル作成が完了してからサーバーを始動するまでの間に、データベース表と同時にユーザー ID を作成できます。

指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターは、スタンドアロン・サーバー・プロファイルを作成するために使用する **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーターと値の例を示したものです。

表 60. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値
-create	N/A
-templatePath	"install_root\profileTemplates\BPM\default.procsvr" (完全修飾されていることが必要)
-profileName	"my_BPM_PSVRSA_profile"
-adminPassword	"admin_pwd"
-adminUserName	"admin_id"
-dbServerPort	"1521"
-dbType	"ORACLE"
-procSvrDbName	"BPMDB"
-dbProcSvrUserId	"procsvr_db_id"
-dbProcSvrPassword	"procsvr_db_pwd"
-perfDWDbName	"PDWDB"
-dbPerfDWUserId	"perfdw_db_id"
-dbPerfDWPassword	"perfdw_db_pwd"

表 60. 指定される **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター (続き)

パラメーター	値
-dbDelayConfig	"true"
-environmentName	"environment_name"

**要確認:** **enableAdminSecurity** パラメーターは常に true であり、false にできないため、指定する必要はありません。

**ヒント:** **samplesPassword** パラメーターは、サンプルを使用している場合のみ必要です。

**制約事項:** **dbProcSvrUserId** および **dbPerfDWUserId** パラメーターは、同じ値が **procSvrDbname** および **perfDWDdbName** パラメーターに与えられていた場合には、同じ値を持つことはできません。

デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターは、通常では変更する必要のない **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターとデフォルト値を示したものです。

表 61. デフォルトの **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター

パラメーター	デフォルト値
-profilePath	"install_root¥profiles¥my_BPM_PSVRSA_profile"
-hostName	"host_name"
-nodeName	"host_nameNodenode_number"
-cellName	"host_nameNodenode_numbercell_numberCell"
<b>Windows</b> -winserviceCheck	"true"
<b>Windows</b> -winserviceAccountType	"localsystem"
<b>Windows</b> -winserviceStartupType	"manual"
<b>Windows</b> -winserviceUserName	"Administrator"
-dbJDBCClasspath	"install_root¥jdbcDrivers¥Oracle"
-dbOutputscriptDir	"install_root¥profiles¥ my_BPM_PSVRSA_profile¥dbscripts"
-dbHostName	"local_host_name"

『Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーター』に示すのは、プロファイル管理ツールを通じて表示されない追加の **manageprofiles** コマンド行ユーティリティ・パラメーターで、ユーザー自身の Oracle 用ユーザー名およびパスワードの組み合わせを選択するように指定することが可能です。

表 62. Oracle 用追加 **manageprofiles** コマンド行ユーティリティー・パラメーター

パラメーター	値	注釈
-dbCeiMeUserId	"cei_me_userID" (CEI ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbCeiMeId は ORCCM00。
-dbCeiMePassword	"cei_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbCeiMePassword = dbPassword
-dbAppMeUserId	"app_me_userID" (SCAAPP ME オブジェクトの作成に使用)	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、このユーザーは Oracle データベース名 (SID) に基づいて自動的に作成されます。例: SID が ORCL の場合、dbAppMeId は ORCSA00。
-dbAppMePassword	"app_me_pwd"	このパラメーターはプロファイル作成中、「カスタム・ユーザーとパスワード (Custom Users and Passwords)」オプションを選択する場合に必要です。  「単一パスワードのユーザー生成 (Generate Users with Single Password)」オプションについては、dbCeiPassword は dbPassword に設定されます。例: dbAppMePassword = dbPassword

## プロファイルの拡張

WebSphere Application Server バージョン 7.0 または WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0 の既存のプロファイルを拡張して、WebSphere Enterprise Service Bus のサポートを追加できます。

- トピック『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルの作成または拡張を行うためのリストを参照してください。
- プロファイルが以下の特性を保有していることを確認してください。
  - IBM Business Process Manager のインストール済み環境を持つシステム上に存在していること。
  - デプロイメント・マネージャーに統合されていないこと。プロファイル管理ツールまたは **manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用して、統合済みのプロファイルを拡張することはできません。
  - 稼働中のサーバーがないこと。

ご使用のシステムに WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment のプロファイルが既に存在している場合は、それらのプロファイルで定義されている稼働環境で WebSphere ESB の機能を使用できるようになります。

#### 制約事項:

- 64 ビット・アーキテクチャー (Linux on zSeries プラットフォームは除く) 上の IBM Business Process Manager インストール済み環境でプロファイルを拡張するときは、プロファイル管理ツールを使用することはできません。他の 64 ビット・アーキテクチャーでプロファイルを拡張するときは、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用できます。**manageprofiles** コマンド行ユーティリティの使用については、『manageprofiles コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの拡張』を参照してください。32 ビットの IBM Business Process Manager インストール済み環境を使用している場合は、これらのアーキテクチャー上でもプロファイル管理ツールを使用できます。

このセクションおよびサブセクション内の説明に従って、Process Server および Process Center のプロファイルを拡張します。プロファイルの拡張は、プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) を使用して対話式に行うことも、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してコマンド行から行うこともできます。

#### プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、 WebSphere Application Server バージョン 7.0、 WebSphere Application Server Network Deployment バージョン 7.0、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 7.5.1 のプロファイルを IBM Business Process Manager バージョン 7.5.1 Process Server プロファイルに拡張します。

以下の前提条件が満たされていることを確認します。

- 拡張後のプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー、デプロイメント・マネージャー、またはカスタム) が、拡張前のプロファイルのタイプと同じである。
- 119 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、デプロイメント・マネージャーに統合されていないことを確認した。

1. IBM Business Process Manager プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- **Linux** `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- **Windows** `install_root\bin\ProfileManagement\pmt.bat`

このツールを開始するためのその他の方法については、『プロファイル管理ツールの開始』を参照してください。

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」ページで、「プロファイル管理ツールの起動」ボタンまたは「プロファイル管理ツール」タブをクリックします。

「プロファイル」タブが表示されます。

3. 「プロファイル」タブで、拡張するプロファイルを強調表示し、「拡張」をクリックします。

システムに存在するプロファイルが「**プロファイル**」タブにリストされます。この手順では、既存のプロファイルを拡張するものと想定しています。

**制約事項:**

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus バージョン 6.2 のプロファイルを IBM Business Process Manager バージョン 7.0 のプロファイルに拡張することはできません。
- セル・スタンドアロン・サーバー、管理エージェント、管理ジョブ・マネージャー、またはセキュア・プロキシのプロファイルは拡張できません。
- WebSphere Application Server プロファイルまたは WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを拡張した場合は、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンから行う必要があります。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。

「拡張の選択 (Augment Selection)」ページが別ウィンドウで開きます。

4. 「拡張の選択 (Augment Selection)」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。そして、「**次へ**」をクリックします。

「プロファイル拡張オプション」ページが表示されます。

5. 「プロファイル拡張オプション」ページで、「**標準的**」または「**拡張**」プロファイル拡張を実行するように選択し、「**次へ**」をクリックします。

「**標準的**」オプションでは、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

「**高度**」オプションでは、プロファイルに独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合されたプロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
  - 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。
6. プロファイル管理ツールの次のページに進む前に、以下のいずれかのトピックに記載されている手順を行って、プロファイルの拡張を構成および完了してください。

選択したプロファイル拡張のタイプ	選択したプロファイル・タイプ (スタンドアロン・サーバー) に基づいてプロファイルの拡張を完了するための手順
標準的	Process Serverプロファイルの場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>336 ページの『「標準 (Typical)」 オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』</li> </ul> Process Center プロファイルの場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>『「標準 (Typical)」 オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』</li> </ul>
高度	Process Serverプロファイルの場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>342 ページの『「詳細 (Advanced)」 オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』</li> </ul> Process Center プロファイルの場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>329 ページの『「詳細 (Advanced)」 オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』</li> </ul>

### Process Center 用プロファイルの拡張:

「標準」プロファイル拡張オプションまたは「詳細」プロファイル拡張オプションを使用して、Process Center 用のプロファイルを拡張することができます。

#### 「標準 (Typical)」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「標準プロファイル拡張」オプションと「詳細プロファイル拡張」オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 119 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。

このタスク・トピックで説明する手順は、以下の場合に使用します。

- Process Center のスタンドアロン・サーバー・プロファイルの拡張

以下のステップは「標準プロファイル拡張」の説明です。

1. プロファイル管理ツールを開始します。

以下のいずれかのコマンドを使用します。

- Linux `install_root/bin/ProfileManagement/pmt.sh`
- Windows `install_root¥bin¥ProfileManagement¥pmt.bat`

「ようこそ」ページが表示されます。

2. 「ようこそ」 ページで、「**プロファイル管理ツールの起動 (Launch Profile Management Tool)**」をクリック、または「**プロファイル管理ツール**」タブを選択します。

「**プロファイル**」タブが表示されます。

「**プロファイル**」タブには、現在マシン上にあるプロファイルのリストが表示されます。この手順では、Process Center の既存のスタンドアロン・プロファイルを拡張するものと想定しています。新しい Process Center プロファイルの作成手順については、126 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』を参照してください。

#### 制約事項:

- セル・スタンドアロン・サーバー、管理エージェント、管理ジョブ・マネージャー、またはセキュア・プロキシのプロファイルは拡張できません。
- WebSphere Application Server プロファイルまたは WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを拡張した場合は、IBM Business Process Manager がインストールされている WebSphere Application Server のバージョンから行う必要があります。プロファイルの拡張が可能な場合以外は、「**拡張**」ボタンは選択できません。

「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページが別ウィンドウで開きます。

3. 「**拡張の選択 (Augment Selection)**」ページで、プロファイルに適用する拡張のタイプを選択します。その後、「**次へ**」をクリックします。

「**プロファイル拡張オプション**」ページが表示されます。

「**プロファイル拡張オプション**」ページで、適用するプロファイル拡張方式を選択します。以下のオプションを使用できます。

- **標準プロファイル拡張**

デフォルトの構成設定を使用してプロファイルを拡張します。

- **詳細プロファイル拡張**

拡張するプロファイルに対して独自の構成値を指定できます。

**制約事項:** 以下のいずれかの条件に該当する場合は、プロファイル管理ツールが警告メッセージを表示します。

- 拡張対象として選択したプロファイルに実行中のサーバーがある。サーバーを停止しない限り、プロファイルは拡張できません。あるいは、「**戻る**」をクリックして、実行中のサーバーを持たない別のプロファイルを選択してください。
- 拡張対象として選択したプロファイルは統合されている。統合されたプロファイルは拡張できません。「**戻る**」をクリックして、未統合の別のプロファイルを選択する必要があります。
- 拡張対象として選択したプロファイルは、選択した製品で既に拡張されている。「**戻る**」をクリックして、別のプロファイルを拡張対象に選択してください。

4. 「**管理セキュリティ**」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。
5. Performance Data Warehouse の構成設定を選択します。

Performance Data Warehouse の機能をこのプロファイル用に構成するには、「**Performance Data Warehouse の構成**」チェック・ボックスを選択します。

6. 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは拡張パスのみを対象としています。

- a. 「データベース設計ファイルの使用 (Use a database design file)」を選択します。
- b. 「参照」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

**重要:** 「データベース・スクリプトを実行してデータベース表を作成する」を選択する場合は、「既存のローカル・データベースまたはリモート・データベースを使用する」を選択しないようにしてください。両方のオプションを選択すると、エラーが発生します。

- e. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルを指定することを選択すると、プロファイル管理ツールのデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベースの構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

7. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。

- 「データベース製品の選択 (Select a database product)」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

- 「Process Server データベース名 (Process Server database name)」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDDB** をそのまま使用します。
- 「Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。

8. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定し、「次へ」をクリックします。

注: データベース・スクリプトを実行しない場合でも、このページを完成させる必要があります。「データベース構成 - パート 2」ページで選択した値は、前のページの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリー内 (別のロケーションを指定しなかった場合は、これらのスクリプトのデフォルト・ディレクトリー内) に格納されたデータベース構成スクリプトに追加されます。

次のリストで、使用しているデータベースの名前を示すリンクを選択してください。

- DB2 データベース
- Microsoft SQL Server
- Oracle

a. DB2 データベースの値を設定します。

以下の表に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 63. DB2 Database の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 Universal</li> <li>• DB2 DataServer</li> </ul>
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、以下のディレクトリーに置かれています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択した場合: <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java</code></li> <li>• インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択しなかった場合: <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2</code></li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

b. Microsoft SQL Server の値の設定

以下の表に、Microsoft SQL Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 64. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Microsoft SQL Server JDBC 2.0</b> 注: JDBC 3.0 もサポートされています。JDBC 3.0 の場合は、「Microsoft SQL Server JDBC 2.0」を選択してください。</li> <li>• <b>Microsoft SQL Server JDBC 1.2</b></li> </ul>
Process Server データベース	Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</li> </ul>
Performance Data Warehouse データベース	Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。

c. Oracle データベースの値の設定

以下の表に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

表 65. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Process Server データベース・ユーザー名および Performance Data Warehouse データベース・ユーザー名に同じ名前を指定することはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Performance Data Warehouse データベース・ユーザー名および Process Server データベース・ユーザー名に同じ名前を指定することはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥oracle</code> に置かれています。

9. 「プロファイル拡張の要約」 ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」: プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」: プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

### 「詳細 (Advanced)」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「詳細」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

- 119 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。

IBM BPM Advanced、Process Center スタンドアロン・プロファイル は、それ独自のコンソールから管理する定義済みサーバー環境で、他のすべての Process Center から独立して機能します。

このタスクは、プロファイル管理ツールの「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、スタンドアロン・プロファイルを拡張する方法を説明しています。

「拡張」オプションを選択することで、以下のタスクを実行できます。

- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

**重要:** このトピックの手順には、「拡張」オプションを使用してスタンドアロン Process Server プロファイルを拡張する際に表示されることがある、プロファイル管理ツールのすべてのページが含まれています。ただし、拡張するプロファイルに構成済みコンポーネント (共通データベース、Business Space powered by WebSphere など) がすでに含まれている場合は、プロファイル管理ツール内のこれらのコンポーネント用のページは表示されません。

321 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順を使用してプロファイルの拡張を開始し、中止した手順から以下のステップを再開してください。

**要確認:** すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. プロファイル管理ツールを使用して、拡張する Process Center プロファイルを選択し、「拡張 (Augment)」をクリックします。「拡張の選択」ページが開きます。

2. プロファイルに適用する拡張のタイプを選択し、「次へ」をクリックします。「プロファイル拡張オプション」ページが開きます。
3. 「詳細プロファイル拡張」を選択して、「次へ」をクリックします。「管理セキュリティー」ページが開きます。
4. 「管理セキュリティー」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

「詳細」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張するための初期手順が完了しました。

#### 関連タスク:

『データベースが定義されている場合の「詳細」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。システムにセットアップ済みのデータベースが既にあるときに、スタンドアロン・プロファイルを拡張することができます。

332 ページの『データベースが定義されていない場合の拡張オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。システムにセットアップ済みのデータベースがまだないときに、スタンドアロン・プロファイルを拡張することができます。

368 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、`bootstrapProcessServerData` コマンドを実行する必要があります。

#### 関連資料:

356 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

#### データベースが定義されている場合の「詳細」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。システムにセットアップ済みのデータベースが既にあるときに、スタンドアロン・プロファイルを拡張することができます。

329 ページの『「詳細 (Advanced)」オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

このタスクでは、システムでデータベースが既に定義されている場合に、プロファイル管理ツールのユーザー・インターフェースにある「詳細プロファイル拡張」オプションを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張する作業について説明します。

**要確認:** すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**  
プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**  
プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題をトラブルシューティングする際に参照するログ・ファイルが示されます。

2. 手動で実行するスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りするように選択したかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、Process Center スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
  - プロファイル管理ツールを使用した Performance Data Warehouse データベースおよび Process Center データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
    - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールを起動する**」オプションが選択されていることを確認します。
    - b. 「**終了**」をクリックして終了します。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
    - d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
  - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
    - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールを起動する**」の横にあるチェック・ボックスをクリアします。
    - b. 「**終了**」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
    - d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、データベースを作成するか、または作成および構成します。
    - e. データベースの構成時に、『**ファースト・ステップ・コンソールの開始**』で説明されているとおり、プロファイルに関連付けられた「**ファースト・ステップ・コンソール**」を開始します。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルに拡張されました。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi\_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。

#### 関連タスク:

329 ページの『「**詳細 (Advanced)**」 オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「**詳細**」オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

#### データベースが定義されていない場合の拡張オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。システムにセットアップ済みのデータベースがまだないときに、スタンドアロン・プロファイルを拡張することができます。

329 ページの『「**詳細 (Advanced)**」 オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

このタスクでは、システムでデータベースが定義されておらず、かつ定義する必要がある場合に、プロファイル管理ツールのユーザー・インターフェースにある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張する作業について説明します。「**データベース設計**」ページが表示されます。

**要確認:** すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、「**拡張**」オプションを使用して作成したスタンドアロン・サーバーのプロファイルとデプロイメント・マネージャーのプロファイルの両方で使用できます。

**注:** IBM Business Process Manager Express 構成では、データベース設計ファイルの使用は推奨されません。

- a. 「**データベースの構成にはデータベース設計ファイルを使用する**」を選択します。
- b. 「**参照**」をクリックします。
- c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
- d. 「**次へ**」をクリックします。

設計ファイルの指定を選択する場合、Profile Management Tool のデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベース構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

2. 「Process Center 構成」 ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

#### 環境名

構成する環境の名前を指定します。

#### 環境タイプの選択

環境タイプは、Process Center の使用方法を示します。以下のいずれかのオプションを選択します。

**実動** 実動キャパシティーでサーバーを使用する場合は、「**実動**」を選択します。

#### ステージング

サーバーを実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームにする場合は、「**ステージング**」を選択します。

#### テスト

サーバーをテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

例えば、負荷テストはテスト・サーバーで実行し、変更を実稼働環境に反映させるまでの間、それらの変更をホストするための一時的なロケーションとしてステージング環境タイプを使用します。構成する Process Center が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「**環境タイプ**」として「**ステージング**」を指定することが考えられます。

#### Process Center の構成情報

Process Center の接続先となる Process Server を構成します。以下のフィールドにパラメーターを設定します。

#### サーバーをオフラインで使用する

構成するサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

#### プロトコル

Process Server への接続プロトコルとして **http://** または **https://** を選択します。

#### ホスト名

この Process Center が Process Server と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

Process Center と Process Server サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Server にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

**ポート** Process Server のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Server にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

「**接続のテスト**」をクリックすることによって、Process Server への接続をテストできます。

「**次へ**」をクリックします。

3. 「データベース構成 - パート 1」 ページで、以下のアクションを実行します。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。

- 「新規ローカル・データベースの作成」または「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)」を選択します。

- 「Process Server データベース名 (Process Server database name)」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されません。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。
4. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成パラメーター』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

**DB2** 「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

#### **DB2 Universal Database for z/OS**

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 - パート 2」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

#### **Microsoft SQL Server**

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

**Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

5. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「**プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。**」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**  
プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**  
プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題をトラブルシューティングする際に参照するログ・ファイルが示されます。

6. 手動で実行するスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りするように選択したかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、Process Center スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
  - プロファイル管理ツールを使用した Performance Data Warehouse データベースおよび Process Center データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
    - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールの起動**」オプションが選択されていることを確認します。
    - b. 「**終了**」をクリックして終了します。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
    - d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
  - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
    - a. 「**ファースト・ステップ・コンソールを起動する**」チェック・ボックスをクリアします。
    - b. 「**終了**」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
    - d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、データベースを作成するか、または作成および構成します。
    - e. データベースの構成時に、『ファースト・ステップ・コンソールの開始』で説明されているとおりに、詳細を確認しながら、プロファイルに関連付けられた「ファースト・ステップ・コンソール」を開始します。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルが IBM Business Process Manager プロファイルに拡張されました。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi\_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。

#### 関連タスク:

329 ページの『「**詳細 (Advanced)**」 オプションを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**詳細プロファイル拡張**」 オプションを使用して、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「**詳細**」 オプションを選択すると、カスタマイズした構成設定でプロファイルが拡張されます。

#### Process Server のプロファイルの拡張:

「**標準**」 プロファイル拡張オプションまたは「**詳細**」 プロファイル拡張オプションを使用して、Process Server のプロファイルを拡張できます。

##### 「**標準 (Typical)**」 オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張:

IBM Business Process Manager Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張と構成を行うには、プロファイル管理ツールの「**標準プロファイル拡張**」 オプションを使用します。「**標準 (Typical)**」 オプションを選択すると、デフォルトの構成設定でプロファイルが拡張されます。

スタンドアロン・プロファイル、Network Deployment プロファイル、およびカスタム・プロファイルの違いなど、プロファイルの概念を理解していること。

「**標準プロファイル拡張**」 オプションと「**詳細プロファイル拡張**」 オプションの違いについて、どのシナリオのもとで一方を他方より優先して使用する必要があるかを含めて理解してください。

- 119 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認してください。

このトピックでは、プロファイル管理ツールを使用してプロファイルを拡張することを前提としています。プロファイル管理ツールを既に開始しており、Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張を選択し、「**標準プロファイル拡張**」 オプションを選択していると想定しています。

この構成のタイプでは、プロファイル管理ツールは以下のタスクを実行します。

- 管理コンソールをデプロイするためのオプションを表示します。

**制約事項:** スタンドアロン・サーバー・プロファイルをデプロイメント・マネージャーに統合する予定がある場合、**標準的な** オプションを使用してプロファイルを作成しないでください。「**標準 (Typical)**」 のプロファイル拡張で提供されるメッセージング・エンジン・ストレージおよびデータベース・タイプのデフォルト値は、デプロイメント環境のインストールには適していません。代わりに、「**拡張**」 オプションを使用してプロファイルを拡張してください。詳しくは、342 ページの『「**詳細 (Advanced)**」 オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』を参照してください。

321 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』に記載されている手順に従って作業が完了していれば、「**管理セキュリティ**」 ページが表示されます。すべての IBM Business Process Manager プロファイルでセキュリティが有効になっています。

1. 「**管理セキュリティ**」 ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

2. 「Process Server 構成」 ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

#### 環境名

構成する環境の名前を指定します。

#### 環境タイプの選択

以下のオプションがあります。

- 実稼働

実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「**実動**」を選択します。

- ステージ

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーが機能することになる場合は、「**ステージング**」を選択します。

- テスト

構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「**テスト**」を選択します。

環境タイプは、Process Server の使用方法を示します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー (実動、ステージング、またはテスト) です。テスト・サーバーでは負荷テストを実行できます。ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするための一時的なロケーションとして使用できます。構成する Process Server が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「**環境タイプ**」として「**ステージング**」を指定することが考えられます。

#### Process Center の構成情報

Process Server の接続先の Process Center を構成します。

以下のフィールドにパラメーターを設定します。

- **サーバーをオフラインで使用する**

構成しているサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。

オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

- **プロトコル**

Process Center への接続プロトコルとして「**http://**」または「**https://**」を選択します。

- **ホスト名**

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- ポート

Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

「接続のテスト」をクリックすることによって、Process Center への接続をテストできます。

「次へ」をクリックします。

3. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。IBM Business Process Manager Standard の Process Server を拡張する際は、「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」および「**Process Server データベース名 (Process server database name)**」フィールドは表示されません。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。
- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「**データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)**」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されます。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「**データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)**」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。
4. 「データベース構成 - パート 2」ページで、データベース構成を指定し、「次へ」をクリックします。

**注:** データベース・スクリプトを実行しない場合でも、このページを完成させる必要があります。「データベース構成 - パート 2」ページで選択した値は、前のページの「データベース・スクリプトの出力ディレクトリー」フィールドで指定したディレクトリー内 (別のロケーションを指定しなかった場合は、これらのスクリプトのデフォルト・ディレクトリー内) に格納されたデータベース構成スクリプトに追加されます。

次のリストで、使用しているデータベースの名前を示すリンクを選択してください。

- DB2 データベース
  - Microsoft SQL Server
  - Oracle
- a. DB2 データベースの値を設定します。

以下の表に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 66. DB2 Database の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 Universal</li> <li>• DB2 DataServer</li> </ul>
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、以下のディレクトリーに置かれています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択した場合: \${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java</li> <li>• インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択しなかった場合: \${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2</li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 50000 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

b. Microsoft SQL Server の値の設定

以下の表に、Microsoft SQL Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 67. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Microsoft SQL Server JDBC 2.0</b> 注: JDBC 3.0 もサポートされています。JDBC 3.0 の場合は、「Microsoft SQL Server JDBC 2.0」を選択してください。</li> <li>• <b>Microsoft SQL Server JDBC 1.2</b></li> </ul>

表 67. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー</p> <p><code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥SQLServer</code> に置かれています。</p>

c. Oracle データベースの値の設定

以下の表に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 (その 2)」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得する必要があります。

表 68. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Process Server データベース・ユーザー名および Performance Data Warehouse データベース・ユーザー名に同じ名前を指定することはできません。</p>
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワード</li> </ul> <p>Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• パスワードの確認</li> </ul> <p>確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p>注: Performance Data Warehouse データベース・ユーザー名および Process Server データベース・ユーザー名に同じ名前を指定することはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	<p>デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。</p>
サーバー・ポート	<p>デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。</p>
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	<p>JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}\%jdbcdrivers%oracle</code> に置かれています。</p>

5. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「**拡張**」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「**戻る**」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

- 「プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました」：プロファイルの拡張が完了したが、エラーが生成されたことを示します。
- 「プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません」：プロファイルの拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile complete)」ページには、問題のトラブルシューティングを行うために参照するログ・ファイルが示されます。

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi\_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

#### 「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した *Process Server* スタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「**詳細**」オプションを選択して、カスタマイズした構成設定でプロファイルを拡張します。

*IBM BPM Advanced*、*Process Server* スタンドアロン・プロファイル は、それ独自のコンソールから管理する定義済みサーバー環境で、他のすべての Process Server から独立して機能します。開始する前に、このプロファイルのサーバーを停止し、*BPM Advanced* インストール済み環境からプロファイル管理ツールを起動しておく必要があります。

このタスクは、プロファイル管理ツールの「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、スタンドアロン・プロファイルを拡張する方法を説明しています。

「**拡張**」オプションを選択することで、以下のタスクを実行できます。

- データベース設計ファイルを使用してデータベースを構成します。

**重要:** このトピックの手順には、「**拡張**」オプションを使用してスタンドアロン Process Server プロファイルを拡張する際に表示されることがある、プロファイル管理ツールのすべてのページが含まれています。た

だし、拡張するプロファイルに構成済みコンポーネント (共通データベース、Business Space powered by WebSphere など) がすでに含まれている場合は、プロファイル管理ツール内のこれらのコンポーネント用のページは表示されません。

321 ページの『プロファイル管理ツールを使用したプロファイルの拡張』の手順を使用してプロファイルの拡張を開始し、中止した手順から以下のステップを再開してください。

**要確認:** すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. プロファイル管理ツールを使用して、拡張する Process Server プロファイルを選択し、「**拡張 (Augment)**」をクリックします。「拡張の選択」ページが開きます。
2. プロファイルに適用する拡張のタイプを選択し、「**次へ**」をクリックします。「プロファイル拡張オプション」ページが開きます。
3. 「**詳細プロファイル拡張**」を選択して、「**次へ**」をクリックします。「管理セキュリティ」ページが開きます。
4. 「管理セキュリティ」ページから、拡張するプロファイルの管理ユーザー ID およびパスワードを再入力します。

拡張するプロファイルで WebSphere(r) Application Server サンプル・アプリケーションがデプロイされている場合は、実行するアカウントが必要です。アカウントのパスワードを指定してください。アカウントのユーザー名は変更できません。

「詳細」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張するための初期手順が完了しました。

#### 関連タスク:

344 ページの『データベースが定義されている場合の「詳細」オプションを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。この Process Server スタンドアロン・プロファイルは、システム上でデータベースが既に定義されている場合に拡張することができます。

345 ページの『データベースが定義されていない場合の「詳細」オプションを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。この Process Server スタンドアロン・プロファイルは、システム上でデータベースがまだ定義されていない場合に拡張することができます。

368 ページの『データベースへのシステム情報のロード』

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

#### 関連資料:

356 ページの『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド』

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

データベースが定義されている場合の「詳細」オプションを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張：

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「詳細プロファイル拡張」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。この Process Server スタンドアロン・プロファイルは、システム上でデータベースが既に定義されている場合に拡張することができます。

IBM BPM Advanced、Process Server スタンドアロン・プロファイル は、それ独自のコンソールから管理する定義済みサーバー環境で、他のすべての Process Server から独立して機能します。開始する前に、このプロファイルのサーバーを停止し、BPM Advanced インストール済み環境からプロファイル管理ツールを起動しておく必要があります。342 ページの『「詳細 (Advanced)」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

このタスクでは、システムでデータベースが既に定義されている場合に、プロファイル管理ツールのユーザー・インターフェースにある「詳細プロファイル拡張」オプションを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張する作業について説明します。

**要確認:** すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティが有効になっています。

1. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。

「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**  
プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**  
プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題をトラブルシューティングする際に参照するログ・ファイルが示されます。

2. 手動で実行するスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りするように選択したかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、Process Server スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
  - プロファイル管理ツールを使用した Performance Data Warehouse データベースおよび Process Server データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
    - a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」オプションが選択されていることを確認します。
    - b. 「終了」をクリックして終了します。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。

- d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
- 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
  - a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」の横にあるチェック・ボックスをクリアします。
  - b. 「終了」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
  - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
  - d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、データベースを作成するか、または作成して構成します。
  - e. データベースの構成時に、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi\_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

#### 関連タスク:

342 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「**詳細**」オプションを選択して、カスタマイズした構成設定でプロファイルを拡張します。

#### データベースが定義されていない場合の「**詳細**」オプションを使用したスタンドアロン・プロファイルの拡張:

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) にある「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、カスタマイズした構成設定で Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。この Process Server スタンドアロン・プロファイルは、システム上でデータベースがまだ定義されていない場合に拡張することができます。

*IBM BPM Advanced*、Process Server スタンドアロン・プロファイル は、それ独自のコンソールから管理する定義済みサーバー環境で、他のすべての Process Server から独立して機能します。開始する前に、このプロファイルのサーバーを停止し、BPM Advanced インストール済み環境からプロファイル管理ツール

を起動しておく必要があります。342 ページの『「詳細 (Advanced)」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』の手順を使用して詳細プロファイル拡張を開始し、このタスクのステップから再開します。

**要確認:** すべての IBM Business Process Manager プロファイルで管理セキュリティーが有効になっています。

1. オプション: 設計ファイルを使用してデータベースを構成します。このオプションは、「拡張」オプションを使用して作成されたスタンドアロン・サーバー・プロファイルおよびデプロイメント・マネージャー・プロファイルの両方で使用できます。
  - a. 「データベースの構成にはデータベース設計ファイルを使用する」を選択します。
  - b. 「参照」をクリックします。
  - c. 設計ファイルの完全修飾パス名を選択します。
  - d. 「次へ」をクリックします。

設計ファイルの指定を選択する場合、Profile Management Tool のデータベース構成パネルはスキップされます。代わりに、データベース構成を完了するために、設計ファイルの場所がコマンド行に渡されます。

2. 「Process Server 構成」ページで、以下のパラメーターの値を設定します。

#### 環境名

構成する環境の名前を指定します。

#### 環境タイプの選択

以下のオプションがあります。

- 実稼働

実動キャパシティーでサーバーを実行する場合は、「実動」を選択します。

- ステージ

実動前サーバーとして使用されるステージング・プラットフォームとしてサーバーが機能することになる場合は、「ステージング」を選択します。

- テスト

構成するサーバーをテスト環境として使用する場合は、「テスト」を選択します。

環境タイプは、Process Server の使用方法を示します。例えば、Process Server を使用するキャパシティー (実動、ステージング、またはテスト) です。テスト・サーバーでは負荷テストを実行できます。ステージング環境タイプは、変更を実動環境に反映する前にそれらの変更をホストするための一時的なロケーションとして使用できます。構成する Process Server が、コンテンツおよび新機能のレビューを目的としてアクセスおよび使用される場合は、「環境タイプ」として「ステージング」を指定することが考えられます。

#### Process Center の構成情報

Process Server の接続先の Process Center を構成します。

以下のフィールドにパラメーターを設定します。

- サーバーをオフラインで使用する

構成しているサーバーがオフライン・サーバーであるかどうかを示します。

オフライン・サーバーは、Process Center に接続されていない Process Server です。

オフライン・サーバーは、Process App の Snapshot をデプロイするときにも使用できます。ただし、Process App をオフラインの Process Server にデプロイする方法は、Process App をオンラインの Process Server にデプロイする方法とは異なります。

- **プロトコル**

Process Center への接続プロトコルとして「**http://**」または「**https://**」を選択します。

- **ホスト名**

この Process Server が Process Center と通信するために必要なホストまたは仮想ホストを入力します。完全修飾ホスト名を使用します。

Process Server と Process Center サービスとの間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ポート**

Process Center のポート番号を入力します。Process Server と Process Center との間にロード・バランサーまたはプロキシ・サーバーが存在する環境の場合、ここでの設定内容が Process Center にアクセスするための URL と一致していることを確認してください。

- **ユーザー名**

Process Center にログオンする際に使用するユーザー名を入力します。

- **パスワード**

Process Center にログオンする際に使用するパスワードを入力します。

- **パスワードの確認**

Process Center にログオンする際に使用するパスワードを確認します。

「**接続のテスト**」をクリックすることによって、Process Center への接続をテストできます。

「**次へ**」をクリックします。

3. 「データベース構成 - パート 1」ページで、以下のアクションを実行します。

- 「**データベース製品の選択 (Select a database product)**」ドロップダウン・リストから、プロファイルで使用されるデータベース製品を選択します。
- 「**新規ローカル・データベースの作成**」または「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

データベース製品として DB2 を選択した場合は、新規データベースの作成を選択できます。DB2 はソフトウェアに組み込まれているため、プロファイル管理ツールにより新規 DB2 データベースが作成されます。

ソフトウェアで使用するデータベース製品が既に存在する場合は、「**既存のローカルまたはリモート・データベースの使用 (Use an existing local or remote database)**」を選択します。

- 「**Process Server データベース名 (Process Server database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **BPMDB** をそのまま使用します。
- 「**Performance Data Warehouse データベース名 (Performance Data Warehouse database name)**」フィールドにデータベースの名前を入力するか、またはデフォルト値 **PDWDB** をそのまま使用します。

- データベース表の作成に使用される SQL スクリプトが書き込まれるディレクトリーを設定する場合は、「データベース・スクリプトのデフォルト出力ディレクトリーをオーバーライドする (Override the default output directory for database scripts)」チェック・ボックスを選択します。

このチェック・ボックスを選択しない場合、スクリプトはデフォルト・ディレクトリーに出力されません。

- データベース・スクリプトを自動で (プロファイル作成プロセスの一部として) 実行する場合は、「データベース・スクリプトを実行してデータベースを初期化 (Run database scripts to initialize the databases)」チェック・ボックスを選択します。このチェック・ボックスを選択しない場合、プロファイル作成の完了後に、ユーザー自身またはデータベース管理者がスクリプトを手動で実行できます。
4. 「データベース構成 - パート 2」ページで、選択したデータベースの構成を指定します。各必須フィールドについて詳しくは、『プロファイル管理ツール構成のデータベース構成パラメーター』を参照してください。

以下のデータベースのパラメーターを構成できます。

**DB2** 「データベース構成 (その 2)」ページで DB2 データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

#### **DB2 Universal Database for z/OS**

DB2 Universal Database for z/OS を使用して新規データベースを作成することはできません。Performance Data Warehouse データベースが存在している必要があり、スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合は Process Server データベースも必要です。「データベース構成 (その 2)」ページで DB2 Universal Database for z/OS の値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

#### **Microsoft SQL Server**

「データベース構成 - パート 2」ページで Microsoft SQL Server データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

**Oracle** このデータベースを使用して新規データベースを作成することはできません。

**重要:** プロファイルを作成する前に、SYSDBA 特権のあるユーザー ID を取得している必要があります。

「データベース構成 - パート 2」ページで Oracle データベースの値を設定した後に、「次へ」をクリックして「プロファイル拡張の要約」ページに進みます。

5. 「プロファイル拡張の要約」ページで、「拡張」をクリックしてプロファイルを拡張するか、「戻る」をクリックしてプロファイルの特性を変更します。「プロファイル構成の進行状況 (Profile Configuration Progress)」ウィンドウに構成の進行状況が表示されます。

プロファイルの拡張が完了すると、「プロファイル拡張の完了」ページに「プロファイル管理ツールにより、プロファイルが正常に拡張されました。」というメッセージが表示されます。

**重要:** プロファイルの拡張中にエラーが検出された場合、成功メッセージの代わりに他のメッセージが表示されます。それは、以下のようなメッセージです。

**プロファイル管理ツールでプロファイルが拡張されましたが、エラーが発生しました**

プロファイル拡張が完了しましたが、エラーが発生したことを示します。

**プロファイル管理ツールでプロファイルを拡張できません**

プロファイル拡張が完全に失敗したことを示します。

「プロファイル完了 (Profile Complete)」ページには、問題をトラブルシューティングする際に参照するログ・ファイルが示されます。

6. 手動で実行するスクリプトを作成して実際のデータベース構成を先送りするように選択したかどうかに応じて、以下のタスクのいずれかを実行し、Process Server スタンドアロン・プロファイルの構成を完了します。
  - プロファイル管理ツールを使用した Performance Data Warehouse データベースおよび Process Server データベースの構成が完了したら、以下のステップを実行します。
    - a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」オプションが選択されていることを確認します。
    - b. 「終了」をクリックして終了します。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
    - d. ファースト・ステップ・コンソールを使用して、サーバーを始動します。
  - 手動で実行するスクリプトを生成して実際のデータベース構成を延期することを選択した場合は、以下のステップを実行します。
    - a. 「ファースト・ステップ・コンソールを起動する」の横にあるチェック・ボックスをクリアします。
    - b. 「終了」をクリックして、プロファイル管理ツールを閉じます。
    - c. 別のウィンドウで開いている「プロファイル」ページを閉じます。
    - d. サイトの標準的なデータベース定義ツールと手順を使用して、プロファイル管理ツールにより生成されたスクリプトを編集して実行し、データベースを作成するか、または作成して構成します。
    - e. データベースの構成時に、プロファイルに関連付けられているファースト・ステップ・コンソールを開始します。

以下のいずれかの作業が完了しました。

- WebSphere Application Server、WebSphere Application Server Network Deployment、または WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの IBM Business Process Manager プロファイルへの拡張。
- WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルの WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルへの拡張。

ファースト・ステップ・コンソールから「**サーバーの起動**」を選択してサーバーの作動をチェックします。出力ウィンドウが開きます。次のようなメッセージが表示される場合、サーバーは正常に作動しています。

```
ADMU3000I: e-business のサーバー server1 がオープンしました。  
プロセス ID は 3348 です  
(Server server1 open for e-business; process id is 3348)
```

ファースト・ステップ・コンソールからインストール検査テスト (IVT) を実行するか、**wbi\_ivt** コマンド行ユーティリティを実行することで、サーバーの動作を確認することもできます。このテストは、デプロイメント・マネージャーまたはスタンドアロン・サーバーのインストール環境が正常に動作していることが確認するものです。Process Server スタンドアロン・サーバー・プロファイルの場合はシステム正常性検査も実行され、レポートが生成されます。

#### 関連タスク:

342 ページの『「**詳細 (Advanced)**」オプションを使用した Process Server スタンドアロン・プロファイルの拡張』

プロファイル管理ツールのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 上の「**詳細プロファイル拡張**」オプションを使用して、Process Server スタンドアロン・プロファイルを拡張します。「**詳細**」オプション

ョンを選択して、カスタマイズした構成設定でプロファイルを拡張します。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用したプロファイルの拡張:

拡張は、拡張テンプレートで既存のプロファイルを変更する機能です。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルは IBM Business Process Manager プロファイルに拡張することができます。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルは WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルに拡張できます。プロファイルを拡張するには、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用します。

この手順を実行する前に、以下の作業が完了していることを確認してください。

- 『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件 (Prerequisites for creating or augmenting profiles)』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件のリストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーに既に統合されているかどうかを次の手順で判別します。
  - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、このプロファイルを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。
  - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されておらず、後から **addNode** コマンドを使用してそのプロファイルを統合する場合、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
    - 実行されていなければなりません。
    - IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャー・プロファイルでなければなりません。
    - リリース・レベルが拡張中のプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである必要があります。
      - IBM Business Process Manager プロファイルは、WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーを使用することができません。
      - WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルでは、WebSphere Enterprise Service Bus デプロイメント・マネージャーまたは IBM Business Process Manager デプロイメント・マネージャーを使用できます。
    - JMX 管理ポートを使用可能にしておく必要があります。デフォルト・プロトコルは SOAP です。
- **manageprofiles** パラメーターとデフォルト値を『**manageprofiles** パラメーター』で既に検討しました。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

このタスクには、**セキュリティー・ロールが必要**です。『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してプロファイルを拡張するには、以下のステップを実行します。

1. 既存のプロファイルの作成時に使用したテンプレート (デプロイメント・マネージャー、スタンドアロン、または管理対象) を調べます。プロファイルの作成に使用したテンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` のプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。

2. 拡張先のテンプレートを探します。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを IBM Business Process Manager または WebSphere ESB プロファイルに拡張できます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。

使用可能なプロファイル・テンプレートは次のとおりです。

- `default.procctr`: Process Center スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard または Express に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- `default.procsvr`: Process Server スタンドアロン・プロファイル用で、IBM BPM Standard または Express に固有の機能を備えたスタンドアロン・サーバーを定義します。
- `managed.procctr`: IBM BPM Standard または Express の Process Center カスタム・プロファイル用で、デプロイメント・マネージャーに統合されている場合に管理対象ノードを定義します。使用するソリューションにデプロイメント環境が必要であると判断した場合、ランタイム環境には 1 つ以上の管理対象ノードが必要になります。カスタム・プロファイルには空のノードが含まれており、デプロイメント・マネージャー・セルに統合して作動可能にする必要があります。カスタム・プロファイルを統合すると、カスタム・プロファイルが管理対象ノードに変更されます。統合先のデプロイメント・マネージャーのリリース・レベルが、作成しているカスタム・プロファイルのリリース・レベル以上でない場合は、ノードを統合しないでください。

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。`-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

3. 応答ファイルを作成します。応答ファイルを作成するには、`-profilePath` パラメーターは指定せず、「create」を「augment」と置き換えてください。パラメーターおよびそのデフォルト値の完全なリストについては、`manageprofile` パラメーターを参照してください。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

4. `-response` パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを実行します。

- **Linux** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`
- **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの拡張は正常に終了しました。(INSTCONFSUCCESS: Profile augmentation succeeded.)」というメッセージが表示された場合は、プロファイルの拡張が正常に完了したことが分かります。また、以下のログ・ファイルを確認できます。

- **Linux** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`
- **Windows** `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_augment.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に拡張されたことを確認します。このためには、以下のコマンドを実行します。

- **Linux** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/wbi_ivt.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `profile_root¥bin¥wbi_ivt.bat`

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した *Process Center* スタンドアロン・プロファイルの拡張:

拡張は、拡張テンプレートで既存のプロファイルを変更する機能です。プロファイルは、コマンド行から **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することができます。

- 『119 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーに既に統合されているかどうかを次の手順で判断します。
  - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、これを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。
  - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されていない場合は、後から **addNode** コマンドを介してそのノードを統合するとき、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
    - 実行されていなければなりません。
    - リリース・レベルが拡張中のプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである必要があります。
    - JMX 管理ポートを使用可能にしておく必要があります。 デフォルト・プロトコルは SOAP です。
    - インストールした製品に応じて、事前に **IBM Business Process Manager** または **WebSphere Enterprise Service Bus** プロファイルに拡張されている必要があります。
- このセクションにあるプロファイル拡張コマンドの例を確認している。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**この作業に必要なセキュリティの役割:** 120 ページの『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。

既存のプロファイルの作成時に使用したテンプレート (デプロイメント・マネージャー、スタンドアロン、または管理対象) を調べます。プロファイルの作成に使用したテンプレートは、`install_root/properties/profileRegistry.xml` のプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。この手順では、Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張することを前提とします。

このタスクでは、**manageprofiles** を使用して Process Center スタンドアロン・プロファイルを拡張する方法について説明します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張するには、以下のステップを実行します。

1. 拡張先のテンプレートを探します。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを IBM Business Process Manager または WebSphere ESB プロファイルに拡張できます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。

使用可能なプロファイル・テンプレートは次のとおりです。

- **default.procctr**: Process Server スタンドアロン・プロファイル用。IBM Business Process Manager Standard または Express の機能が組み込まれたスタンドアロン・サーバーを定義します。

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、**augment** パラメーターを使用します。**augment** パラメーターを使用すると、**manageprofiles** コマンド行ユーティリティーは **-templatePath** パラメーターのテンプレートを使用して、**-profileName** パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。**-templatePath** パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、**-templatePath** パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

2. 応答ファイルを作成します。応答ファイルを作成する際には、**-profilePath** パラメーターは指定せず、「create」を「augment」と置き換えてください。パラメーターおよびそのデフォルト値の完全なリストについては、**manageprofile** パラメーターを参照してください。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、'**personalCertValidityPeriod=1** ' や '**winserviceCheck=false** ') ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

3. **-response** パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から **manageprofiles** コマンドを実行します。

- **Linux** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`
- **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

### **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用した *Process Server* スタンドアロン・プロファイルの拡張:

拡張は、拡張テンプレートで既存のプロファイルを変更する機能です。既存の *WebSphere Application Server* プロファイルまたは *WebSphere Application Server Network Deployment* プロファイルを *IBM Business Process Manager* プロファイルに拡張できます。プロファイルは、コマンド行から **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することができます。

- 『119 ページの『プロファイルの作成または拡張に関する前提条件』』で、プロファイルを作成または拡張するための前提条件リストを確認している。
- 拡張する予定のプロファイルに関連付けられたすべてのサーバーをシャットダウンした。
- スタンドアロン・サーバーまたはカスタム・プロファイルを拡張する場合は、それがデプロイメント・マネージャーに既に統合されているかどうかを次の手順で判別します。
  - 拡張するプロファイルが既にデプロイメント・マネージャーに統合されている場合は、このプロファイルを **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用して拡張することはできません。
  - 拡張しようとするプロファイルがまだデプロイメント・マネージャーに統合されていない場合は、後から **addNode** コマンドを介してそのノードを統合するとき、拡張を正常に完了するためには、統合先のデプロイメント・マネージャーが以下の状態になっている必要があります。
    - 実行されていなければなりません。
    - リリース・レベルが拡張中のプロファイルと同じか、それより高いリリース・レベルである必要があります。
    - JMX 管理ポートを使用可能にしておく必要があります。 デフォルト・プロトコルは SOAP です。
    - インストールした製品に応じて、事前に *IBM Business Process Manager* または *WebSphere Enterprise Service Bus* プロファイルに拡張されている必要があります。
- このセクションにあるプロファイル拡張コマンドの例を確認している。
- 同じプロファイルで **manageprofiles** コマンド行ユーティリティを実行していないことを検査している。エラー・メッセージが表示された場合は、別のプロファイル作成操作や拡張操作が進行中かどうかを確認してください。実行されている場合は、完了するまで待ってください。

**この作業に必要なセキュリティの役割:** 120 ページの『プロファイル作成のための、非 root ユーザーに対するファイルとディレクトリーの書き込み権限の付与』を参照してください。

既存のプロファイルの作成時に使用したテンプレート (デプロイメント・マネージャー、スタンドアロン、または管理対象) を調べます。プロファイルの作成に使用したテンプレートは、*install\_root/properties/profileRegistry.xml* のプロファイル・レジストリーを表示して判別できます。このファイルは変更しないでください。テンプレートを確認するだけにしてください。この手順では、*Process Server* スタンドアロン・プロファイルを拡張することを前提とします。

このタスクでは、**manageprofiles** を使用して *Process Server* スタンドアロン・プロファイルを拡張する方法について説明します。

**manageprofiles** コマンド行ユーティリティを使用してスタンドアロン・プロファイルを拡張するには、以下のステップを実行します。

1. 拡張先のテンプレートを探します。既存の WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Network Deployment プロファイルを IBM Business Process Manager または WebSphere ESB プロファイルに拡張できます。

各プロファイルのテンプレートは、`install_root/profileTemplates/BPM` ディレクトリー (BPM テンプレートの場合) にあります。

使用可能なプロファイル・テンプレートは次のとおりです。

- `default.procsvr`: Process Server スタンドアロン・プロファイル用。IBM Process Manager Standard および Express 構成の機能を含むスタンドアロン・サーバーを定義します。
- `default.esbserver`: WebSphere Enterprise Service Bus スタンドアロン・サーバー・プロファイル用で、スタンドアロン・サーバーを定義します。

拡張テンプレートを使用して既存のプロファイルに変更を加える場合は、`augment` パラメーターを使用します。`augment` パラメーターを使用すると、`manageprofiles` コマンド行ユーティリティーは `-templatePath` パラメーターのテンプレートを使用して、`-profileName` パラメーターで指定されているプロファイルを更新または拡張します。使用できる拡張テンプレートは、どの IBM 製品のどのバージョンが環境にインストールされているかによって決まります。`-templatePath` パラメーターには必ず完全修飾ファイル・パスを指定してください。理由は、`-templatePath` パラメーターに相対ファイル・パスを指定すると、指定したプロファイルが完全に拡張されないためです。

注: `install_dir/profileTemplates/BPM` ディレクトリー内のファイルは手動で変更しないでください。

2. 応答ファイルを作成します。応答ファイルを作成する際には、`-profilePath` パラメーターは指定せず、「create」を「augment」と置き換えてください。パラメーターおよびそのデフォルト値の完全なリストについては、`manageprofile` パラメーターを参照してください。

サンプル応答ファイルは、`install_root/BPM/samples/manageprofiles/` ディレクトリーの下にあります。作成するプロファイル (スタンドアロンまたはネットワーク、Process Center または Process Server) に応じて適切な応答ファイルを選択し、環境に合わせてファイルをカスタマイズしてください。

**重要:** 値の後にスペースが入っている (例えば、`'personalCertValidityPeriod=1 '` や `'winserviceCheck=false '`) ことがないようにしてください。スペースがある場合は、プロファイルの作成が失敗します。

『IBM Business Process Manager サンプルを使用した応答ファイルの作成』を参照してください。

3. `-response` パラメーターと、作成した応答ファイルの名前を使用して、コマンド行から `manageprofiles` コマンドを実行します。

- **Linux** `manageprofiles.sh -response myResponseFile`
- **Windows** `manageprofiles.bat -response myResponseFile`

コマンドにより、実行につれて状況が表示されます。コマンドが終了するまで待機します。他の応答ファイルと同様に、ファイルの構文解析時には応答ファイルに対する通常の構文検査が適用されます。応答ファイルの個々の値はコマンド行パラメーターと見なされます。

「INSTCONFSUCCESS: プロファイルの拡張は正常に終了しました。(INSTCONFSUCCESS: Profile augmentation succeeded.)」というメッセージが表示された場合は、プロファイルの拡張が正常に完了したことが分かります。また、以下のログ・ファイルを確認できます。

- **Linux** `install_root/logs/manageprofiles/profile_name_augment.log`
- **Windows** `install_root¥logs¥manageprofiles¥profile_name_augment.log`

インストール検査テスト (IVT) ツールを実行して、プロファイルが正常に拡張されたことを確認します。このためには、以下のコマンドを実行します。

- **Linux** **Linux** および **UNIX** プラットフォームの場合: `profile_root/bin/bpm_ivt.sh`
- **Windows** **Windows** プラットフォームの場合: `profile_root%bin%bpm_ivt.bat`

### プロファイル管理ツール構成のデータベース構成フィールド:

スタンドアロン環境のプロファイルを作成するには、データベース情報が必要です。必要な情報は、使用するデータベースによって異なります。

以下のいずれかの表を参照して、特定のデータベース・タイプに必要なデータベース・パラメーターを特定してください。

表 69. プロファイル管理ツール構成のデータベース構成パラメーター

データベース・タイプ
DB2 Universal Database 構成フィールド
Microsoft SQL Server データベース構成フィールド
Oracle データベース構成フィールド

### DB2 Universal Database 構成フィールド

以下の表に、DB2 Universal Database をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 - パート 2」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 70. DB2 データベースの場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
JDBC ドライバー	以下のオプションから選択してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• DB2 Universal</li> <li>• DB2 DataServer</li> </ul>
データベース認証用のユーザー名 (User name for database authentication)	データベースで認証を行うユーザー名を入力してください。
データベース認証用のパスワード	データベースで認証を行うパスワードを入力してください。
パスワードの確認	パスワードを確認します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルは製品と一緒にパッケージ化されており、以下のディレクトリーのいずれかに置かれています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択した場合: <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/db2/java</code></li> <li>• インストール時に DB2 Express フィーチャーを選択しなかった場合: <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}/jdbcdrivers/DB2</code></li> </ul>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 <code>localhost</code> をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 <code>50000</code> をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、メッセージング・エンジン表がそのデータベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成する際に、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

## Microsoft SQL Server データベース構成フィールド

以下の表に、Microsoft SQL Server をデータベース製品として選択する場合に「データベース構成 - パート 2」ページで入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 71. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
Windows 認証情報を使用してデータベースに接続するように指定する場合は、「 <b>Windows 認証を適用</b> 」オプションを選択します。このオプションを選択すると、共通データベース、Process Server データベース、および Performance Data Warehouse データベースのフィールドが非アクティブになります。	
<b>共通データベース</b>	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
<b>Process Server データベース</b>	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• <b>パスワード</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• <b>パスワードの確認</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>

表 71. Microsoft SQL Server の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ユーザー名 Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</li> <li>• パスワード Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</li> <li>• パスワードの確認 Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを確認してください。</li> </ul>
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイル (sqljdbc4.jar) は製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}\%jdbcdrivers%</code> SQLServer に置かれています。
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1433 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。

スタンドアロン構成の場合のみ、Process Server データベースを構成すると、メッセージング・エンジン表がそのデータベースに作成されます。Performance Data Warehouse データベースを構成する際に、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が Performance Data Warehouse データベースに作成されます。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

• SQL 認証:

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
- Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
- Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、Common Event Infrastructure (CEI)、および Business Process Choreographer のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。

• Windows 認証:

- Windows 認証では、ユーザーおよびパスワードはいつも同じになるため、すべてのメッセージング・エンジンにカスタム・スキーマを定義して、メッセージング・エンジンごとに異なるスキーマで表を作成できるようにする必要があります。メッセージング・エンジンが構成されると、Windows ユーザ

ーを使用してスキーマが自動的に作成されます。Windows ユーザーがスキーマの作成特権を持っていない場合は、製品を構成する前にスキーマを作成する必要があります。

- メッセージング・エンジン・スキーマ名については、『*Microsoft SQL Server* で使用するスタンドアロン・プロファイルの作成』のステップ 2 を参照してください。

## Oracle データベース構成フィールド

以下の表に、Oracle をデータベース製品として選択する場合に入力しておく必要があるフィールドを示します。

表 72. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド

フィールド	必要なアクション
共通データベース	<p>共通データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> 共通データベースのユーザー名を入力してください。</p> <p><b>パスワード</b> 共通データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p>
Process Server データベース	<p>Process Server データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Process Server データベースのユーザー名を入力してください。</p> <p><b>パスワード</b> Process Server データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Process Server データベースのユーザー名と Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を同じにすることはできません。</p>

表 72. Oracle の場合の必須のデータベース構成フィールド (続き)

フィールド	必要なアクション
Performance Data Warehouse データベース	<p>Performance Data Warehouse データベースの場合は、以下のパラメーターの値を入力してください。</p> <p><b>ユーザー名</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を入力してください。</p> <p><b>パスワード</b> Performance Data Warehouse データベースで認証を行うパスワードを入力してください。</p> <p><b>パスワードの確認</b> 確認のためにパスワードを再入力してください。</p> <p><b>注:</b> Performance Data Warehouse データベースのユーザー名を Process Server データベースのユーザー名と同じにすることはできません。</p>
データベース・サーバーのホスト名 (例えば IP アドレス)	デフォルト値 localhost をそのまま確定するか、データベース・サーバーの正しいホスト名を入力します。
サーバー・ポート	デフォルト値 1521 をそのまま確定するか、サーバーの正しいポート番号を入力します。
JDBC ドライバーのクラスパス・ファイルのディレクトリー・ロケーション (Directory location of JDBC driver classpath files)	JDBC 2.0 ドライバーのクラスパス・ファイルは、製品と一緒にパッケージ化されており、ディレクトリー <code>\${WAS_INSTALL_ROOT}¥jdbcdrivers¥oracle</code> に置かれています。

すべてのコンポーネントが同じ Oracle インスタンスを使用するため、個々のコンポーネントに使用されるデータベースに違いはありません。

スタンドアロン構成の場合のみ、ユーザーおよびスキーマに関する追加の考慮事項がいくつかあります。

- Process Server を構成すると、Process Server メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Process Server メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Process Server のユーザーおよびパスワードが使用されます。
- Performance Data Warehouse を構成すると、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジンに対して指定されたユーザーおよびパスワードを使用して、Performance Data Warehouse メッセージング・エンジン表が作成されます。これらの値が指定されていない場合は、Performance Data Warehouse のユーザーおよびパスワードが使用されます。
- Service Component Architecture (SCA) システム、SCA アプリケーション、Common Event Infrastructure (CEI)、および Business Process Choreographer のメッセージング・エンジン表は、異なるユーザーおよびパスワードを使用して構成する必要があります。これらは、他のメッセージング・エンジンと同じユーザーおよびパスワードを使用することはできません。

#### 関連タスク:

126 ページの『プロファイル管理ツールを使用した Process Center スタンドアロン・プロファイルの作成』

Process Center スタンドアロン・プロファイルを作成するには、プロファイル管理ツールを使用します。

## データベースの構成

プロファイルを開始する前に、そのプロファイルで使用するようになるデータベースを構成しておく必要があります。

すべてのデータベース名およびスキーマ名のリストなど、データベース要件を計画しておく必要があります。詳しくは、『データベース構成の計画』を参照してください。

### 提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルの作成の一環としてデータベースを作成するか、データベース設計ツール (dbDesignGenerator) を使用するか、データベースを手動で作成するか、またはプロファイル作成後にデータベース・スクリプト・ファイルを実行してデータベースを作成できます。ネットワーク・デプロイメント環境では、デプロイメント・マネージャーを開始してカスタム・プロファイルを作成する前に、データベースを作成する必要があります。

**制約事項:** Oracle の場合、データベース・インスタンスは SQL ファイル実行の一環として作成されません。Oracle 製品資料を参照して、インスタンスを手動で作成する必要があります。

生成された SQL スクリプトを実行してデータベースを作成するには、以下の手順に従います。

1. スクリプトは以下のディレクトリにあります。
  - Process Server データベースの場合:  
`install_root%dbscripts%ProcessServer%db_type%createDatabase.sql`
  - Performance Data Warehouse データベースの場合:  
`install_root%dbscripts%PerformanceDW%db_type%createDatabase.sql`
2. 該当するスクリプトに必要な変更を加えます。変更が必要な箇所を見つけるには、@ を探します。例えば、@DB\_NAME@ を任意のデータベース名で置き換えます。

**注:** SQL Server の場合は、Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。これは、COLLATE 属性値に含まれる文字列 CI によって指定されます。この変数が SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS のように (SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name 'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
```

```

at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery
(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]

```

3. 該当するスクリプトを実行して、エラーなく完了することを確認します。

#### 関連タスク:

364 ページの『Process Center または Process Server のデータベース表の作成』

SQL スクリプトを実行して、IBM Process Center 構成または IBM Process Server 構成用のデータベース表を作成します。

365 ページの『Performance Data Warehouse データベース表の作成』

SQL スクリプトを実行して、IBM Performance Data Warehouse 用のデータベース表を作成します。

367 ページの『XA トランザクションの構成』

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。Microsoft SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

## 手動でのデータベースの作成

IBM Business Process Manager Express は、Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Express をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

Process Server および Performance Data Warehouse には、固有の独立したデータベースが必要であり、これらを他の BPM コンポーネントと同じデータベース上に構成することはできません。

ここに示す手順は、DB2 と SQL Server のみを対象としています。Oracle の場合は、Oracle の単一インスタンスを使用して BPM を構成できます。Oracle インスタンスが存在し、アクセス可能でなければなりません。Oracle インスタンスを作成するには、Oracle の資料を参照してください。単一の Oracle インスタンスを使用する場合は、必ず BPM データベースごとに異なるユーザー ID を使用してください。

データベースを作成するには、以下のコマンドを使用します (@ プレースホルダーの文字列は適切な値に置き換えます)。

#### • DB2の場合:

```

create database @DB_NAME@ automatic storage yes using codeset UTF-8 territory US pagesize 32768;
connect to @DB_NAME@;
grant dbadm on database to user @DB_USER@;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGFILSIZ 4096 DEFERRED;
UPDATE DB CFG FOR @DB_NAME@ USING LOGSECON 64 DEFERRED;
connect reset;

```

#### • SQL Server の場合:

```

osql -b -S hostname -U db_user_account -P db_user_password
-Q "CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS"

```

ここで、**hostname** は SQL Server をホストするシステムのホスト名、**db\_user\_account** と **db\_user\_password** は データベースを作成するためのログインに使用されるユーザー名とパスワード、

**database\_name** は作成するデータベースの名前です。これらのデータベースでは大/小文字が区別されないようにする必要があるので、**COLLATE SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** が含まれています。

Microsoft SQL Server データベースがインストールされた後、サーバーを始動する前に、XA トランザクションを構成する必要があります。

**注: SQL Server の場合は、Process Server および Performance Data Warehouse 用に作成するデータベースで大/小文字が区別されないようにしてください。**これは、**COLLATE** 属性値に含まれる文字列 **CI** によって指定されます。この変数が **SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CI\_AS** のように (**SQL\_Latin1\_General\_CP1\_CS\_AS** ではなく) 指定されていることを確認します。これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name 'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]: Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException: PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?]; nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery
(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

Microsoft SQL Server を Performance Data Warehouse のデータベースとして使用する場合は、既存のプロセス・アプリケーション用の最適化プログラムまたはポータルを使用したレポートの生成中に、以下のエラー・メッセージが表示される可能性があります。この場合は、レポートが表示されなくなります。

```
com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'slathresholdtraversals'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError
(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult
(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteCursored
(SQLServerStatement.java:1824)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.doExecuteStatement
(SQLServerStatement.java:760)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement$StmtExecCmd.doExecute
(SQLServerStatement.java:685)
```

Microsoft SQL Server では、ユーザーと関連付けられたデフォルトのスキーマ名がユーザー名と同じでなければなりません。例えば、Performance Data Warehouse データベースのユーザー名が *perfDB* の場合は、ユーザー *perfDB* と関連付けられたデフォルトのスキーマ名も *perfDB* にする必要があります。ス

ーパユーザー (*sa* など) を使用するのではなく、通常のデータベース・ユーザーを作成し、そのユーザーに必要な権限を割り当てる必要があります。この理由は、スーパーユーザーのデフォルトのスキーマが *dbo* であり、これを変更できないためです。

既存のテーブルが、ユーザー名と同じスキーマと関連付けられていない場合は、以下のステップを実行できます。

1. SQL Server Management Studio のオブジェクト・エクスプローラーで、テーブル名を右クリックし、「設計」をクリックします。
2. 「設計」ビューで、F4 キーを押して「プロパティ」ウィンドウを表示します。
3. 「プロパティ」ウィンドウで、スキーマ名を更新します。
4. タブを右クリックし、「閉じる」を選択して「設計」ビューを閉じます。
5. 保存するか尋ねられたら、「OK」をクリックします。選択したテーブルが、スキーマに転送されます。
6. Performance Data Warehouse データベース内のすべてのテーブルに対して、上記のステップを繰り返します。

#### 関連タスク:

『Process Center または Process Server のデータベース表の作成』

SQL スクリプトを実行して、IBM Process Center 構成または IBM Process Server 構成用のデータベース表を作成します。

365 ページの『Performance Data Warehouse データベース表の作成』

SQL スクリプトを実行して、IBM Performance Data Warehouse 用のデータベース表を作成します。

367 ページの『XA トランザクションの構成』

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。Microsoft SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

## Process Center または Process Server のデータベース表の作成

SQL スクリプトを実行して、IBM Process Center 構成または IBM Process Server 構成用のデータベース表を作成します。

構成に必要なすべてのステップを実行しており、データベースを初期化するためのデータベース・スクリプトを構成中に実行しないことを選択していることが必要です。また、Process Center または Process Server のデータベース表の作成先となるデータベースを作成済みであることが必要です。データベースの作成については、『データベースの作成』を参照してください。

構成の完了時に作成された Process Center または Process Server の SQL スクリプトを実行するには、次の手順で行います。

**注:** Process Server はスキーマをサポートしません。ユーザーとしてログインしてから、SQL ファイルを実行する必要があります。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。

デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/ProcessServer/DB\_product* に出力されます。以下に例を示します。

*profile\_root/dbscripts/ProcessServer/DB2*

2. 以下のコマンドを root ユーザーまたは管理者として実行します。

- **Linux** `configProcessServerDB.sh createDB`
- **Windows** `configProcessServerDB.bat createDB`

注: **createDB** パラメーターは、ローカル・データベースを作成するために使用されます。必要なデータベースが作成済みの場合は、このパラメーターを省略してください。**createDB** パラメーターは、Oracle データベースには適用できないため、コマンドから除外する必要があります。

3. SQL データベースの場合は、Process Center または Process Server 用のテーブルを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Process Center または Process Server 用に構成したデータベース (BPMDB) に対して **createTable\_ProcessServer.sql** を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

4. SQL データベースの場合は、Process Center または Process Server 用のテーブル・プロシージャーを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Process Center または Process Server 用に構成したデータベース (BPMDB) に対して **createProcedure\_ProcessServer.sql** を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

5. 接続をリセットします。

Process Center 構成または Process Server 構成用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、Process Center 構成または Process Server 構成上でサーバーまたはクラスターを開始することができます。

#### 関連タスク:

361 ページの『提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成』

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

362 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Express は、Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Express をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

## Performance Data Warehouse データベース表の作成

SQL スクリプトを実行して、IBM Performance Data Warehouse 用のデータベース表を作成します。

構成に必要なすべてのステップを実行しており、データベースを初期化するためのデータベース・スクリプトを構成中に実行しないことを選択していることが必要です。また、Performance Data Warehouse のデータベース表の作成先となるデータベースを作成済みであることが必要です。データベースの作成については、『データベースの作成』を参照してください。

構成の完了時に作成された Performance Data Warehouse の SQL スクリプトを実行するには、次の手順で行います。

注: Performance Data Warehouse はスキーマをサポートしません。ユーザーとしてログインしてから、SQL ファイルを実行する必要があります。

1. データベース表を作成するための SQL スクリプトが格納されているディレクトリーに移動します。

デフォルトでは、SQL スクリプトはプロファイルの作成時に、*profile\_root/dbscripts/PerformanceDW/DB\_product* に出力されます。以下に例を示します。

*profile\_root/dbscripts/PerformanceDW/DB2*

2. 以下のコマンドを root ユーザーまたは管理者として実行します。

- **Linux** `configPerformanceDWDB.sh createDB`
- **Windows** `configPerformanceDWDB.bat createDB`

注: **createDB** パラメーターは、ローカル・データベースを作成するために使用されます。**createDB** パラメーターは、Oracle データベースには適用できないため、コマンドから除外する必要があります。

3. SQL データベースの場合は、Performance Data Warehouse 用のテーブルを作成します。

ステップ 1 で移動したディレクトリーから、Performance Data Warehouse 用に構成したデータベース (PDWDB) に対して **createTable\_PerformanceDW.sql** を実行します。

すべての SQL ステートメントがエラーなく成功したことを確認してください。

Performance Data Warehouse 用のデータベース表が作成され、データベース構成が完了しました。

これで、データベースにシステム情報をロードし、Performance Data Warehouse 上でサーバーまたはクラスターを開始することができます。

#### 関連タスク:

361 ページの『提供されているスクリプトを使用したデータベースの作成』

プロファイルの作成時にデータベースを作成しなかった場合は、後で実行するためのデータベース・スクリプト・ファイルが生成されます。

362 ページの『手動でのデータベースの作成』

IBM Business Process Manager Express は、Process Server データベースと Performance Data Warehouse データベースを必要とします。標準インストールを使用して IBM Business Process Manager Express をインストールする前に、データベースが使用可能であることを確認する必要があります。

## Microsoft SQL Server データベースの構成

Microsoft SQL Server と共に使用するスタンドアロン・プロファイルを作成することができます。

### 前提条件

プロファイルを作成する前に、データベースをホストするサーバーに Microsoft SQL Server をインストールする必要があります。

### データベース特権およびセキュリティー上の考慮事項

データベース・スキーマを作成するには、テーブルを作成するための十分な権限が付与されているユーザー ID が必要です。テーブルが作成されたら、テーブル内の情報の選択、挿入、更新、削除を行うのに十分な権限をアプリケーションが備えている必要があります。

367 ページの表 73 は、データ・ストアへのアクセスに必要なデータベース特権を示しています。

表 73. データベース特権

データベース管理システム	データ・ストア・テーブルの使用に必要な最小の特権	データ・ストア・テーブルの作成に必要な追加の特権
Microsoft SQL Server	SQL Server の認証が SQL Server のログイン ID およびパスワードに基づいて行われるように、SQL Server を構成します。ユーザー ID は、テーブルを所有できるか、または TRUNCATE TABLE ステートメントを発行するのに十分な権限を備えているグループのメンバーになることができます。	ユーザー ID には CREATE TABLE ステートメント特権が必要です。

分離レベルは、トランザクションのロック動作を指定します。分離レベルを READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT に設定する必要があります。SQL コマンド **SELECT name, is\_read\_committed\_snapshot\_on FROM sys.database** を使用すると、Process Server データベース、パフォーマンス・データウェアハウス、および共通データベースの分離レベルを確認できます。SQL コマンド **ALTER DATABASE <database> SET READ\_COMMITTED\_SNAPSHOT ON** を使用すると、分離レベルを設定できます。

#### 関連タスク:

104 ページの『標準インストール時の既存データベースの構成』

標準インストール時に既存のデータベース・サーバーを構成するための正しいデータベース値を判別するには、このトピックの情報を参考にしてください。

#### XA トランザクションの構成:

データベースをインストールしたら、サーバーを始動する前に XA トランザクションを構成する必要があります。Microsoft SQL Server JDBC ドライバーは、Java Platform Enterprise Edition/JDBC 2.0 のオプションの分散トランザクションのサポートを提供します。**SQLServerXADataSource** クラスから取得した JDBC 接続は、Java Platform Enterprise Edition (Java EE) アプリケーション・サーバーなどの標準分散トランザクション処理環境に参加できます。

XA トランザクションの構成に失敗すると、サーバーの始動時に次のエラーが起こる可能性があります。**javax.transaction.xa.XAException: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: XA 制御接続を作成できませんでした。(Failed to create the XA control connection.) エラー: ストアド・プロシージャ 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex' が見つかりませんでした。(Error: "Could not find stored procedure 'master..xp\_sqljdbc\_xa\_init\_ex'.")**..

1. MS DTC サービスには、Service Manager で「Automatic」のマークを付けて、SQL Server サービスの開始時に実行されるようにしてください。XA トランザクション用に MS DTC を使用可能にするには、以下のステップを実行する必要があります。

#### Windows XP および Windows Server 2003 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
- b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」を選択し、「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- c. 「MSDTC」タブをクリックし、次に「セキュリティ構成」をクリックします。
- d. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。

- e. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ダイアログ・ボックスを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
- f. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。

#### Windows Vista および Windows 7 の場合:

- a. 「コントロール パネル」 > 「管理ツール」 > 「コンポーネント サービス」を選択します。
  - b. 「コンポーネント サービス」 > 「コンピュータ」 > 「マイ コンピュータ」 > 「分散トランザクション コーディネータ」を選択します。
  - c. 「ローカル DTC (Local DTC)」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
  - d. 「ローカル DTC のプロパティ (Local DTC Properties)」ダイアログ・ボックスで「セキュリティ」タブをクリックします。
  - e. 「XA トランザクションを使用可能にする (Enable XA Transactions)」チェック・ボックスを選択し、「OK」をクリックします。これで、MS DTC サービスが再始動します。
  - f. もう一度「OK」をクリックして「プロパティ」ダイアログ・ボックスを閉じ、「コンポーネント サービス」を閉じます。
  - g. SQL Server サーバーを再始動して、MS DTC の変更と同期していることを確認します。
2. JDBC 分散トランザクション・コンポーネントを構成します。
- a. 『リソース』セクションの URL を使用して、Microsoft のサイトから「Microsoft SQL Server JDBC Drive 2.0」ドライバーをダウンロードします。
  - b. 任意のフォルダーにアーカイブを unzip します。
  - c. JDBC unarchived ディレクトリーから SQL サーバー・コンピューターの Binn ディレクトリーに sqljdbc\_xa.dll ファイルをコピーします。32 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、SQL サーバーが x64 プロセッサにインストールされていても、x86 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。x64 プロセッサ上の 64 ビット SQL サーバーで XA トランザクションを使用する場合は、x64 フォルダーの sqljdbc\_xa.dll ファイルを使用します。
  - d. SQL サーバーで xa\_install.sql データベース・スクリプトを実行します。このスクリプトにより、sqljdbc\_xa.dll で呼び出される拡張ストアード・プロシージャがインストールされます。これらの拡張ストアード・プロシージャにより、Microsoft SQL Server JDBC ドライバー用の分散トランザクションおよび XA サポートが実装されます。このスクリプトは、SQL Server インスタンスの管理者として実行する必要があります。
  - e. JDBC ドライバーを使用する分散トランザクションに参加する権限を特定のユーザーに認可するには、そのユーザーをマスター・データベース内の SqlJDBCXAUser ロールに追加します (例えば、lombardi ユーザーの場合、「User」マッピングにマスター・データベースを追加し、SqlJDBCXAUser ロールにチェック・マークを付けます)。

## データベースへのシステム情報のロード

IBM Business Process Manager サーバーの始動または使用を試みる前に、**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行する必要があります。

**bootstrapProcessServerData** コマンドを実行すると、BPM アプリケーションの構成データがデータベースにロードされます。このデータは、BPM アプリケーションが正常に実行されるようにするために必要です。

注: スタンドアロン・プロファイルを作成するときに、プロファイル作成中にデータベースを作成することを選択した場合は、このコマンドが自動的に実行されます。

- スタンドアロン・プロファイルを作成し、データベース表のセットアップを据え置いた場合は、データベースおよびその表を作成した後、かつサーバーを初めて始動する前に、`bootstrap` コマンドを実行する必要があります。
- Network Deployment (ND) 環境では、サーバーまたはサーバー・クラスターを作成した後に、このコマンドを実行する必要があります。クラスターでは、単一のクラスター・メンバーを指定して、このコマンドを 1 回だけ実行してください。データベースおよびその表を作成した後、かつプロファイルおよびデプロイメント環境を作成した後、かつ最初のサーバーを始動する前に、このコマンドを実行します。別のクラスター・メンバーを追加した場合に、このコマンドを再実行する必要はありません。

コマンド行から `bootstrap` ユーティリティを実行します。ブートストラップ・ユーティリティは、スタンドアロン・プロファイルまたはデプロイメント・マネージャー・プロファイルのディレクトリにあります。以下に例を示します。

```
<install_root>/profiles/Dmgr01/bin
C:¥<install_root>¥profiles¥ProcCtr01/bin
```

ブートストラップ・ユーティリティは、以下の構文を使用して実行します。

- **Linux** `bootstrapProcessServerData.sh [-dbJDBCClasspath classpath] -clusterName cluster_name`
- **Linux** `bootstrapProcessServerData.sh [-dbJDBCClasspath classpath] -nodeName node_name -serverName server_name`
- **Windows** `bootstrapProcessServerData.bat [-dbJDBCClasspath classpath] -clusterName cluster_name`
- **Windows** `bootstrapProcessServerData.bat [-dbJDBCClasspath classpath] -nodeName node_name -serverName server_name`

ここで、

- `-dbJDBCClasspath` は、データベース JDBC ドライバーのロケーションです。`dbJDBCClasspath` で指定するパスにスペースが含まれている場合は、その値を引用符で囲む必要があります。デフォルト・ロケーションは `WAS_INSTALL_ROOT/jdbcdrivers` です。
- `-clusterName` はアプリケーション・ターゲット・クラスターの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターまたは `-nodeName` および `-serverName` パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。
- `-nodeName` はノードの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターおよび `-serverName` パラメーター、または `-clusterName` パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。
- `-serverName` はサーバーの名前です。ND 環境の場合は、このパラメーターおよび `-nodeName` パラメーター、または `-clusterName` パラメーターのいずれか一方を指定する必要があります。スタンドアロンの場合は指定しないでください。

パラメーターは大/小文字が区別されます。

Process Server または Process Center を正常に始動する前に、データベースにシステム情報がロードされました。

**重要: For SQL Server**、ブートストラップ・ユーティリティが失敗した場合は、Process Server データベースおよび Performance Data Warehouse データベースを作成するときに、`COLLATE` 属性で大/小文字を区別しないように指定したこと (**CI**) を確認します (大/小文字を区別する場合は **CS**)。つまり、`create` コマンドが以下のようにになっている必要があります。

```
CREATE DATABASE database_name COLLATE SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS
```

これを行わない場合、以下のようなエラーが発生することがあります。

```
org.springframework.beans.factory.BeanCreationException: Error creating bean with name
'message.routingCache' defined in class path resource [registry.xml]: Instantiation of bean
failed; nested exception is org.springframework.beans.BeanInstantiationException: Could not
instantiate bean class [com.lombardisoftware.bpd.runtime.engine.message.DefaultMessageRoutingCache]:
Constructor threw exception; nested exception is org.springframework.jdbc.BadSqlGrammarException:
PreparedStatementCallback; bad SQL grammar [select "value" from lsw_system where "key"=?];
nested exception is com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name
'lsw_system'.
```

```
Caused by: com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException: Invalid object name 'lsw_system'.
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerException.makeFromDatabaseError
(SQLServerException.java:196)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.getNextResult(SQLServerStatement.java:1454)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.doExecutePreparedStatement
(SQLServerPreparedStatement.java:388)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement$PrepStmtExecCmd.doExecute
(SQLServerPreparedStatement.java:338)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.TDSCommand.execute(IOBuffer.java:4026)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnection.executeCommand
(SQLServerConnection.java:1416)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeCommand(SQLServerStatement.java:185)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerStatement.executeStatement(SQLServerStatement.java:160)
at com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerPreparedStatement.executeQuery
(SQLServerPreparedStatement.java:281)
at org.apache.commons.dbcp.DelegatingPreparedStatement.executeQuery
(DelegatingPreparedStatement.java:205)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate$1.doInPreparedStatement(JdbcTemplate.java:648)
at org.springframework.jdbc.core.JdbcTemplate.execute(JdbcTemplate.java:591)
[...]
```

ND 環境の一部であるがクラスターの一部ではないサーバーにデータをブートストラップするには、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -nodeName node01 -serverName server1
```

Process Center または Process Server をホストするクラスターにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -clusterName myAppCluster
```

デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData
```

カスタム JDBC ドライバーのロケーションを指定して、デフォルトのスタンドアロン・プロファイル・サーバーにデータをブートストラップする場合は、以下のようになります。

```
bootstrapProcessServerData -dbJDBCClasspath c:/DB2/java
```

スタンドアロン・サーバーまたは最初のクラスター・メンバーを始動できます。

## Process Server および Performance Data Warehouse を構成した後のデータベース・パスワードとユーザー ID の変更

データベース構成が完了した後に、必要に応じてデータベース・パスワードおよびユーザー ID を再構成することができます。

データベース・パスワードおよびユーザー ID を再構成するには、管理コンソールを使用します。データベース・パスワードおよびユーザー ID を変更するには、以下の 3 つの処理を実行する必要があります。

- すべてのデータ・ソースの認証別名を更新する

- メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新する
- 98database.xml ファイルで Process Server および Performance Data Warehouse のパスワードを手動で更新する

**重要:** 何らかの構成変更を行う前に、config フォルダをバックアップすることをお勧めします。config フォルダは、Deployment Manager の下の <Dmgr-profile>/config にあります。詳しくは WebSphere Application Server 管理者にお問い合わせください。

#### データ・ソース認証別名の更新:

データベース・パスワードおよびユーザー名を変更する前に、データ・ソース認証別名を更新する必要があります。

この手順を始める前に、以下のすべての項目を必ず実行してください。

- Network Deployment 環境に対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。また、すべてのクラスターを停止し、DMGR とすべてのノード・エージェントの実行を継続する必要があります。
- スタンドアロン・プロファイルに対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。

データ・ソース認証別名を変更するには、以下の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「リソース」 > 「JDBC」 > 「データ・ソース」を選択します。

**注:** 「コンポーネント管理認証別名」および「XA リカバリー用の認証別名 (Authentication alias for XA recovery)」に対して構成されている値を書き留めておいてください。

3. 必要なデータ・ソースを選択します。
4. 「関連項目」セクションを選択し、「JAAS - J2C 認証データ」を選択します。
5. ステップ 2 で書き留めた、適切な「コンポーネント管理認証別名」の値を選択します。パスワードまたはユーザー名を編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
6. 「JAAS - J2C 認証データ」パネルに戻り、ステップ 2 で書き留めた「XA リカバリー用の認証別名 (Authentication alias for XA recovery)」の値を選択します。パスワードまたはユーザー名を編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
7. 更新内容を保存し、「完全同期」をクリックして、この情報をすべてのノードに同期させます。

#### メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名の更新:

データベース・パスワードおよびユーザー名を変更する前に、メッセージ・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新する必要があります。

この手順を始める前に、以下のすべての項目を必ず実行してください。

- Network Deployment 環境に対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。また、すべてのクラスターを停止し、DMGR とすべてのノード・エージェントの実行を継続する必要があります。
- スタンドアロン・プロファイルに対して、要求の送信がすべて停止していることを確認します。
- Network Deployment クラスターおよびサーバーを停止した後、別名を変更する前に、DMGR とすべてのノード・エージェントを始動する必要があります。

メッセージング・エンジンのデータ・ストア認証別名を更新するには、以下の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログインします。
2. 「サービス統合」 > 「バス」を選択します。

3. 各バスの認証別名を更新するには、以下の手順を実行します。
  - a. 「バス」 > 「[Bus\_NAME]」 > 「メッセージング・エンジン」 > 「[MESSAGING\_ENGINE]」 > 「データ・ストア」を選択します。

**要確認:** データ・ストアでの「認証別名」の値を書き留めておいてください。

- b. 「関連項目」セクションを選択し、「JAAS - J2C 認証データ」をクリックします。
- c. ステップ a で書き留めた値を選択します。パスワードを編集し、「OK」をクリックして変更を保存します。
- d. 更新内容を保存し、「完全同期」をクリックして、この情報をすべてのノードに同期させます。

### 構成ファイル内のパスワードおよびユーザー名の更新:

データベース・パスワードを変更するには、いくつかの構成ファイルを更新する必要があります。

ユーザー名およびパスワード更新を始める前に、DMGR と各ノード・エージェントが稼働していることを確認してください。新規パスワードで 98Database.xml ファイルを更新したら、「完全同期」をクリックして、変更内容をすべてのノードに適用する必要があります。その後、ご使用の環境を再始動して、ご使用の Network Deployment 環境またはスタンドアロン環境で新規パスワードを確実にアクティブ化する必要があります。

IBM Process Center、IBM Process Server、および IBM Performance Data Warehouse では、それぞれのデータベース情報が 98Database.xml ファイルに保管されるため、このファイルを新規パスワードまたはユーザー ID で更新する必要があります。このファイルが存在するすべての場所については、このトピックに記載されている表を参照してください。

サンプルの 98Database.xml ファイルには、次のようなコード・セグメントが含まれています (これは例であり、セットアップに応じて異なる場合があります)。

```
<databases>
<default-database-name>default</default-database-name>
<database type="default">
<driver>com.ibm.db2.jcc.DB2Driver</driver>
<url>jdbc:db2://localhost:50000/BA8000_1</url>
<user>bpmdb</user>
<schema></schema>
<encrypted-password>GFgs/fnJCC9RnNCHDH3kLA==:acGciJgBON8WTk0ZF/dS/A==</encrypted-password>
<db-name>BA8000_1</db-name>
<storage-group></storage-group>
</database>
</databases>
```

ユーザー ID を変更するには、`<user>new_userID</user>` のように、user タグに新規の値を追加します。

パスワードについては、暗号化ツールを使用して生成されたパスワード値を組み込んで、次に示す項目を更新する必要があります。「関連リンク」セクションの『パスワードの暗号化』で説明されている方法を使用してください。

```
<encrypted-password>7Yu5Kz3XaYL5aUjbWfISHg==:VyP9e8ytnTz6623hERR4lg==</encrypted-password>
```

表 1 に、スタンドアロン環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーションを示します。

表 74. スタンドアロン環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーション

デプロイメント・タイプ	ファイルのロケーション
Process Center	<p>Process Center</p> <p>&lt;STANDALONE-PROFILE-DIR&gt;¥config¥cells¥&lt;cell name&gt;¥nodes¥&lt;node name&gt;¥servers¥&lt;server name&gt;¥process-center¥config¥system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p>&lt;STANDALONE-PROFILE-DIR&gt;¥config¥cells¥&lt;cell name&gt;¥nodes¥&lt;node name&gt;¥servers¥&lt;server name&gt;¥performance-data-warehouse¥config¥system</p>
Process Server	<p>Process Server</p> <p>&lt;STANDALONE-PROFILE-DIR&gt;¥config¥cells¥&lt;cell name&gt;¥nodes¥&lt;node name&gt;¥servers¥&lt;server name&gt;¥process-server¥config¥system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p>&lt;STANDALONE-PROFILE-DIR&gt;¥config¥cells¥&lt;cell name&gt;¥nodes¥&lt;node name&gt;¥servers¥&lt;server name&gt;¥performance-data-warehouse¥config¥system</p>

表 2 に、Network Deployment 環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーションを示します。

表 75. Network Deployment 環境での 98Database.xml 構成ファイルのロケーション

デプロイメント・タイプ	ファイルのロケーション
Process Center	<p><b>1 または 2 クラスター・トポロジー</b></p> <p>Process Center</p> <p><b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;¥config¥cells¥&lt;cell name&gt;¥clusters¥&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;¥process-center¥config¥system</b></p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;¥config¥cells¥&lt;cell name&gt;¥nodes¥&lt;node name&gt;¥servers¥&lt;server name&gt;¥process-center¥config¥system</b></p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;¥config¥cells¥&lt;cell name&gt;¥clusters¥&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;¥performance-data-warehouse¥config¥system</b></p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;¥config¥cells¥&lt;cell name&gt;¥nodes¥&lt;node name&gt;¥servers¥&lt;server name&gt;¥performance-data-warehouse¥config¥system</b></p>
	<p><b>3 または 4 クラスター・トポロジー</b></p> <p>Process Center</p> <p><b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;¥config¥cells¥&lt;cell name&gt;¥clusters¥&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;¥process-center¥config¥system</b></p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - <b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;¥config¥cells¥&lt;cell name&gt;¥nodes¥&lt;node name&gt;¥servers¥&lt;server name&gt;¥process-center¥config¥system</b></p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p><b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;¥config¥cells¥&lt;cell name&gt;¥clusters¥&lt;SUPPORT-CLUSTER-NAME&gt;¥performance-data-warehouse¥config¥system</b></p> <p>サポート・クラスターの一部として使用される各ノード - <b>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;¥config¥cells¥&lt;cell name&gt;¥nodes¥&lt;node name&gt;¥servers¥&lt;server name&gt;¥performance-data-warehouse¥config¥system</b></p>

Process Server	<p><b>1 または 2 クラスター・トポロジー</b></p> <p>Process Server</p> <p>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%process-server%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - &lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%process-server%config%system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%performance-data-warehouse%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - &lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%performance-data-warehouse%config%system</p> <hr/> <p><b>3 または 4 クラスター・トポロジー</b></p> <p>Process Server</p> <p>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;APPLICATION-CLUSTER-NAME&gt;%process-server%config%system</p> <p>アプリケーション・クラスターの一部として使用される各ノード - &lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%process-server%config%system</p> <p>パフォーマンス・データウェアハウス</p> <p>&lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%clusters%&lt;SUPPORT-CLUSTER-NAME&gt;%performance-data-warehouse%config%system</p> <p>サポート・クラスターの一部として使用される各ノード - &lt;DMGR-PROFILE-DIR&gt;%config%cells%&lt;cell name&gt;%nodes%&lt;node name&gt;%servers%&lt;server name&gt;%performance-data-warehouse%config%system</p>
----------------	---

パスワードの暗号化

## DB2 データベースのトランザクション・ログ・オプションの変更

IBM Business Process Manager で使用できるように DB2 を構成する場合は、トランザクション・ログ・オプションを変更する必要があります。

1. DB2 コマンド・ライン・プロセッサを開始します。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
CONNECT TO [DB_name]
UPDATE DB CFG FOR DB_name USING LOGFILSIZ 4096 IMMEDIATE
UPDATE DB CFG FOR DB_name USING LOGSECOND 64 IMMEDIATE
CONNECT RESET
```

3. DB2 を停止して再始動します。

## ファースト・ステップ・コンソールの開始

IBM Business Process Manager Express のインストール後に「ファースト・ステップ」コンソールを使用して、インストールの検証、「プロファイル管理ツール」の開始、製品資料へのアクセス、または個別のプロファイルに関連するサーバーや管理コンソールなどのエレメントに対する指示を行います。

汎用バージョンのコンソールと、インストール内のプロファイルごとのバージョンが使用可能です。各コンソールのオプションは、インストールした機能と、各オペレーティング・システムで使用可能なエレメントに応じて動的に表示されます。オプションには、インストールの検証、サーバーまたはデプロイメント・マネージャーの開始または停止、管理コンソールへのアクセス、プロファイル管理ツールの開始、製品資料へのアクセスなどがあります。

通常は、プロファイル用のバージョンを開始します。以下のセクションでは、「ファースト・ステップ」コンソールの開始手順を、そのバージョンおよびシステムで使用されているプラットフォームごとに詳しく説明します。

- 『Linux、UNIX、および Windows プラットフォーム上のプロファイル用のファースト・ステップ・コンソールの開始』
- 377 ページの『汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールの開始』

**制約事項:** デフォルトのブラウザーとして Mozilla を使用し、そのインストール・ロケーションのパス名にスペースが含まれていると、ファースト・ステップ・コンソールが起動しない場合があります。この問題を解消するには、以下のいずれかのアクションを実行してください。

- Mozilla を、パス名にスペースを含まないロケーションにインストールする。
- レジストリー・キーを変更してスペースを削除する。
- 一時的なデフォルト・ブラウザーとして Internet Explorer を指定してから、Mozilla をデフォルト・ブラウザーに設定する。このアプローチでは、レジストリー・キーからスペースが自動的に除去されます。

## Linux、UNIX、および Windows プラットフォーム上のプロファイル用のファースト・ステップ・コンソールの開始

**Linux** **Windows** 以下のステップを実行し、プロファイル用のファースト・ステップ・コンソールを開始します。

- コマンド・ウィンドウをオープンします。
- 以下のディレクトリーに移動します (*install\_root* は、IBM Business Process Manager または WebSphere Enterprise Service Bus のプロファイルのインストール場所(*install\_root/profiles/profile\_name/*) を表します)。
  - IBM Business Process Manager プロファイルの場合:
    - Linux** `profile_root/firststeps/bpmExp`
    - Windows** `profile_root%firststeps%bpmExp`
  - WebSphere Enterprise Service Bus プロファイルの場合:
    - Linux** `profile_root/firststeps/esb`
    - Windows** `profile_root%firststeps%esb`
- firststeps** コマンドを実行して、コンソールを開始します。
  - Linux** `./firststeps.sh`

- **Windows** firststeps.bat

#### ファースト・パス:

以下のいずれかのタスクを実行して、プロファイルに関連付けられているバージョンのファースト・ステップ・コンソールを開始することもできます。

- プロファイルの作成または拡張処理の終了時に「プロファイル作成の完了」または「プロファイル拡張の完了」パネルの「ファースト・ステップ・コンソール」チェック・ボックスにチェック・マークを付ける。
- **Windows** 「スタート」 > 「プログラム」 > 「IBM」 > 「BPM Express 7.5」 > 「プロファイル」 > *profile\_name* > 「ファースト・ステップ」をクリックします。

### 汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールの開始

以下のステップを実行し、汎用バージョンのファースト・ステップ・コンソールを開始します。

1. コマンド・ウィンドウをオープンします。
2. 以下のディレクトリーに移動します。

- **Linux** `install_root/firststeps/bpmExp`

- **Windows** `install_root%firststeps%bpmExp`

変数 `install_root` は、Linux システム、UNIX システム、または Windows システム上の IBM Business Process Manager インストール済み環境のロケーションを表します。

3. 以下のいずれかのコマンドを実行して、コンソールを開始します。

- **Linux** `./firststeps.sh`

- **Windows** `firststeps.bat`

#### ファースト・パス:

**Windows** Windows プラットフォームで汎用バージョンのコンソールを開始することもできます。そのためには、「スタート」 > 「プログラム」 > 「IBM」 > 「BPM Express 7.5」 > 「ファースト・ステップ」をクリックします。

